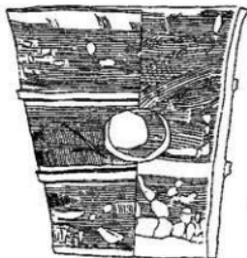


# 後平茶臼古墳・後平遺跡

【第1分冊】



2002

財団法人 岐阜県文化財保護センター

あと ひら ちゃ うす こ ふん      あと ひら い せき  
後平茶臼古墳・後平遺跡

【第1分冊】



2002

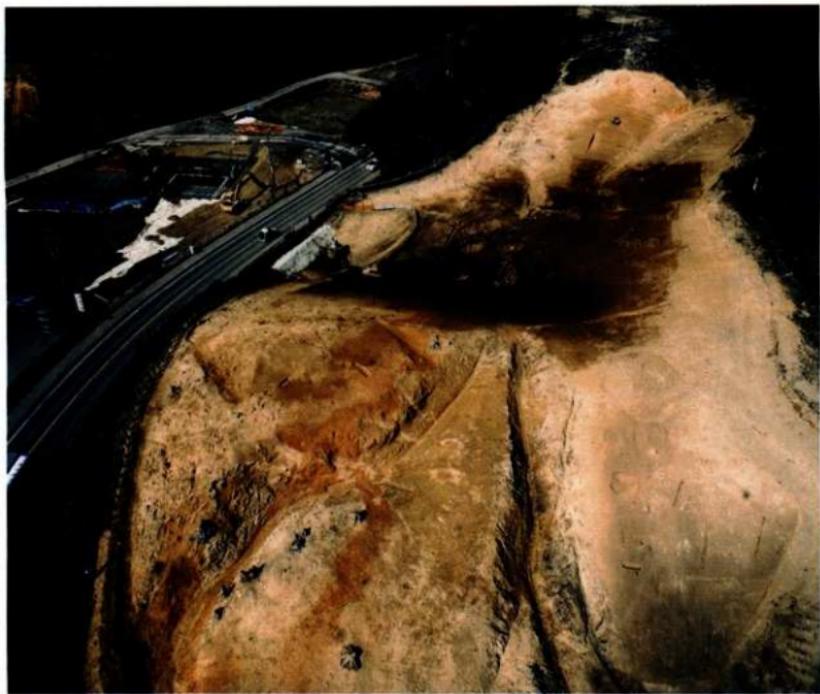
財団法人 岐阜県文化財保護センター



A地区上層（南より）



B地区上層（南東より）



A地区下層（南より）



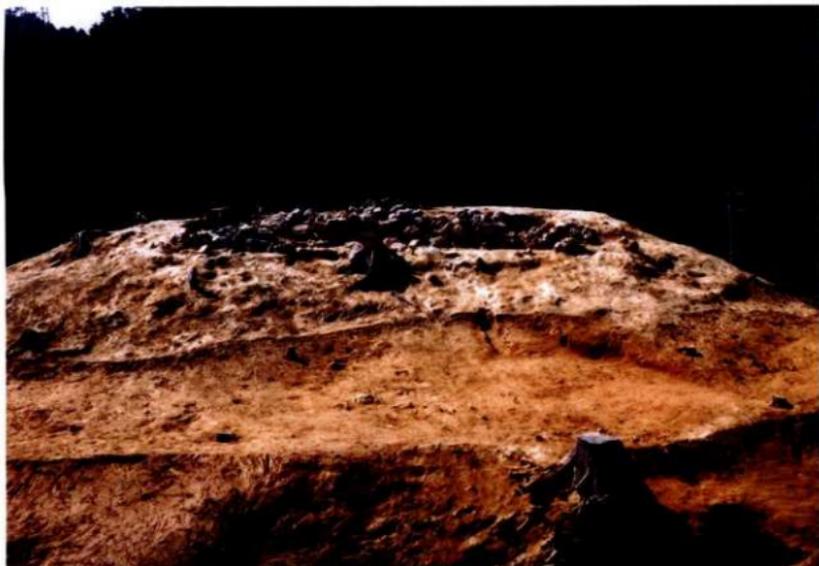
B地区下層（南より）



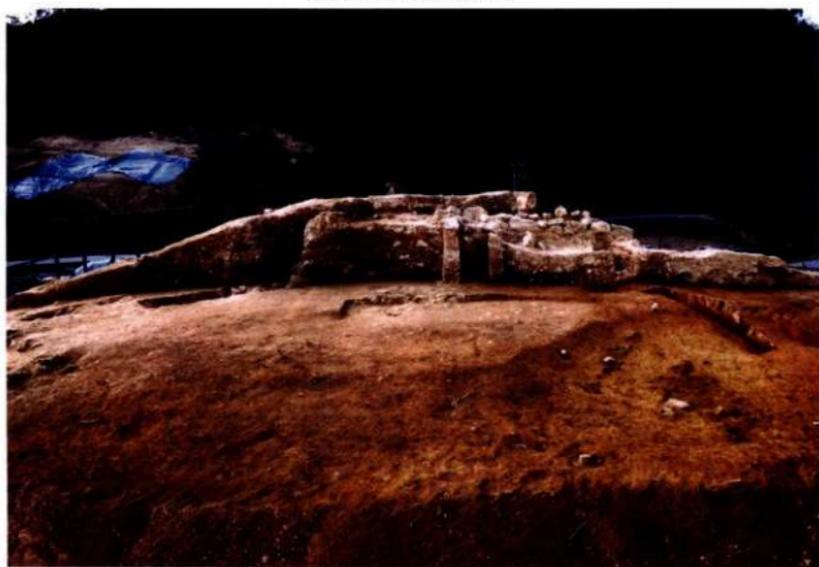
A地区、B地区遠景（東より）



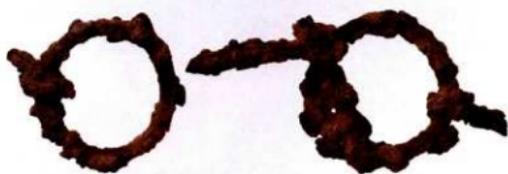
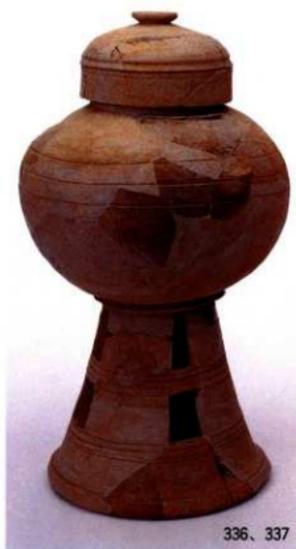
A地区全景（南西より）



後平茶臼古墳全景（東より）



後平茶臼古墳 墳丘主軸S-N（Aライン）断面全景（東より）



497 復元前



497 復元後

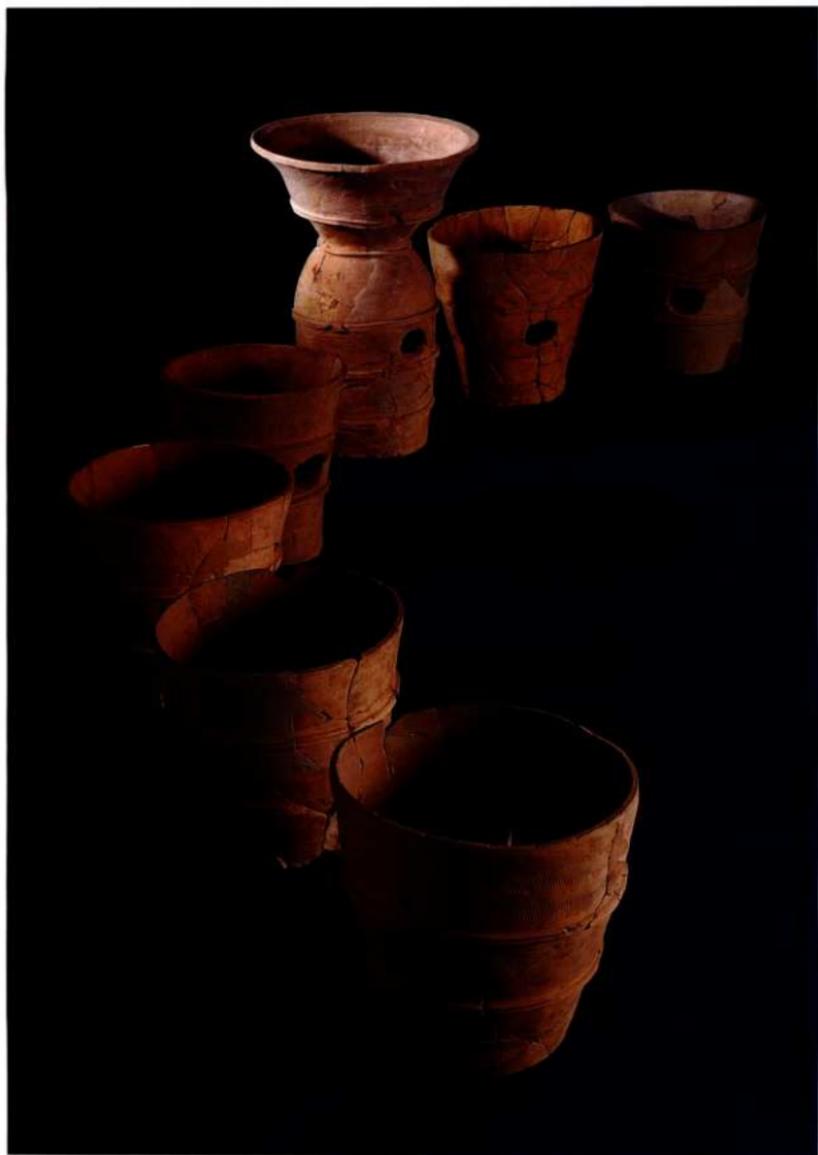


387 復元前



387 復元後

後平茶臼古墳出土遺物



後平茶臼古墳出土埴輪

## 序

後平茶臼古墳・後平1号古墳・後平遺跡が所在する加茂郡富加町は、濃尾平野の北端に位置し、県道関金山線を通じて美濃と飛騨をつなぐ交通の要衝にあたります。また、現存する全国最古の戸籍「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」に記された土地としても知られ、その戸籍から在地の豪族であるカモ県主の一族や渡来の一族である秦氏が当地に居住していたことが分かっています。

今回の発掘調査は、東海環状自動車道建設事業に伴うもので、以前より知られていた後平茶臼古墳を調査しました。残念ながら埋葬主体は盗掘を受けて損壊が著しいものでしたが、盗掘をまぬがれて出土した木心鉄板張輪鏝は県内2例目という貴重な資料です。また、墳丘裾からは須恵質の尾張型埴輪と呼ばれる埴輪が出土しました。この埴輪の配置から後平茶臼古墳は造り出し付き円墳という特殊な墳形を採用していることが判明しました。後平茶臼古墳の被葬者は「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」に記されたカモ県主の一族の祖先である可能性が考えられ、尾張型埴輪の存在から尾張の豪族とも関係が深いと想像されます。また、後平茶臼古墳の周辺には弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡が展開し、さらには滅失した後平1号古墳の存在を明らかにすることができました。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」に記述された内容をさかのぼる資料として当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、富加町教育委員会、地元地区の皆様へ深く感謝申し上げます。

平成14年12月

財団法人 岐阜県文化財保護センター  
理事長 服部 卓郎

## 例 言

- 1 本書は岐阜県加茂郡富加町大平賀に所在する後平茶臼古墳（岐阜県遺跡番号21502-04309）・後平1号古墳（岐阜県遺跡番号21502-09263）・後平遺跡（岐阜県遺跡番号21502-09237）の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は東海環状自動車道（関～美濃加茂）建設事業に伴うもので、建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに平成11年度に実施した。整理作業は八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに平成12年度、平成13年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本文第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第2章第2節を高橋幸仁、第6章を三辻利一（大谷女子大学教授）、それ以外を藤田英博・安田正枝が行った。編集は安田が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削などの業務と、遺物の洗浄・注記はジェイエ岐阜アグリ開発株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影はアートフォト右文に委託して行った。
- 8 石器の実測・観察表作成・文章執筆は株式会社アルカに委託して行った。結果は第3～5章中に掲載した。
- 9 地形測量は株式会社イビソクに、空中写真測量は国際航業株式会社に委託して行った。
- 10 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。結果は第6章に掲載した。
- 11 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関から御助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）  
赤塚次郎・井川祥子・石黒立人・内堀信雄・大熊茂弘・小谷和彦・篠原英政・島田崇正  
高木宏和・高田 徹・田中弘志・中島勝国・中森裕子・長瀬治義・西村勝広・三辻利一  
村木誠・吉田英敏  
富加町教育委員会
- 12 本文中の方位は、国土座標Ⅱ系の座標北を示している。
- 13 土層及び土器類の色調観察は、小川正忠・竹原秀雄1997『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 14 調査記録及び出土品は財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

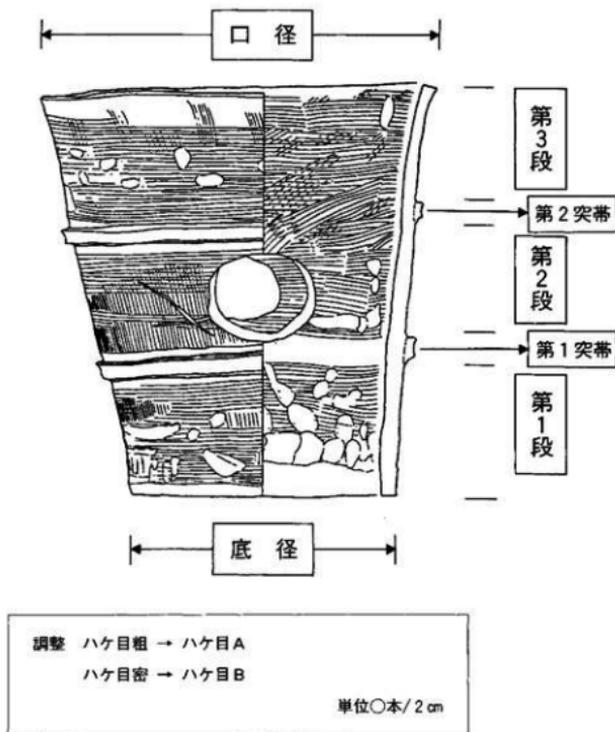
## 凡 例

- 1 出土遺物の実測図の縮尺は、石器が $2/3 \cdot 1/4$ 、縄文土器が $1/2$ 、土師器・須恵器が $1/3$ 、埴輪は $1/4$ である。
- 2 遺構の略号は下記のものを用いたが、古墳2基（後平茶臼古墳・後平1号古墳）は略号を用いていない。

竪穴住居	SB	柱穴・小穴	P
土坑	SK	溝	SD
墓坑	SZ	自然流路	NR
土器だまり	SU	集石炉	SI

なお、遺構内の土坑・柱穴・小穴は地区ごと遺構ごとに1番から通番で番号を付した。

- 3 遺物実測図による表現は下記の模式図通りである。



第1図 埴輪模式図

# 目 次

## (第1分冊)

序

例言

第1章 調査の経緯	1	(藤田英博)
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 発掘調査の経過と方法	7	
第2章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	17	
第1節 地理的環境	17	(高橋幸仁)
第2節 歴史的環境	21	(藤田)
第3章 基本層序と遺構・遺物の概要	26	
第1節 基本層序	26	(藤田)
第2節 遺構・遺物の概要	31	(藤田・安田正枝・角張淳一)
第4章 A地区の遺構と遺物	48	
第1節 I期の遺構と遺物(縄文時代早期～後期)	48	(藤田・角張)
第2節 II期の遺構と遺物(縄文時代晩期)	72	(藤田)
第3節 III期の遺構と遺物(弥生時代末～古墳時代初頭)	74	(藤田・安田・角張)
第4節 IV期の遺構と遺物(古墳時代後期)	133	(藤田・安田)
第5節 V期の遺構と遺物(中世)	203	(藤田・安田)
第6節 VI期の遺構と遺物(近世)	208	(藤田・安田)

## (第2分冊)

第5章 B地区の遺構と遺物	1	
第1節 I期の遺構と遺物(縄文時代早期～後期)	1	(藤田)
第2節 II期の遺構と遺物(縄文時代晩期)	5	(藤田)
第3節 III期の遺構と遺物(弥生時代末～古墳時代初頭)	6	(藤田・角張)
第6章 自然科学分析	25	
第1節 後平茶臼古墳出土埴輪の蛍光X線分析	25	(三辻利一)
第2節 赤みをおびた粘土質物の成分分析	30	(小村美代子)
第3節 後平遺跡出土炭化材の樹種同定	34	(植田弥生)
第7章 考察	39	
第1節 砂行・南青柳・深橋前遺跡と後平遺跡との関連	39	(安田・藤田)
第2節 後平茶臼古墳について	41	(藤田)

遺物観察表

図版

## 挿図目次

### (第1分冊)

第1図	地輪模式図	凡例
第2図	後平茶臼古墳・後平1号古墳・後平遺跡調査前地形測量図・試掘トレンチ設定図(A地区)	3
第3図	後平遺跡調査前地形測量・試掘トレンチ設定図(B地区)	5
第4図	後平茶臼古墳・後平1号古墳・後平遺跡グリッド配置図(A地区)	9
第5図	後平遺跡グリッド配置図(B地区)	11
第6図	遺跡周辺新旧地形図	20
第7図	調査遺跡位置図	21
第8図	周辺遺跡分布図	22
第9図	東山浦・半布里遺跡詳細図	25
第10図	A地区試掘基本層序	27
第11図	A地区基本層序	28
第12図	B地区基本層序	30
第13図	後平遺跡A地区下層全体図	43
第14図	後平遺跡B地区西区下層全体図	44
第15図	後平茶臼古墳・後平1号古墳・後平遺跡A地区全体図	45
第16図	後平遺跡B地区上層全体図	47
第17図	I期遺構配置図	49
第18図	I期SIA01平面図・断面図	53
第19図	I期SKA01平面図・断面図	54
第20図	I期SKA02, SKA03平面図・断面図	55
第21図	I期SKA04～SKA07平面図・断面図	56
第22図	I期SKA08～SKA10平面図・断面図	57
第23図	I期PA01～PA03平面図・断面図	58
第24図	A地区IV、V層出土縄文土器(1)	60
第25図	A地区IV、V層出土縄文土器(2)	61
第26図	A地区IV、V層出土縄文土器(3)	62
第27図	A地区IV、V層出土石器(1)	63
第28図	A地区IV、V層出土石器(2)	64
第29図	A地区IV、V層出土石器(3)	65
第30図	A地区IV、V層出土石器(4)	66
第31図	A地区IV、V層出土石器(5)	67
第32図	A地区IV、V層出土石器(6)	68
第33図	A地区IV、V層出土石器(7)	69
第34図	A地区IV、V層出土石器(8)	70

第35图	A地区縄文土器出土位置图	71
第36图	Ⅱ期NRA01平面图·断面图	73
第37图	SBA03周边地形图	74
第38图	Ⅲ期遺構配置图	75
第39图	Ⅲ期SBA01, SBA02平面图·断面图	77
第40图	Ⅲ期SBA03出土遺物位置图(1)	78
第41图	Ⅲ期SBA03出土遺物位置图(2)	79
第42图	Ⅲ期SBA03遺物出土狀況图	80
第43图	Ⅲ期SBA03平面图·断面图、炭化材出土狀況	81
第44图	Ⅲ期SBA03出土遺物(1)	84
第45图	Ⅲ期SBA03出土遺物(2)	85
第46图	Ⅲ期SBA04平面图·断面图	85
第47图	SBA10周边地形图	86
第48图	Ⅲ期SBA05平面图·断面图	87
第49图	Ⅲ期SBA05遺物出土狀況图	88
第50图	Ⅲ期SBA05出土遺物(1)	89
第51图	Ⅲ期SBA05出土遺物(2)	90
第52图	Ⅲ期SBA06平面图·断面图、砂岩礫出土狀況图	91
第53图	Ⅲ期SBA06出土遺物位置图	92
第54图	Ⅲ期SBA06, SBA11出土遺物、石器	93
第55图	Ⅲ期SBA07, SBA08平面图·断面图	94
第56图	Ⅲ期SBA07出土遺物位置图(1)	95
第57图	Ⅲ期SBA07出土遺物位置图(2)	96
第58图	Ⅲ期SBA08出土遺物位置图	97
第59图	Ⅲ期SBA07, SBA08出土遺物	98
第60图	Ⅲ期SBA09, SBA10平面图·断面图	99
第61图	Ⅲ期SBA10遺物出土狀況图	100
第62图	Ⅲ期SBA09出土遺物位置图	101
第63图	Ⅲ期SBA10出土遺物位置图	103
第64图	Ⅲ期SBA09出土遺物	104
第65图	Ⅲ期SBA10出土遺物	105
第66图	SBA11周边地形图	106
第67图	Ⅲ期SBA11平面图·断面图	108
第68图	Ⅲ期SBA11出土遺物位置图	109
第69图	Ⅲ期SBA12平面图·断面图	110
第70图	Ⅲ期SBA13, SBA14, SKA11平面图·断面图	111
第71图	Ⅲ期SBA13出土遺物位置图(1)	112

第72図	Ⅲ期SBA13出土遺物位置図(2)	113
第73図	Ⅲ期SBA13出土遺物(1)	114
第74図	Ⅲ期SBA13出土遺物(2)	115
第75図	Ⅲ期SBA15～SBA20平面図・断面図	117
第76図	Ⅲ期方形周溝墓平面図・断面図、遺物出土状況図	119
第77図	Ⅲ期方形周溝墓出土遺物	120
第78図	Ⅲ期方形周溝墓出土遺物位置図	121
第79図	Ⅲ期SKA12～14平面図・断面図	125
第80図	Ⅲ期SKA15, 16平面図・断面図、SUA01遺物出土状況図	126
第81図	Ⅲ期SUA01出土遺物	127
第82図	Ⅲ期PA04～11平面図・断面図	128
第83図	Ⅲ期PA12～22平面図・断面図	129
第84図	A地区Ⅲ層出土遺物(1)	130
第85図	A地区Ⅲ層出土遺物(2)	131
第86図	A地区Ⅲ層出土遺物(3)	132
第87図	Ⅳ期遺構配置図	134
第88図	Ⅳ期後平茶臼古墳グリッド配置図	136
第89図	Ⅳ期後平茶臼古墳調査前地形測量図	137
第90図	Ⅳ期後平茶臼古墳地区設定図	138
第91図	Ⅳ期後平茶臼古墳周溝断面図	139
第92図	Ⅳ期後平茶臼古墳墳丘築成土層断面図(1)	147
第93図	Ⅳ期後平茶臼古墳墳丘築成土層断面図(2)	149
第94図	Ⅳ期後平茶臼古墳墳丘築成土層断面図(3)	151
第95図	Ⅳ期後平茶臼古墳墳丘築成工程模式図(1)	155
第96図	Ⅳ期後平茶臼古墳墳丘築成工程模式図(2)	157
第97図	Ⅳ期後平茶臼古墳造り出し部埴輪列平面図・断面図	159
第98図	Ⅳ期後平茶臼古墳石室展開図	163
第99図	Ⅳ期後平茶臼古墳石室平面図(1)	164
第100図	Ⅳ期後平茶臼古墳石室平面図(2)	165
第101図	Ⅳ期後平茶臼古墳出土円筒形埴輪第1段切り離し痕跡拓本(1)	172
第102図	Ⅳ期後平茶臼古墳出土円筒形埴輪第1段切り離し痕跡拓本(2)	173
第103図	円筒形埴輪Ⅰ径別分布図・底径別分布図・法量分布図	174
第104図	Ⅳ期後平茶臼古墳出土須恵器(1)	177
第105図	Ⅳ期後平茶臼古墳出土須恵器(2)	178
第106図	A地区須恵器出土位置図	179
第107図	Ⅳ期後平茶臼古墳出土鉄器	181
第108図	Ⅳ期後平茶臼古墳埋葬施設出土鏡	182

第109圖	IV期後平茶臼古墳出土鉄器出土位置図	183
第110圖	IV期後平茶臼古墳外表施設出土壇輪	184
第111圖	IV期後平茶臼古墳墳丘出土壇輪(1)	185
第112圖	IV期後平茶臼古墳墳丘出土壇輪(2)	186
第113圖	IV期後平茶臼古墳墳丘出土壇輪(3)	187
第114圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(1)	188
第115圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(2)	189
第116圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(3)	190
第117圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(4)	191
第118圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(5)	192
第119圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(6)	193
第120圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(7)	194
第121圖	IV期後平茶臼古墳周溝出土壇輪(8)	195
第122圖	IV期後平茶臼古墳周辺出土壇輪	196
第123圖	IV期後平茶臼古墳墳丘出土土師器	197
第124圖	IV期後平茶臼古墳墳丘出土石器	198
第125圖	IV期後半1号古墳出土簪	200
第126圖	IV期後半1号古墳平面図・断面図	201
第127圖	V期遺構配置図	204
第128圖	V期SKA17、PA23平面図・断面図	205
第129圖	V期SZA01出土遺物	206
第130圖	V期中世墓SZA01~SZA05平面図・断面図	207
第131圖	V期Ⅲ層出土遺物、Ⅵ期SDA01出土遺物	208
第132圖	Ⅵ期SDA01、SDA02平面図	209

## (第2分冊)

第133圖	B地区西区Ⅰ・Ⅱ期遺構配置図	2
第134圖	西区Ⅰ期SIB01、SKB01、SKB02平面図・断面図	3
第135圖	西区Ⅰ期PB01、PB02平面図・断面図	4
第136圖	西区Ⅱ期PB03、PB04平面図・断面図	5
第137圖	B地区東区Ⅲ期遺構配置図	7
第138圖	東区Ⅲ期SBB01~SBB03平面図・断面図	9
第139圖	東区Ⅲ期SBB04、SDB01、SDB02平面図・断面図	11
第140圖	東区Ⅲ期PB05~PB08平面図・断面図	14
第141圖	B地区西区Ⅲ期遺構配置図	15
第142圖	西区Ⅲ期SBB05平面図・断面図	17
第143圖	西区Ⅲ期SBB06平面図・断面図	18

第144図	西区Ⅲ期PB09～PB14平面図・断面図	20
第145図	西区Ⅲ期PB15～PB21平面図・断面図	22
第146図	B地区Ⅲ期SBB01～SBB06, SDB01Ⅲ層出土遺物	23
第147図	B地区Ⅲ期SBB04, SDB01Ⅳ・Ⅴ層出土石器	24
第148図	A群埴輪の両分布図	27
第149図	B群埴輪の両分布図	28
第150図	赤みを帯びた粘土質物の蛍光X線スペクトル図	33
第151図	赤みを帯びた粘土質物のX線回折スペクトル図	33

## 付図目次

付図1	後平茶臼古墳A区・D区埴輪出土位置図
付図2	後平茶臼古墳B区埴輪出土位置図
付図3	後平茶臼古墳C区埴輪出土位置図
付図4	後平茶臼古墳墳丘北側転落埴輪出土位置図

## 表目次

### (第1分冊)

第1表	関市種別経営耕地面積(平7)	18
第2表	富加町集落別人口推移	19
第3表	周辺遺跡一覧表	23
第4表	遺構一覧	42
第5表	Ⅲ期ピット一覧表	127
第6表	後平茶臼古墳墳丘土層	142

### (第2分冊)

第7表	後平茶臼古墳出土埴輪の分析データ	29
第8表	石室床石の付着粘土質物から検出された元素	31
第9表	石室床石の付着粘土質物から検出された鉱物	31
第10表	後平遺跡出土炭化材樹種	38
第11表	後平遺跡遺構別出土炭化材樹種	38
第12表	土器観察表A地区	45
第13表	土器観察表B地区	57
第14表	埴輪観察表	58
第15表	鉄製品観察表	69
第16表	石器観察表A地区	70
第17表	石器観察表B地区	72

## 図版目次 (第2分冊)

- 図版1 空中写真撮影
- 図版2 A地区調査前風景
- 図版3 A地区土層断面, SIA01
- 図版4 PA01~PA03, SKA01~SKA03
- 図版5 SKA04~SKA08
- 図版6 SKA09, SKA10, NRA01
- 図版7 SBA01~SBA03
- 図版8 SBA03~SBA05
- 図版9 SBA06, SBA07~SBA10
- 図版10 SBA07~SBA10, SBA12~SBA18, SBA20
- 図版11 SBA19, 方形周溝墓
- 図版12 SKA12~SKA14, ASKA16, SUA01, PA06~PA22
- 図版13 後平茶臼古墳 検出状況・主体部完掘状況
- 図版14 後平茶臼古墳 周溝
- 図版15 後平茶臼古墳 周溝遺物出土状況
- 図版16 後平茶臼古墳 周溝完掘状況
- 図版17 後平茶臼古墳 埴輪列
- 図版18 後平茶臼古墳 控え積み検出状況
- 図版19 後平茶臼古墳 盗掘坑
- 図版20 後平茶臼古墳 開口部
- 図版21 後平茶臼古墳 開口部完掘状況
- 図版22 後平茶臼古墳 基底石検出状況・墳丘除去
- 図版23 後平茶臼古墳 墳丘除去・主体部断面
- 図版24 後平茶臼古墳 主体部断面・墳丘主軸断面
- 図版25 後平茶臼古墳 墳丘主軸断面
- 図版26 後平茶臼古墳 墳丘断面・後平1号古墳
- 図版27 SZA01~SZA03
- 図版28 SZA03~SZA05, SDA01
- 図版29 B地区調査前風景・土層断面
- 図版30 SIB01, SKB01, SKB02, PB01
- 図版31 PB02~PB04, SBB01~SBB03
- 図版32 SDB01, SDB02, SBB04~SBB06, PB06, PB07
- 図版33 PB09~PB17
- 図版34 PB16~PB21
- 図版35 A地区IV・V層出土縄文土器(1)

- 図版36 A地区Ⅳ・Ⅴ層出土縄文土器(2)
- 図版37 A地区Ⅳ・Ⅴ層出土縄文土器(3)
- 図版38 SBA03, SBA05出土土器
- 図版39 SBA05出土土器(1)
- 図版40 SBA05出土土器(2)
- 図版41 SBA05~SBA07出土土器
- 図版42 SBA07出土土器
- 図版43 SBA08, SBA09、Ⅲ層出土土器
- 図版44 SBA10出土土器
- 図版45 SBA13出土土器(1)
- 図版46 SBA13出土土器(2)
- 図版47 方形周溝墓出土土器
- 図版48 後平茶臼古墳出土土器
- 図版49 SUA01, SKA15出土土器、Ⅲ層出土土器(1)
- 図版50 Ⅲ層出土土器(2)
- 図版51 Ⅲ層出土土器(3)
- 図版52 Ⅲ層出土土器(4)
- 図版53 Ⅲ層出土土器(5)
- 図版54 後平茶臼古墳出土埴輪(1) 朝顔形
- 図版55 後平茶臼古墳出土埴輪(2) 411、口縁部
- 図版56 後平茶臼古墳出土埴輪(3) 口縁部
- 図版57 後平茶臼古墳出土埴輪(4) 口縁部
- 図版58 後平茶臼古墳出土埴輪(5) 口縁部
- 図版59 後平茶臼古墳出土埴輪(6) 胴部
- 図版60 後平茶臼古墳出土埴輪(7) 胴部、底部
- 図版61 後平茶臼古墳出土埴輪(8) 底部
- 図版62 後平茶臼古墳出土埴輪(9) 底部、埴輪列出土
- 図版63 後平茶臼古墳出土埴輪00 埴輪列出土、周溝出土
- 図版64 後平茶臼古墳出土埴輪01 396
- 図版65 後平茶臼古墳出土埴輪02 409
- 図版66 後平茶臼古墳出土埴輪03 410
- 図版67 後平茶臼古墳出土埴輪04 413
- 図版68 後平茶臼古墳出土埴輪05 418
- 図版69 後平茶臼古墳出土埴輪06 423
- 図版70 後平茶臼古墳出土埴輪07 周溝出土
- 図版71 後平茶臼古墳出土埴輪08 周溝出土
- 図版72 A地区出土須恵器(1)

- 図版73 A地区出土須恵器(2)  
 図版74 後平茶臼古墳出土鉄器(1)  
 図版75 後平茶臼古墳出土鉄器(2)  
 図版76 後平茶臼古墳出土鉄器(3) レントゲン写真  
 図版77 SZA01,SDA02出土中近世陶器  
 図版78 石器(1)  
 図版79 石器(2)  
 図版80 石器(3)  
 図版81 石器(4)  
 図版82 石器(5)  
 図版83 B地区出土土器  
 図版84 後平遺跡出土炭化材樹種(1)  
 図版85 後平遺跡出土炭化材樹種(2)  
 図版86 後平遺跡出土炭化材樹種(3)

文章中図版 1	土器調整手法細部	37
文章中図版 2	埴輪ハケ調整	168
文章中図版 3	埴輪底部設定細部	171

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

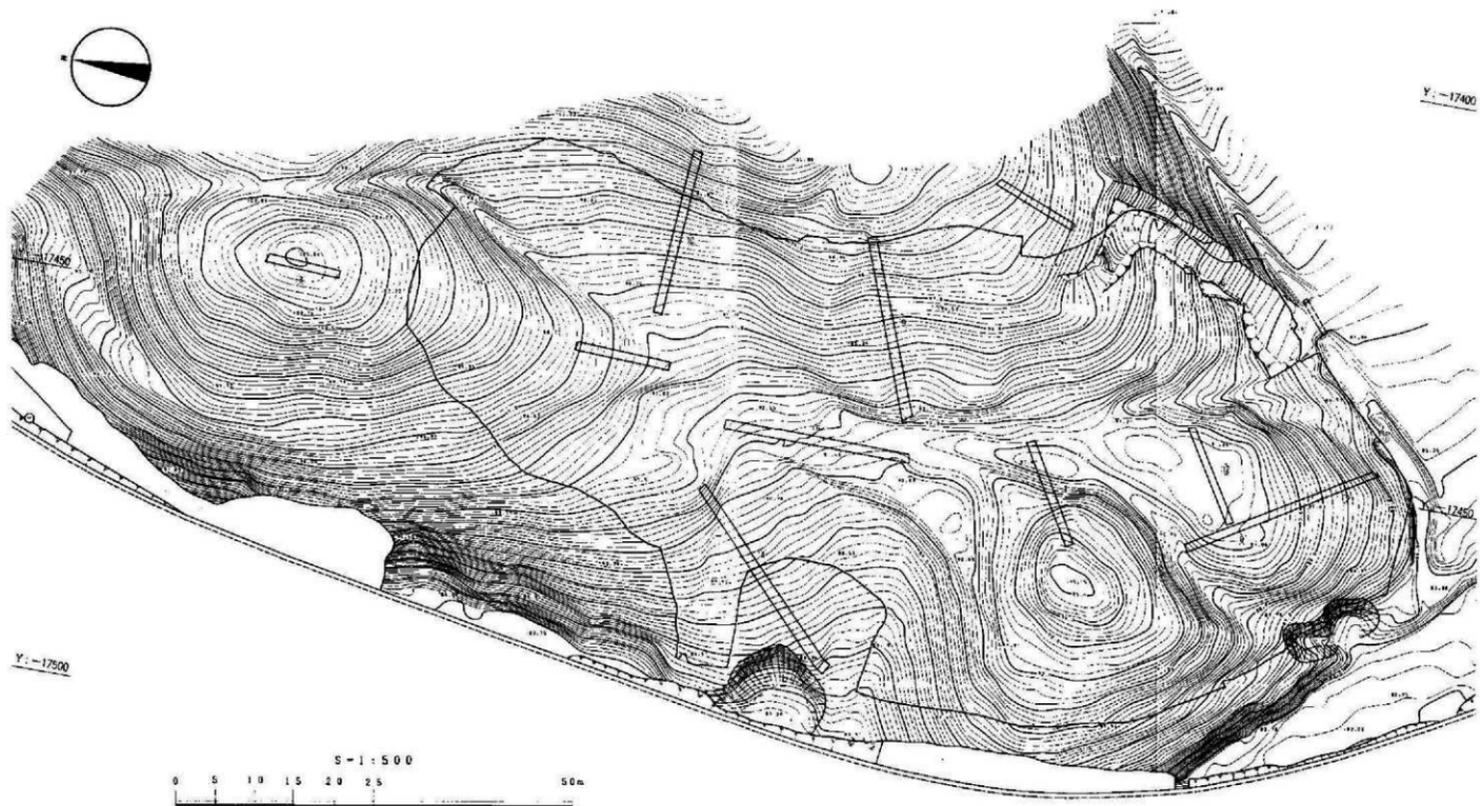
本遺跡は、加茂郡富加町大平賀に所在する。富加町は濃尾平野の北端にあり、周囲は低い丘陵に囲まれた小盆地に位置する。北側は次第に山間部へ連なり、飛騨への境界となる。地勢的には平野部と山間部の狭間にあって、金山街道を通じて飛騨への玄関口にあたる重要な位置を占めている。東海環状自動車道建設事業は、名古屋市周辺30～40km圏に位置する愛知・岐阜・三重の三県の豊田、瀬戸、多治見、美濃加茂、岐阜、大垣、四日市などの諸都市を環状に連絡し、東名・第二東名・名神高速道路や中央自動車道、東海北陸自動車道等の高速道路とのネットワークを形成する交通網整備を目的として計画された。また、都市内外の渋滞緩和、都市周辺地域との交流促進など役割を果たすものとして期待されている。本遺跡はその東海環状自動車道（関～美濃加茂）建設事業予定地内に含まれることになった周知の遺跡である。丘陵斜面に集落が形成された関市の砂形遺跡・深橋前遺跡・南青柳遺跡などの調査事例から、後平茶臼古墳周辺の南斜面に弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡が展開する可能性が十分に予想された。平成11年度には後平茶臼古墳の本発掘調査がすでに計画されており、平成10年に古墳の現状確認のため現地踏査を行ったところ、古墳周辺には南向きの緩斜面が広がることから古墳周辺に遺跡が展開する可能性が高いと判断された。この結果に基づき、平成10年8月28日建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）から追加調査の依頼があり、平成10年9月17日岐阜県から試掘確認調査を実施するよう委託を受けるにいたった。

試掘確認調査は、平成10年10月28日～平成10年11月20日の15日間に実施した。調査は後平茶臼古墳の墳丘及び周溝の範囲確認ならびに後平茶臼古墳周辺に展開すると予想される弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡の有無及び範囲確認を目的として12ヶ所にトレンチを設定して行った（第2図）。第1トレンチは後平茶臼古墳の範囲確認・外表施設の有無確認を主眼として設置し、その掘削にあたっては古墳表面の施設を傷つけないよう人力で行った。トレンチ内の墳丘流失土中で5世紀末葉の尾張型埴輪片の出土をみたため、外表施設として埴輪が樹立されていることが判明した。このため、流失土より下へ掘り下げることを控えた。周溝は地形に沿って深くなる形状が認められ、地山の岩盤まで掘り下げ、その断面形はV字形となることが判明した。断面形が周溝とはそぐわないとも考えられたが、試掘確認調査時の見解では後平茶臼古墳の周溝と判断した。しかし、後述する本発掘調査では第1トレンチで確認した溝は近世期に掘削された道ないしは溝と判明した。丘陵の頂上部に設置した第3トレンチは、地形から判断して未確認の墳丘墓・古墳の是非を判断するためのものであったが、結果は墳丘墓・古墳いずれも認められなかった。第1・3トレンチ以外のトレンチは弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡を確認するために設定したトレンチで、第5トレンチ以外は等高線に対して直交方向に設定した。第5トレンチは集落跡確認よりも谷部の堆積を確認することを優先したために、等高線に沿って設置した。調査は流土の堆積が厚いと予想されたため、流土の除去を重機で行い、その後の遺物包含層以降の作業は人力掘削で行った。また、遺構らしき平面形が確認された時点で掘削を中断した。その結果、遺構・遺物が確認できなかったトレンチは第2・7・8・12トレンチで、そのうち第

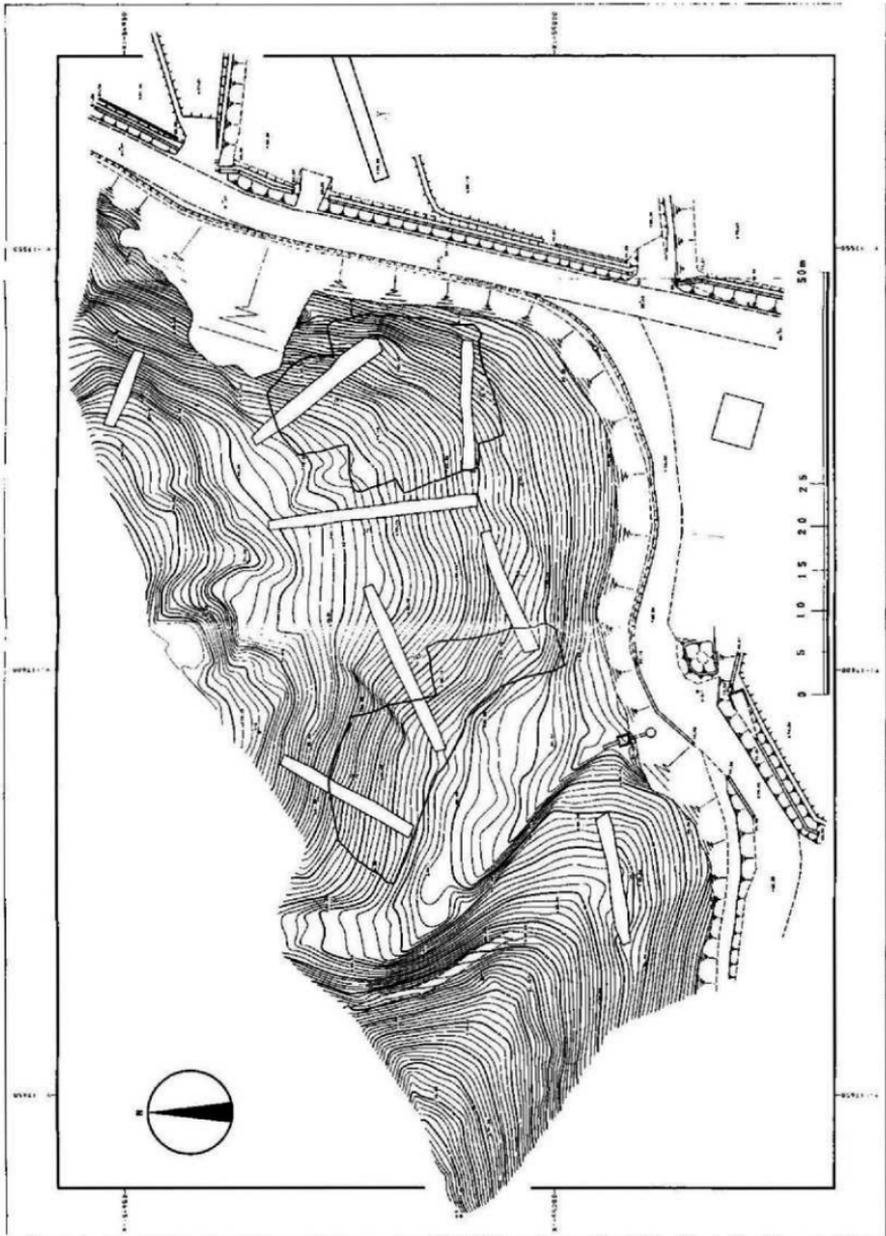
2・8・12トレンチについては平坦面にあるため遺構・遺物は確認できなかったものの後平茶臼古墳の祭祀施設が存在する可能性があったため、前述した第3・7トレンチを除いて遺跡範囲を認定した。さらに第5トレンチからは他のトレンチで確認した弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層より下位に縄文時代の遺物包含層を確認したため、谷部のみ一部縄文時代の遺物包含層が残ることが判明した。これらの結果から、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層ならびに遺構を上層面、縄文時代の遺物包含層ならびに遺構を下層面と呼ぶこととし、それぞれの調査面積を上層面7,080㎡（後平茶臼古墳解体後の墳丘底面部分も含む）、下層面4,500㎡と認定した。なお、本発掘調査で使用している基本層序は第5・9トレンチの所見に基づいている（第9図参照）。また、今回の試掘確認調査で確認した集落跡は文化財保護法第57条6遺跡の発見通知に基づき後平遺跡と呼称することとした。

以上の結果に基づいて平成10年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し本発掘調査が必要であると判断するとともに遺跡範囲を確定し、岐阜県教育委員会及び事業者と協議した結果、岐阜県より委託を受けた（財）岐阜県文化財保護センターが平成11年6月10日より本発掘調査を実施した。本発掘調査を開始して間もなく、調査の地点と関・金山線を挟んで反対側の丘陵地（第3図参照）において崩落した斜面の断面中にも本調査地点と同様の層序が認められた。この地点も東海環状自動車道の建設予定地内に含まれていることから、試掘確認調査を実施する必要性が生じた。このため、岐阜県教育委員会及び事業者と協議を行い、平成11年10月28日から15日間にわたって（財）岐阜県文化財保護センターが2回目の試掘確認調査を実施した。古墳の可能性は低いため、調査の目的は前年度の試掘確認調査同様、弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡確認に主眼を置き、11カ所にトレンチを設定した（第3図）。第1トレンチは現況測量図の東側に設定したが、中世から近世の水田耕作土はみられるが、上面は削平を受け畦畔はみられず遺物もなかった。水田部及び急斜面に設置した第2・9～11トレンチでは遺物・遺構は確認できなかったが、第2・9～11トレンチ以外のトレンチでは予想通り本調査地点と同様な層序を確認することができ、遺物・遺構も確認することができた。また、第7トレンチでは本発掘調査地点と同じく縄文時代の遺物包含層が確認された（下層面）。この結果から、平成11年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、この地点にも後平遺跡が広がるものと判断されることから新たに遺跡調査範囲を確定し、調査を実施することとなった。このため、岐阜県教育委員会及び事業者と協議を行い、実際に掘削する橋脚及び取り付け道路の範囲のみ本発掘調査を実施することになり、上層面645㎡（東区390㎡・西区255㎡）、下層面255㎡（西区）の本発掘調査を平成11年11月9日より実施した。

なお、調査地点が2カ所に分散するため、1回目の試掘確認調査で確認した地点をA地区、2回目の試掘確認調査で確認した地点をB地区と呼称することにした。B地区は橋脚部分を中心とする調査範囲のため、さらに2カ所に調査地点が分かれており、これを区別するため東側の調査区をB地区東区、西側の調査区をB地区西区と呼ぶこととした。



第2図 後平某白古墳・後平1号古墳・後平遺跡調査前地形測量図、試掘トレンチ設定図 (A地区)(S:1/500)



第3図 横平藩跡調査新地形測量・試掘トレンチ設定図 (B地区) (S:1/500)

## 第2節 発掘調査の経過と方法

### 1 調査期間

平成11年6月10日～平成12年3月2日

### 2 調査区の設定(第2・3図)

第1節で述べたように調査地点が連続していないため、A地区とB地区に区分し、さらにB地区を東区と西区に区分している。各地区の呼称は本報告書中において便宜的に用いるもので、A地区・B地区の呼称は住居跡などの遺構の名称にも用いている(A地区のSB01→SBA01)。

### 3 グリッド設定方法(第4・5図)

調査開始前の試掘確認調査実施時に業者委託によってA・B両地区とも地形測量を行い、この後本発掘調査開始とともに磁北を基準として5m×5mのグリッドを設定した。グリッド杭の名称は北から南へ1～27、東から西へA～BQとして、グリッドの名称は北東杭で呼称することにした。

### 4 層序

詳細は第3章で述べるが、遺物包含層を中心とする基本層序はI～VIのローマ数字、遺構内の埋土は算用数字で呼称することとした。

### 5 調査対象面積

A地区	試掘確認調査	270m <sup>2</sup>
	調査対象面積	7,080m <sup>2</sup>
B地区	試掘確認調査	230m <sup>2</sup>
	調査対象面積	900m <sup>2</sup>

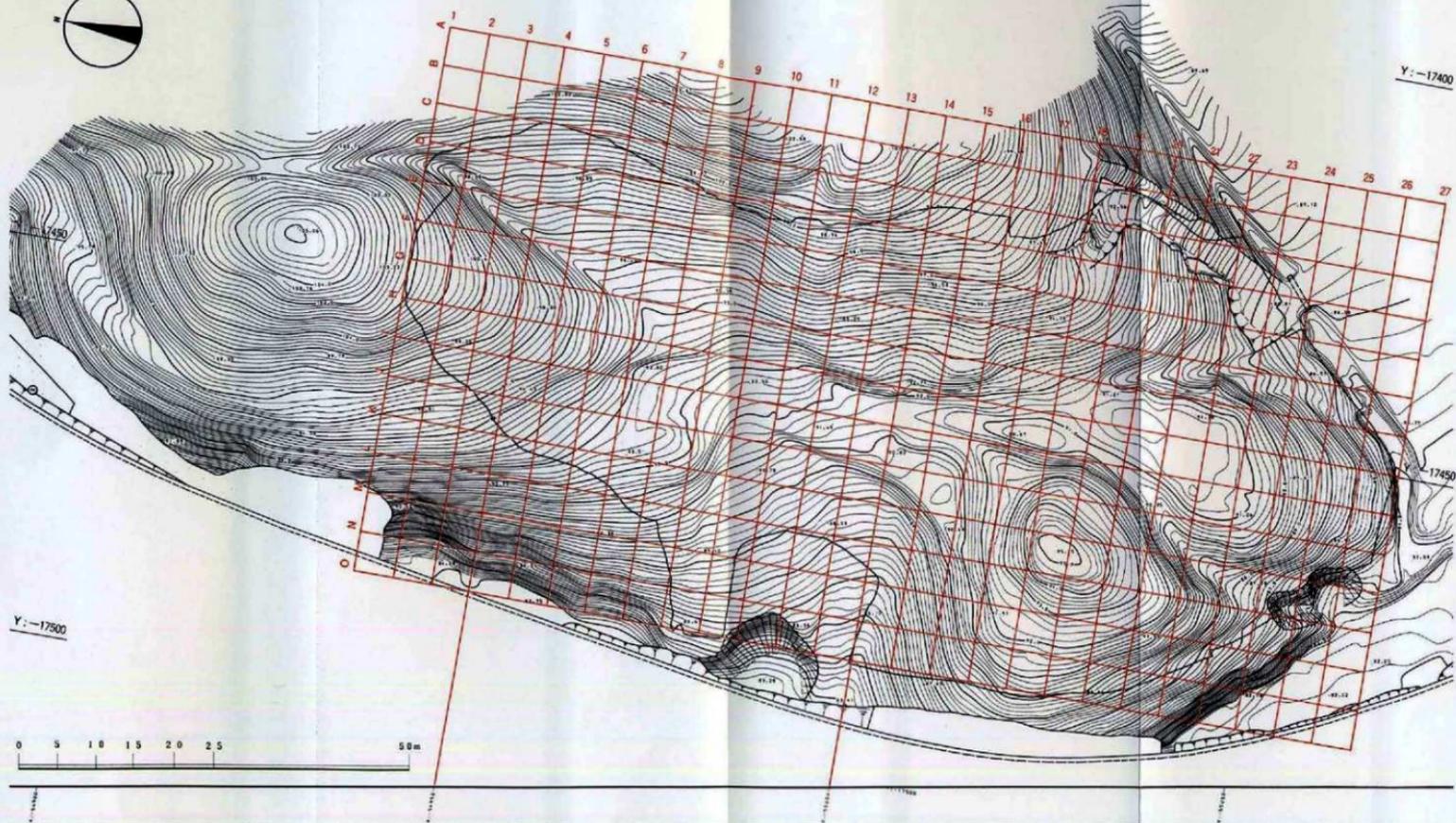
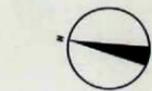
### 6 調査の経過

#### A地区(第10・11図)

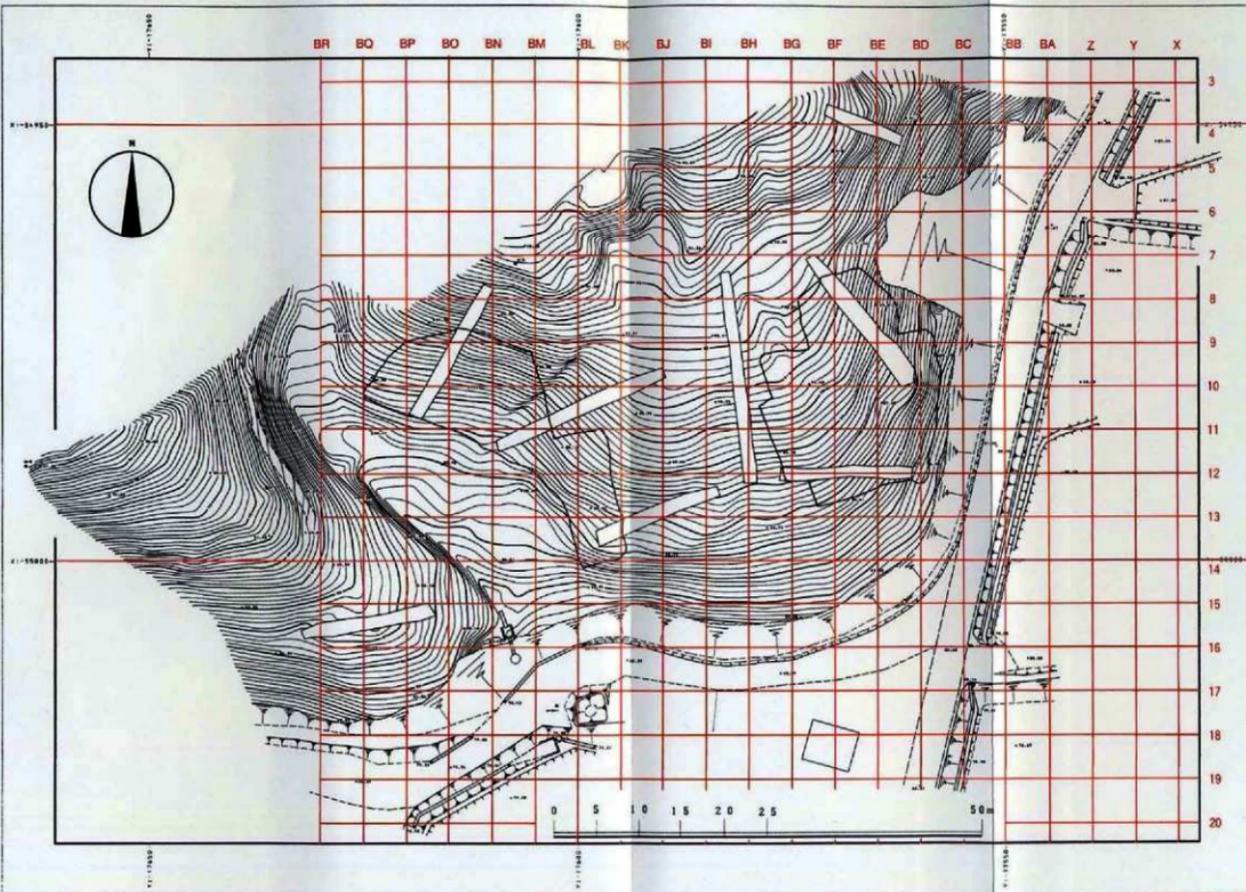
A地区ではグリッド杭の設置に先行して、平成11年6月より表土掘削を開始した。その理由は後述する基本層序のうち、表土ならびに流土(I・II層 第10図参照)が厚く堆積しているためで、I・II層掘削後にグリッド杭が機能しないことにある。このI・II層の掘削は機械掘削に依存したが、後半茶臼古墳の範囲はすべての作業を人力で掘削することにした。グリッド杭の設置はI・II層の掘削が完了後、6月下旬頃より実施した。グリッド杭設置後、遺物包含層(III層)の掘削を開始し、遺物包含層掘削後の作業はすべて人力で行った。グリッドの畦は試掘確認調査によって遺構面までの層序はほぼ把握していたため、遺構を平面的に確認するまでは残すことにしたが、遺構確認後は取り扱うことにした。なお、I列・K列・14列・試掘第9トレンチの畦は谷部の堆積を観察するため、遺構確認後も残すこととし、畦の除去は第1回目の空撮時に行った。各グリッドからの出土遺物の取り上げはグリッド名・土層を注記して一括して取り上げたが、確認した遺構内から出土した遺物については

すべてサイトシステムによって取り上げ、遺構内の遺物ドット図を作成した。また、一括性の高い遺物についてはこれとは別に1/10で図面を作成した。上層面で確認した遺構は古墳を除けば、そのほとんどが弥生時代末～古墳時代初頭に属する住居で斜面上方では地山である岩盤を直接掘り込み、下方ではIV層を掘り込んでいた。これらの住居は斜面に立地しているため、平面形のうち谷部側の1/2ないしは1/3程度が流失しており、当時の状況をとどめているものはSBA03のみであった。住居の掘削は切り合いが認められない場合は四分法を用い、切り合いが認められた場合は、切り合い関係が断面で把握できるよう任意に畦を設定した。土坑・ピットは長軸方向の半割によって断面を観察した。住居跡からの遺物の出土は希薄で、なかには炉跡あるいは柱穴が認められない住居があり、集落の存続期間が短期であったことをうかがわせるものであった。J9グリッドでは東西方向に伸びる三日月状の浅い溝を確認した。また、J8グリッドからは表土から素環鏡板付轡が出土した。これらの結果から、この溝は、試掘確認調査では確認できなかった古墳の周溝であることが判明した。この古墳は主体部・墳丘はすでにすべて流失して、周溝のみが一部残存するものと判断した。このため、文化財保護法第57条6遺跡の発見通知に基づき、後半1号古墳として登録された。各遺構完掘後、住居は1/20、土坑・ピットは1/10でそれぞれ平面図・断面図を作成した。その後、平成11年12月1日に空撮を1/50で実施した。なお、空撮後は岩盤を掘削していない住居は基本的に四分法に従った断面に沿って断割りを行い、床面より下位の土層観察に努めた。

後半茶臼古墳は試掘確認調査時に埴輪の存在を確認していたため、すべての作業を人力で行った。平成11年6月より表土掘削及び墳丘流失土の除去から作業を始めた。これらの作業に先立ち、現状での墳丘主軸を想定した十字に主軸線を設定して、北西区をA区、北区をB区、南西区をC区、南東区をD区と呼称して作業を進めた。作業を開始して間もなく、C区で埴輪2基が原位置で確認され、その配置からみて埴形が造り出し付円墳であることが判明した。この埴形については、試掘確認調査時の所見と合致するものであった。さらに埴輪列が続くと考えられたことから慎重に作業を進めた。原位置を保つ埴輪はこの2基のみで、埴形のみを確認したものも含めても6基が残存するのみであり、大半の埴輪は周溝内に転落していた。埋葬施設は調査当初から墳頂部に人头大のチャート礫が散乱していたため、すでに破壊を受けていることが容易に予測できた。表土掘削直後から、主体部を構成する石組みを確認したが、北側の半分程度はすでに破壊を受け、石組みを認めることができなかった。埋葬施設は当初、竪穴式石塚と予想し、後述する現地説明会もこの見解で発表した。しかし、横穴式石室である可能性も捨てきれなかったため、埋葬施設を1/10で手測りによって図面を作成し、開口部と予想される部位の石材の除去と開口部の確認を行った。その結果、小さな開口部を確認することができたため、埋葬施設は竪穴式石塚ではなく、竪穴系横口式石室であることが判明した。墳丘の断割りは、B区・D区における墳丘の流失が著しく、埋葬施設の主軸方向に合わせることで困難であったため、前述した現状の墳丘に合わせた主軸線を利用し、これに埋葬施設の主軸に合わせた断割りも追加して実施した。また、埋葬施設の西側では埋葬施設の控え積みが良好に残存していたため、これについても任意に断割りを行った。これらの一連の作業を終え図化が完了した後、墳丘築成以前の状況を確認するためにすべて墳丘の除去を行った。墳丘の解体中に弥生時代末～古墳時代初頭の土器片が多数出土し、墳丘築成にあたっては、かなりの住居を破壊したものである。墳丘解体後の地形は平坦で、墳丘築成の最初の段階は原地形を平坦に整えたことが判明した。この地形を後述する



第4図 後平茶臼古墳・後平1号古墳・後平遺跡グリッド配置図 (A地区)(S:1/500)



第5図 後平遺跡グリッド配置図 (B地区)(S:1/500)

下層面の空撮に合わせて図化を行い、後半茶臼古墳の調査を完了した。

下層面の調査は第1回目の調査終了後、平成11年12月2日より始めた。すべての作業を人力で行い、まず無遺物層であるⅣ層の掘削から始めた。試掘確認調査時の所見ではⅣ層は無遺物層で縄文時代の遺物包含層であるⅤ層を安定的に覆っていると判断していたが、部分的に縄文時代の遺物が出土する箇所があり、Ⅳ・Ⅴ層の形成が一様ではないことが判明した。この理由は第2章で詳述するが、斜面上層では基盤の岩盤上に弥生時代末～古墳時代初頭および縄文時代の遺物包含層ならびに遺構面が形成されていたため、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層・遺構面が形成されるにあたって、縄文時代の遺物包含層・遺構面が谷部へ流失し、その流失過程が安定的ではなかったことによると思われる。このため、Ⅳ層中では縄文時代晩期と思われる溝を1条確認した。他の遺構はⅣ層掘削前後、Ⅴ層を掘削する過程で確認した。土坑と思われる平面形を多数確認したが、その大半は風倒木痕であり、人為的な遺構は土坑数基にとどまり、定住的な集落を確認することはできなかった。これらの遺構を完掘した後、平成12年3月1日に空撮を行い、調査を完了した。

## B地区（第12図）

平成11年11月9日より機械掘削による表土掘削を開始した。調査の手順はA地区同様に行うこととし、同月17日より人力による遺物包含層（Ⅲ層）の人力掘削を始めた。Ⅲ層の形成が希薄であったため、B地区では調査を開始して早い段階から遺構検出の作業に取りかかることになった。上層面で確認された遺構はA地区と同じく、弥生時代末～古墳時代末の住居で6棟を確認し、A地区の遺跡がB地区にも展開していくことを確認した。空撮はこれらの遺構を完掘した後、平成13年1月18日に実施した。下層面の調査は西区のみですべて人力によって掘削した。Ⅳ層の堆積が厚く、その掘削に大半の期間を費やした。確認した遺構は土坑・ピット数基でA地区同様の結果となった。下層面の空撮はA地区の第2回目の空撮と同じ日程で実施し、調査を完了した。

## 7 遺跡・遺物の公開・広報

平成11年11月24日に記者発表を行い、平成11年12月4日に現地にて現地説明会を開催し280名の参加をみた。また、12月7日には関市立富野小学校6年生26名が現地を見学した。翌年7月8日に、平成12年度岐阜県発掘調査報告会「岐阜県新発見考古速報2000」において本遺跡の概要説明及び埴輪・鉄製品の展示を行った。また、平成12年12月9日～平成13年1月4日には「特別企画いにしへの美濃と飛騨～センター設立10年のあゆみ～」が、平成13年11月17日～平成13年12月16日には平成13年度発掘速報展が岐阜県博物館で開催され、後半茶臼古墳の出土遺物を展示した。

## 8 遺物・調査記録の整理作業

平成12・13年度の2カ年にわたって、出土遺物・調査記録の整理作業を行った。遺物の洗浄・注記ならびに硬化剤処理（土器）は現地ですべて完了したため、平成12年度以降の整理作業はこれらの作業以降の段階から始めた。その工程は以下の通りである。

### 遺物

土器の接合・復元→土器の実測・観察表の作成→土器実測図の製図→写真撮影→図版作成→遺物・

## 実測図の収納・記録保管

## 遺構

遺構実測図の整理→遺構カード・一覧表の作成→遺構実測図の製図→図版作成→実測図の収納・保管  
土器の接合・復元ならびに実測図・観察表の作成は平成12年度に実施した。とくに埴輪の接合が困難で接合率が悪く、良好な資料を提示することができなかった。また、胴部片の数（多）と底部片の数（少）が見合わない印象を受けた。なお、本文の執筆は上記の作業と併行して行い、金属製品の保存処理は適宜行った。

## 9 発掘調査及び整理作業の体制

理事長	村木光男（平成11年度）、服部卓郎（平成12～13年度）
専務理事兼事務局長	原隆男（平成11～12年度）、成戸宏二（平成13年度）
常務理事兼経営部長	二山晃（平成11～12年度）、福田安昭（平成13年度）
経営部次長兼経営課長	坂東隆（平成11～12年度）、福田照行（平成13年度）
調査部長	山元敏治（平成11年度）、高橋幸仁（平成12年度）、武藤貞昭（平成13年度）
調査次長	高橋幸仁（平成11年度）、武藤貞昭（平成12年度）、片桐隆彦（平成13年度）
担当調査課長	片桐隆彦（平成11年度）、飯沼暢康（平成12年度）、高木徳彦（平成13年度）
担当調査員	富田雅之（平成11年度）、阿部昌弘（平成11年度）、村瀬泰啓（平成11年度） 藤田英博（平成11～12年度）安田正枝（平成13年度）
整理作業従事者	小木曾美智、後藤悦子、高木優子、橋本法子、日比野登美子、山口久子 野尻みどり、長柄勲子

## 10 調査日誌抄

## A地区

平成11年

- 6月10日 調査開始。表土掘削（機械掘削・人力掘削）。
- 6月11日 C4グリッドで中世墓確認。
- 6月14日 後平茶臼古墳造り出し部で原位置を保つ埴輪を確認。
- 6月21日 後平茶臼古墳C区で周溝を確認。
- 6月23日 埋葬施設で鏝出土。
- 6月28日 後平茶臼古墳A区で周溝確認。
- 6月30日 グリッド杭設置。
- 7月2日 後平茶臼古墳C区墳丘流失土中から磨製石包丁出土。Ⅲ層の掘削開始。
- 7月8日 後平茶臼古墳の埋葬施設の位置をほぼ確認。掘削を開始する。
- 7月16日 SDA01から常滑窯の口縁部片出土。
- 7月21日 富野小教諭6名来訪。

- 7月22日 可見市文化財審議委員中島勝国氏・富加町教育委員会高田崇正氏来訪。
- 8月2日 後平茶臼古墳B区周溝内ではほぼ完形となる埴輪が転落しているのを確認。  
各務原市教育委員会大熊茂弘氏来訪。
- 8月4日 糸貫町教育委員会中森裕子氏・可見市教育委員長瀬沼義氏・吉田英敏氏来訪。
- 8月5日 富加町教育委員会島田氏他作業員7名来訪。
- 8月6日 SBA01完掘。
- 8月23日 後平茶臼古墳の埋葬施設はほぼ完掘。
- 8月26日 清水小小谷和彦氏来訪。
- 8月30日 SBA03検出。
- 8月31日 後平茶臼古墳墳丘断削り開始。
- 9月8日 後平1号古墳の周溝確認。掘削開始。
- 9月9日 SBA05検出。  
富加町教育委員会教育長松山武夫氏・主事島田氏他文化財審議委員2名来訪。
- 9月15日 台風16号通過。
- 9月17日 埋葬施設の控積み範囲を確定するために墳頂部に任意の調査用グリッドを設置。
- 9月27日 SBA06検出。
- 10月5日 SBA07検出。
- 10月8日 方形周溝墓確認。
- 10月19日 富加町教育委員会島田氏来訪。
- 10月25日 SBA03が焼失住居であることが判明。炭化材出土状況図を作成。
- 10月26日 三重大学名誉教授八賀晋氏ご指導。
- 11月10日 後平茶臼古墳の埋葬施設内で確認した盗掘を掘削。
- 12月1日 第1回空撮実施。
- 12月2日 谷部においてIV層掘削開始。
- 12月4日 現地説明会実施。
- 12月7日 富野小学校6年生26名見学。
- 12月8日 後平茶臼古墳墳丘解体作業開始。
- 12月17日 岐阜市教育委員会内堀信雄氏・岐阜市文化振興事業団井川祥子氏来訪。
- 12月24日 見晴台考古資料館村木誠氏来訪。
- 平成12年
- 1月7日 V層掘削開始。
- 1月14日 富加町教育委員会島田氏来訪。
- 1月17日 岐阜県中世城館跡総合調査調査員高田徹氏・富加町教育委員会島田氏来訪。
- 1月31日 各務原市埋蔵文化財調査センター西村勝広氏来訪。
- 3月1日 第2回目空撮実施。
- 3月2日 一部、VI層掘削。
- 3月3日 現地調査終了。

B地区

平成11年

- 11月7日 調査開始。重機によってⅡ層の掘削を始める。
- 11月9日 東区の人力掘削を開始。遺物包含層（Ⅲ層）を掘削。
- 11月19日 東区においてSBB01～SBB03を検出。
- 11月26日 東区においてSBB04を検出。
- 12月3日 西区の人力掘削開始。
- 12月24日 西区でSBB05、06検出。

平成12年

- 1月12日 東区のSBB04で住居外の周溝確認。
- 1月17日 第1回目空撮実施。
- 1月19日 西区の下層面調査開始。人力でⅣ層掘削開始。
- 1月26日 自然流路を確認。断面を観察するため、断割を実施。
- 2月10日 Ⅴ層の検出作業開始。
- 2月15日 集石遺構を確認。
- 2月17日 数基の土坑を確認。
- 3月1日 第2回空撮実施。
- 3月3日 現場事務所を撤収して調査完了。



現地説明会



現地説明会

## 第2章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

#### (1) 遺跡の分布

岐阜県をいくつかに分ける場合、岐阜・西濃・中濃・東濃・飛騨という地区名としての5区分がある。もっともこれが絶対ではなく、さらに中濃を美濃と可茂に、東濃を多治見と恵那に分ける場合がある。

県内には遺跡が約8,400あるが、5地区に分けた場合に飛騨がやや少ない(1,100)ほかは、美濃の4地区は1,600~2,100程度の中におさまり、ほぼよいバランスになっている。

ところで、今回の遺跡はもともと古墳から出発したが、結局は住居跡も合わせた遺跡になった。古墳については濃尾平野の周辺にベルト状をなして密に分布している。ほぼそのベルトの一角に存在する2市町、関市は186基と多く第6位、富加町は51基21位であるが、いずれも県内上位である。さらに関市・富加町についてみると、各々の市町に存在する遺跡に占める古墳の比率が72%・86%となっており、地区平均(43%)の2倍近い数値となっており、古墳の集中する地域であることがわかる。最も古墳の多い岐阜地区(77%)、次に多い西濃地区(75%)の中に入っても決して遜色ない数値となっている。両市町が濃尾平野からそれほど遠くなく、山間部への入口付近に位置しているためと思われる。

すなわち扇状地の扇頂・扇端それに谷底平野を生産の場に照準を合わせ、そこからそれほど遠くない場所で自分の生活地域が一望に見渡せること、さらに水害の心配のない、それでもって生産の場を圧迫しない場所が選ばれたのではないかと思われる。

#### (2) 自然環境と社会環境

今回の遺跡「後平」は富加町の北端(大平賀)に位置し、すぐ北は関市(旧富野村)になっており、富加町と関市(旧富野村)の概況を把握することによって、当該遺跡の環境を知ることができる。

北からのびる山地が順次高度を減じて、標高も200m程度の丘陵とその間の谷底平野が発達する地域である。西に長良川、東に飛騨川で大きく区切られてはいるが山地の中を津保川が南流し、やがては長良川に合流している。その津保川が関市(旧富野村)から富加町加治田(川小牧)をとおり、大平賀と説田の間を通過、しばらく高畑と関市の境界をなして流れやがて関市域の中を下流へと向かう。その津保川の流下過程では加治田までの部分と大平賀・説田間以降の部分で、やや状況の違いを示している。すなわち、加治田までは山地及び谷川・谷底平野の連続をなしている。比較的谷底平野はよく発達しているが、津保川およびその支流もさらに下方浸食を進めており、谷底平野は段丘化している場合が多い。谷底平野は圃場整備の済んでいるところも多く、水田化されている所が圧倒的である。本流の津保川は基本的に北から南へ流れているが適度に蛇行しているので、比較的平野に恵まれた日当たりのよい箇所に集落が位置している。また津保川の支流となる代表的な河川が3本(藤谷川・小野川・志津野川)あって、いずれも西から東へ流れて津保川に注ぐ。これらの谷も比較的谷底平野はよく発達し平地に恵まれるが、集落は谷の北側すなわち日向面に集中していることがよくわか

る。そしてこの状況は富加町加治田（川小牧）まで継続する。すなわち大きく湾曲する津保川の滑走斜面を利用し、しかも日当たりのよい部分に集落は存在する。

加治田（川小牧）を過ぎると大平賀・滝田に至り、状況は一変する。すなわちこれまで山地及び谷川・谷底平野（「谷川・谷底平野地域」）であったのが、ここからは山は小規模な丘陵となり標高も100m程度になる。よって平地が支配的となるが、その平地は谷底平野が規模を拡大したもの（沖積平野）と洪積台地とに分かれる（「山地から平野への漸移地域」）。洪積台地は原内の濃尾平野でいえば、各務原・黒野（岐阜市）・黒野（大野町）などが知られるが、富加町の場合は中心部を東から西へ流れる川浦川の左岸から、南は詰田川右岸にまで及ぶ間が該当する。この区画は沖積世には河川の影響を受けていない黒ボクを中心とした土地で、水田も不可能で開発が遅れた地区である。それが大正年間から開墾が始まり、近年はむしろ公共施設のみならず一般住宅なども多く見られる居住域となったのである。しかし土地利用上の特色ともいえる、苗木の育成や挿作・樹木作物が見られるなどは、開墾以前の面影を感じさせるものとなっている。なお、ため池が目立つがこれも、水源としての山地が乏しい割には平地に恵まれ、雨水を蓄えておく必要性が生じてきている証拠である。津保川左岸一帯では近代的灌漑施設ができ、ため池は減少に向かったが、右岸一帯は今だその域に達していないため、ため池が健在である。次にこの2地域を分けて述べる。

### (3) 谷川・谷底平野地域

前述した「谷川・谷底平野地域」をさらに産業・人口面から見てみる。この地区は関市（旧富野村）と富加町加治田（川小牧）からなる。

関市からみると、旧富野村は関市の最北端に位置し、昭和29年に合併した区域である。面積は23㎢（23%）あるものの、人口は2,470人（平11 3%）と最少であり、さらにゆっくり減少を続けている。なお、関市を8地区に分けた場合、人口が最近10年間に減少しているのは、市街地と旧富野村のみである。農業では関市を9地区に分けた場合（第1表参照）、旧富野村は比較的水田率が高く圃場整備の行き届いている状況を示しているが、作付けしていない率が12%と高い。

第1表 関市種類別経営耕地面積（平7）

単位：ha

旧町村名	耕地面積	田	%A	作付けない面積	%B
関町	614	553	90	44	8
田原町	359	241	67	14	6
千疋村	73	63	86	2	3
下有知村	214	191	89	19	10
富野村	195	171	88	20	12
小金田村	167	146	87	6	4
保戸島村	50	42	84		
中有知村	20	8	40	0	0
南武芸村	61	57	93	4	7
合計	1,755	1,472	84	110	7

%Aは耕地面積に占める田面積の率、%Bは田に占める作付けない面積の率  
 「関市統計書」から筆者作成<sup>1)</sup>

これは人口減少地区であること、山間部で農業を行うには不利な条件があるためと思われる。なお農作物としてはまめ類・野菜・麦・いも・花卉・種苗・飼料用作物などがある。桑園は市内19軒の内8軒を占め、最も多く残っている。一方、工業は事業所数・従業者数・製造出荷額とも最低である。商業も商店数・従業者数・年間商品販売額・売場面積・1商店当たり年間商品販売額とも最も低い値を示している。

富加町に入っても加治田（川小牧）は似た状況が続く。すなわち山地の他は谷川と谷底平野からなり、川小牧の集落は谷底平野に位置している。なお人口は、昭和44年に比べ平成12年は川小牧のみ減少している。なお川小牧の場合文政5年（1826）と比べてもその増加率は最も低調である。また養蚕が残っていることも、土地利用に桑園があることから把握できる。

このように関市（旧富野村）と富加町加治田（川小牧）はよく似た傾向を示している。遺跡の位置は大平賀にかろうじて入るものの、実質的には富野・川小牧の地の遺跡と言っても過言ではない。

#### (4) 山地と平野の漸移地域

さて富加町の津保川に沿う2つ目の集落（大山）からはこの地域へと移行する。人口をみても増加に転じ、「基本的に平地がある」との実感が表現されてくるといってよい。平成12年の指数が114～191に該当する5集落は、沖積平野に生産の場をもつ集落である。条旱遺構の残存からもわかるように稲作を占くから営み、集落は山麓か川沿いの微高地に成立している。基本的に山の南側に集中していることはいうまでもない（第2表参照）。

第2表 富加町集落別人口推移

集落名	江戸明治	昭和44年	指数A	平成12年	指数B
滝田	415	665	160	933	225
羽生	297	1,504	506	2,029	683
大山	220	306	139	374	170
高畑	142	381	268	438	308
夕田	257	278	108	294	114
大平賀	317	516	163	606	191
加治田	756	745	99	861	114
川小牧	188	233	124	206	110
網丸	156	187	120	214	137

単位：人 加治田は明治初年時点での範囲を指す。  
江戸明治は年度に幅があり、享保8年（1718）～明治2年（1869）の間である。指数Aは江戸明治を100としたときの昭和44年、指数Bは江戸明治を100としたときの平成12年である。『富加町史』と富加町役場資料から筆者作成<sup>2</sup>

また平成12年の指数が225以上の集落は3つあるが、これらは洪積台地上に位置している。すなわち江戸期～明治初年には今よりかなり人口が少なかったことを示しているが、これは乏水性の土地で黒ボクの酸性土壌のため水田はおろか農用地として開発されることもなく、森林（松林）として残されていたのである。それが大正期から開発の手が加えられ、昭和12年には開墾が完了した。それ以降畑作が展開し、冬は麦、夏は甘藷をつくり、甘藷成金が出現するほどであった。時あたかも戦時中であり、食糧増産に役立ったのであるが、戦後になると甘藷への魅力も薄れて作付け作物に変化が出てきた。近年ではサトイモ・白菜などの露地野菜、じねんじょ、あるいは花き・花木が出てきてい

る。なおかつての森林を思い起こさせる苗木の生産もあるが、ヒノキ・スギが依然中心ではあるが、ケヤキ・クリなども加わり、従来の針葉樹中心から1割程度は落葉樹へと比重も変わってきた。

以上は、富加町・関市について若干の歴史を踏まえて述べたものであるが、該当地域の新旧地形図も参考になるのでつぎにあげておく。(高橋幸仁)

参考資料

- 1) 2000関市『平成11年度関市統計書』
- 2) 1980富加町『富加町史』下巻 通史編



明治39年測量図大2 製版  
1 : 50,000地形図「上有知」[岐阜]



平成9年国立地理院発行  
1 : 50,000地形図「美濃」[岐阜]

第6図 遺跡周辺新旧地形図

## 第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する富加町内には数多くの遺跡が所在する。その多くは後期古墳だが、水田耕作などによりかなりの数が滅失している。第8図にあげている古墳でも半数ちかくはすでに原位置が確認できないものもあることから、元来は100基ちかい古墳があったのかもしれない。

町内の遺跡を概観するとこうした後期古墳以外に旧石器時代の遺跡が顕著である。旧石器時代の遺跡は大山北野遺跡、車塚遺跡、恵日山遺跡、北野遺跡があげられ、いずれも台地上に形成された遺跡である。これらの遺跡は県立関高校社会研究部の踏査によってその存在が明らかとなったもので、恵日山遺跡では昭和44年に一部、南山大学によって調査実施されている。旧石器時代の遺跡は県内でもそれほど多くはないことから、町内の旧石器時代の遺跡は県内でも注目される遺跡と考えられ、今後の調査研究が一層望まれる地域でもある。



国土地理院発行 1 : 50,000地形図

岐阜 (平成10年発行)

美濃 (平成9年発行)

美濃加茂 (平成7年発行)

金山 (平成元年発行)

第7図 調査遺跡位置図 (S : 1/100,000)



国土地理院発行 1 : 25,000地形図 (美濃)  
1 : 25,000地形図 (美濃開)

第8図 周辺遺跡分布図 (S : 1/25,000)

第3表 周辺遺跡一覧表

番号	名称	内容
1	後平茶臼古墳 後平第1号古墳 後平遺跡A地区	本報告遺跡。
2	後平遺跡B地区	本報告遺跡。
3	南坂茶臼古墳	円墳で、一部横穴式石室が露出している。
4	小竹原遺跡	縄文時代の遺跡。縄文時代前期の土器片の他に石鏝、打製石斧が採集されている。
5	老梅第1号古墳	
6	老梅第2号古墳	
7	坂本古窯	8世紀初頭の須恵器窯。
8	大山古墳群	過去に十数基の円墳があったとされているが、現在は消失している。
9	大山北野遺跡	旧石器時代～縄文時代の遺跡。ナイフ形石器の他に縄文時代中期～後期の土器片が採集されている。
10	池下第1号古墳	全長26m程度の前方後円墳。
11	池下第2号古墳	直径20mの円墳があったとされているが、現在は宅地となり、一部の墳丘が残るのみである。
12	池下遺跡	弥生時代の遺跡。弥生時代中期の貝田町式土器片が採集されている。
13	大山車塚古墳	直径20m程度の円墳で保存状態は良好。過去に刀、鏝、甕、須恵器などが出土したという記録が残っている。また、周囲には小円墳があったとされているが、現在は消失している。
14	車塚遺跡	旧石器時代～縄文時代の遺跡。ナイフ形石器が採集されている。また、異形部分磨製石鏝や縄文時代前期後半の北白川層Ⅱ～Ⅲ式土器片も採集されている。
15	福岡遺跡	弥生時代～古墳時代前期の集落跡。昭和42年、工場建設に伴う土取り作業によって、住居の断面が露出し、南山大学と県立岡山高校社会研究部によって調査が実施されている。この結果、古墳時代前期の住居3棟が確認されている。
16	井高第1号古墳	町指定遺跡。「滝田の火塚」と呼ばれることもある。一辺19m程度の方墳で、横穴式石室は複室構造をもつものとして貴重である。
	井高第2号古墳	
	井高第3号古墳	
	井高第4号古墳	直径20m程度の円墳。
17	天神野北古墳	直径16m程度の円墳。
18	金戸古墳	現在は消失しているが、過去に平塚が採集されている。
19	打越古墳群	消失した可能性大。
	袴室屋第1号古墳	円墳で、一部横穴式石室が露出している。現状では直径14m程度だが、本来は20m程度あったとみられる。
	袴室屋第2号古墳	円墳。
	袴室屋第3号古墳	円墳。
20	袴室屋第4号古墳	
	袴室屋第5号古墳	直径17m程度の円墳。墳丘の一部が削平を受け、横穴式石室が露出している。
	袴室屋第6号古墳	円墳。
	袴室屋第7号古墳	円墳。
21	山崎車塚古墳	

番号	名称	内容
22	隈田古墳群	水田耕作によって消失した可能性大。
23	隈田古墳	現状で、直径17m程度の円墳。横穴式石室は南向きに開口していたと思われるが、現在は埋まっている。
	山崎第1号古墳	
24	山崎第2号古墳	
	山崎第3号古墳	
25	本郷遺跡	縄文時代の遺跡。縄文時代中期後半の加賀利Ⅱ式土器片の他に石鏝や打製石斧が採集されている。
26	中陣子第1号古墳	円墳。
27	中陣子第2号古墳	
28	北野経塚	
29	北野古墳群	墳丘は水田耕作によって削平されているが、埋葬施設は残っていると考えられる。
30	恵日山遺跡	旧石器時代～弥生時代の遺跡。旧石器時代については昭和41年に南山大学人類学教室による小規模な調査が行われている。縄文時代前期後半の丹保式または北白川層Ⅱ式の土器や挾杖瓦器、部分磨製石鏝が採集され、町内では規模の大きい遺跡と考えられる。また、弥生文系土器も採集され、遺跡の下層は弥生時代までだとみられる。
31	愛宕古墳	全長23m程度の前方後円墳。埋葬施設は横穴式石室と考えられている。
32	北野遺跡	旧石器時代の遺跡。ナイフ形石器や台形石器が採集されている。また、実器も採集されており、遺跡の下層は縄文時代に下ると考えられている。
33	杉洞第1号古墳	全長27m程度の前方後円墳。地元では「ひさご塚」と呼ばれている。
34	杉洞第2号古墳	
35	杉洞第3号古墳	
36	杉洞第4号古墳	昭和44年に調査が行われている。直径20m程度の円墳とみられ、横穴式石室からは多量の須恵器が出土した。築造年代は出土須恵器から7世紀前半代と考えられる。
37	逆野遺跡	
38	蓮野古墳	全長27m程度の前方後円墳。
39	夕田遺跡	
	北洲第1号古墳	
40	北洲第2号古墳	直径20m程度の円墳。
	北洲第3号古墳	宅地、畑地によって、現在は横穴式石室の1/3を残すのみである。
41	夕田茶臼山古墳	町指定遺跡。全長34m程度の前方後円墳。
42	高畑第1号古墳	
43	高畑第2号古墳	
44	春日古墳	
45	於波里古墳	
46	白山神社遺跡	弥生時代末～古墳時代初期の遺跡。赤歌された屈折式の土器が採集されている。
47	東山浦 半希聖遺跡	弥生時代～古代の一大遺跡。大宝二年御野面加毛郡半希聖戸籍の故地として有力視されている。夜帳遺跡などにもなっており、7回の調査が実施されている。

縄文時代の遺跡は、前述した旧石器時代の遺跡が継続している事例が多く、そのため縄文時代の比較的古い段階の遺跡が目立つ。小竹原遺跡、車塚遺跡、恵日山遺跡では縄文時代前期後半の土器片が採集されている。縄文時代中期以降の遺跡には大山北野遺跡、本郷遺跡があるが、縄文時代前期以前の遺跡に比べると遺跡数が減っている印象を受ける。

弥生時代の遺跡は数少ない。池下遺跡、夕田遺跡で弥生土器が採集されているが、詳細は不明である。しかし、詳細は後述するが、東山浦・半布里遺跡では弥生時代中期の住居（SB69・SB75）が昭和53～55年の県教育委員会の調査によって確認されている。この住居からは土器・石包丁が一括出土しており、県内では数少ない中期末（高蔵式併行）の資料として貴重である。最近行われた東山浦D地点（第9図）では前記した住居とほぼ同じ時期とみられる溝が確認されている。報告者は環濠の可能性も指摘しており、東山浦・半布里遺跡において中期末に大規模な集落が展開されていた可能性が高い。弥生時代末～古墳時代初頭に相当する遺跡は現在、本報告書で報告する後平遺跡しか知られていない。しかし、本遺跡も新たに認知された遺跡であり、斜面に立地するというその特異な立地条件に照らせば、未だ知られていない遺跡が町内に存在する可能性は十分にあると考えられる。

古墳時代に入ると前半段階の遺跡には土取り作業に伴って調査を実施した稲荷遺跡があげられる。調査の結果、3棟の住居が確認されている。出土遺物を見ると古墳時代初頭（週間Ⅱ式併行）に形成された遺跡とみられ、後平遺跡に継続する遺跡として注目される。後期古墳は古代の一大集落である東山浦・半布里遺跡の関わりでその存在が重要である。しかし、すでに滅失した古墳も多く、今回の調査で新たに確認した後平1号古墳のように墳丘・埋葬施設すべて失った古墳も数多く存在するものと予想される。本報告書で報告する後平茶臼古墳は町内では立地・墳形などからみて盟主的な位置を占めると考えられる。町内の古墳には前方後円墳の墳形を採用するものとして池下第1号古墳、愛宕古墳、夕田茶臼山古墳、杉洞第1号古墳、蓮野古墳が知られている。いずれも正式な調査事例がないため詳細は不明だが、後平茶臼古墳の事例を考えるといずれの古墳も早い段階の後期古墳である可能性が高いとみられる。これらの古墳は町内周辺を取り囲む低丘陵上に分散して立地し、周辺地域を統括していた中小首長の墓と考えられる。そうした中小首長墓の系列は井高第1号古墳や杉洞第4号古墳に引き継がれると考えられ、町内では東側の丘陵部に集中する傾向が認められる。この傾向は後述する古代の大集落である東山浦・半布里遺跡と近接することから、東山浦・半布里遺跡の集団によって形成された可能性が高い。

東山浦・半布里遺跡は正倉院に現存する最古の戸籍「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」の故地として有力視され、古代の集落を実態解明するのに重要な資料を提供している遺跡である。元来、東山浦遺跡、半布里遺跡として別々に呼称されているが、隣接しているため遺跡範囲の確定が困難で、その内容も近似することから、ここでは一括して取り扱う。東山浦・半布里遺跡は現在までに範囲確認を含めて7回の発掘調査が行われている（第9図）。調査の契機は富加町庁舎の建設に伴うもので、昭和52年に発掘調査が実施され、7～8世紀代の住居跡（建物跡も含む）が33棟確認された。この結果、住居の年代観と半布里戸籍の年代観がほぼ一致し、一躍注目を浴びることになった。その後、県教委による昭和53～55年の範囲確認調査、町教委による昭和61年の範囲確認調査ならびに庁舎に隣接するタウンホール富加の建設に伴う発掘調査が昭和62年に実施され、確認された住居跡は137棟に及び（前述したSB65・75の弥生中期の住居跡2棟を含む）、この地が古代の一大集落であることが明らか

となっている。最近では平成8～9年にかけて東山浦B～D地点の発掘調査（A地点は昭和52年の調査地点）が町教委によって実施されている。B地点では古代の住居跡2棟が確認され、遺跡の広がりがかなり広範囲に及んでいることが明らかになりつつある。現在も町教委によって遺跡範囲の確定が精力的に進められているので、さらなる半布里の集落解明に向けての成果があがることが期待される。

参考文献 1981岐阜県教育委員会「半布里遺跡調査概報(1) 一流田・羽生地区—

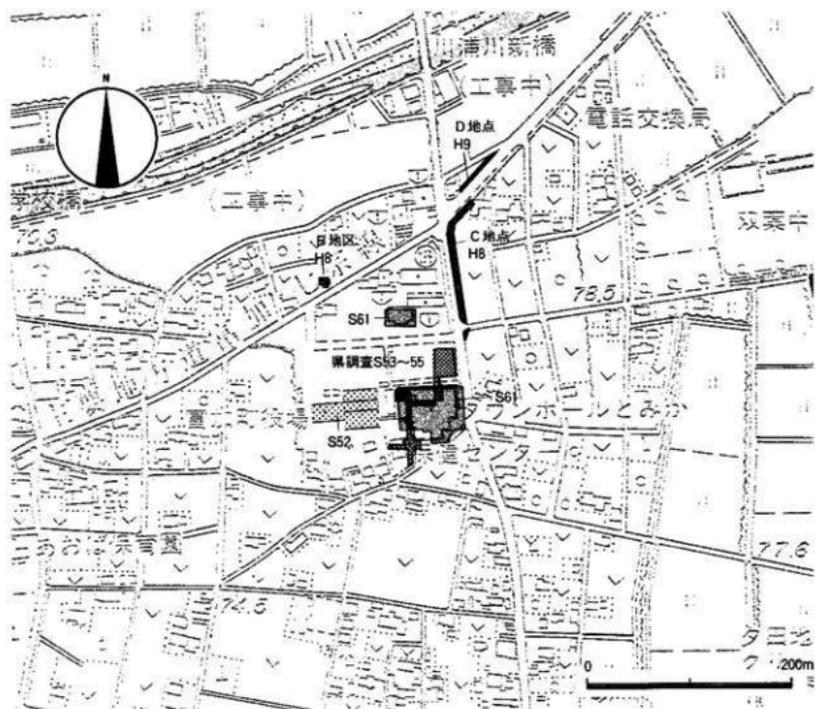
1987富加町教育委員会「半布里遺跡」富加町文化財調査報告書第3号

1989富加町教育委員会「半布理遺跡発掘調査報告書」富加町文化財調査報告書第4号

1996富加町教育委員会「東山浦遺跡B地点発掘調査報告書」富加町文化財調査報告書第5号

1997富加町教育委員会「東山浦遺跡C地点発掘調査報告書」富加町文化財調査報告書第6号

1998富加町教育委員会「東山浦遺跡D地点発掘調査報告書」富加町文化財調査報告書第7号



第9図 東山浦・半布里遺跡詳細図

## 第3章 基本層序と遺構・遺物の概要

### 第1節 基本層序

後平茶臼古墳・後平1号古墳・後平遺跡の層序は、試掘確認調査の結果に基づき、以下のように区分して発掘調査を進めた。層序はその性質によって上層から下層の順にⅠ～Ⅴに大きく区分し、さらにⅠ～Ⅴの層序を細分した。細分はローマ数字の後ろに小文字のアルファベットを付けて区分した。ここで紹介する層序はA・B両地区とも試掘確認調査及び本発掘調査におけるトレンチ・グリッド畦の断面で、Ⅰ～Ⅴ層の大区分の層序は共通するものとして統一を図っているが、細分した層序については、それぞれの断面の観察結果に基づくもので、厳密には各断面で差異が認められる。A地区では安定した層序が認められたため、細分した層序も統一を図っているが、B地区では東区と西区では相違が認められるため、別々に取り扱う。なお、遺物の取り上げはⅠ～Ⅴ層の大区分の層序を利用して取り上げた。

#### A地区（第10、11図）

##### Ⅰ層（10YR 3/3 暗褐色土）

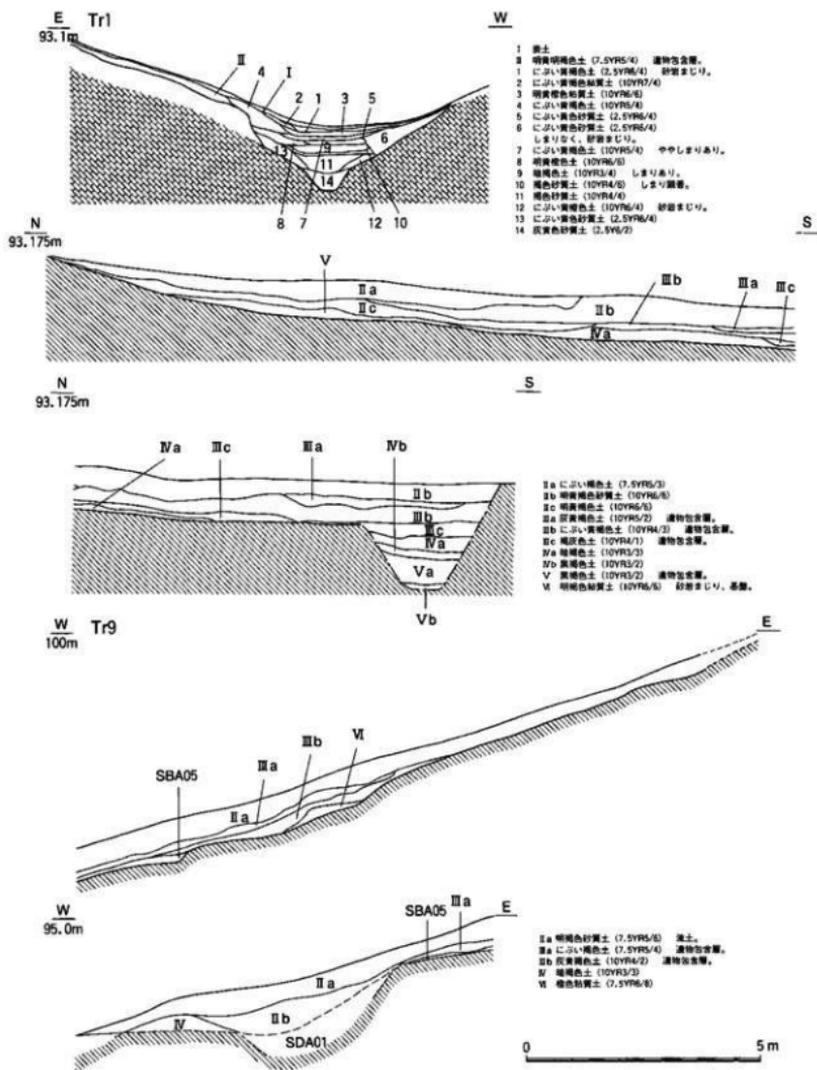
表土。調査以前の腐植土、現代の耕作土。

##### Ⅱ層（10YR 6/6 明黄褐色砂質土）

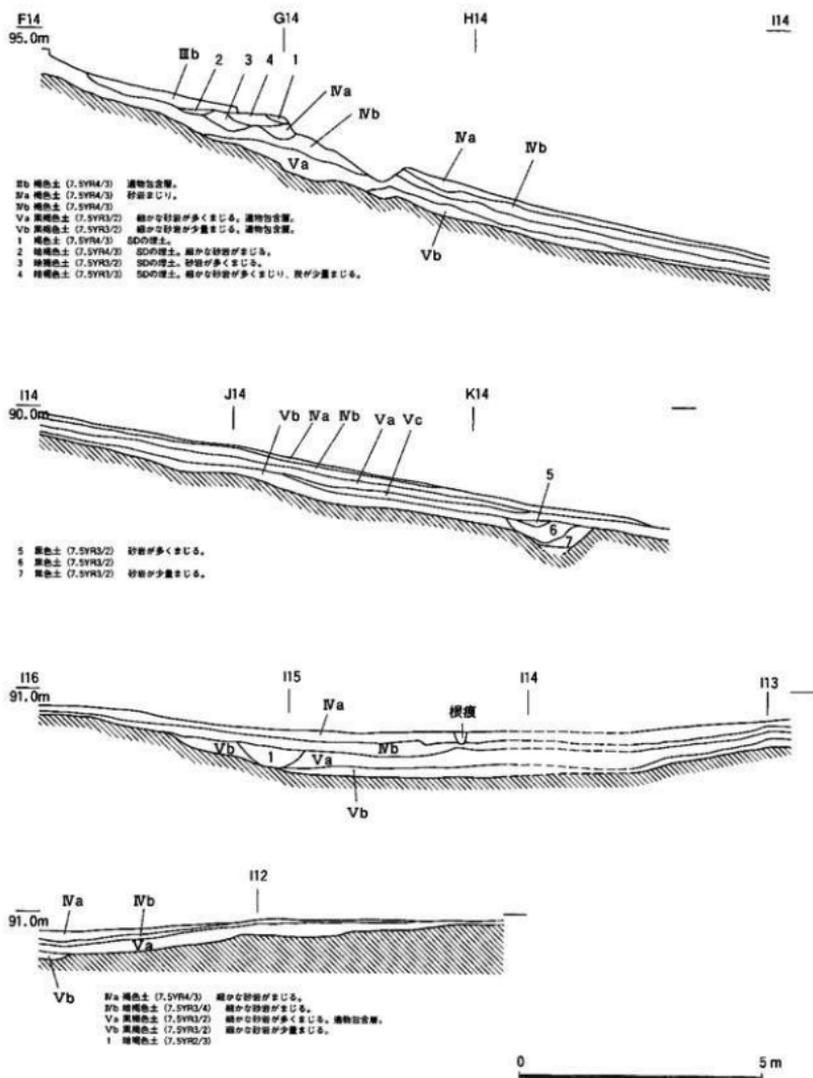
後述する弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層を覆う層序で、地山である砂岩岩盤が尾根頂上部から風化・浸食によって斜面下方に流失・堆積したものと考えられる。当然、堆積の厚さは斜面上方から下方に向かって厚くなり、最大で70cm程度堆積している。また、Ⅱ層中にはラミナ面が認められることから、流水にともなって堆積したことがわかる。土色は赤褐色を呈するものがあり、その色調は起源となる砂岩岩盤の土色を反映しているとみられる。赤褐色を呈する岩盤は主に細粒砂岩で形成され、風化に伴って雨水などによって鉄分が沈着して赤褐色化したものと考えられる。Ⅱ層中ではSZ02を代表とする中世墓を確認した。この結果からみて、Ⅱ層中のどこかに中世の遺構面が形成されていたと考えられるが、断面中ではその様子はまったく確認できなかった。このため、中世墓はいずれもⅢ層上面でⅡ層が堆積している状況で確認し、調査時には当時の遺構面を掘削してしまっており、Ⅲ層を掘り込んだ遺構のみを中世の遺構として把握したにすぎない。このことから、Ⅱ層の形成は中世にはすでに開始され、現在に至っているものと考えられる。後述するSD01中から近世初期の遺物が出土しており、近世の段階ではⅡ層はまだSD01を埋めるに至っていないものと判断できる。

##### Ⅲ層（10YR 3/2 黒褐色土）

出土土器からみて弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層。谷部において確認した住居跡の上部のⅢ層から出土した土器片が住居内出土の土器片と接合する事例も認められることから、弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面である可能性も捨てきれないが、調査中はⅢ層中に遺構を確認することができなかったため、遺構面ではないと判断している。堆積は10～20cm程度と薄いもので、F列より東側及び9列より北側の斜面上部ではⅢ層の堆積は認められない。おそらく、浸食によって斜面下方に流失



第10図 A地区試掘基本層序 (S : 1/100)



第11図 A地区基本層序 (S:1/100)

したものと考えられる。また、Ⅲ層中からはわずかに埴輪や縄文土器が出土した。埴輪は後平茶臼古墳から流入したものと思われる。縄文土器は本米、後述するⅤ層に伴うものだが、G列より東側の斜面上方ではⅤ層の堆積はなく、そのまま地山に連なり、中間層であるⅣ層の堆積も認められない。このことからみて、F列より東側では弥生時代末～古墳時代初頭ならびに縄文時代の遺構面が地山上に重複していた可能性が高く、この結果、Ⅲ層中に縄文土器片が混入したものと考えられる。

#### Ⅳ層 (7.5YR 4/3 褐色土)

性質はⅡ層と近似し、遺物包含層であるⅢ・Ⅴ層の中間層的性格をもつ。層序中には風化した径1cm前後の砂岩が認められたため、地山である砂岩岩盤から土が供給されたものと考えられる。試掘確認調査時には無遺物層と想定したが、わずかに縄文土器や石器が出土した。その理由はⅢ層と同様、斜面上方から流入したものと考えられる。なお、弥生時代末～古墳時代初頭の遺構はⅣ層が堆積している範囲では、このⅣ層を掘削して遺構を形成している。このことから、Ⅳ層上面が弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面と判断している。

後述するNRA01はⅣ層中で確認しており、遺構の形成時期は出土土器から判断して、縄文時代晩期と考えられる。他には同時期の遺構を確認していないが、Ⅱ層で確認した中世墓と同じく、Ⅳ層中のどこかに縄文時代晩期の遺構面が形成されていた可能性がある。

#### Ⅴ層 (7.5YR 3/2 黒褐色土)

ややシルト質で、縄文時代の遺物を包含する層序。その時代の幅は広く、縄文時代早期～縄文時代晩期に及び、その期間にⅤ層が形成されたと判断される。Ⅴ層の堆積は谷部に限定され、G列より西側で認めることができる。それより斜面上方にも形成されていた可能性もあるが、おそらく浸食によって失われているとみられる。

## B地区

### 東区 (第12区)

Ⅲ層より下部では地山である砂岩岩盤が露出するため、調査区内にはⅣ・Ⅴ層は認められない。

#### I層

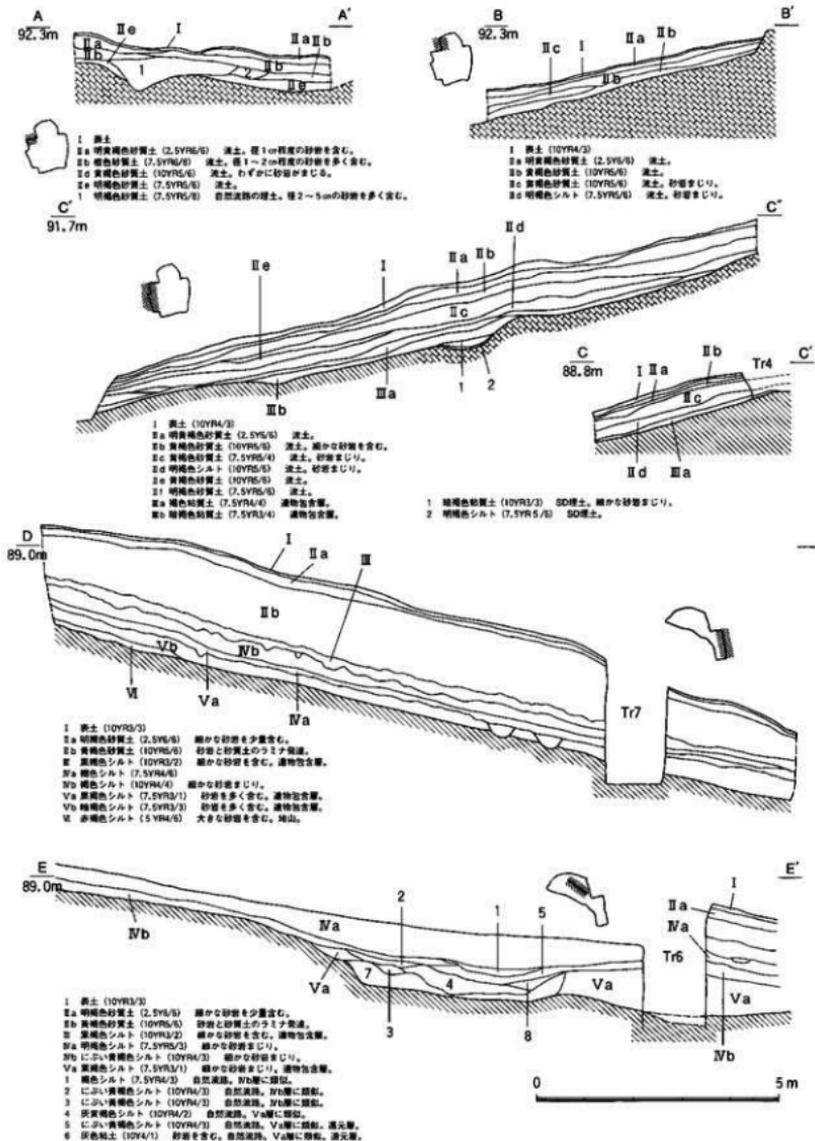
A地区と同様。

#### II層

A地区と同様の状況を示すが、やや堆積が厚く最大で1m程度が堆積している。なお、A地区で確認した中世の遺構は本層序中では確認できなかった。

#### III層

厚さ10～20cm程度でA地区と同様の状況を示している。調査区の北半分では斜面のため、Ⅲ層は認められなかった。



第12図 B地区基本層序 (S:1/100)

## 西区（第12図）

谷部に位置するため、Ⅳ・Ⅴ層の存在が確認されている。

### Ⅰ層

A地区と同様。

### Ⅱ層

性質は前述したA地区と同一だが、その堆積が東区と比べてもさらに厚くなり、1m以上堆積している。

### Ⅲ層

A地区同様、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層。この層序を掘削した後、Ⅳ層上面で遺構が確認できる。西区ではⅢ層は安定した状況で認められ、ほぼ調査区域全域で堆積が認められる。

### Ⅳ層

A地区と同じく、Ⅲ層とⅤ層の中間層としての性格をもつ。斜面上方では薄くなるものの、ほぼ調査区域全域に堆積が認められる。

### Ⅴ層

縄文時代の遺物包含層。30cm程度が堆積し、A地区と比べると安定しているとの印象を受ける。調査区北半分では次第に堆積が薄くなり、Ⅲ層あるいはⅣ層に連なるものと考えられる。

## 第2節 遺構・遺物の概要（第13、14、15、16図・第4表）

### 1 遺構の概要

前述した層序の所見から安定した遺構面は2面だが、Ⅱ層ならびにⅣ層中で確認された遺構を含めると遺構面は計4面と考えられる。これをⅠ～Ⅵ期として区分して本章以降で評述することにする。Ⅰ～Ⅵ期の区分はA地区を基本として区分したもののだが、B地区でもほぼ該当するのでそのままⅠ～Ⅵ期の区分を使用することにする。

#### Ⅰ期（縄文時代早期～後期）

Ⅴ層を掘削した後確認した遺構をⅠ期の遺構として区分した。Ⅴ層の広がりからみて谷部のみにⅠ期の遺構が展開すると想定していたが、A地区ではE17グリッドにある集石遺構SIA01はその形態からみてⅠ期の遺構と判断される。SIA01は斜面上部、すなわちⅤ層が堆積していない箇所で地山である砂岩岩盤を掘削して形成されており、斜面上部では後述するⅢ期の遺構と同一面に遺構が形成されていることを確認した。このため、予想以上にⅠ期の遺構が広がると推測していたが、地山上でⅠ期の遺構と確実に認定できるものはSIA01のみであった。SIA01以外のⅠ期の遺構はすべてⅤ層が堆積する谷部で検出した。谷部で検出した遺構は土坑10基で、遺物がまったく出土しなかったため、その具体的な所属年代を明らかにすることはできない。これらの土坑周囲には風倒木痕が多数存在し、遺構と認定した土坑のなかにも、風倒木が含まれる可能性があることは否めない。

また、Ⅴ層中からの遺物の出土は希薄であり、住居跡も確認できなかったことからⅠ期の時期には定性的な様相は認められなかった。

#### Ⅱ期（縄文時代晩期）

A地区では前述したようにⅣ層掘削中に確認した自然流路NRA01から縄文時代晩期の土器が出土

したため、Ⅱ期の遺構とした。NRA01以外の遺構は確認できなかった。B地区でもⅣ掘削中に検出した遺構に土坑とピットがあるが、遺物はまったく出土しなかったため、その所属年代を明らかにすることはできないが、層序を重視してⅡ期の遺構として取り扱う。

### Ⅲ期（弥生時代末～古墳時代初頭）

Ⅲ層を掘削した後に確認した遺構をⅢ期の遺構として区分した。Ⅲ層が堆積している箇所ではⅣ層を掘削して遺構を形成しているが、Ⅳ層あるいはⅢ層が堆積していない斜面上方では地山を掘削して遺構を形成している。確認した遺構は住居跡、方形周溝墓、溝、土坑などで本遺跡の主体となる時期である。主な遺構は下記の通りである。

A地区では南側斜面と西側斜面に分散して住居跡が展開する傾向が認められ、こうした傾向はB地区でも共通し、傾斜角20°前後の斜面に展開する。確認した住居跡は斜面に占地しているため、谷側の平面形を浸食によって失われているものが大半である。おそらく、谷側の床面は山側を掘削した排土を使用して築成したものと思われるため、その構造上、流失しやすい環境にあったと推測される。こうした住居跡の占地ならび構造上の特徴から、確認した住居跡の平面形は本来の形状を保持しておらず、山側のみ平面形のみが残存する横長の形状を示すものが多い。このため、炬跡も流失した可能性が高い。本来の形状を保つ住居跡はA地区のSBA03が唯一で、住居の掘削をすべて地山に依存したために、本来の形状を保持したと考えられる。B地区のSBA01では山側からの流水を防ぐために、住居跡の外周をめぐる周溝（SDA01・SDA02）を確認したが、A地区では確認していない。確認した住居跡のうち重複関係が認められるのはA地区ではSBA07～SBA10、SBA13周辺、B地区では東区のSBB01～SBB02があるが、いずれも住居跡の左右で重複するのではなく、斜面に直交する方向で重複している状況が確認できた。しかし、一部に誤認している可能性もある。住居跡から出土遺物は少なく、遺物にも大きな時期差がないことから、短期的な集落であったと考えられる。

一括性の高い遺物は焼失住居であるA地区SBA03出土遺物のみで、それ以外は斜面最高所にある住居跡は別にして斜面下方にある住居跡の遺物は上方に位置する住居跡からの混入は避けられないものと判断される。

なお、住居跡の記述については以下の通りの表記に従って報告する。以下の表記は類似する遺跡である砂行遺跡に基づいている。（※1）

山側：住居内からみて斜面上方

谷側：住居内からみて斜面下方

山側周溝：住居跡の山側をめぐる浅い溝。住居内への防水目的で築成されたと思われる。B地区のみでしか確認できていない。

壁溝：住居内の壁面と床面の境界をめぐる細い溝。主に山側しか認められない。おそらく、壁面を支える板材を支持するための布握りとして築成されたと考えられる。

面積：住居の床面の面積。しかし、谷側が流失していることが多いため、正確とはいえない。

主軸方向：住居の形状が本来の形状を保持していないため、谷側から山側へ向かう方向を主軸方向として判断した。

奥行き：山側の床面幅

幅：最も谷側に残る床面の幅

隅角；住居内の各壁面が接する箇所。丸い場合と角張っている場合がある。

※1 2000『砂行遺跡』財団法人岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集

#### IV期（古墳時代後期）

後平茶臼古墳と後平1号古墳が相当する。いずれも斜面上部ないしは尾根頂上部に立地するため、Ⅱ・Ⅲ層の堆積はなく、地山である砂岩基盤上に墳丘を築成しているが、後平茶臼古墳では墳丘断面観察時に古墳造営時の旧表土が認められた。後平茶臼古墳の墳丘中にはⅢ期の遺物が数多く含まれていたことから、古墳周辺には古墳造営時にはⅢ期の遺構が展開していたものと推測され、これを古墳造営に伴って破壊した結果、墳丘中にⅢ期の遺物が混入したと考えられる。こうした墳丘中から出土した遺物のなかには磨製石包丁や磨製石鏃などの、貴重な資料も認められる。後平茶臼古墳の年代は墳丘裾をめぐる尾張型埴輪ならびに埋葬施設から出土した須恵器から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。埋葬施設は堅穴系横口式石室で県内では横穴式石室の導入期にあたる希有な事例である。

後平1号古墳は第1章で述べたように、調査当初は予期していたものではなかった。その残存状況は悪く、周溝の一部が残存するのみである。詳細は後述するが、後平1号墳は出土した甕の年代観より6世紀前葉～中葉と判断した。

なお、B地区にはIV期に相当する遺構は認められなかった。

#### V期（中世）

A地区においてⅡ層中で確認された中世墓の存在によって明らかとなったもので、本発掘調査中では安定した遺構面を確認することができなかった。本報告書でV期として紹介する遺構はすべて、Ⅲ層あるいは地山を掘削して形成しており、前述したⅢ期の遺構を検出する過程で確認したものである。試掘確認調査の結果に基づいて、Ⅱ層の掘削を重機に依存した。その結果、Ⅱ期の遺構をⅢ期の遺構とともに確認することになった。調査区の北側で確認したSZA01などはⅡ層掘削時から、炭化材が混在した土が広がる様子が認められたことから、遺構の形成はⅡ層中から始まっていると考えられる。

V期の遺構としたものはいずれも長軸2m前後の楕円形の土坑で、炭化材を伴う。SZA01、SZA02、SZA03、SZA04、SZA05がそれぞれであるが、遺物が出土し所属年代が明らかとなったものはSZA01のみである。SZA01以外はⅡ層中から遺構が掘削された可能性が高いこと、SZA01と平面形が類似し炭化材を伴うことを重視してV期の遺構として判断した。

B地区ではA地区同様にV期の遺構が存在するものと想定し作業を進めたが、確認できなかった。

#### VI期（近世）

B地区では認められず、A地区のSDA01・SDA02がVI期の遺構に相当する。SDA01・SDA02はいずれも地山の岩盤を断面V字形に掘削したもので、SDA02は自然流路の可能性が高いが、SDA01は人為的に掘削したものと考えられる。その理由は掘削した排土を9列～16列にかけては、溝の東側に埋め立て堤防上の形状を呈していたことによる（第10図IV層）。深さは深いところでは2.7mに達し、大量の土が排出されたことが容易に推測できる。また、後平茶臼古墳の東側に隣接するため、後平茶臼古墳東側1/3程度を溝の掘削に伴って破壊している。溝の掘削時期は近世初期の常滑甕の破片が出土したことから、その時期を想定している。溝の機能については不明だが、道の可能性が高い。

## 2 遺物の概要

## I 期（縄文時代早期～後期）

I 期の遺構を覆うIV・V層から出土した遺物を取り扱う。また、III層中で確認したI期に属する遺物もここで取り扱う。I期の遺物は出土量が少なく、遺構に伴うものも認められなかった。遺物は縄文土器と石器類で、縄文土器は茅山下層式と元住吉山式に類似するものが多いことから、縄文時代早期と後期の遺物が主体であると考えられる。なお、B地区ではI期の遺物はほとんど出土しなかった。

## II 期（縄文時代晩期）

前述したNRA01から出土した遺物を取り扱う。NRA01からは条痕調整を施した土器片が出土しているため、その年代は縄文時代晩期と考えられる。

## III 期（弥生時代末～古墳時代初頭）

III層及び住居内から出土した遺物を取り扱う。その大半は山中式後期～廻間I式に相当する土器で、少量の石器類が出土している。石器の多くは石鏃だがその形状からみて、山中式後期～廻間I式を遡る時期のものも認められる。

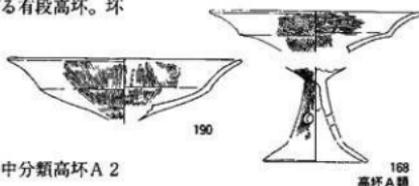
出土した土器は下記の通り分類した。分類にあたっては既往の研究を参考にした。※1

## 高坏

坏部底部で段をもって坏部口縁部が立ち上がる有段高坏。坏部・脚部の形状からA～C類に分類した。

## 高坏A類

坏部底部と坏部口縁部の境界に強い段を有し、坏部口縁部が強く外反するもの。脚部はB・C類に比して丈高である（山中分類高坏A2類・砂行分類A1類）。



## 高坏B類

坏部底部と坏部口縁部の境界に段を有し、坏部口縁部が直立気味に立ち上がるもの（廻間分類高坏A1類・砂行分類高坏B類）。



## 高坏C類

坏部底部と坏部口縁部との境界に段を有するが、坏部がB類に比して深いもの。脚部はB類と比べると短脚化する傾向にある（廻間分類高坏A2類・砂行分類高坏C類）。



**器台**

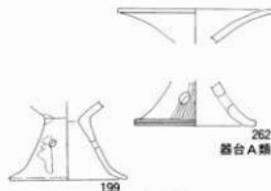
脚部の形態からA・B類に分類した。

**器台A類**

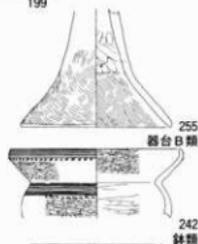
脚基部が太く円柱状を呈し、裾部が強く外反するもの  
(山中分類器台A類)。

**器台B類**

脚基部がA類に比して細く、円錐状にひろく脚部をもつ  
もの(廻間分類器台C類・砂行分類器台B類)。

**鉢**

口縁部の形態により細分できる可能性が高いが、出土量が少ないため一括して取り扱う。大半は口縁部が長く外傾して、端部をわずかに受口状とするものが目立つ。また、端部及び頸部に擬凹線と列点文を施す(砂行分類鉢C類)。

**甕**

完存する資料が少ないため、主に口縁部の形態に着目してA～D類に分類した。近年の調査事例である砂行遺跡で確認された資料と類似性が高く、脚台が破片でもわずかしか確認できないことから、おそらく平底甕である可能性が高い。

**甕A 1類**

頸部が弱くくびれ、その頸部から口縁部が長く外反気味に立ち上がるもの。器面の調整には外面において条痕調整が認められる(砂行分類甕A類)。

**甕A 2類**

形態は甕A 1と同様であるが、調整(外面ハケなど)・文様(直線文・列点文)に変化のあるものを一括する。

**甕B類**

頸部はA類と比べると強く屈折し、口縁部が長く外傾するもの。端部は受口状となり、鉢類の手法と共通する。また、文様も端部外面と頸部に施され、鉢類との類似性が高い(砂行分類甕C類類似)。

**甕C 1類**

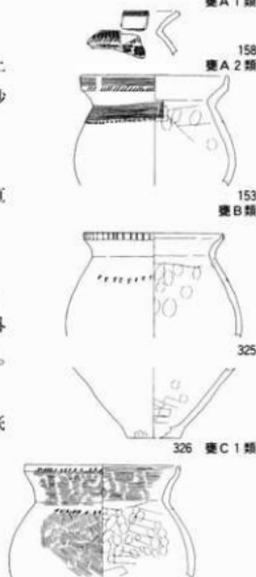
口縁部が短く外傾し、端部にわずかに段をもつもの。底部は平底である。

**甕C 2類**

形態は甕C 1類と同様であるが、口縁部が長く外傾するもの。

**甕D類**

上記の分類に相当しないものを一括した。



**甕E類**

S字甕を一括する。

**壺**

壺類は破片資料が大半を占め、細分できる資料が少ないため、既往の研究に照らして、以下の器形の3つに分類した。

**壺A類**

いわゆるパレススタイル壺を一括する。

**壺B類**

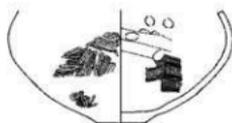
小型の長頸壺を一括する。大半が端部外面に鉢類と共通する文様をもつ。

**壺C類**

上記の分類以外のものを一括した。



188



193

壺A類



149

壺B類

**文様構成と加飾手法について**

Ⅲ期の土器は各器形、とくに甕・鉢の口縁部・胴部上半に加飾する傾向が強く認められ、その手法も様々であるため、ここで加飾する手法のパターンを分類し、その後の記述で用いることにする。加飾文様は擬凹線文・直線文と刺突文・列点文の組み合わせが強く、口縁部・胴部上半に共通して用いられる。

以上に擬凹線文・直線文と刺突文・列点文、ならびに加飾する際に使用したと考えられる工具についての分類を示しておく。

**直線文** いわゆるハケメの痕跡と同一で、板状工具によるハケメ痕跡によって横位の直線文を形成するもの。施工工具は以下の2つが想定される。

工具A 板の小口を利用したと思われるハケメ痕跡を残すもの(写真2)。

工具B 工具Aより器面に残されたハケメ痕跡の間隔が広く、その断面も深くなり、板の小口を利用したというよりは、櫛状工具を利用した可能性が高いと考えられるもの(写真1)。列点文の施工工具として多用される。

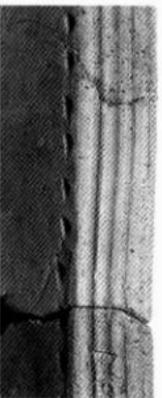
**擬凹線文** 櫛状工具などで幅広い凹線を形成して、文様とするもの(写真7)。

**刺突文** 工具A・Bを利用して加飾するが、その痕跡に工具の前後の動きがみられるもの(写真5)。

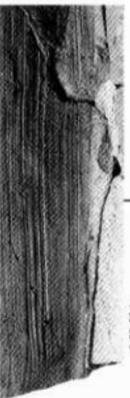
**列点文** 工具A・Bを利用して加飾するが、刺突文と異なり、工具に前後の動きがなく、器面に対してほぼ垂直に工具を押しつける痕跡を残すもの(写真4・5)。

- ※1 赤塚次郎1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター  
1990「週間式土器」『週間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター

2000「砂行遺跡」財団法人岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集



① 242 直線文工具B  
刺突文



② 242 直線文工具A



③ 242 直線文工具A  
刺突文



⑤ 158 直線文工具A  
列点文



⑥ 188 内面 縦凹線文



⑦ 188 外面 縦凹線文



④ 153 直線文工具B  
列点文  
直線文工具A  
刺突文



⑧ 293 内面 羽状列点文  
竹葉文  
縦凹線文

#### IV期（古墳時代後期）

後平茶臼古墳、後平1号古墳に関連する遺物を取り扱う。後平茶臼古墳の主な遺物は墳丘裾をめぐる周溝から出土した尾張型埴輪、埋葬施設から出土した須恵器が大半を占めるが、埋葬施設からは少量ながら鏡などの馬具類も認められる。尾張型埴輪は総じて残存状況が悪く、接合しても器形を復元する資料が少ない。詳細は後述するが、過去にかなりの量が採集されていると考えられる。須恵器は完形で出土することはなく、いずれも破片で出土した。なかには谷部のⅢ層から出土したものもあり、その要因は盗掘によるものと想定される。なお、墳丘中から出土したⅢ期の遺物は便宜上、ここで取り扱う。

後平1号古墳からは轡が出土しているが、轡以外の土器類の出土は皆無である。

#### V期（中世）

SZA01から出土した山茶碗のみが相当する。

#### VI期（近世）

SDA01から出土した遺物が相当する。年代観の指標となる遺物は天日茶碗の破片や常滑甕の破片であるが、Ⅲ層から流入したⅢ期の遺物も出土している。（藤田英博、安田正枝）

### 石器分析の目的と方法

#### 石器分類の手續きと分類の目的

石器分類の手續きは、2つの作業によって実現される。最初に私たちが石器を見たときに、石器はみたままの違いで分類される。石皿である、石鏃である、打製石斧であると。これらは大きさ、石材など見るからに違う石器は、あらかじめ分類しておく必要がある。この分類の方法を「器種分類」という。

次に見た目で明らかに違う石器をさらに分類する必要がある。最初に見た目の違いで分類された石器の中で、同じ石器としたモノの中にも、製作者の意図の違いがみられるからである。

以上のように、石器分類の目的は、作った側の意図に従う分類を明らかにするために行われるのである。ゆえに、石器分類によって得られた「分類表」の善し悪しは、どの程度まで製作者の意図に従う分類を復元できているのかで評価がなされるのである。私たちが恣意的に分類した石器の分類表（器種分類表）は、分類した現代人の石器の分類を示しているので、石器研究の目的の最終分類表にはならないのである。

#### 技術属性の記述の必要性

石器の分類で最も必要なことは、石器の技術属性を記述することである。石器は人工物なので、製作者の意図が込められている。その意図は技術属性に表現されているので、技術属性の記述を行うことで、製作者の意図に従った石器の分類を復元するのである。そして石器研究の目的は、技術属性によって石器を見ることで、石器製作者の意図に従う石器の分類を、現代語で記述できる。

#### 剥離技術の定義

石器をつくるためには、石を割る（剥離する）手法を習得する必要がある。この手法を「剥離技術」

と呼ぶ。

石器をつくるときには、右手（利き手）に工具（ハンマー）をもち、左手に剥離する素材をもつ。右手（利き手）の動きと左手の動きの総合動作で石器の剥離は行われる。そこで「剥離技術」の実状をわかりやすくすると、「右手（利き手）の技術」と「左手の技術」に分解できる。「右手の技術」は「ハンマーの種類とその作法」であり、「左手の技術」は素材の傾け方のことになる。

#### 剥離技術の属性項目

右手の技術に従い、ハンマーの種類及びハンマーの動作の作法という属性がある。従って、「ハンマーの種類」と「ハンマーの作法」が右手の属性として記述されることになる。一方左手の技術は素材の傾きであり、剥離面の役割を決める属性である。素材の傾きは、剥離角として記述もできるし、剥離の様相としても記述できる。より現実感のある記述は、剥離角と縁辺や末端の様相を組み合わせた現代語として記述されるとわかりやすい記述になる。以下にそれらを詳述する。

#### ハンマーの属性（右手の属性）

ハンマーの属性は硬・軟質の区分とハンマーの大きさである。

硬質ハンマー（表記は「H」）は、素材よりハンマーがより硬いものを指す。ゆえに硬質ハンマーでは、結果として石器の縁辺に砕けや潰れが生じる。軟質ハンマー（表記は「S」）は、ハンマーのほうが柔らかく、ハンマーそのものが変形し、衝撃のショックを吸収する。その結果打点周辺には砕けや潰れがほとんど生じない。

またハンマーの違いは、打点周辺だけでなく、剥離面様相にも顕著に現れる。硬質ハンマーで加撃されると石核側に残される剥離面の稜線はゴツゴツした切り立ったものになる。軟質ハンマーで加撃されると、石核側に残される剥離面の稜線は平らで滑らかな線となる。また、軟質ハンマーのほうが、剥離面が石器の中心に向かって、より伸びる傾向がある。

本遺跡の場合に限らず、黒曜石のハンマーの種類は特にわかりにくい。黒曜石は縁辺が砕けやすく、打点の砕けだけではハンマーの種類を特定できないからである。しかし基本にもどって観察を行うと、硬質ハンマーの場合は縁辺に潰れたコーンができ、白く濁った打点が発生する。軟質ハンマーの場合は曲げの剥離が頻発するものや、打点が残るものは大きく打点が広がっている。曲げの剥離にはバルブは発生しないので、打点の有無は容易に観察できるのである。また剥離面の幅に硬質・軟質の顕著な差が表れる。軟質ハンマーのほうが剥離面の幅が2ミリ程度大きくなる傾向がある。また本遺跡の場合にはリングのうねりと稜線の切り立ち方についても特徴がある。

ハンマーの大きさは、打点から推定できる打点の径によって記述する。加工の打点の径を測り、ミリ単位で記述してもよいし、その記述をさらに整理して、この遺跡には広い(W)径のものと狭い(N)径のものがある、という「理解」を示した記述でもよい。

#### ハンマーの作法（使い方）の属性（右手の属性）

ハンマーの使い方は、対象（石核）に直接ハンマーを叩きつける直接打撃（表記は「D」）、ハンマーを石核に押し付けて押し剥がす押し剥離（表記は「P」）とパンチを使う間接打撃（表記は「I」）の3

種類がある。ともにハンマーの使い方が異なるので、剥離面様相も異なる。

直接打撃の場合は、打点は明瞭でバルブは比較的発達し、稜線はゴツゴツする。

押圧剥離の場合は、打点は明瞭なもののバルブが発達せず、稜線は平らになる。

間接打撃の場合は、小さい剥離面ながら規則正しく剥離がなされ、バルブがある直接打撃に近似する剥離面になる。

#### 直接打撃のハンマーの作法（右手の属性）

普通に手首を返しながらかハンマーを用いる直接打撃がある。通常の剥離とも呼ばれる。このとき生じる剥離面は割れ円錐の発達する「コーンタイプ」と呼ばれる剥離面である。打点の直下から円錐が発達し、さらに円錐は次第にハンマーの押し出す力に吸収されながら剥離がおこる。

次にハンマーを垂直にたたきつける直接打撃がある。主に楔形石器にみられる直接打撃である。剥離面の打点は明瞭なものの、ハンマーによる圧縮の力が優勢のために、円錐が発達しないで、物体を引き裂くように剥離が起こる。通常の剥離によって生じる「コーンタイプ」の剥離に対して、これを「ウェッジタイプ」の剥離面と呼ぶ。

さらに、ハンマーを寝かせて、石器の鋭い縁に並行にあてるハンマーの用い方がある。この剥離面は広義の折れ面であり、打点がなく、バルブも生じない。「ペントタイプ」の剥離面とも呼ぶ。

このように3種類の剥離面があるが、主にハンマーストーンに加撃によって形成される剥離面は通常の剥離による「コーンタイプ」の剥離面である。

#### 素材の傾きと剥離の方向（左手の属性）

素材の傾きは、剥離面の役割を実現する。平らにおいた石器の縁辺を加撃すると、剥離によって刃先ができる。また立てた縁辺を加撃すると、鋭い縁辺は潰れて、「刃潰し」の状態になる。こうした素材の傾きは、刃先のあるものは剥離角で、刃先のないものは剥離面の様子によって記述ができる。

「石器研究法」によれば、左手の技術によって形成された剥離面の種類は、通常の剥離・急角度剥離・平坦剥離・階段状剥離・刃潰し・橋状剥離の6種類とされている。左手の技術の記述は、この6種類を用いることで、十分に記述ができる。

一方剥離面の方向というのは、ハンマーの加撃による力の抜ける主たる方向である。

人間が素材の石を加撃する時には、その石を叩き壊そうとするのか、薄い剥片を剥がそうとするのか、いずれにしろ意識的に加撃がなされる。例をあげれば、榛名平遺跡の打製石斧の側辺には階段状剥離がみられるものがあるが、この階段状剥離は打製石斧から剥片を剥がそうとした剥離痕ではない。石器の周辺をハンマーで叩いて、石器の側辺を整形することが目的の剥離である。では、何故そのようなことが言えるのであろうか。

それは、ハンマーの振り下ろされる方向が、石器の奥に向かって進行しているので、剥片を剥離する方向ではないからなのである。このようにハンマーを振り下ろすときに、何を目的とした剥離なのかを理解する手だてとして、剥離面の方向は分析の対象とされるのである。

### 剥離技術の記述方法

属性の項目を明らかにしておこう。

ハンマーの種類：硬質（H）か軟質（S）。

ハンマーの当て方：直接打撃（D）、間接打撃（I）、押圧剥離（P）。

ハンマーの径：細い（N）、広い（W）。本遺跡の場合は、ハンマーのコンタクトエリアの径が2mm程度のを「N」、4mmをこえるものを「W」とする。

直接打撃のハンマーの身振り：通常と垂直（「v」と表記）があるものの、通常は省略して、垂直打撃のみを記述するほうが整理しやすい。

押圧剥離の作法：なんらかの固定具を使う押圧剥離（「MP」と表記）、手のひらのなかで石器を保持して押圧する手のひら押圧（「HP」と表記）の2種類が本遺跡ではみられる。

以上の属性の組み合わせで剥離技術を記述する。このとき、剥離技術の定義に従って、右手/左手の順番に記述するとわかりやすい。

したがって、記述の順番は「ハンマーの種類、ハンマーの作法/素材の傾き」となる。

例えば、径の広い硬質ハンマーの直接打撃で急角度の剥離がなされている加工なら、「wHD/急角度」。同じように、径の狭い硬質ハンマーの垂直打撃で刃潰し加工がなされているなら「nHVD/刃潰し」となる。径の細い軟質ハンマーの固定具を使う押圧剥離であるなら、nSMPと記述する。いずれも、記号の意味と記述の順番の規則さえ守れば、混乱は少ない。

### 石器の製作技法

石器を製作するにあたっては、剥離技術だけで石器製作はできない。そこにつくろうとする道具の設計図がなければ剥離技術だけでは石器にならないのである。

石器をつくるということは、石の剥離技術の習得と文化の中に埋め込まれた石器形態の理解が必要になる。したがって、石器をつくるということは、その文化の中で習得する剥離技術（ハンマーの種類とその使い方の身振り）と、その文化の中にある道具の形態（形のイメージ）に習熟することである。

石器の形態分析は、石器の形を構成している刃を分解することである。そして、分解した刃にどのような剥離技術でどのような剥離面が形成されているかを理解し、特定の刃が特定の剥離技術によって形成されて、特定の形態がつくられているのが石器の姿である。

石器の形態は特定の刃を特定の剥離技術で形成することで成り立っている。刃と剥離技術の規則的な関係、及びその関係を全体の形態に置き換えると、特定の石器文化には特定の石器製作の基本的な約束ごとがあることがわかる。この石器製作の約束ごとを「石器の製作技法」と呼ぶ。（角張淳一）

引用・参考文献

『石器研究法』竹岡俊樹著 習叢社 東京 1989

『石器研究の感想』角張淳一「東京考古」16 東京考古談話会 1998

『続石器研究の感想』角張淳一「東京考古」18 東京考古談話会 2000

『武蔵台遺跡』府中病院遺跡調査会 東京都 1984

『江川・中畦遺跡』高知県西土佐村教育委員会 2000

第4表 遺構一覧

遺構層序	地 区 A		地 区 B	
	遺 構	出土層序遺構確認面	遺 構	出土層序遺構確認面
I 期	SIA01 SKA01～SKA10 PA01～PA03	IV層（遺物包含層） V層（確認面）	SIB01 SKB01, SKB02 PB01, PB02	IV層（遺物包含層） V層（確認面）
II 期	NRA01	IV層中（確認面）	PB03, PB04	IV層中（確認面）
III 期	SBA01～SBA20 方形周溝墓 SKA11～SKA16 PA04～PA22 SUA01	III層（遺物包含層） IV層（確認面）	SBB01～SBB06 SDB01, SDB02 PB05～PB08（東） PB09～PB21（西）	III層（遺物包含層） IV層（確認面）
IV 期	後平茶白古墳 後平1号古墳	III層（遺物包含層）		
V 期	SKA17, PA23 SZA01～SZA05	II層（確認面）		
VI 期	SDA01, SDA02			



A地区調査前（西より）



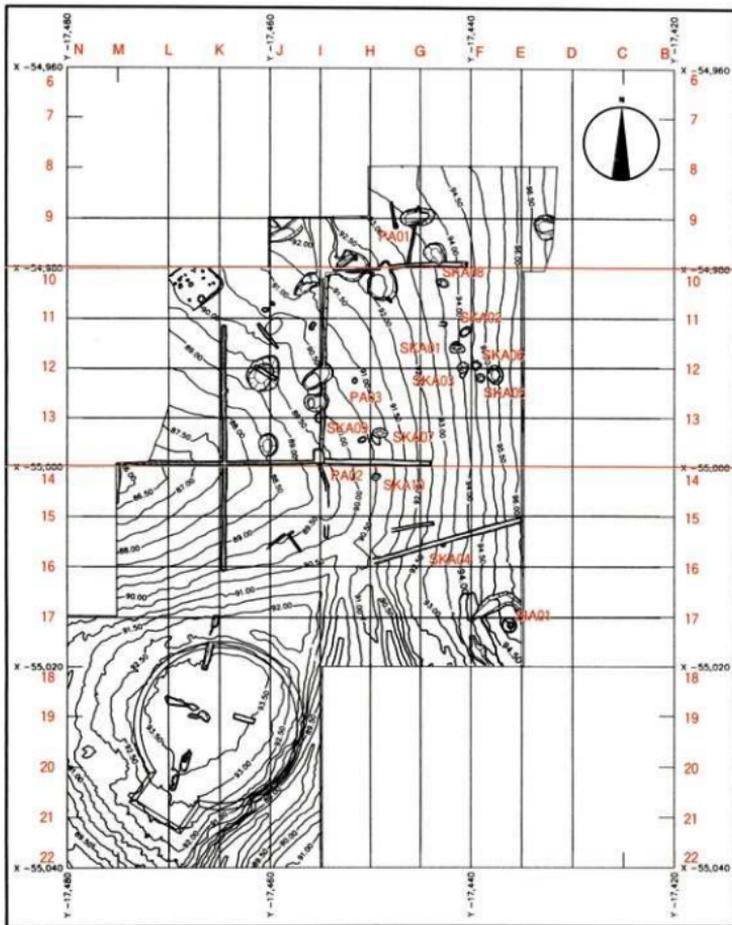
A地区遠景（西より）



フェンス囲い



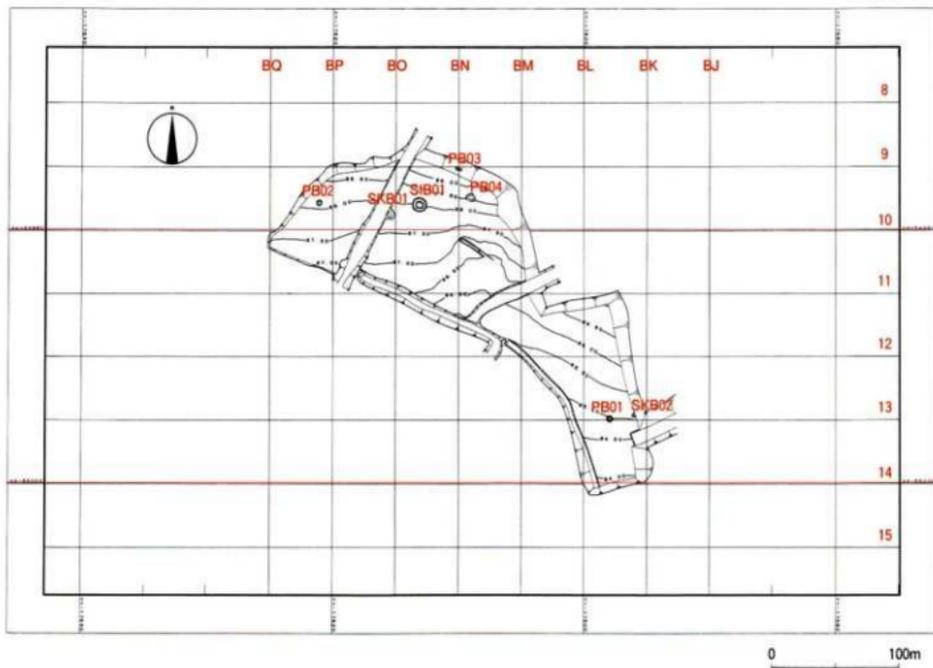
集水マス



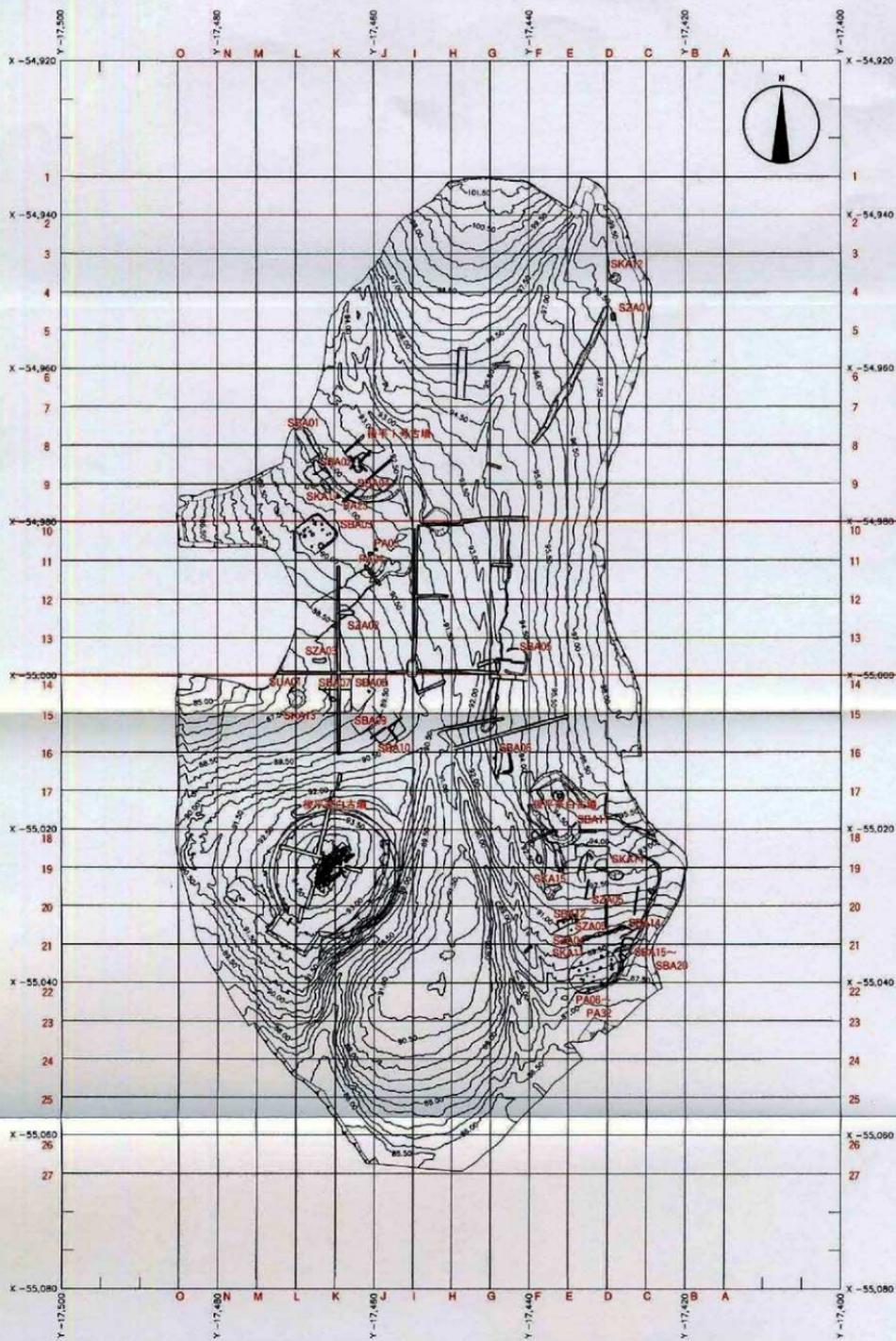
1 : 500



第13図 後平遺跡A地区下層全体図 (S : 1/500)

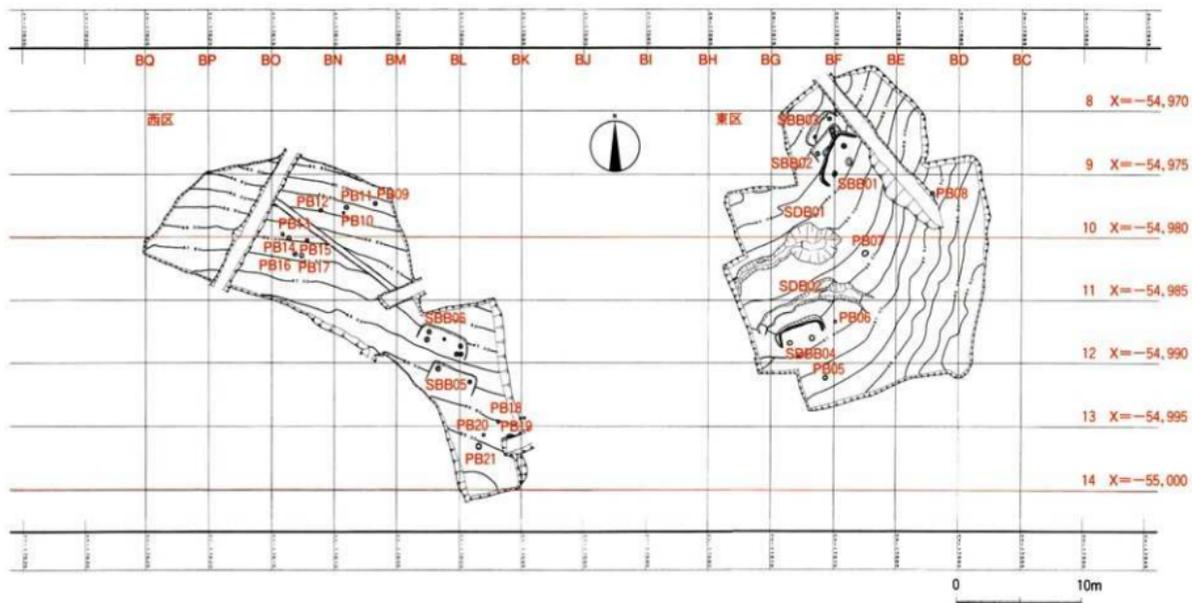


第14図 後平遺跡B地区西区下層全体図 (S : 1/400)



1 : 500

第15图 後平基日古墳・後平1号古墳・後平遺跡A地区全体图 (S : 1/500)



第16図 後平遺跡B地区上層全体図 (S : 1/400)

## 第4章 A地区の遺構と遺物

### 第1節 I期の遺構と遺物（縄文時代早期～後期）

#### 遺構

##### SIA01（第18図）

E17グリッドで、約20cm大の被熱を受けた砂岩の角礫が円形に1m弱の規模で広がっているのを確認した。礫の大きさは10cm～20cm程度で、その広がりは散漫である。おそらく、礫の大半は斜面下方に流失したものである。遺構の形成は基盤である砂岩岩盤上であるが、その平面形の検出が困難であったため、周囲を一段掘り下げて平面形の検出を図った。その結果、礫は平面形が約1mのほぼ円形を呈する土坑のなかに充填されていることを確認した。礫の充填は確認面から深さ30cm程度までで、それより下位には細かな炭化材混じりの土層が認められた。断面形は円錐形を呈し、埋土からの遺物の出土は皆無であった。

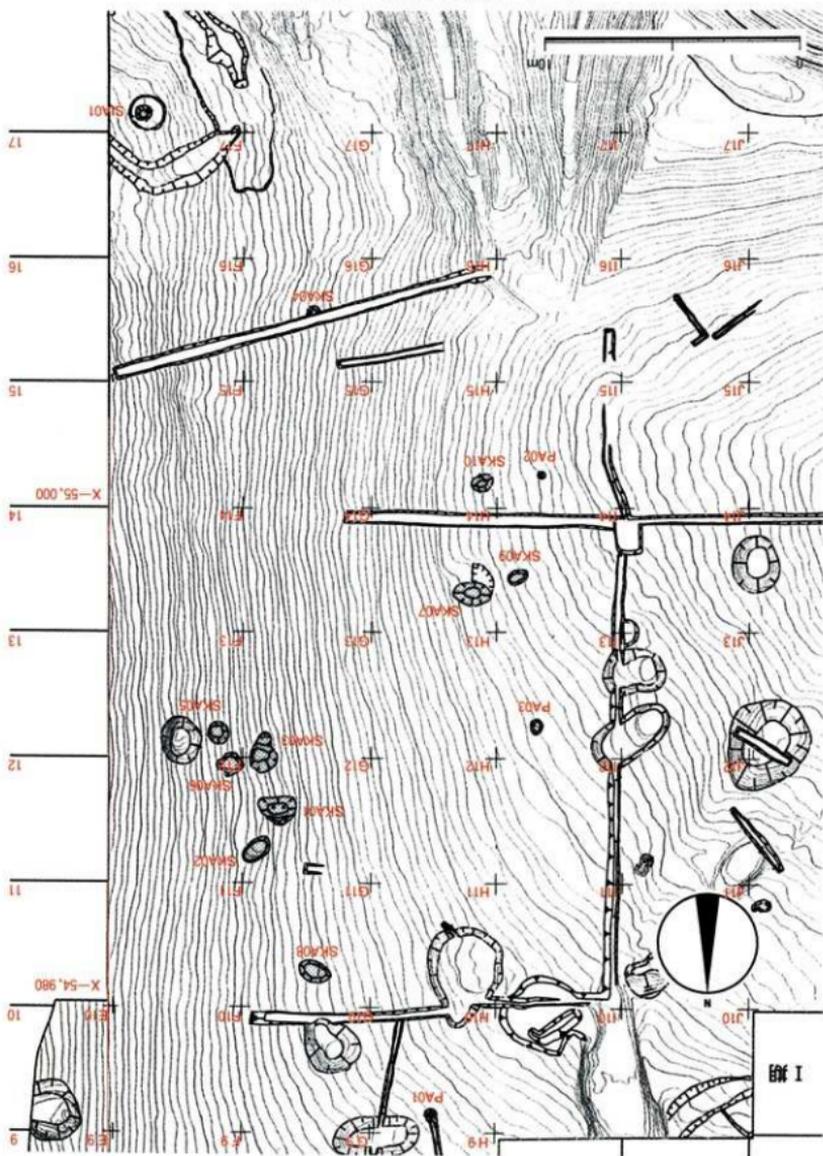
遺構の年代は遺物の出土は認められなかったが、遺構の形態から縄文時代早期と考えられる。V層からわずかに縄文時代早期後半の土器片が出土していることから、この時期にSIA01が形成されたと思われる。

##### SKA01（第19図）

F11グリッドから平面形が隅丸長方形を呈する土坑を検出した。その規模は長軸1.49m、短軸0.78mをはかり、主軸方向はN-89°-Eを向く。壁面は60°程度の傾斜をもつ。このため、床面は平坦で狭く、断面は台形状を呈する。深さは最大で0.84mとかなり深いものであった。床面には主軸にそって、直径10cm弱のピットが認められたが、深さが約5cmと浅く、枕などが打ち込まれた穴なのか判断は難しい。埋土にはIV・V層に起因する黒褐色土が堆積していた。なお、遺物は出土しなかったため、遺構の年代の特定は困難である。

##### SKA02（第20図）

F11グリッドでSKA01の北側で確認した土坑。平面形は楕円形を呈し、約30cmと浅い。平面形の規模は長軸1.32m、短軸0.75mで、主軸方向はN-47°-Eを向く。床面は地形にそって傾斜する状況を示し、中央付近から西側に向かってさらに深くなる状況が認められる。この床面の相違は断面の土層からみて、土坑の重複関係を示す可能性があるが、判断はできない。埋土からは遺物はまったく出土せず、遺構の年代の特定は難しい。



第17図 I期遺構配置図 (S : 1/200)

## SKA03 (第20図)

F11・F12グリッドの境界にあって、SKA01の南側に隣接する。平面形は不整な凹形を呈し、床面の形状は不安定である。平面形及び床面形状から風倒木痕の可能性も指摘できるが、他の風倒木痕の形状及び土層（土層の逆転）の比較から現地では遺構と判断し、ここでも遺構として報告する。平面形の規模は長軸1.21m・短軸1.04mをはかるが、主軸方向は床面形状からみて、短軸方向となり、その方向はN-105°-Eを向く。深さは最大で55cmで、埋土からは遺物は出土しなかった。このため、遺構の年代の特定は困難である。

## SKA04 (第21図)

F15グリッドで検出した。確認したのは、南半分のみである。平面形はおそらく楕円形を呈すると思われ、長軸は現存では39cmだが、復元すると推定70cm程度になると考えられる。短軸の規模は56cmをはかり、深さは最大で20cmである。主軸方向はN-13°-Wである。遺構の掘削面は地山の砂岩岩盤であり、IV・V層の堆積範囲からは外れている。なお、埋土からは遺物が出土しなかったため、遺構の年代の特定は難しい。

## SKA05 (第21図)

F12グリッドで検出したほぼ円形を呈する土坑。規模は直径約80cmで、深さは最大で42cm認められる。壁面は東側では垂直にちかい急角度の立ち上がりを示すが、西側ではなだらかである。埋土は他の土坑とは異なる黄褐色土の堆積が認められるため、時期が異なる可能性がある。また、風倒木痕の可能性も捨てきれない。なお、遺物は出土しなかった。

## SKA06 (第21図)

E11グリッドにあって、SKA03の東側に隣接する。平面形は不整な方形の形状を呈し、床面にも微妙な起伏が認められるため、風倒木痕の可能性もあるが、現地での判断をもとにここでは遺構として報告する。平面形の規模は南北方向94cm、東西方向80cmをはかり、主軸方向は南北方向と仮定するとN-5°-Eである。深さは最大で37cmが認められる。埋土はIV・V層に起因する褐色土が堆積していたが、遺物の出土は皆無のため、遺構の年代の特定はできない。

## SKA07 (第21図)

G13グリッドで検出した土坑。検出当初は風倒木痕の可能性もあると考えられたが、断面から土坑と認定した。平面形は楕円形を呈すると思われ、長軸は現存で0.73m、推定で復元すると1.49m程度の規模をはかると考えられる。短軸は0.77mで、主軸方向はN-92°-Eを向く。壁面の立ち上がりは急角度で、このため床面はせまくなっている。埋土には黒褐色土が堆積し、縄文土器の破片が1点出土した。遺物が出土した土坑は本土坑のみで貴重な資料だが、摩滅の著しい破片のため、図示が不可能な資料であった。また、文様・調整の観察が不可能ため、時期の判断もできなかった。

## SKA08（第22図）

G11グリッドで検出した。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸1.34m・短軸0.85mである。深さは浅く15cm程度である。主軸方向はN-61°-Wを向く。埋土は単層で暗褐色土が堆積しており、遺物は出土しなかった。

## SKA09（第22図）

H13グリッドで確認した楕円形を呈する土坑。その規模は長軸76cm・短軸59cmをはかる。深さは15cm程度で、壁面の立ち上がりは緩やかである。主軸方向はN-74°-Eを向く。埋土は単層で黒褐色土が堆積していた。

## SKA10（第22図）

G14で検出した土坑。深さが10cmにも満たない浅い土坑のため、遺構の認定に不安を残すが、壁面が斜面のため流失したものと判断して土坑と認定した。平面形は楕円形で、その規模は長軸90cm・短軸55cmをはかる。主軸方向はN-66°-Eを向く。埋土は安定せず、主にIV層に起因する土層が堆積していた。なお、遺物出土は皆無であった。

## PA01（第23図）

G9グリッドで確認した小ピット。平面形は直径約50cmの円形を呈す。深さは10cm強と浅く、自然地形との可能性も否定できない。埋土は単層で暗褐色土が堆積し、遺物は出土しなかった。

## PA02（第23図）

H14グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、その規模は直径約30cmをはかる。深さは15cm弱と浅く、壁面の立ち上がりも緩やかである。埋土は黒褐色土が堆積し、遺物は出土しなかった。

## PA03（第23図）

H12グリッドで確認した楕円形を呈するピット。深さは20cm弱で、長軸は58cm、短軸は45cmをはかる。遺物は出土せず、埋土は暗褐色土が堆積していた。



A地区 下層遺構完掘状況（北より）



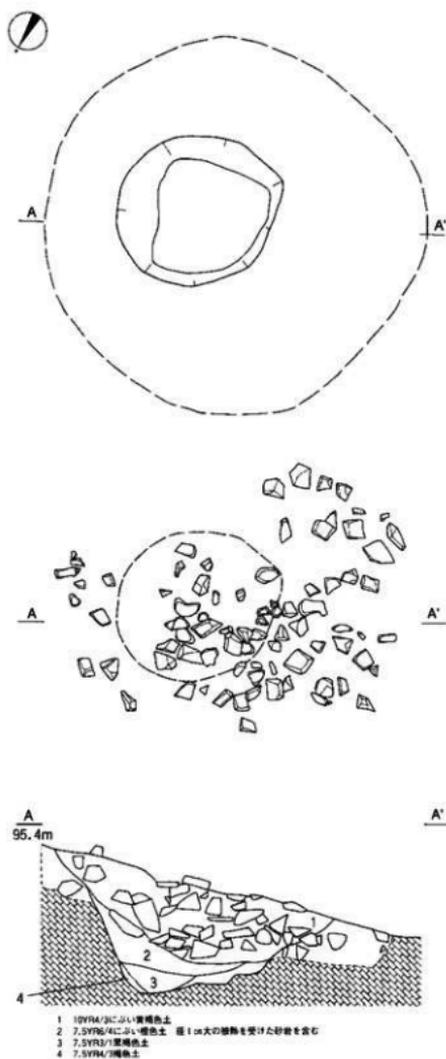
A地区 下層遺構完掘状況（東より）

## 遺物

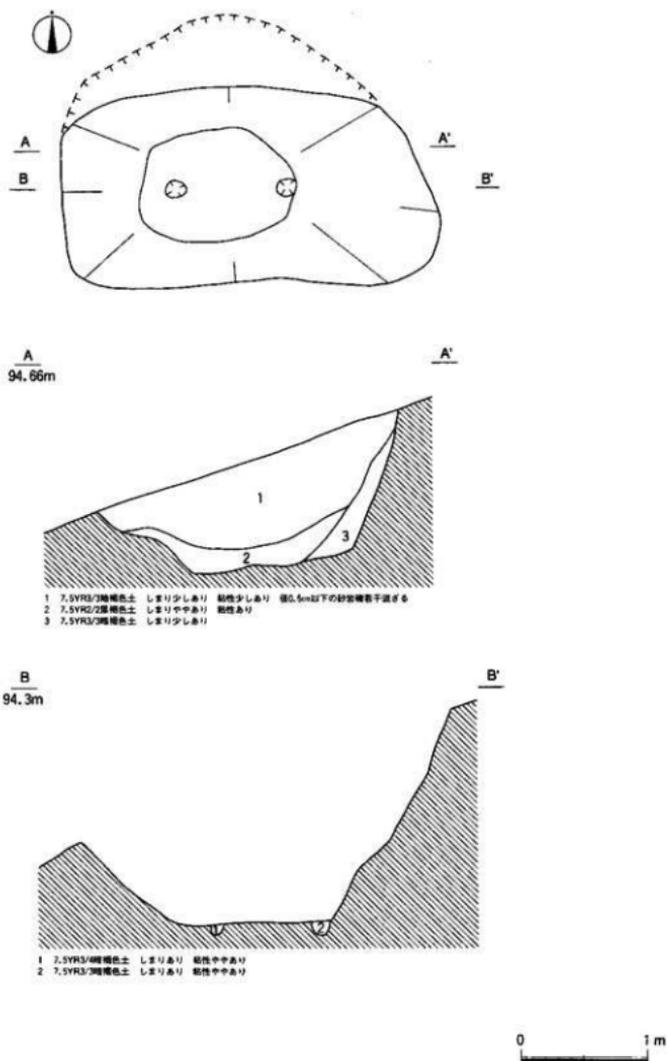
遺構から出土した遺物がほとんど認められないため、ここでは主にⅣ・Ⅴ層から出土した縄文土器・石器を取り扱う。縄文土器には早期後半および後期後半、後述する晩期後半の遺物が認められ、土器を見る限り、資料の継続性はない。基本層序の見解及び土器資料からみて、前述した遺構の年代は早期後半ないしは後期後半の可能性が高いが、その確固たる根拠はない。縄文時代早期後半・後期後半の土器の出土はきわめて少量で、破片を観察する限り、接合はしないが同一個体となる資料が大半を占め、せいぜい5個体分程度の資料が出土したにすぎないと思われる。(第24、25図)

## 縄文土器

1～5は縄文時代早期の条痕文系土器と思われる資料である。いずれも胎土中に繊維痕を含む。3～5は摩耗が激しく、器面調整は観察できないが、4・5は1と同一個体となる可能性が高い。1は器面に条痕調整及び刺突文が残り、残存状況が良好な資料である。茅山下層式とみられる。2・3は器壁が薄いため、縄文時代早期末葉の資料と考えられる。6～10は比較的太い沈線によって文様が描かれる資料で、6・9は同一個体の可能性がある。いずれも型式は判断できないが、縄文時代中期末葉の資料と考えられる。13～19は出土地点もちかく、同一個体となる可能性が高い資料である。また、本遺跡の縄文時代のピークを示す資料と考えられる。磨消縄文帯による文様帯が認められる。幅広の文様帯は直線的に横走し(13・14・17・19)、幅狭の文様帯は二重となる資料も認められ(12・17)、楕円形状の区画を形成しているようにみえる。おそらく、幅広の文様帯が器形の屈曲部位にあたり、幅狭の文様帯が胴部最大径にあたるものと推測される。時期は縄文時代後期中葉と考えられ、北白川上層式2期に類似する。20～24・29は縄文時代後期後葉の資料と思われる。20～22は幅広の磨消縄文帯がみられるが、磨消縄文帯より下位は無文帯と思われ、前述の13～19よりは後出的な資料である。23・24は同一個体の口縁部片で口縁が屈曲する部位までに縦位の粘土紐による隆帯が貼り付けられる。29は波状口縁を呈する資料で、精緻な磨消縄文帯が認められる。これら20～24・29は一乗寺K式～元住吉式に類似する資料と考えられる。25～28は巻き貝による沈線が認められる資料で、縄文時代後期末葉の宮滝式に類似する。19には二枚貝の押圧痕が認められる。30～32は縄文時代後期中葉以降の無文粗製土器と思われる資料で、口縁部片を中心に抽出した。34は縄文時代後期中葉以降の底部片、33はほぼ同時期の注口部と考えられる。35～37は縄文時代晩期中葉頃の資料と思われる。器面表面には条痕調整及び突帯文が認められないことが、時期判断の要因である。36・37は波状口縁を呈し、口縁端部に棒状工具による押圧が認められる。38～43は器面に残る条痕調整により、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の資料と考えられる。39は口縁部の外反が強く、43は羽状文のようにもみえるので、弥生時代前期の条痕文系土器の可能性が高い。



第18図 I期SIA01平面図・断面図 (S:1/40)

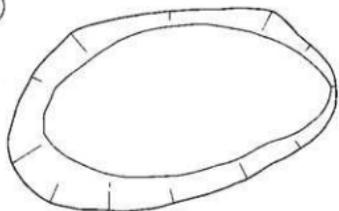


第19図 I期SKA01平面図・断面図 (S:1/40)

SKA02

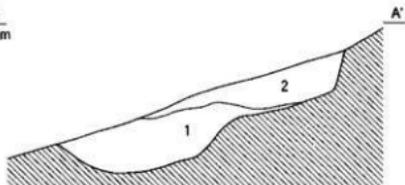


A



A'

A  
94.5m

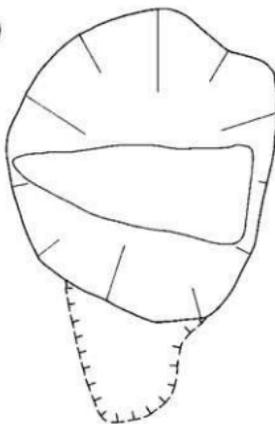


- 1 7.5YR3/3暗褐色 しまりやや有り 粘性中々あり  
2 7.5YR3/4暗褐色 しまりややあり 粘性少しあり

SKA03

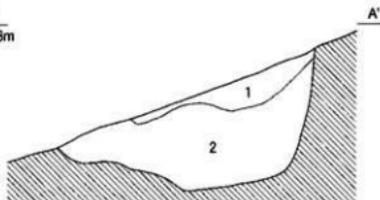


A



A'

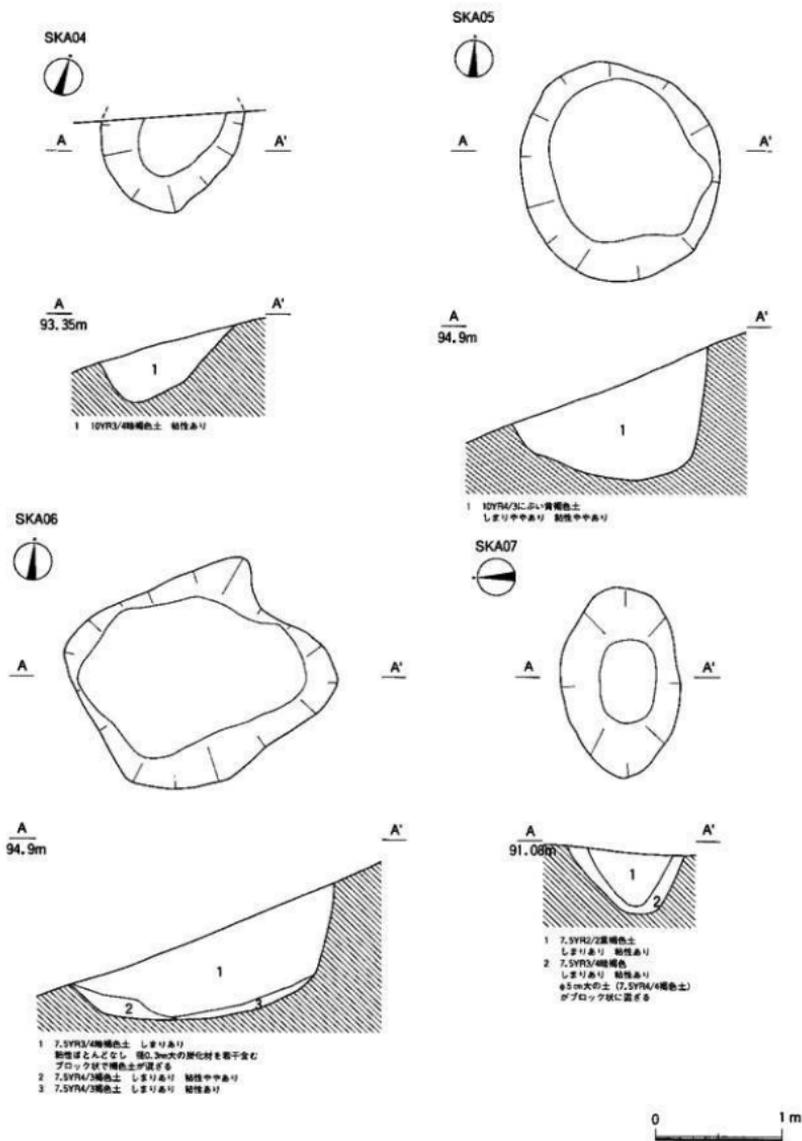
A  
94.3m



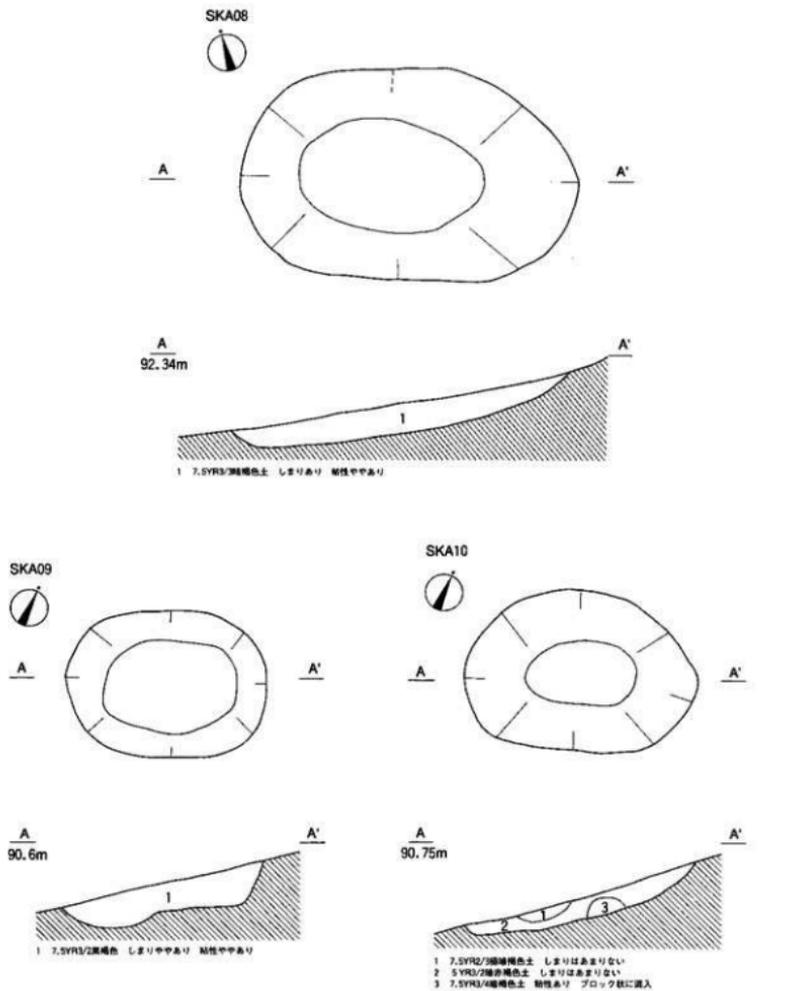
- 1 7.5YR3/4暗褐色 しまりほとんどなし 粘性少しあり  
2 7.5YR3/3暗褐色 しまりほとんどなし 粘性ややあり



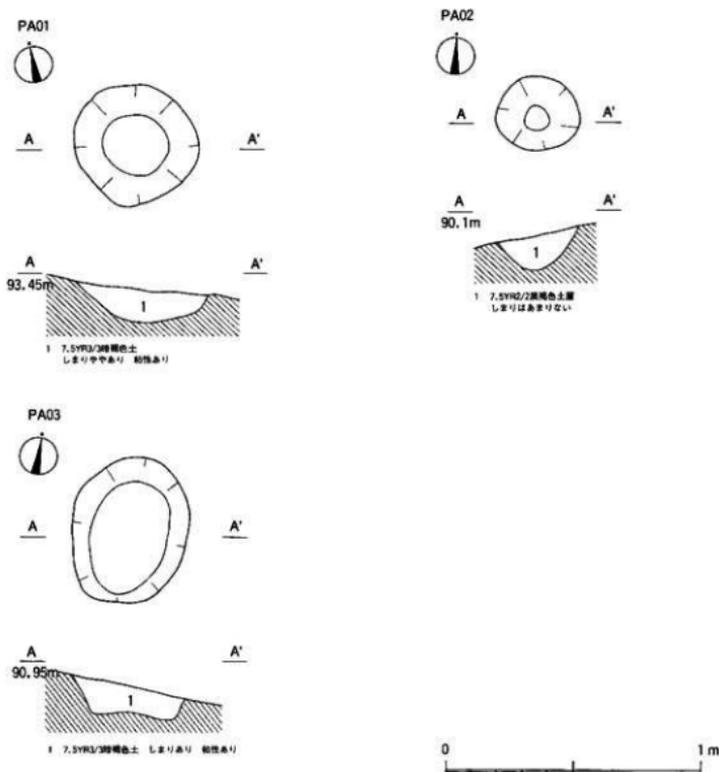
第20図 I期SKA02、SKA03平面図・断面図 (S:1/40)



第21図 I期SKA04、SKA05、SKA06、SKA07平面図・断面図 (S:1/40)



第22図 I期SKA08、SKA09、SKA10平面図・断面図（S：1/40）



第23図 I期PA01、PA02、PA03平面図・断面図（S：1/20）

## 縄文時代の石鏃と剥片石器（第27図～第34図）

掲載された石器は縄文時代早期及び後期の石器である。出土土器は、早期条痕文系の土器、後期後半、晩期後半の時期である。これらの土器はそれぞれ全く異なる土器文化で、継続的な資料ではない。

47～73石鏃：小形の剥片を素材に、押圧剥離で尖頭部を形成する三角形の胴部をもつ石器を石鏃とした。しかし、1は「トトロ石器」の可能性があり、2は尖頭部が折れたとみて石鏃としたが不自然な形態である。この2点だけは便宜的に石鏃に含めた。

石鏃はすべて凹基鏃である。石材は珪岩・下呂石・サスカイトの3種類である。珪岩はすべてハードハンマーの押圧剥離、下呂石とサスカイトはハードハンマーとソフトハンマーの両方の押圧剥離がある。経験的であるが、石材とハンマーの種類の組み合わせで時期を類推すれば、縄文時代の早期の石鏃が珪岩のハードハンマー製、下呂石やサスカイト製でハードハンマーとソフトハンマーの混在状態の凹基鏃は縄文時代の後期以降に顕著に現れるといえる。

74尖頭器断片もしくは石匙断片：珪岩製の両面加工の尖頭部をもつ石器である。尖頭器か尖頭部をもつ石匙の断片であろう。早期末の時期と推定できる。

75、76：石鏃未製品。珪岩製。両極剥片にハードハンマーの押圧剥離が付いている。石鏃の未製品の初期工程で放棄された資料。

77、79：削器。珪岩製。77は垂直打撃の剥片の鋭い縁辺にハードハンマーで刃部を形成した削器。79は両面加工の素材にハードハンマーの直接打撃で刃部を形成している。

80鋸歯状削器：ホルンフェルス製。ハードハンマーの直接打撃の縦長剥片の側面に小さなハードハンマーの急角度で鋸歯状の刃部を形成している。時期は不明。

78水晶の小礫：時期不明

81石核：珪岩の小形石核。小さな縦長剥片を剥離している。このサイズの石核は、剥片剥離作業のときに、タガネをあてて剥離する間接打撃の剥離技術を用いていると推定できる。

82両極剥片：サヌカイト製。石鏃の素材を製作するときに生じた剥片であろう。

83両極石器：小さな両極石器。縁辺に不規則なハードハンマーの押圧剥離が付いている。石鏃の素材の可能性が大きい。

84～94 剥片類：多様な剥片類を掲載した。両極剥片や間接打撃の可能性のある剥片などが特徴的である。縁辺に不規則な押圧剥離の観察できるものは使用痕剥片とした。

95～100 石鏃：加工で鋭い尖頭刃部を形成する石器を石鏃とした。石鏃とした石器は多様な技術と形態石器を含んでいる。95や96のように押圧剥離で加工された石鏃、97のように急角度の間接打撃の加工の石鏃、98は尖頭器のような石鏃、100は尖頭部に加工がなく、基部をハードハンマーの直接打撃で加工している石鏃である。

99異形石器：サヌカイト製の異形石器である。勾玉の未製品の可能性もある。

101鋸歯状削器：押圧剥離で鋸歯状の刃部を形成した削器の断片。

103、102、105：ヘラ状石器：すべて赤珪岩製。図では基部を手前に置いた。やや平坦な直接打撃で側面を成形し、片面加工で頑丈な刃部を作る石器である。この3つの石器は、加工技術と石材の一定性が強く、縄文早期のヘラ状石器の好資料と思われる。

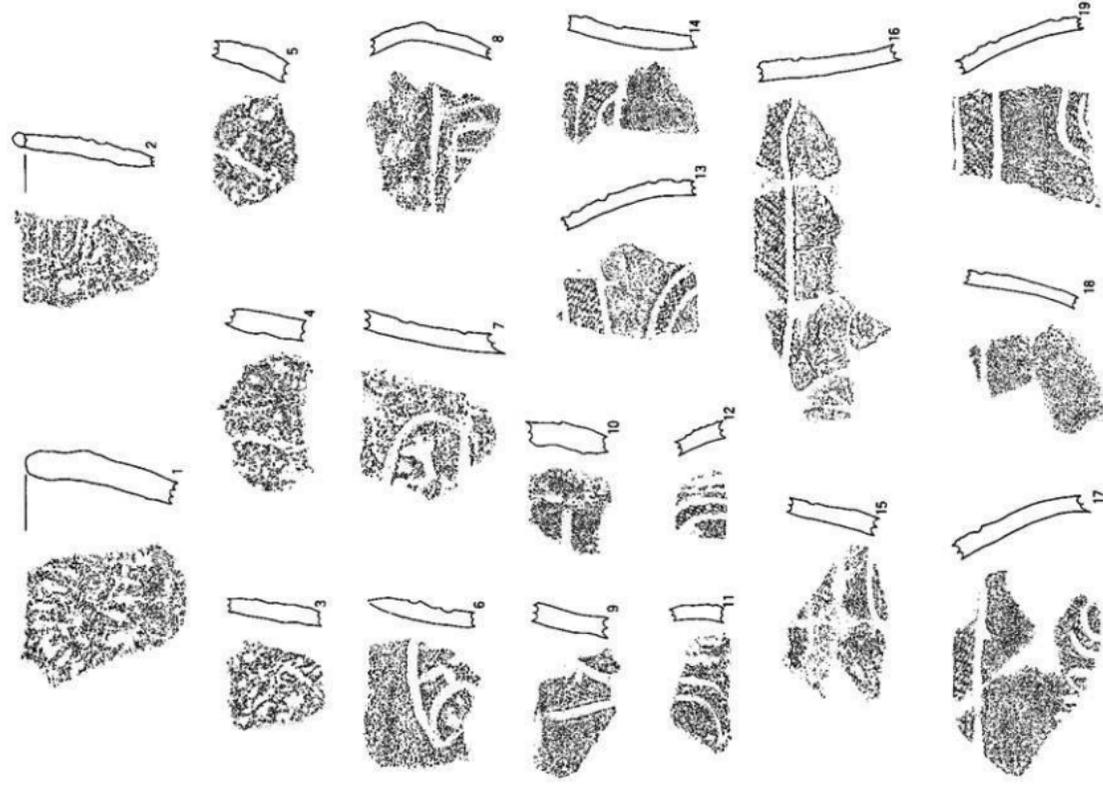
104、106～110 打製石斧：打製石斧は刃部の摩擦痕が顕著な凹刃の石斧である。すべて縄文時代後期の石器と思われる。

112使用痕剥片：凝灰岩製。不規則な剥離は使用痕の可能性がある。

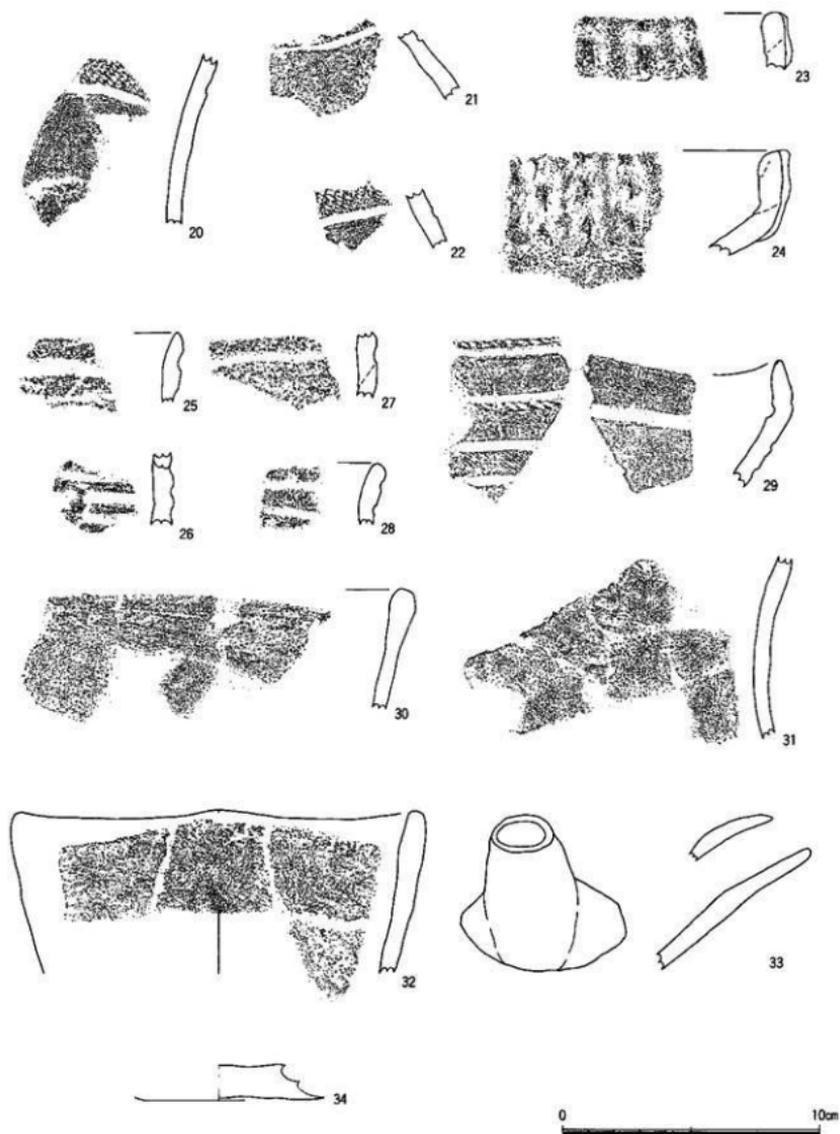
113礫器：大形の剥片を素材に周囲を直接打撃で成形している礫器。

116～126：礫石鏃

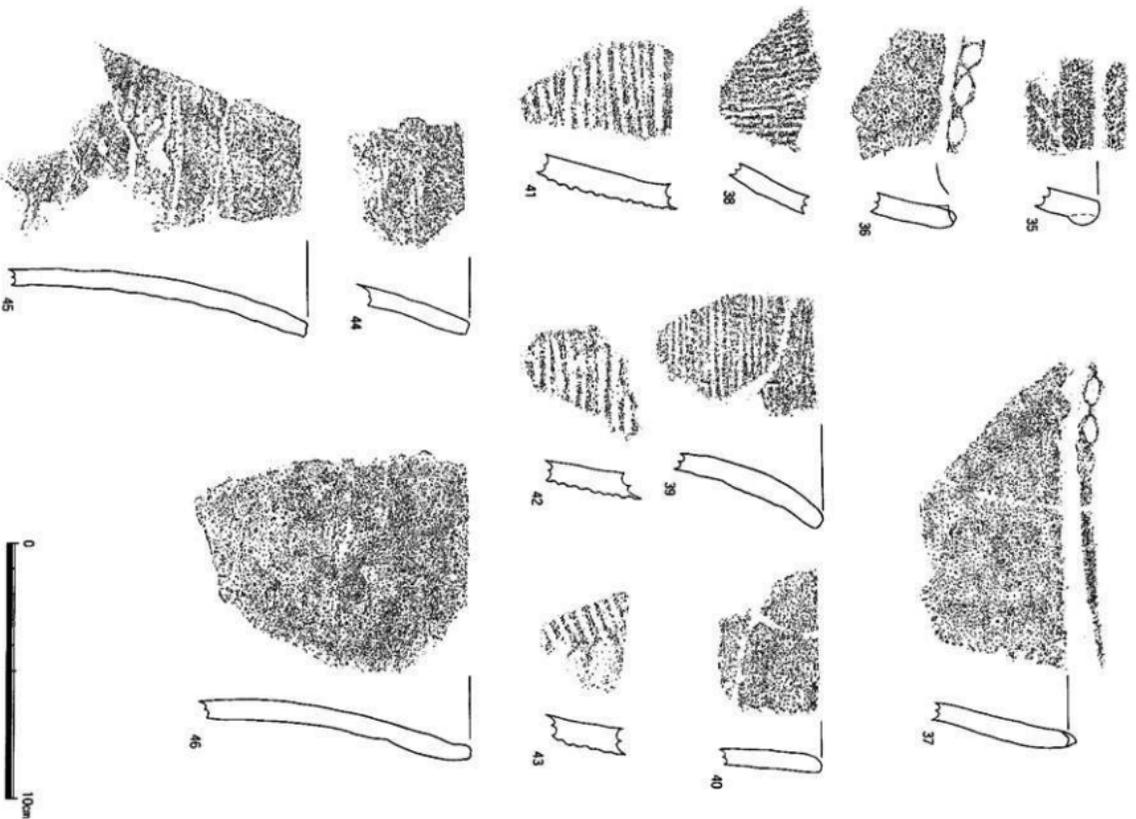
114、115、127～136：磨石・敲石類。敲打と磨面は使用痕。この中で129は早期に特徴的な「挟り入り特殊磨石」の可能性が大きい。



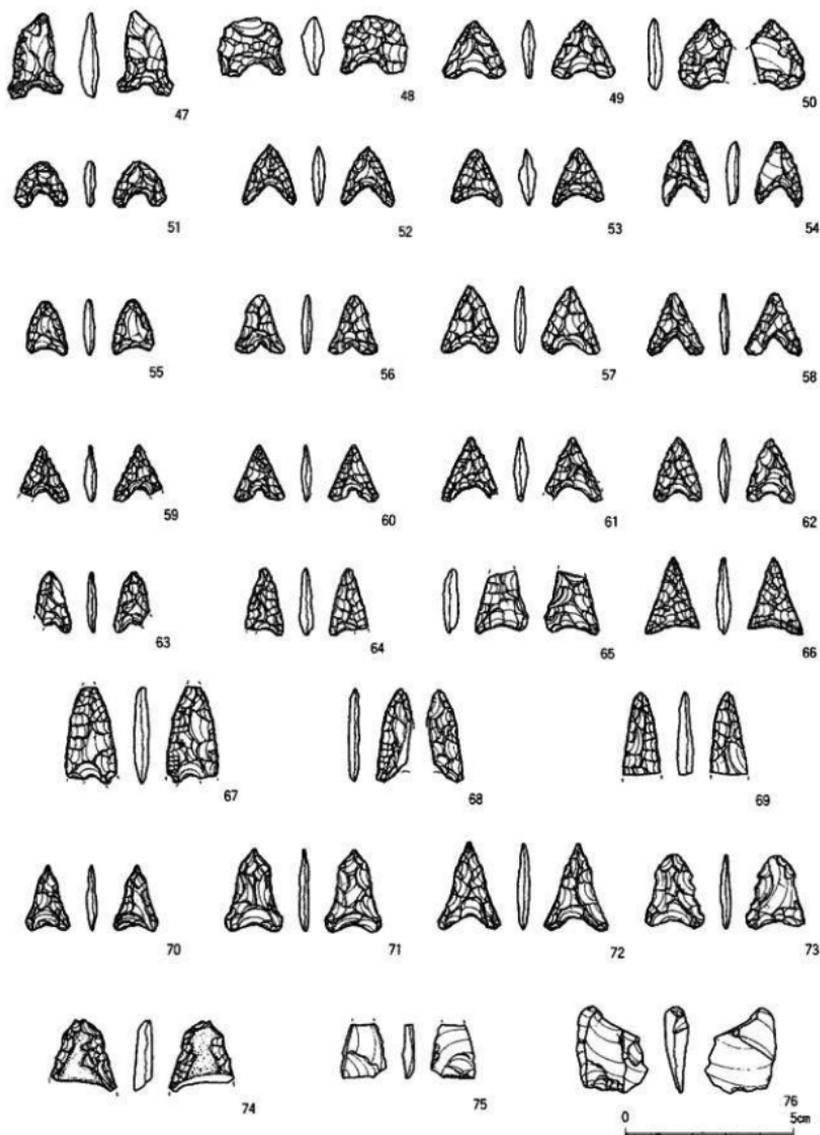
第24図 A地区Ⅴ、Ⅵ層出土縄文土器(1) (S:1/2)



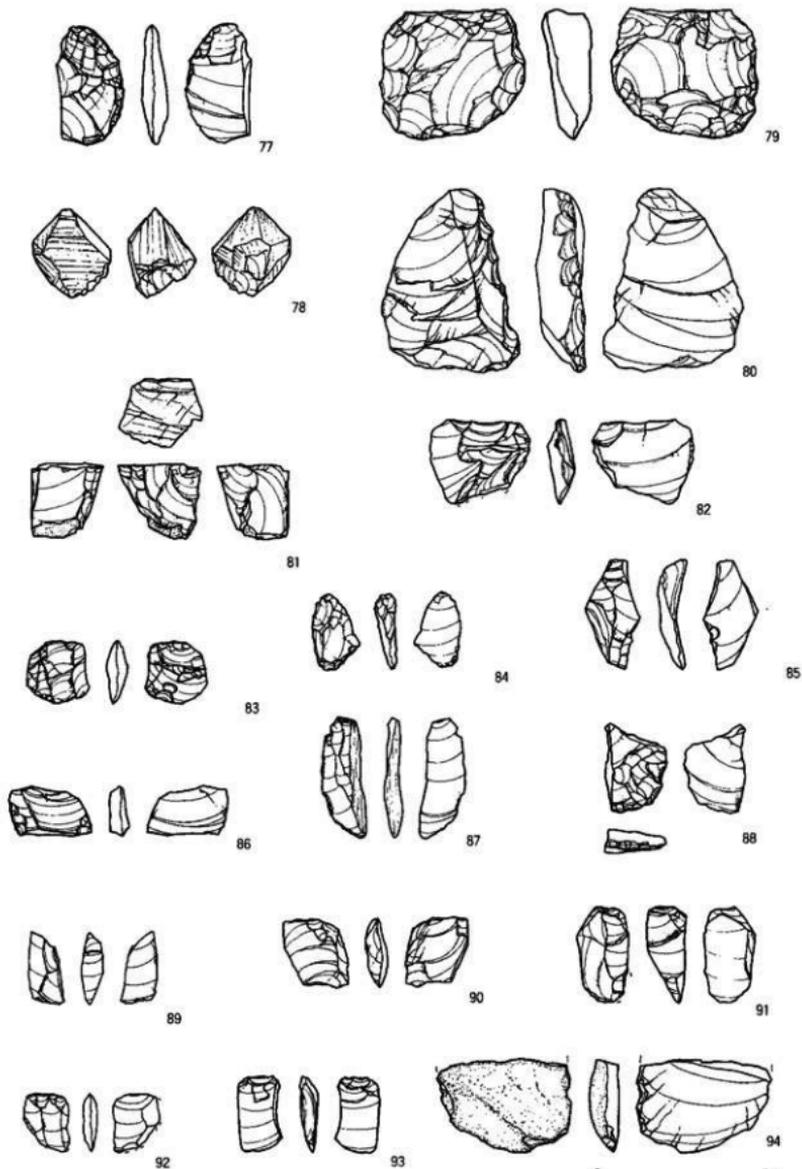
第25図 A地区Ⅳ、Ⅴ層出土縄文土器(2) (S : 1/2)



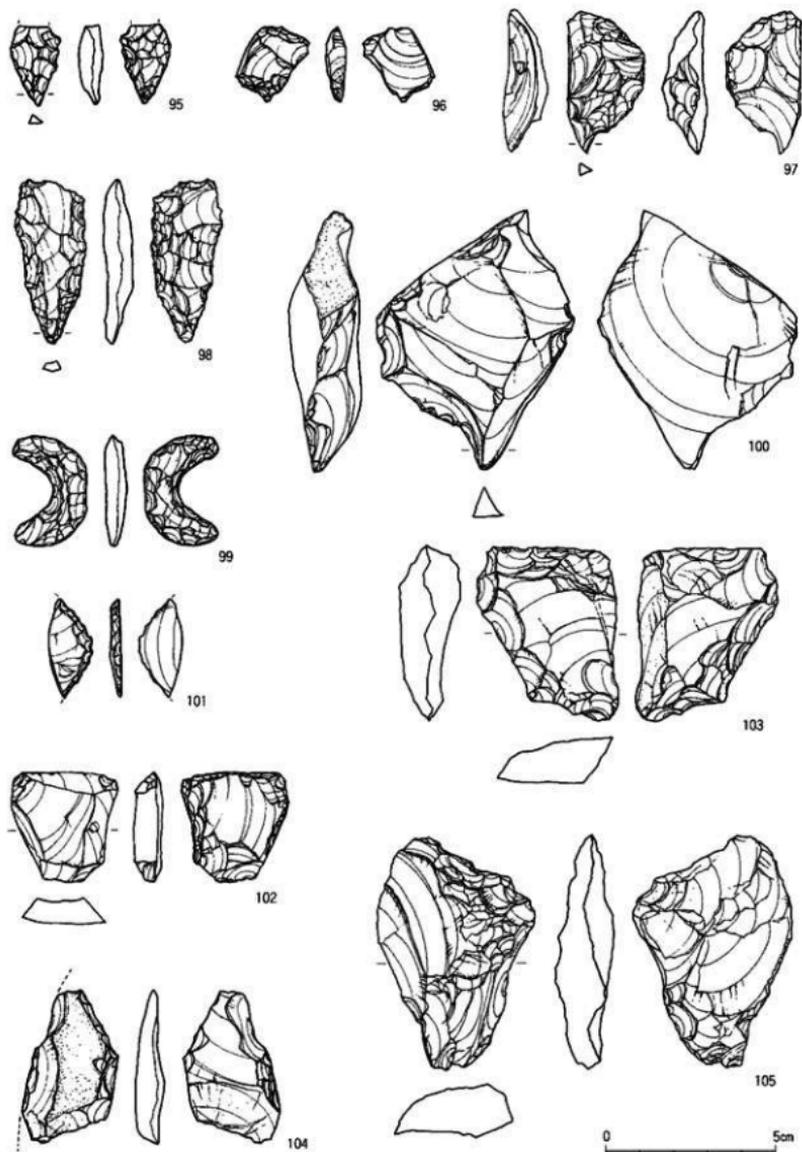
第26図 A地区Ⅳ、Ⅴ層出土縄文土器③ (S : 1/2)



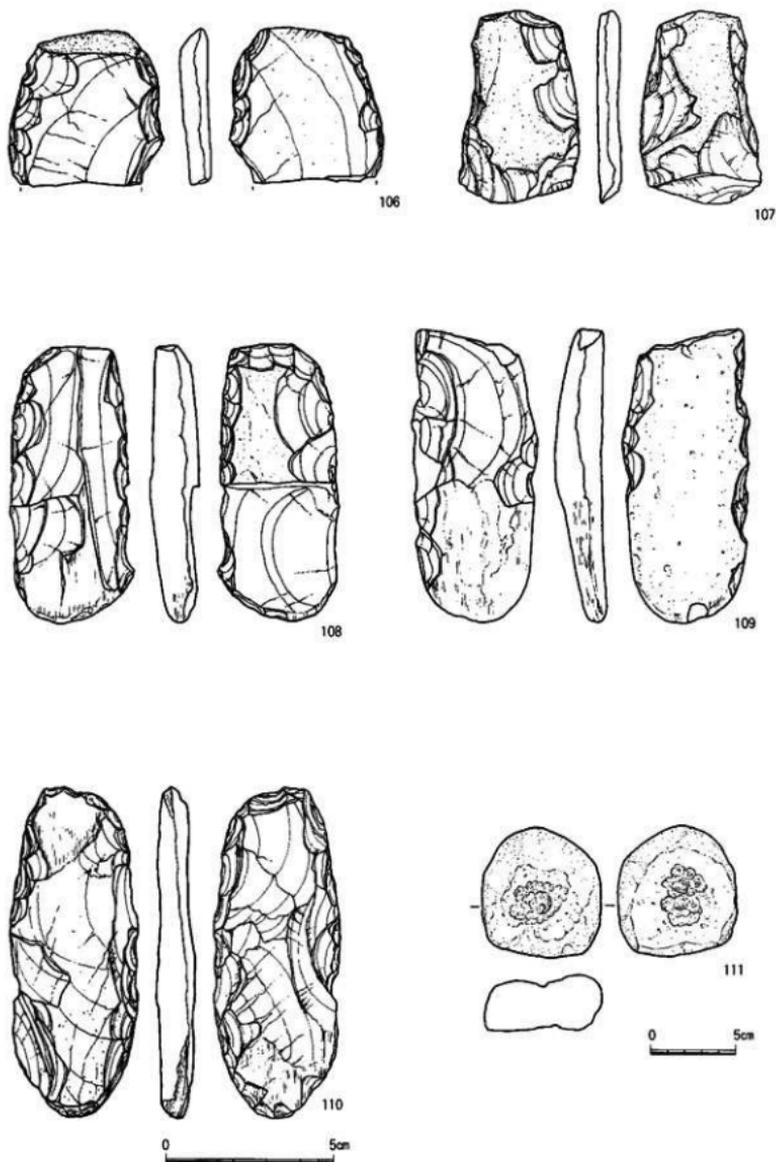
第27図 A地区Ⅳ、Ⅴ層出土石器(1) (S: 2/3)



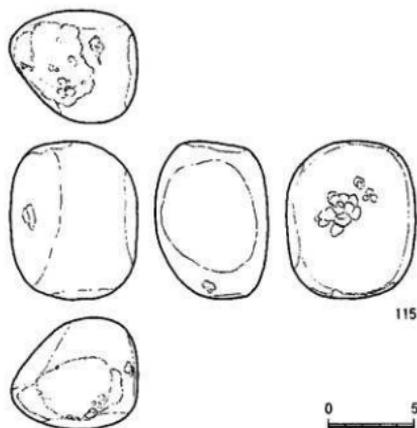
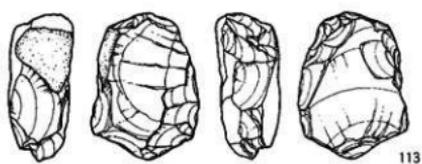
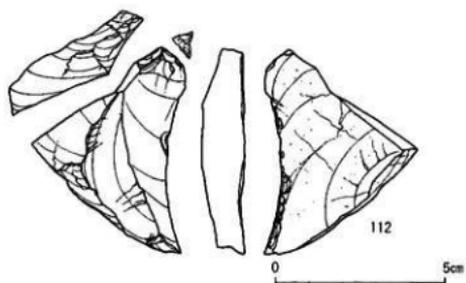
第28図 A地区IV、V層出土石器(2) (S : 2/3)



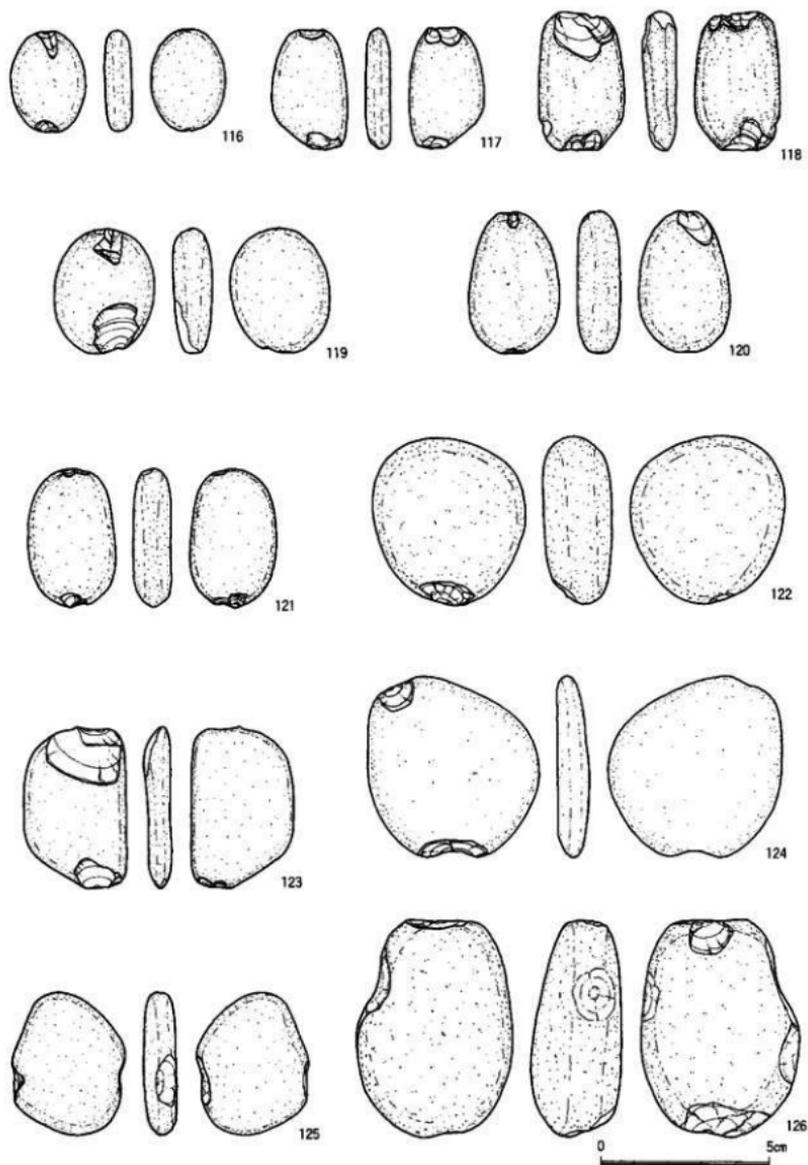
第29図 A地区IV、V層出土石器(3) (S:2/3)



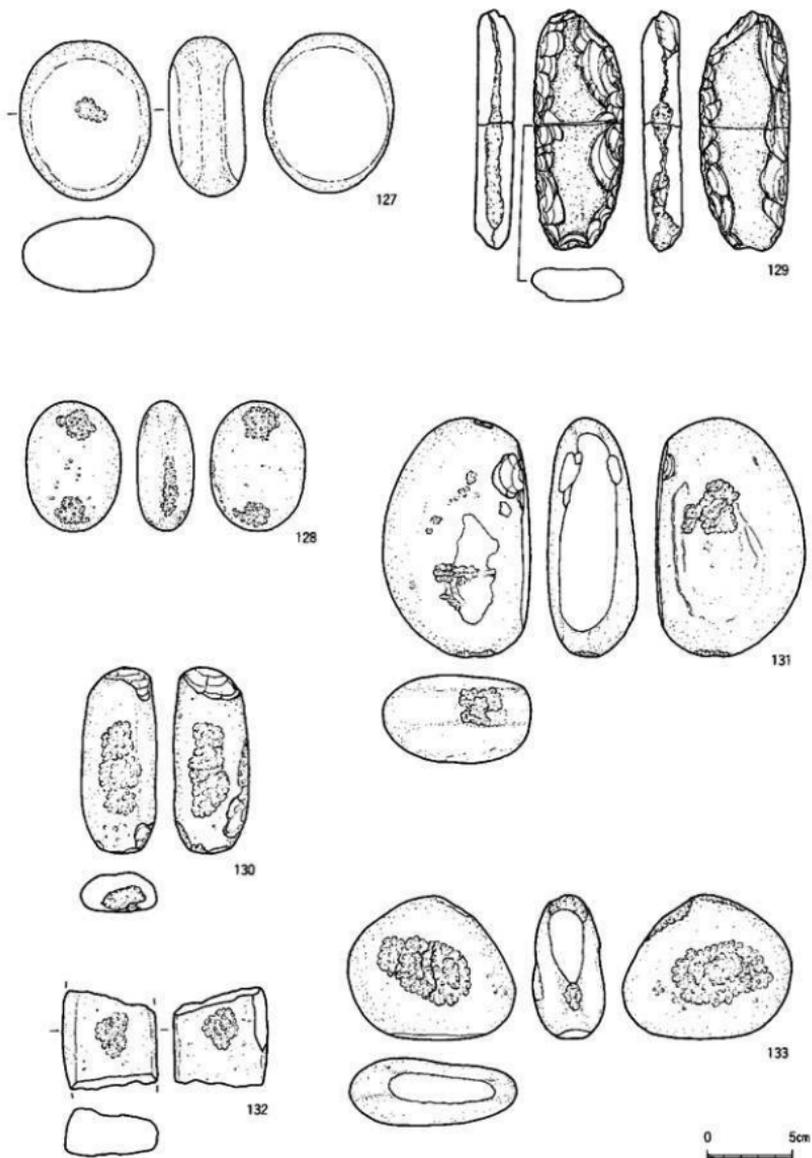
第30図 A地区IV、V層出土石器(4) (S : 2/3、1/4)



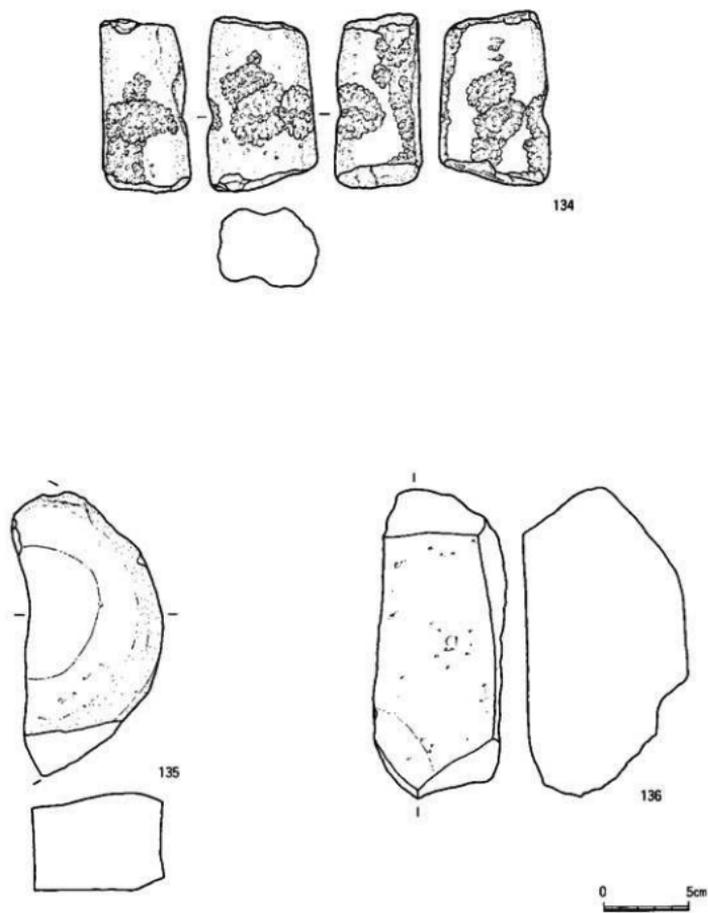
第31図 A地区Ⅳ、Ⅴ層出土石器(5) (S : 2/3、1/4)



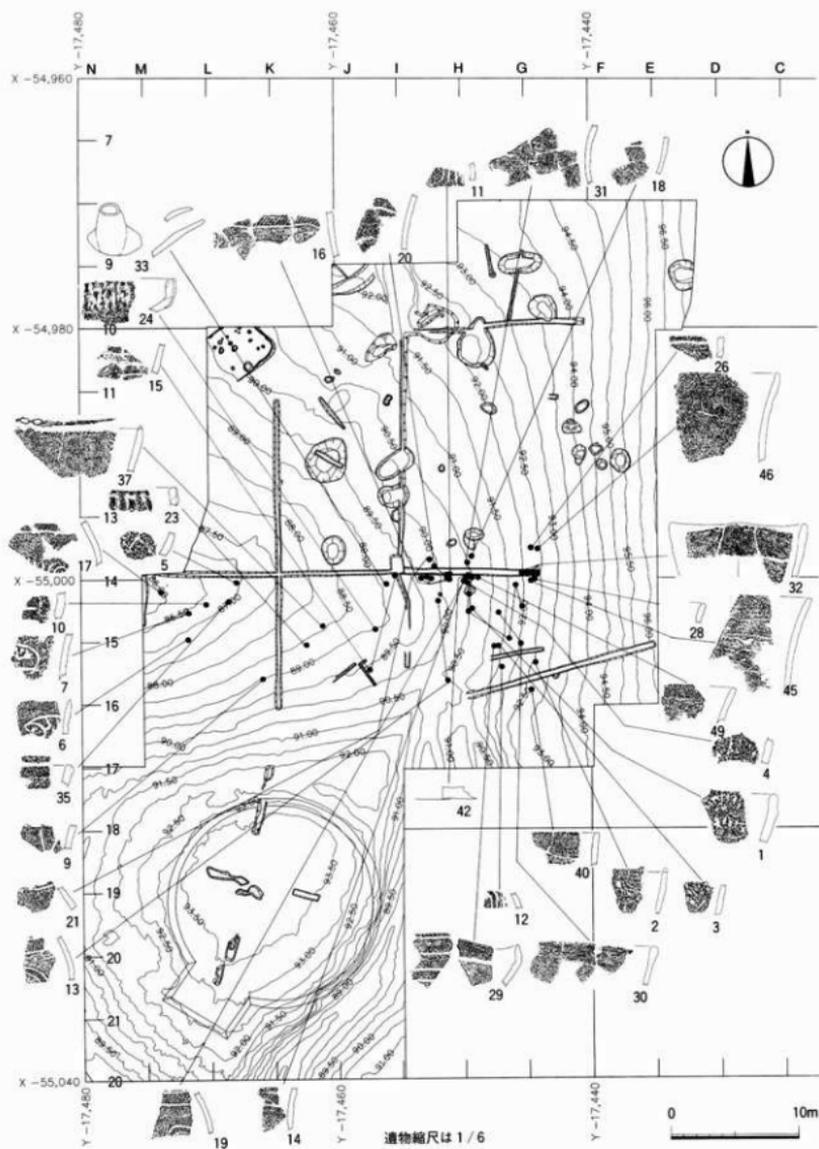
第32図 A地区IV、V層出土石器(6) (S : 2/3)



第33図 A地区M、V層出土石器(7) (S:1/4)



第34図 A地区Ⅳ、Ⅴ層出土石器(θ) (S : 1/4)



第35図 A地区縄文土器出土位置図（S：1/400）

## 第2節 II期の遺構と遺物（縄文時代晩期）

Ⅳ層の掘削中に検出した自然流路NRA01をⅠ期に後続するものとしてⅡ期の遺構と判断した。NRA01（第36図）はF9～G15グリッドにかけて、南北に細長く伸びる自然流路で、全長約31.2m・最大幅約1.7mをはかる。SDA01の東側に隣接するため、西側の壁面は部分的にSDA01によって削平されている。このため、SDA01掘削中にF11・F14・F15グリッドではNRA01の断面がSDA01の東壁面と重複したため、住居跡の断面のように見え、当初は住居跡と認識していた。その後、F14・F15グリッドで2棟程度の住居跡があると判断して調査を進めたが、住居跡らしい平面形は確認できず、断面を観察するためにF15グリッドにサブトレンチを設定したところ、Ⅳ層を掘削した溝であることが判明した。この結果、F11・F14・F15グリッドで住居跡と認識していた断面はNRA01とSDA01がわずかに重複していることを住居跡と誤認していたことが判明した。深さは一部に掘削し過ぎの箇所もあるが、確認面から20cm程度と浅いもので、埋土は風化した砂岩礫が混じる褐色土が認められた。底面は鉄分の沈着により硬化した箇所が認められたことから、人為的に掘削した溝というよりは自然流路である可能性が高い。溝の幅が北から南へ向かうにつれ、次第にその幅が広がることも自然流路の可能性が高いことを示す一つの要因と考えられる。

遺物は埋土より少量の縄文晩期後半の土器片が出土した。一部、住居跡と誤認した際に出土した土器片も含むが、出土地点を照合するとNRA01内に含まれることから、NRA01から出土したものと判断した。NRA01から出土した土器片中には前述したⅠ期の遺物を含まないことから、縄文晩期後半の安定した資料とみられる。図示した44～46は無文粗製の深鉢である。いずれも口縁部片の資料で、口縁端部の強いナデ調整が特徴的である。時期的にはほぼ同時期とみられ、縄文時代晩期後葉の突帯文以前のものと考えられる。おそらく、縄文時代晩期中葉の稲荷山式に類似すると判断される。



A地区下層遺構完掘状況（南より）



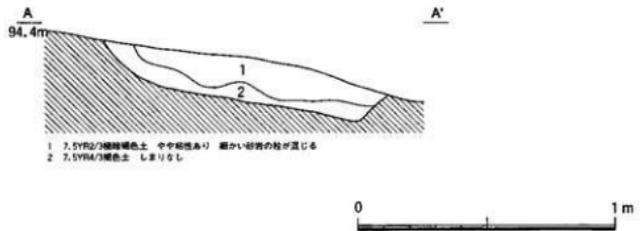
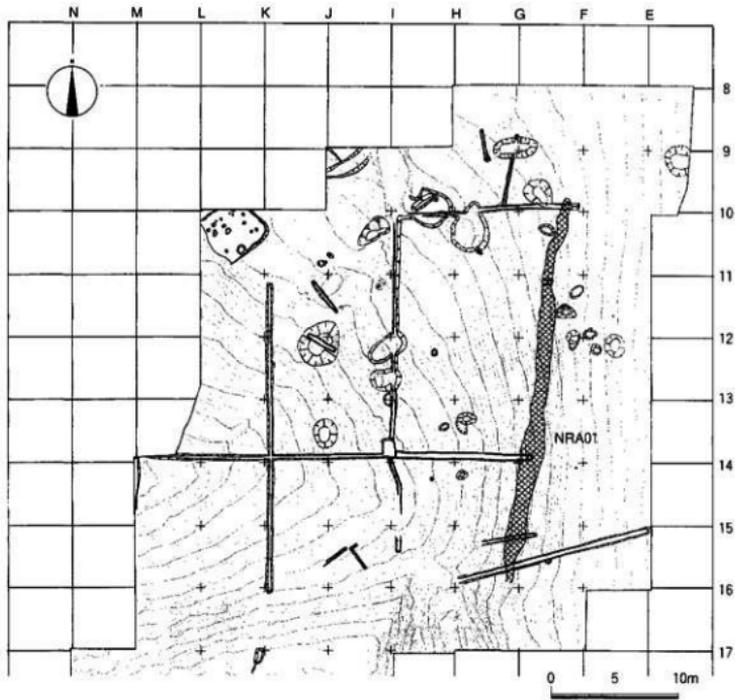
A地区作業風景



A地区下層遺構完掘状況（東より）



A地区下層遺構完掘状況（南より）

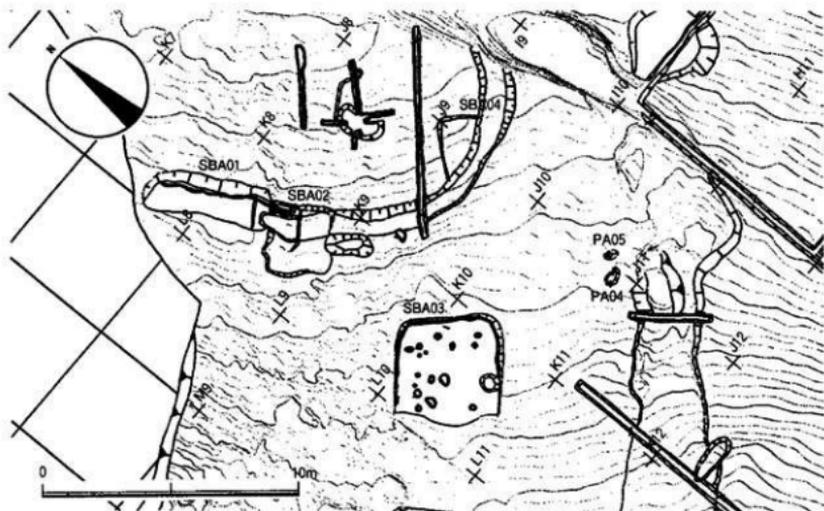


第36図 II期NRA01平面図 (S:1/400)・断面図 (S:1/20)

## 第3節 Ⅲ期の遺構と遺物（弥生時代末～古墳時代初頭）

## 住居跡

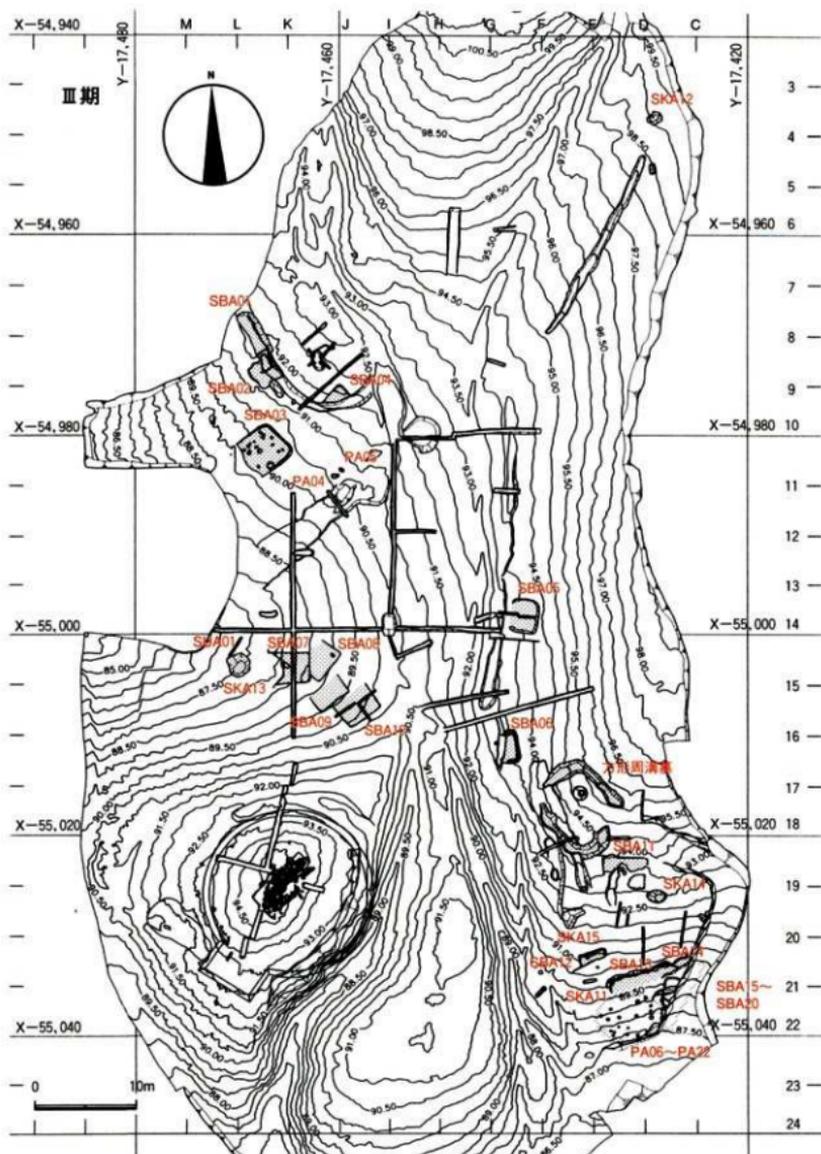
Ⅲ期の遺構は9列～16列の間にある西向き斜面と17列～22列にある南向きの斜面の二箇所にそれぞれ集中する。主な遺構は住居跡17棟で、いずれも傾斜角 $10^{\circ}$ ～ $25^{\circ}$ の急な斜面上に形成されている。遺物の出土は総じて少なく、焼失住居のSBA03以外は一括資料といえるものは認められない。このため、遺構内から出土した土器は器形が判明するものは出来る限り図示することに努めた。



第37図 SBA03周辺地形図 (S : 1/200)

## SBA01 (第39図)

K7・K8グリッドで確認した住居跡で地山である砂岩岩盤上に形成されていた。谷側の平面形は流失のため、そのほとんどが失われている。確認できた平面形は本来の形状からすると1/3程度と推測される。検出当初はⅢ層に起因する黒褐色土の堆積が認められなかったため(Ⅱ層が堆積)、住居跡と想定していなかった。そのため、地山を検出すべく調査を進めたところ、山側の壁面と壁溝が認められたため、住居跡と認定した。その結果、土層観察用の畦を設定することなく、住居跡を完掘してしまったため、住居内の土層観察を行うことができなかった。隅角は北西部しか認められず、かなり丸みをもっている。北東部の隅角は一部、掘削の行き過ぎがあり判然としない。奥行きは4.8m、幅は判然としないが5.02mをはかる。主軸長は現存で1.62mをはかり、その方向はN-63°-Eを向く。床面は岩盤が露出し、硬化面・貼床等の様子は確認できなかった。また、柱穴・炉跡の痕跡も確認できなかった。壁溝は幅5cm前後・深さ5cm弱で山側の壁面際をめぐり、山側の壁面は壁溝際から傾斜角 $30^{\circ}$ ～ $45^{\circ}$ で緩やかに立ち上がる。おそらく、堆積の過程でかなり崩壊したものと思われる。



第38図 Ⅲ期遺構配置図 (S : 1/500)

なお、遺物は出土しなかったが、周囲の住居跡と同じく弥生時代末～古墳時代初頭に形成されたとと思われる。

#### SBA02 (第39図)

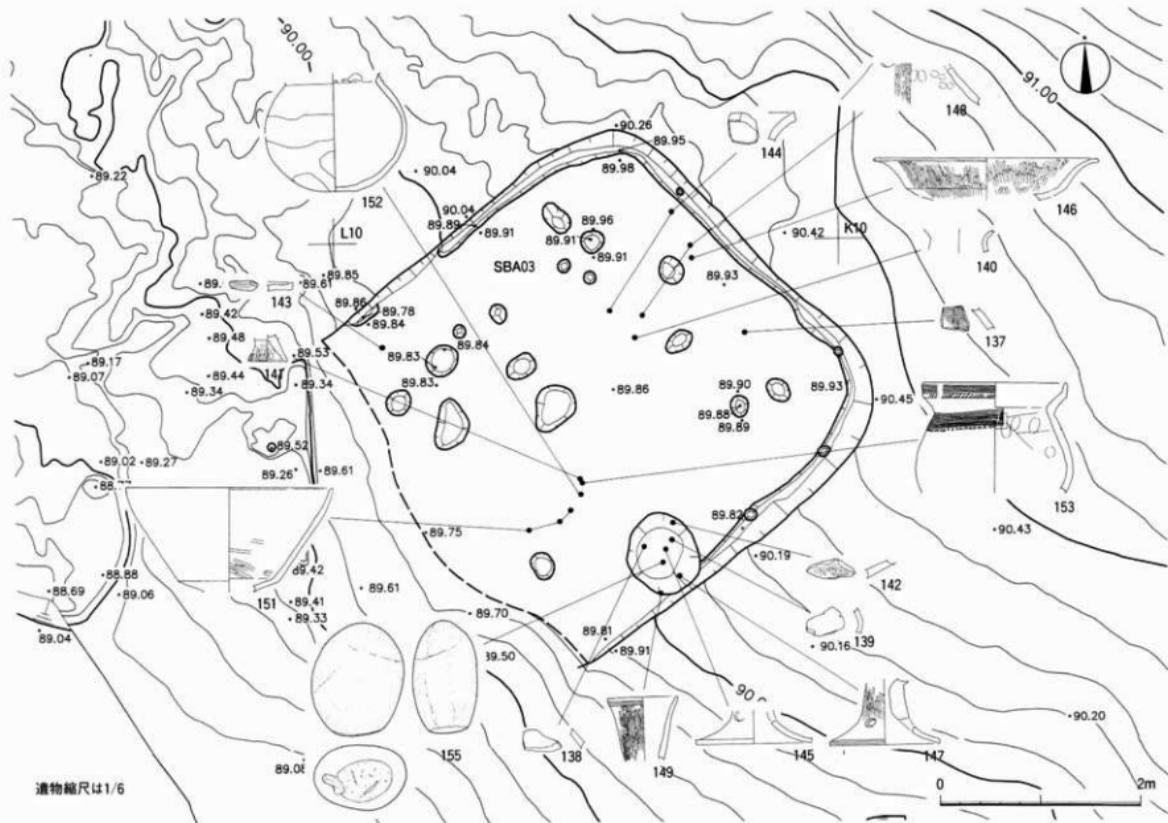
K 8 グリッドで確認した住居でSBA01と隣接して重複関係が認められる。完掘にいたる経過はSBA01と同様の経過のためやや不確定な部分もあるが、SBA01との重複関係はSBA01→SBA02と判断した。その理由はSBA01のわずかに残る壁溝がSBA05の壁溝を削平していることによる。また、後述する後平1号墳の周溝が本住居跡の中央をめぐるが、前述した調査の経過の理由により、一部後平1号墳周溝の確認を怠った。壁面は山側とそれに連なる東側の壁面しか認められず、高さは約20cm程度と比較的浅い。埋土はⅡ層に類似する土層が堆積し、短期のうちに埋没したものと想定される。壁溝は山側壁面際の西側でしか認められなかったが、おそらく本来は山側壁面をめぐるものと思われる。奥行きはSBA01に切られているため現存長で2.28mをはかる。同様にして幅は2.45mをはかり、奥行きに対してやや幅広である。谷側の平面形は一部を流失しているものと思われるが、SBA01に切られている部分は別にして、本来の形状の4/5程度の形状は保持していると考えられる。炉跡・柱穴の痕跡は確認できなかった。主軸長は現存で2.59mが認められ、主軸方向はN-58°-Eを向く。

また、遺物の出土も皆無であった。

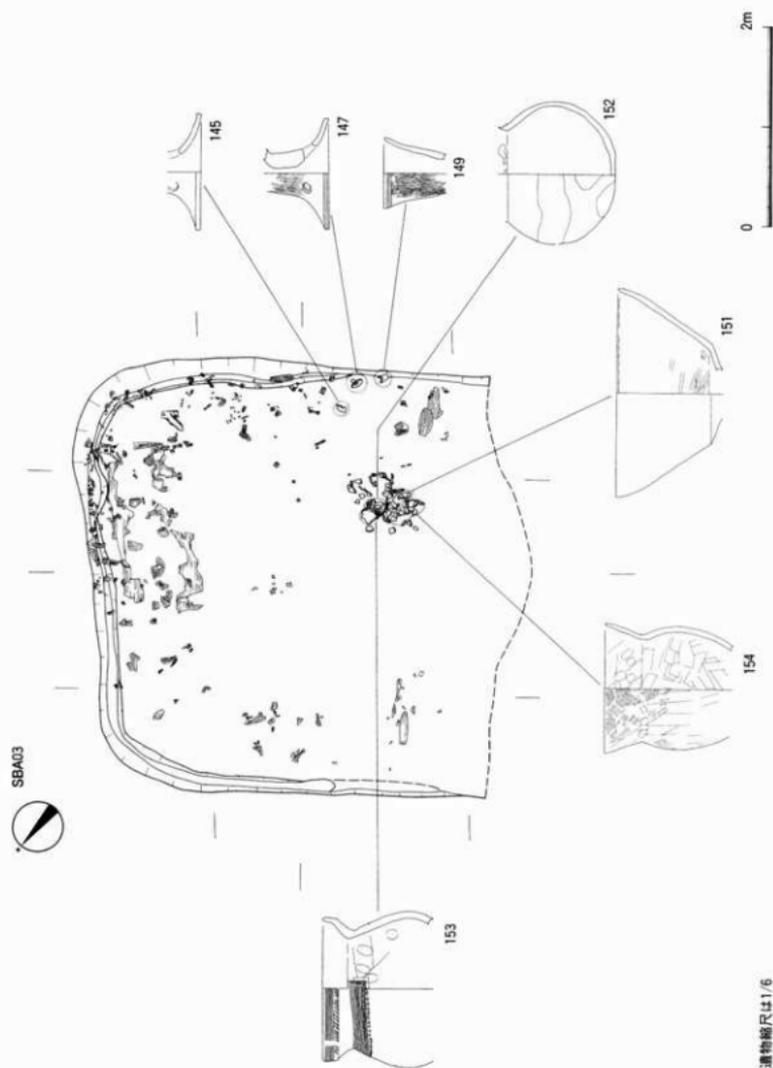
#### SBA03 (第40～45図)

K 8・K 9 グリッドに所在する住居跡。砂岩岩盤を深く掘削しているため、検出は比較的容易であった。焼失住居でA地区において確認した住居跡のうち、最も残存状況が良好な住居である。おそらく、本遺跡のなかで本来の形状を保つ唯一の住居跡と考えられる。平面形はほぼ正方形を呈し、主軸長4.07m・幅4.08mをはかり、奥行きは3.21mである。主軸方向はN-51°-Eを向く。山側の隅角はいずれも丸く、壁面際には幅10cm程度・深さ5cm程度の壁溝がめぐる。壁溝は北側ならびに南側の壁面際の半分程度まで連なる。南端については住居内の土坑SKA12につながる。最大壁高は山側の壁面で0.57mをはかる。両側の東西壁面は自然地形にそって山側から谷側に向かって次第に浅くなり、谷側の床面端で自然地形につらなる。隅角は丸みをもつ。埋土は主にⅢ層に起因する黒褐色土の堆積がみられ、床面付近では炭化材と焼土粒の分布が集中する。なお、1層は試掘範囲調査時におけるTr4を掘削した際の埋め戻し土である。炭化材は山側の床面付近に集中して認められ、その周囲が被熱して赤褐色化していた。炭化材は南北両壁面隅付近にも広がりをもせることから、壁面を支えていた板材が焼失したと思われる。また、炭化材の樹種は後述するが、針葉樹が主に使用されていた。炭化材には板状の薄く比較的幅の大きいものと細長いものが認められ、それぞれ板材と杭材に対応すると考えられる。炭化材の出土状況は床面より全体に2～3cm程度高く、炭化材の下部には地山の風化土に起因する褐色土が堆積していた。このことからみて、本住居跡の焼失住居は住居跡を廃絶してわずかに時間が経過した後に、焼失した可能性もある。床面は炭化材を除去した後に検出した。床面は本遺跡中ではめずらしく、その残存状況は良好であった。床面は一見貼床状を呈するほど硬化していた。住居を掘削した際に生じた排土を利用して床面を築成して、それが硬化したと思われる。ピツ









第42図 Ⅲ期SBA03遺物出土状況図 (S:1/50)

遺物縮尺は1/6



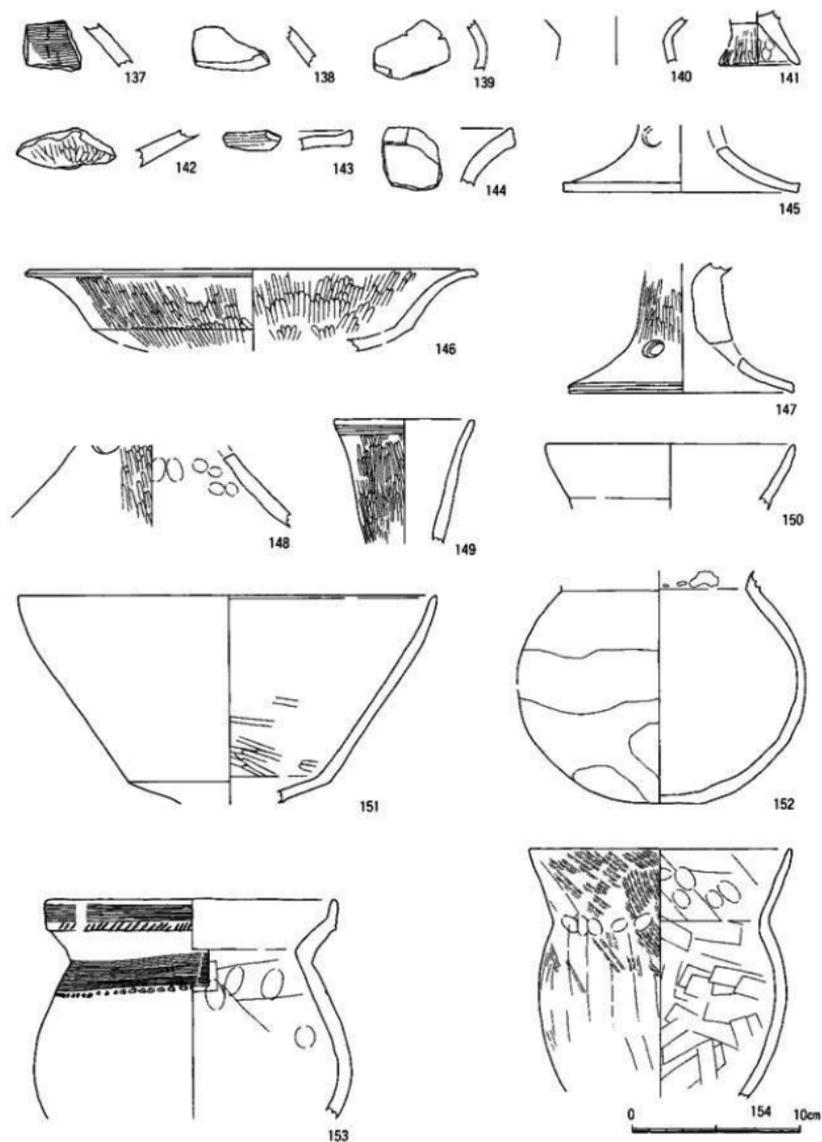
トは床面上で壁溝内に位置するものを含めて計19個を確認した。そのうち支柱穴として認定できるのはP2・P7・P13・P14で、いずれも他のピットに比べて0.5m前後と深いことがその理由である。P16～P20は壁溝内で確認したピットで、直径、深さとも10cm程度の小さなものであるが、その位置および大きさからみて、前述した板材を支える枕材用のピットである可能性が高い。深さP2・P7・P13・P14以外のピットは深さが10cmにも満たないピットで、その性格は不明である。炉跡は住居の中央やや西よりの箇所を確認した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.53m・短軸0.37mをはかる。中央付近は被熱して赤褐色化していた。深さは5cm弱程度で浅いものである。住居の所属時期からみて、本来は円形を呈すると考えられ、炉跡の西端に設置されていた川原石が抜き取られたことにより、平面形が楕円形に変化したと推測される。その他、本住居内で注目すべき施設として、南壁面に接するようにして不整形を呈する土坑SK01を確認したことがあげられる。その規模は0.77m×0.63m・深さ0.3m弱で、土坑内からは安山岩の川原石が出土した。堆積状況は検出当初は確認面を炭化材が覆っており、炭化材を除去した後は床面形成土に類似する土層の堆積が認められた。炭化材の状況ならびに床面形成土の流入からみて、本土坑は住居焼失時にはほとんど埋没していたことになり、生活時に機能していた施設かどうかについての判断はやや困難である。川原石を何かの目的をもって埋設したことは十分に推測可能であるので、現状では生活時に機能した施設ではなく、祭祀的な意味をもった施設と判断しておきたい。

土器は住居の中央やや南よりの箇所から集中して出土した。その点数は土器の破片で356点である。出土レベルは炭化材と同様、床面から約2～3cm程度浮き気味で出土した。一括性の高い土器群(137～154)だが、出土状態からみて、住居廃絶直後のものかは判断が困難である。特に高坏A類(146)と高坏C類(151)が併存していること、また、台付甕の脚部破片(141)の出土もその理由である。その他の資料はやや離れた位置から出土して、小破片であることから同レベルで取り扱うことはできないと考えられる。そのなかでも151～154は出土状況からみて、一括性が高いと判断できる(第42図)。甕は条痕文のある甕A1類(154)、口縁端部が受口状になる甕B類が出土している。また、甕はA類(138、139)、B類(149)があり、赤彩のある土器片も出土している。

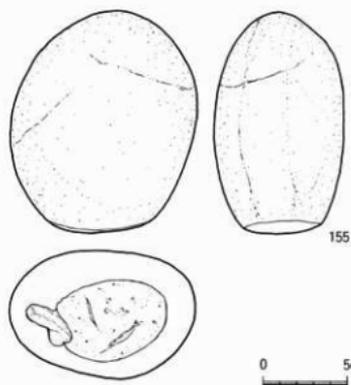
石器155敲石：端部に叩きの使用痕。敲き痕は滑らかで、見摩耗面のようにもみえる。おそらく柔らかい対象物に使用していると推定できる。トチ敲き石の使用痕にも近似している。

#### SBA04 (第46図)

J10・K10にあり、後半1号古墳周溝の削平を受け、住居の大半は失われていた。およそ住居の北西部1/4程度が残存する。検出した壁高は最大で25cm程度と浅い。おそらく、後半1号古墳墳丘造営時にかなり削平されたものと考えられる。北西部の隅角はやや丸みをもって、北側壁面と西側壁面が接する。現存長の奥行きは1.4m、西側壁面の長さは2.15mをはかる。主軸方向はN-42°-Eを向く。埋土は黒褐色土の堆積が認められたが、遺物の出土は土器片2点にとどまり、その土器も細片のため図示は不可能であった。また、床面は硬化面が認められず、壁溝・炉跡・柱穴などの施設は確認できなかった。住居の所属時期は出土土器からは判断し難いが、周辺の住居と同様とみて弥生時代末～古墳時代初頭としておきたい。



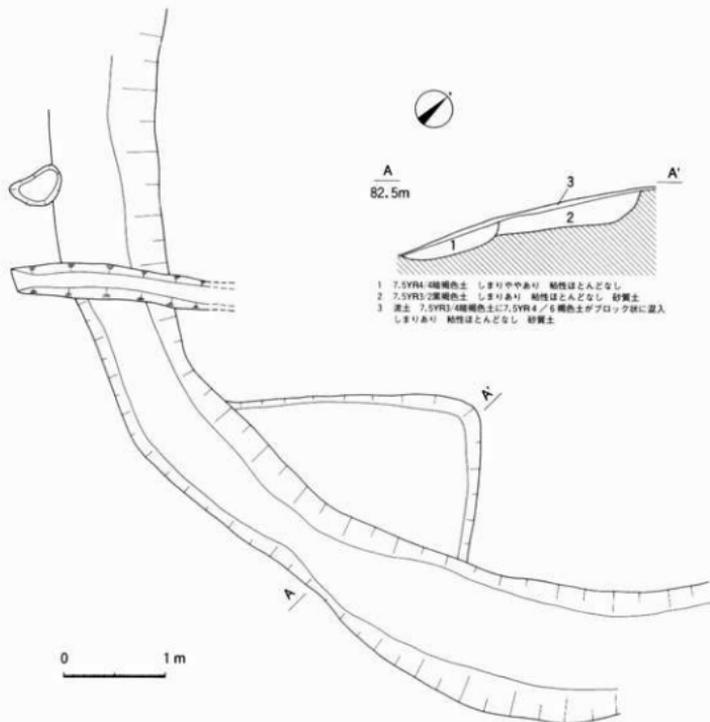
第44図 SBA03出土遺物(1) (S : 1/3)



第45図 SBA03出土遺物② (S : 1/4)



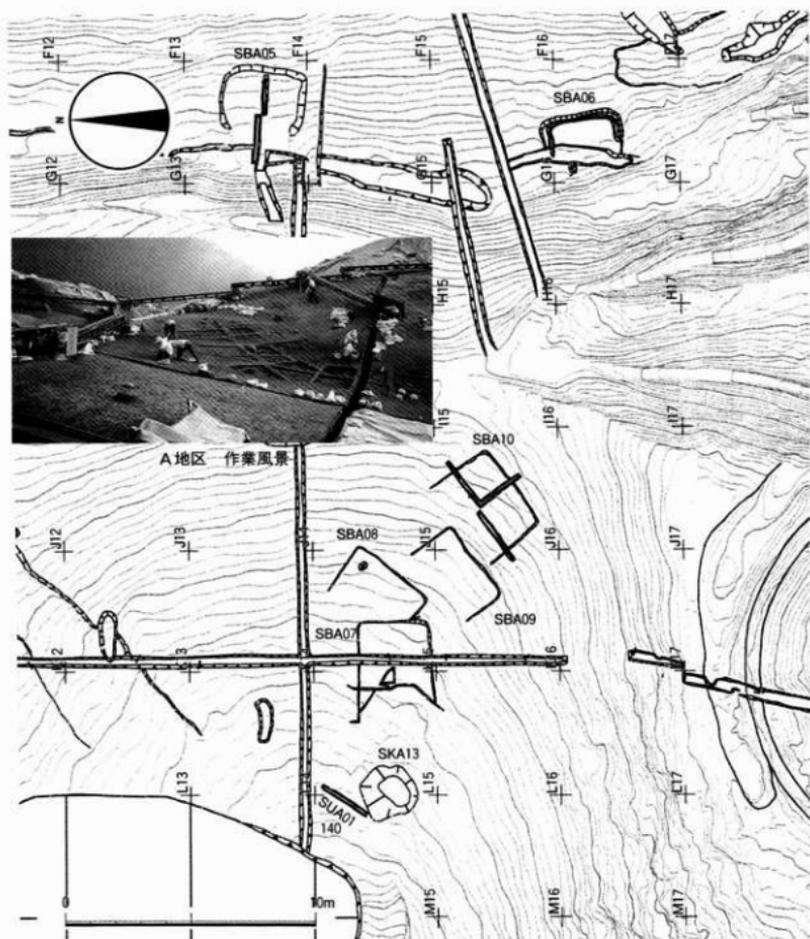
A地区 作業風景



A  
82.5m

- 1 7.5YR4-6暗褐色土 しまりややあり 粘質ほとんどなし
- 2 7.5YR3-2黄褐色土 しまりあり 粘質ほとんどなし 砂質土
- 3 表土 7.5YR3-4暗褐色土に7.5YR4/6暗褐色土がブロック状に混入 しまりあり 粘質ほとんどなし 砂質土

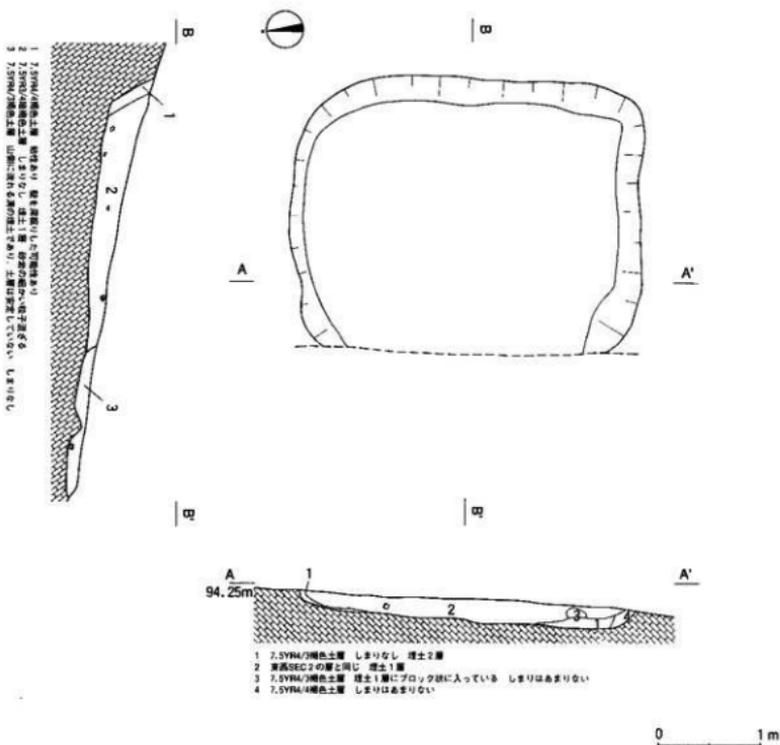
第46図 III期SBA04平面図・断面図 (S : 1/50)



第47図 SBA10周辺地形図 (S : 1/200)

## SBA05 (第48~51図)

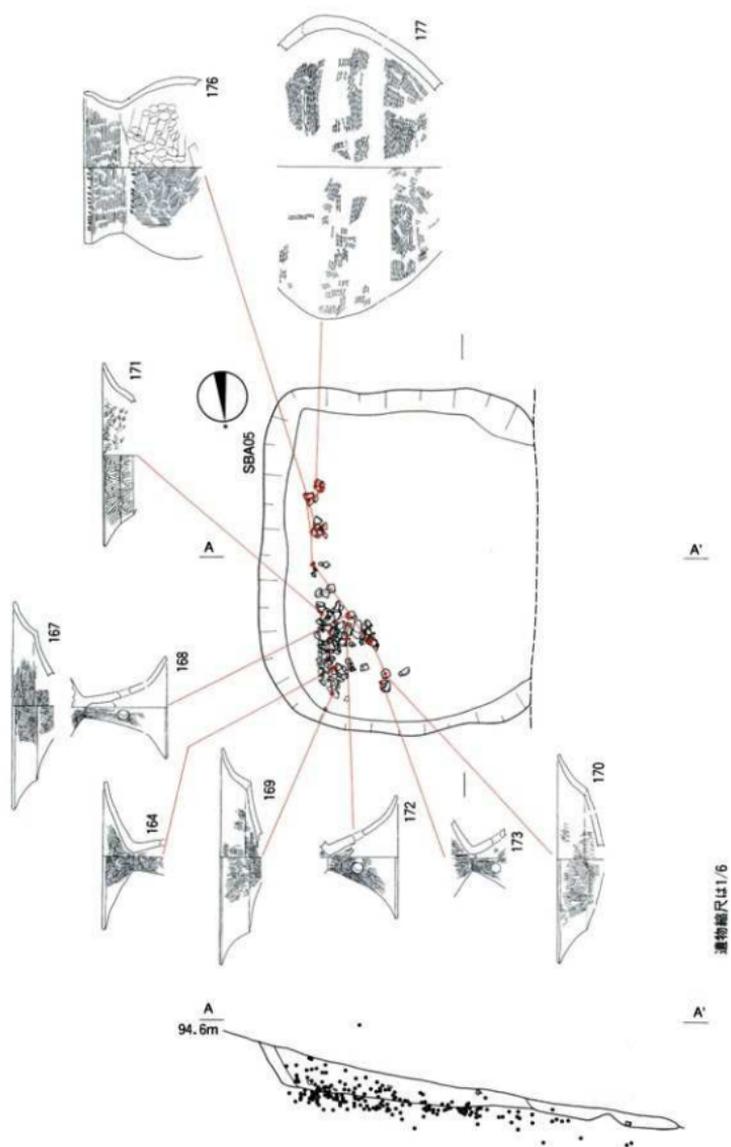
F13グリッドで確認した住居跡。IV層を掘削して形成している。平面形はほぼ正方形を呈するが、西端は自然流路によって一部流失している。規模は主軸長2.91m・幅2.32m・奥行き2.5mで、やや小型の住居である。主軸の方向は $N-92^{\circ}-E$ である。壁面は山側の部分で最大40cm強の高さが認められるが、南北両側の壁面はかなり壁面の立ち上がりが緩やかでおよそ住居跡らしくない形状であ



第48図 Ⅲ期SBA05平面図・断面図（S：1/50）

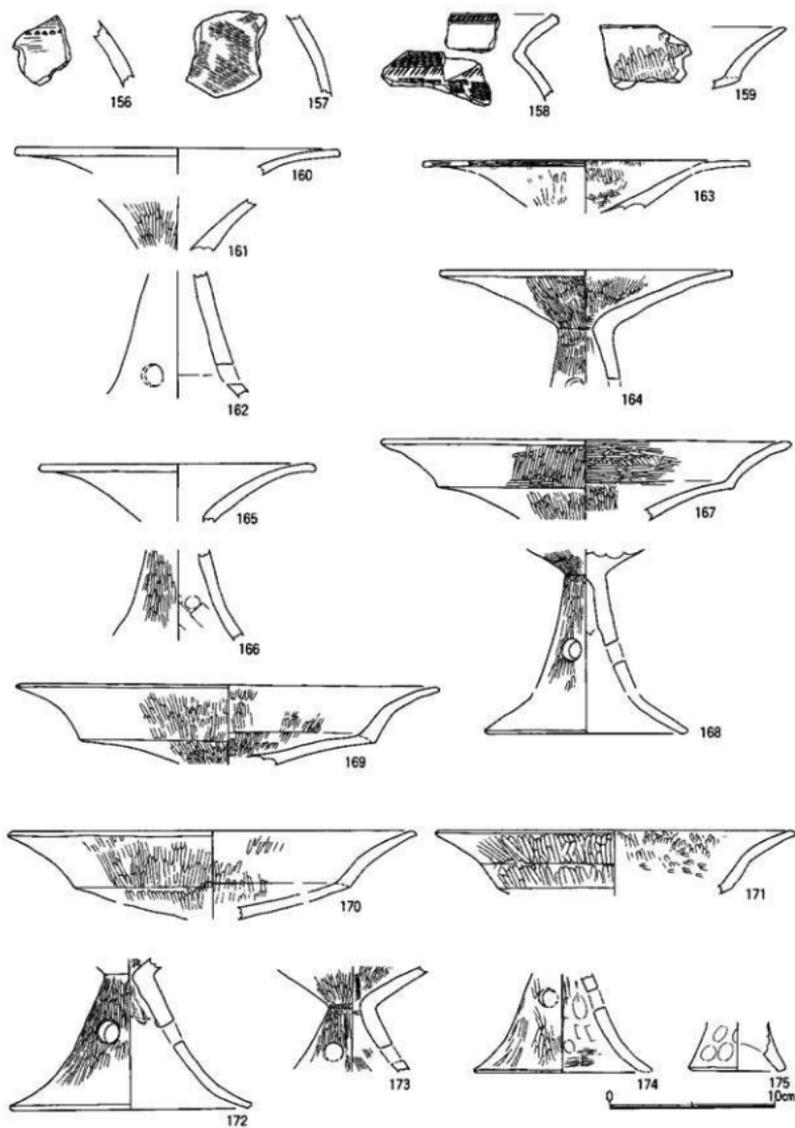
る。谷部の埋没に伴って、かなり壁面が崩壊した結果、生じた状況と現地では理解した。山側の壁面付近では10cm～20cm大砂岩礫がほぼ床面上に広がっているのを検出した。一部の砂岩礫には被熱して赤褐色化しているものも認められた。砂岩礫周囲の土は被熱していないことに疑問が残るが、住居廃絶に関わって、何かの意図をもってこれらの砂岩礫を廃棄した可能性が高い。同様の状況は後述するSBA06でも確認している。床面にはまったく硬化した箇所はなく、壁溝・炉跡・柱穴などの施設は検出できなかった。

遺物は埋土の中層あたりから多く出土し、その点数は土器の破片で327点にのぼりA地区の住居のなかではSBA03の次に多い。土器の破片は同一個体資料が大半を占めることから、周囲から混入した土器片は少ないと考えられ、かなり一括性の高い土器群としての評価が可能である。また、資料の大半が高坏A類（159、162、167～172、174）で占められることに特徴がある。しかし、その出土状況からみて住居廃絶直後の土器群ではなく、ある一定の時間を経過した後の土器群と考えられる。住居の所属年代は出土土器からみて弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。甕C 2類（176）、条痕文

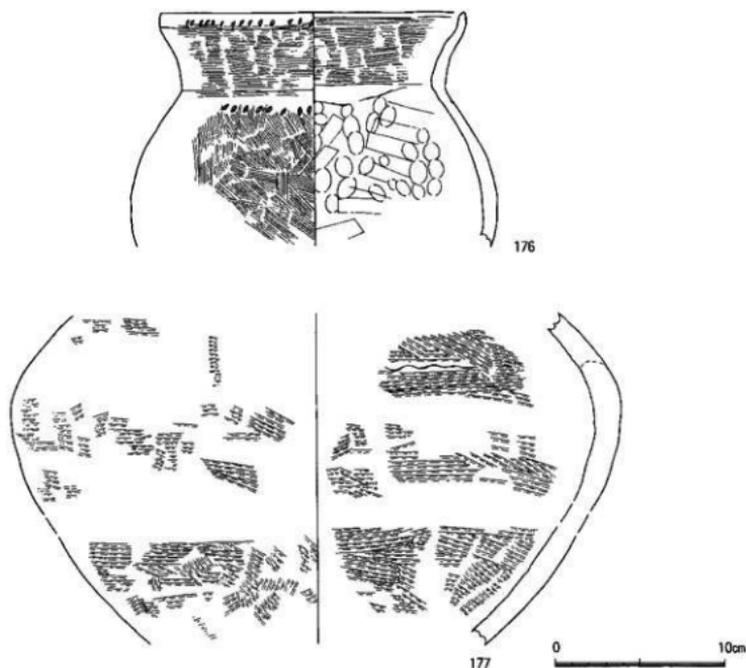


第49図 Ⅲ期SBA05遺物出土状況図 (S : 1/50)

遺物縮尺は1/6



第50図 SBA05出土遺物(1) (S : 1/3)



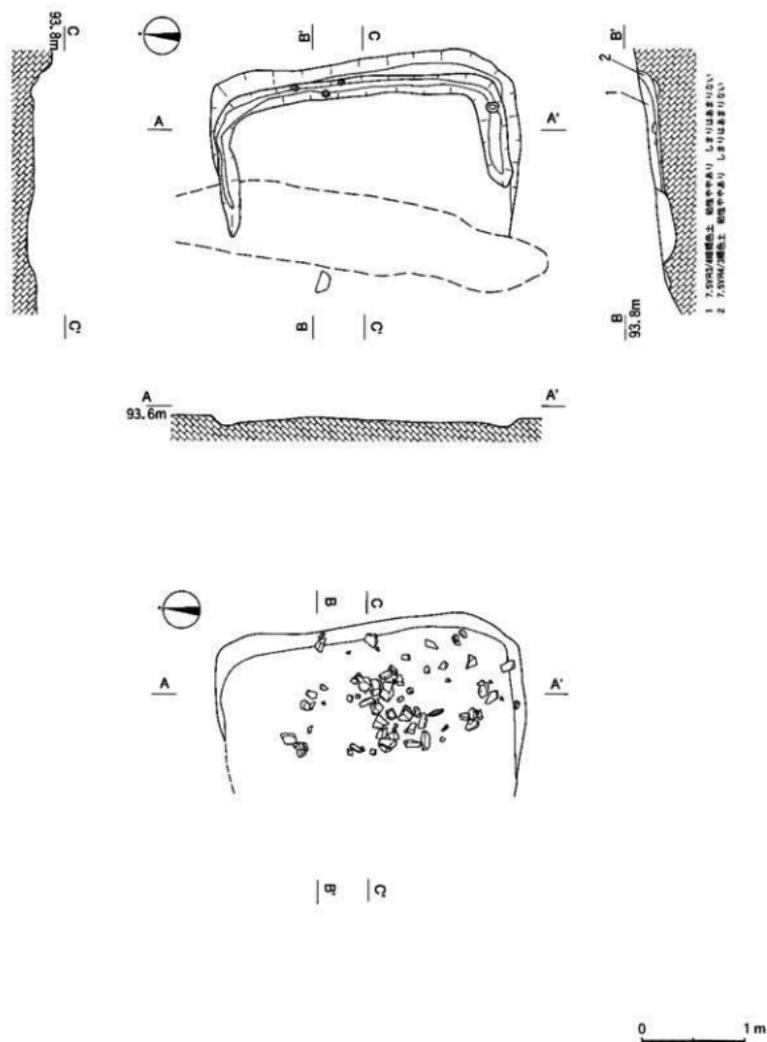
第51図 SBA05出土遺物(2) (S:1/3)

系の甕A1類(157)の胴部破片が出土している。

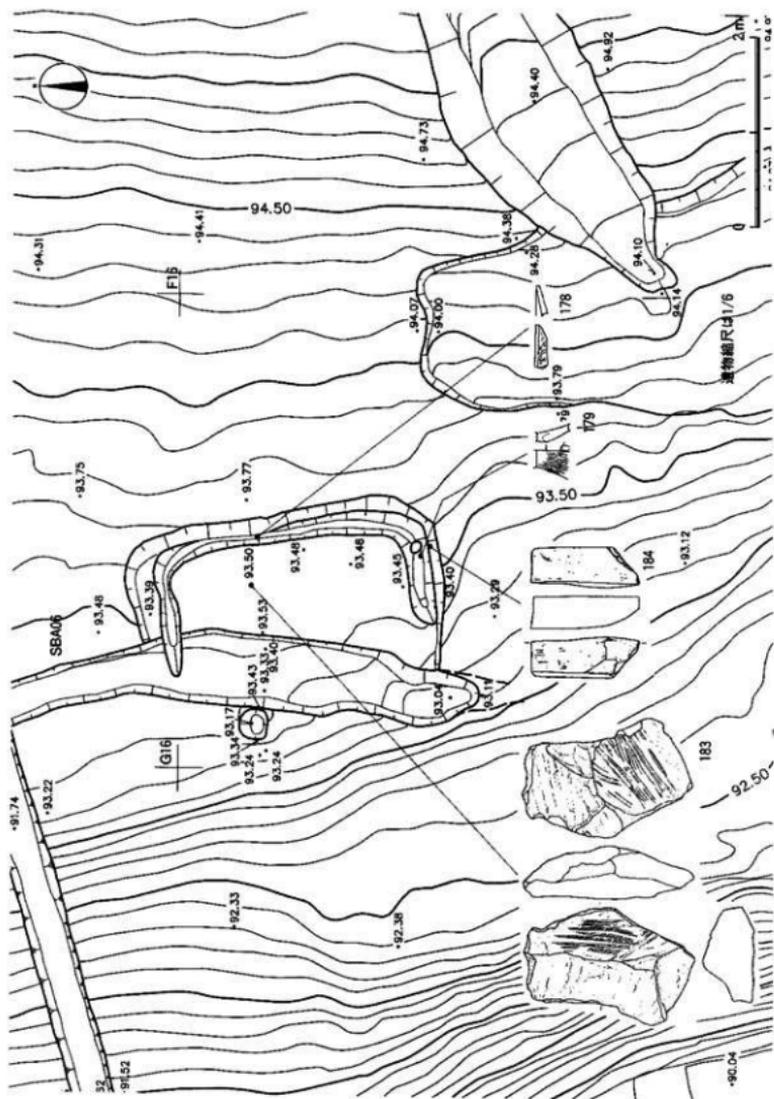
#### SBA06 (第52～54図)

F16グリッドに所在する住居跡でIV層を掘削して形成している。西端は自然流路によって削平されている。平面形は横長の長方形を呈するが、本来は正方形にちかい形状を示すものと思われる。規模は奥行き2.82m・幅2.85m・主軸長1.32mをはかる。山間に残る壁高は約20cmと浅く、おそらくII層の堆積に伴って流失したものと考えられる。壁溝は山側を中心にコの字状にめぐる。幅は約20cm程度で他の住居跡と比較するとやや広めである。深さは山側では約10cm程度認められるが、両端では浅くなり床面に連続する。壁溝内には直径7～10cm程度の小ピット(P1～P4)があり、深さは10cm弱と浅いが、壁面を支える板材の杭穴とみられる。主軸方向はN-83°-Eを向く。柱穴は確認できなかったが、炉跡はわずかに確認することができた。本住居の西端にある溝の西側壁面付近で長軸20cm程度の硬化した焼土面を検出した。住居の平面形は溝の削平によって、この焼土面に及ばないが、位置からみて本住居に伴う炉跡と考えられる。

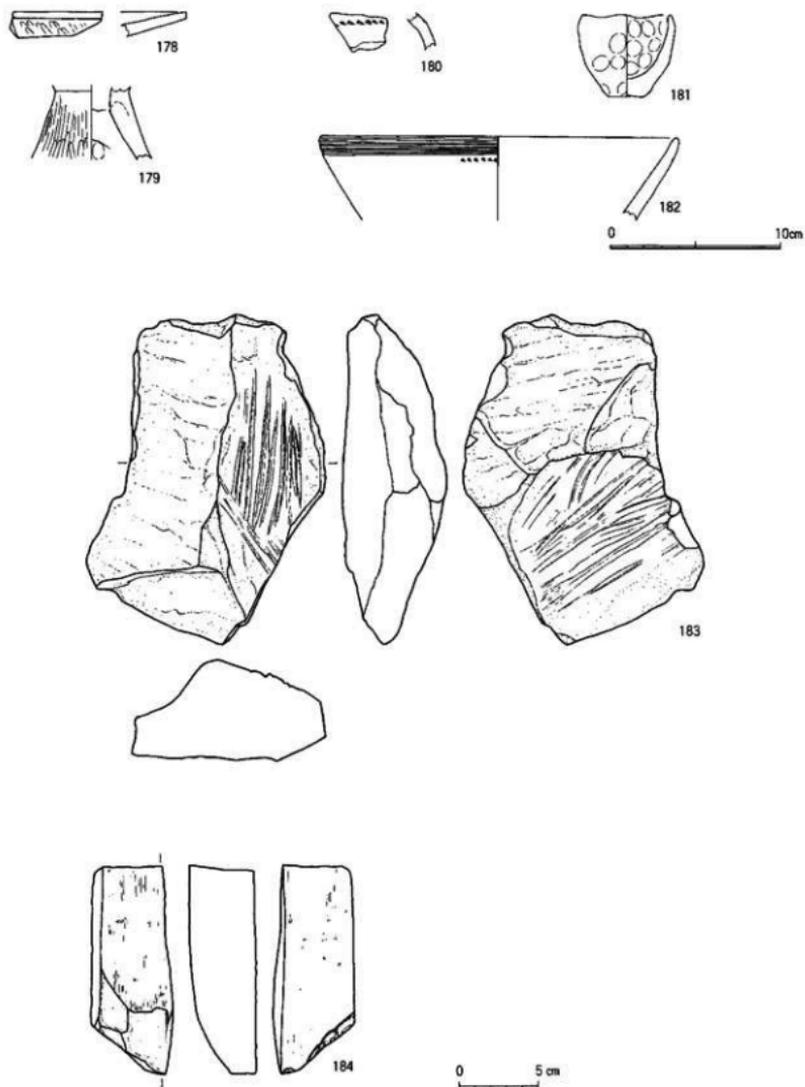
床面付近ではSBA05同様、10～20cm大の砂岩礫を廃棄している状況を確認した。砂岩礫は一部、



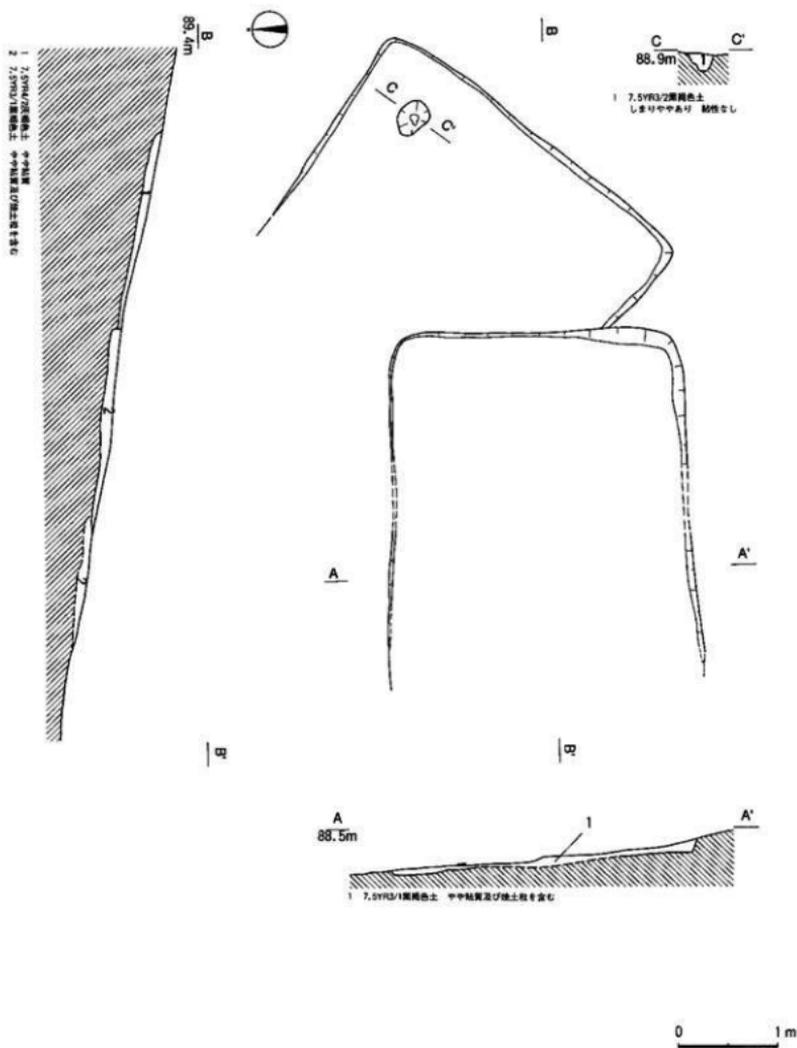
第52図 III期SBA06平面図・断面図 砂岩礫出土状況図 (S : 1/50)



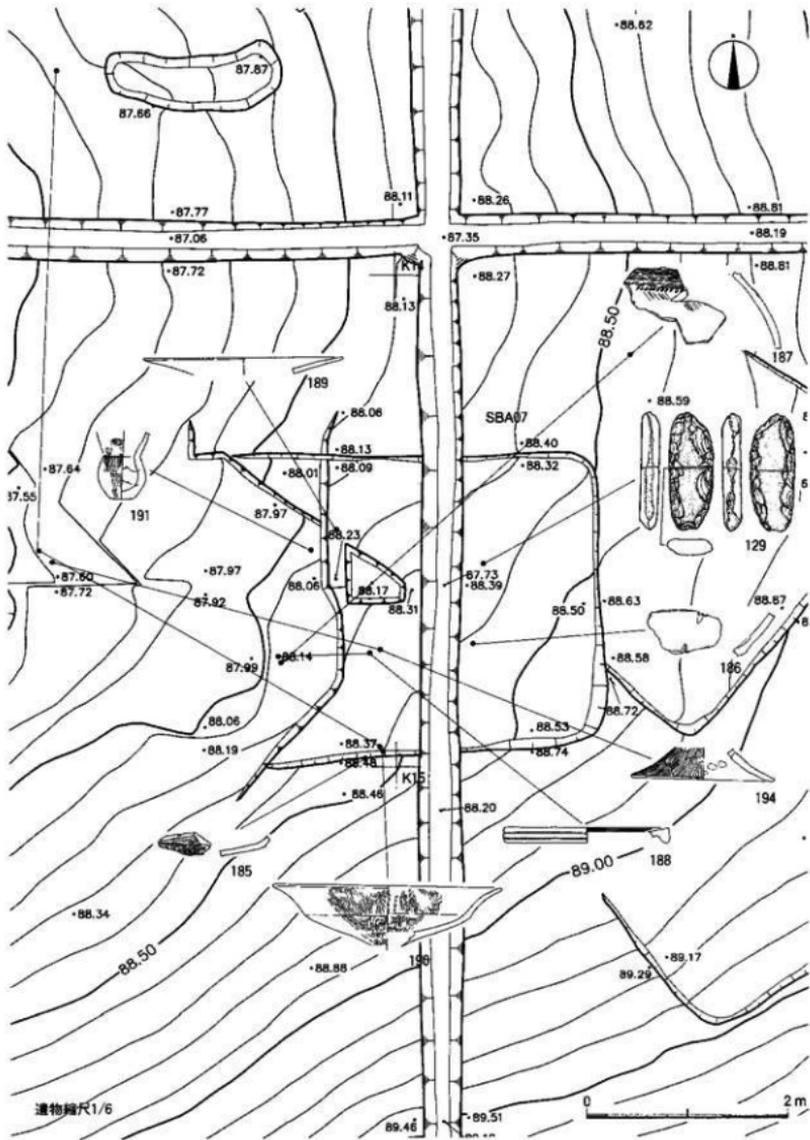
第53図 Ⅲ期SBA06出土遺物位置図 (S : 1/50)



第54図 Ⅲ期SBA06、SBA11出土遺物（S：1/3、石器 S：1/4）

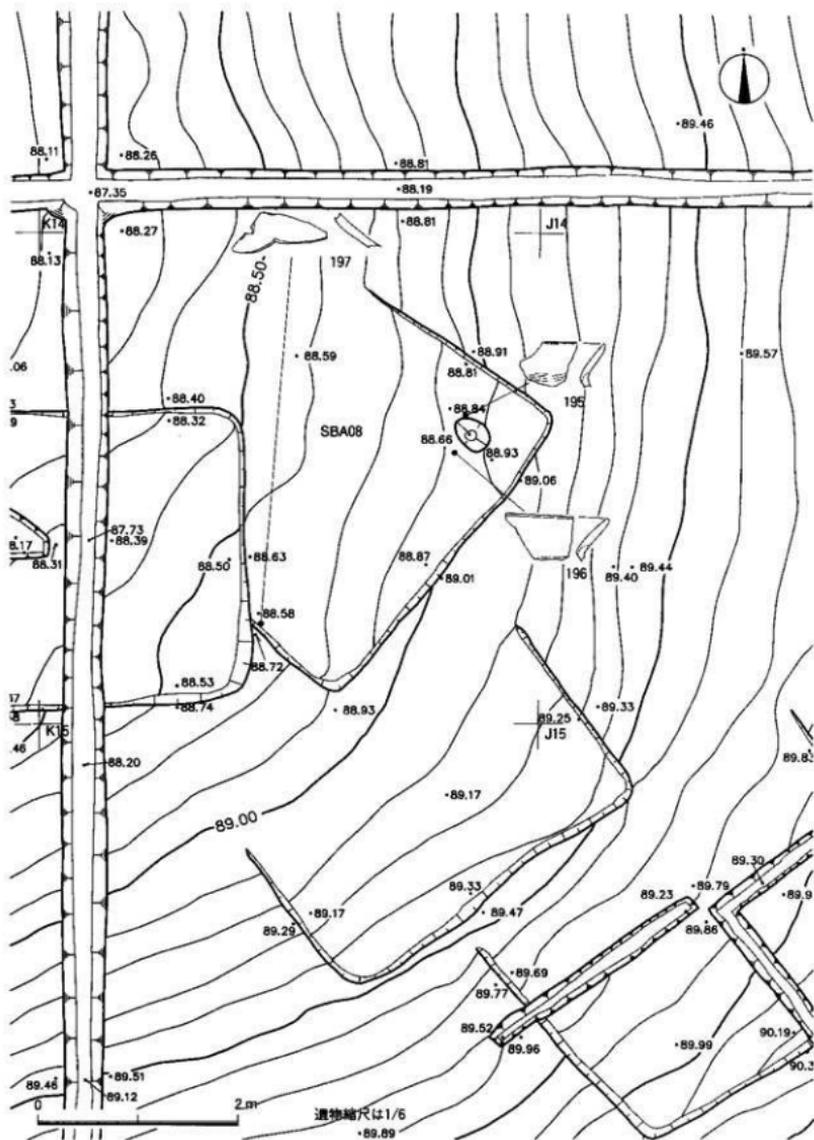


第55図 Ⅲ期SBA07、SBA08平面図・断面図 (S : 1/50)

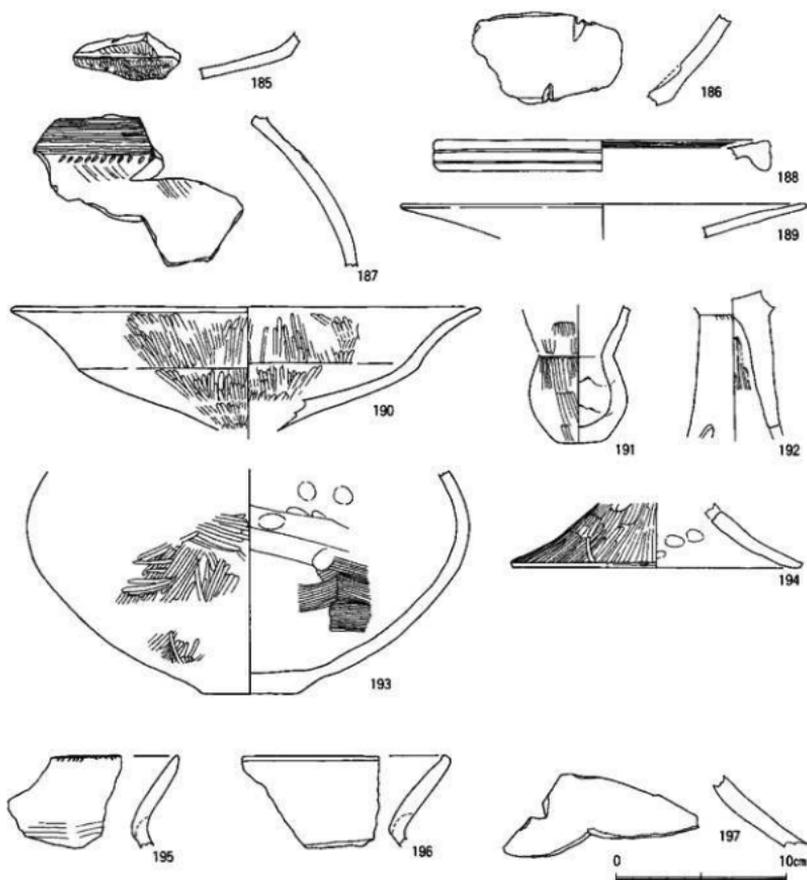


第56図 Ⅲ期SBA07出土遺物位置図(1) (S : 1/50)





第58図 Ⅲ期SBA08出土遺物位置図 (S : 1/50)

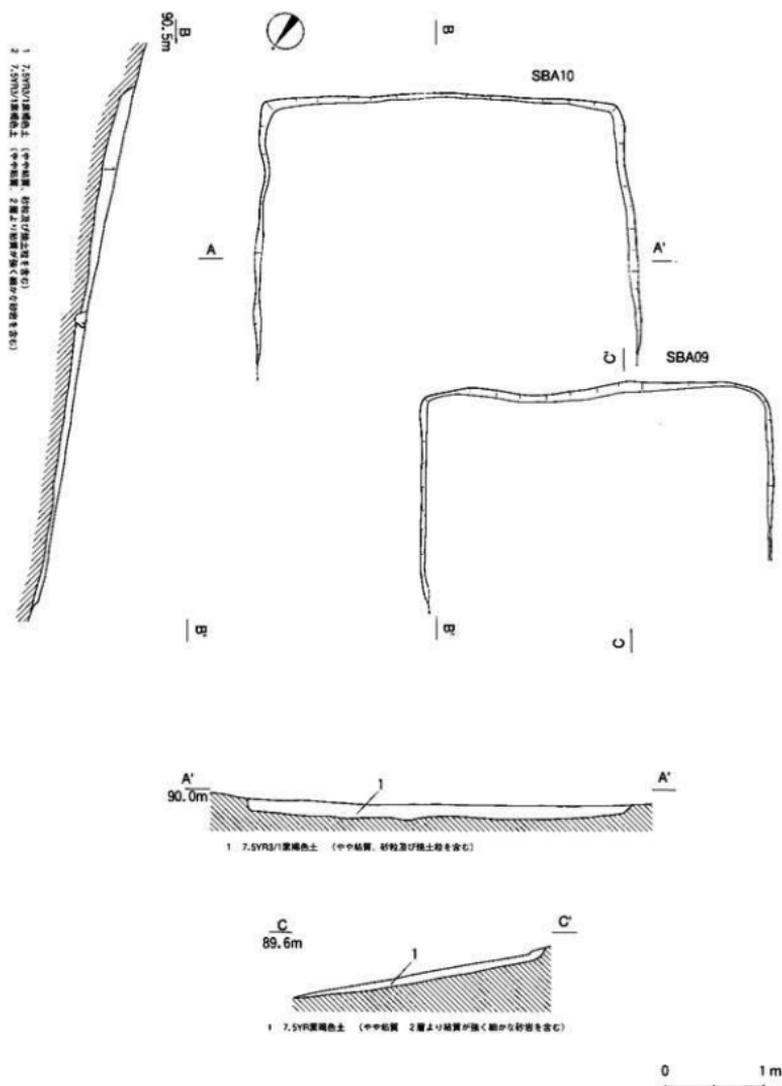


第59図 SBA07、SBA08出土遺物 (S : 1/3)

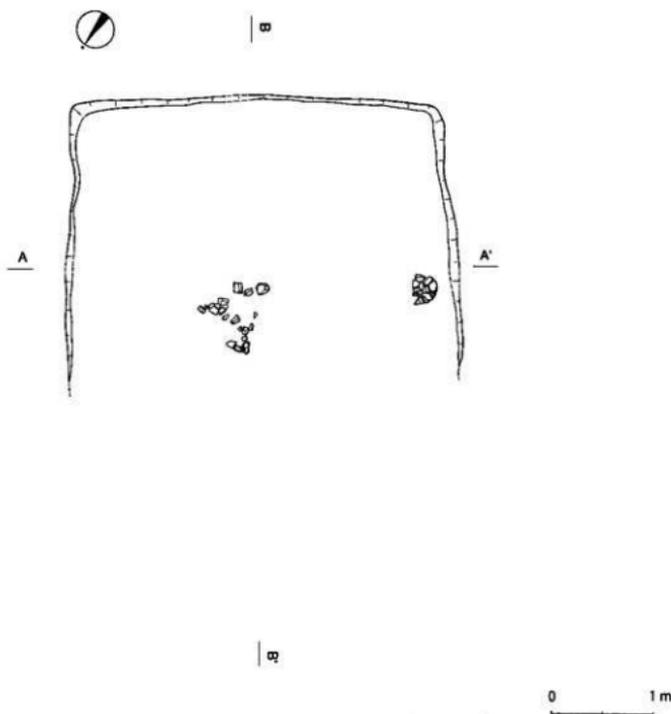
被熱し破損しているものも認められ、炭化材もわずかだが、砂岩礫の周囲に散布していた。砂岩礫は住居の南半分集中し、とくに中央やや南よりに集中する傾向が強いが、検出時には強い規則性は認められなかった。また、これらの礫とはほぼ同じレベルで土器片も出土しており、礫のなかには砥石として使用されたもの（第54図183、184）も認められる。

土器は、器台（178）、鉢（180）が出土した。土器片で28点出土している。

砥石（183）細い溝状の砥面が数条観察される。砥石（184）金属に使用する仕上げの砥石。ふたつの砥石は金属器の加工に使用されたものと思われる。



第60図 Ⅲ期SBA09、SBA10平面図・断面図 (S : 1/50)



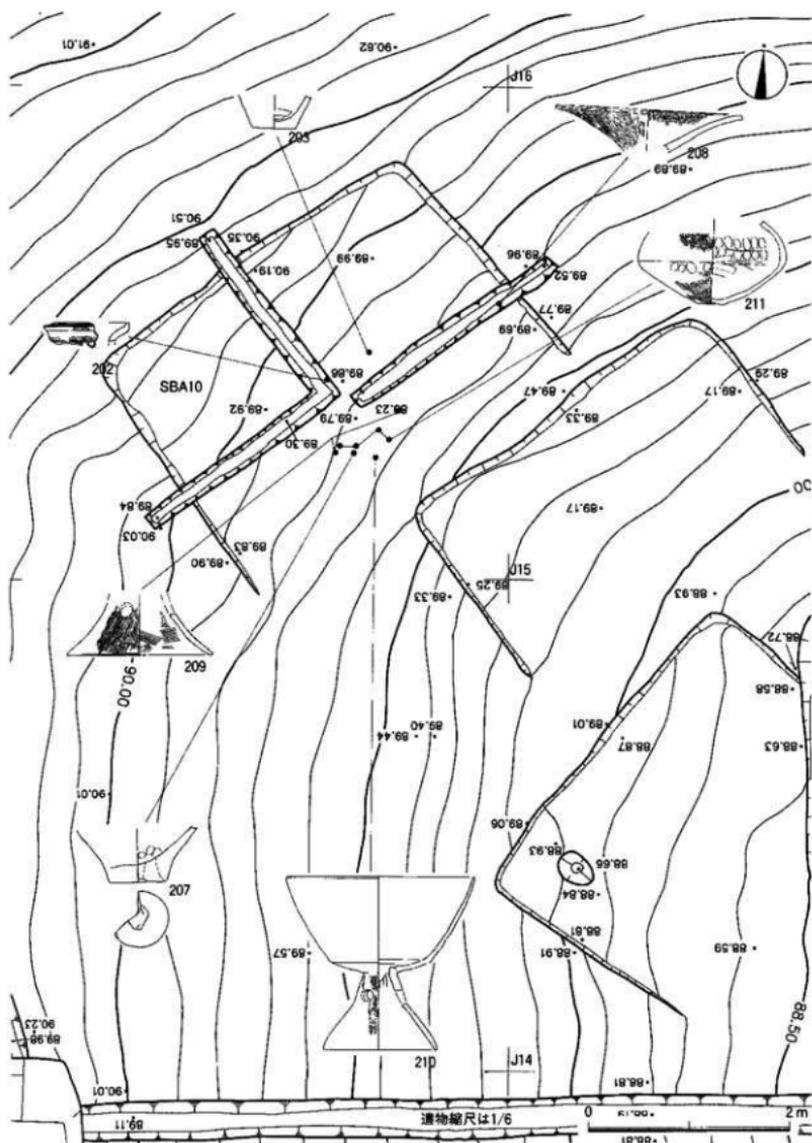
第61図 III期SBA10遺物出土状況図 (S:1/50)

## SBA07 (第55-57, 59図)

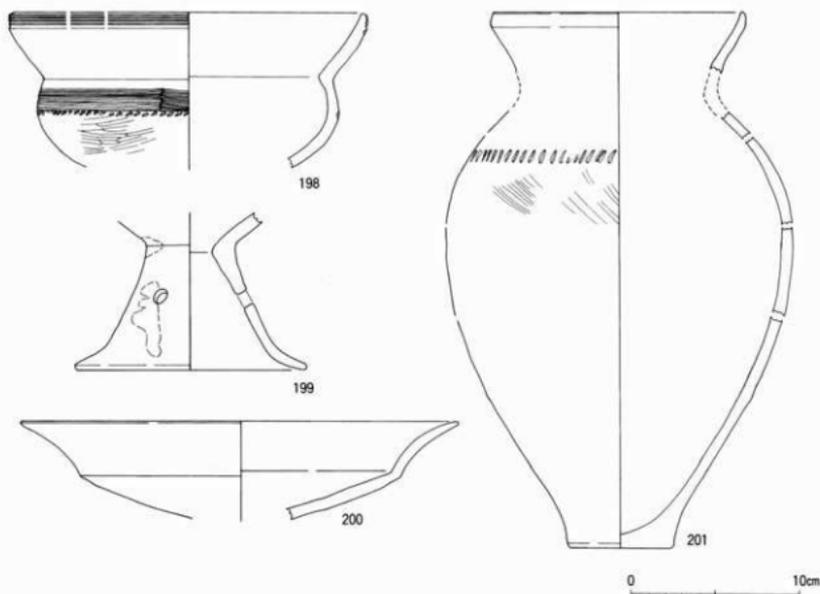
J14・K14グリッドで確認した住居跡でSBA08と重複関係を持ち、その先後関係はSBA08→SBA07と想定している。壁面は山側で約5cmと浅く、床面も平坦とはいえない。平面形はやや縦長の長方形にちかく、主軸長3.65m・奥行き2.8m・幅3.1mをはかり、谷側の幅が広がっている。主軸方向はN-89°-Eを向く。山側の隅角は丸く、壁溝は認められなかった。また、柱穴・炉跡などの施設についてもその痕跡は確認できなかった。

遺物は埋土から96点が出土し、一部の土器についてはⅢ層を掘削して出土したグリッド出土土器と接合関係をもつものがある。土器については、高坏A類(185, 190, 192, 194)、高坏C類(186)の併存がみられる。器台B類(189)、壺A類(188, 193)、ミニチュア土器(191)が出土している。打製石斧(129)は縄文時代の石器で、混入したものである。





第63図 Ⅲ期SBA10出土遺物位置図 (S : 1/50)



第64図 Ⅲ期SBA09出土遺物 (S : 1/3)

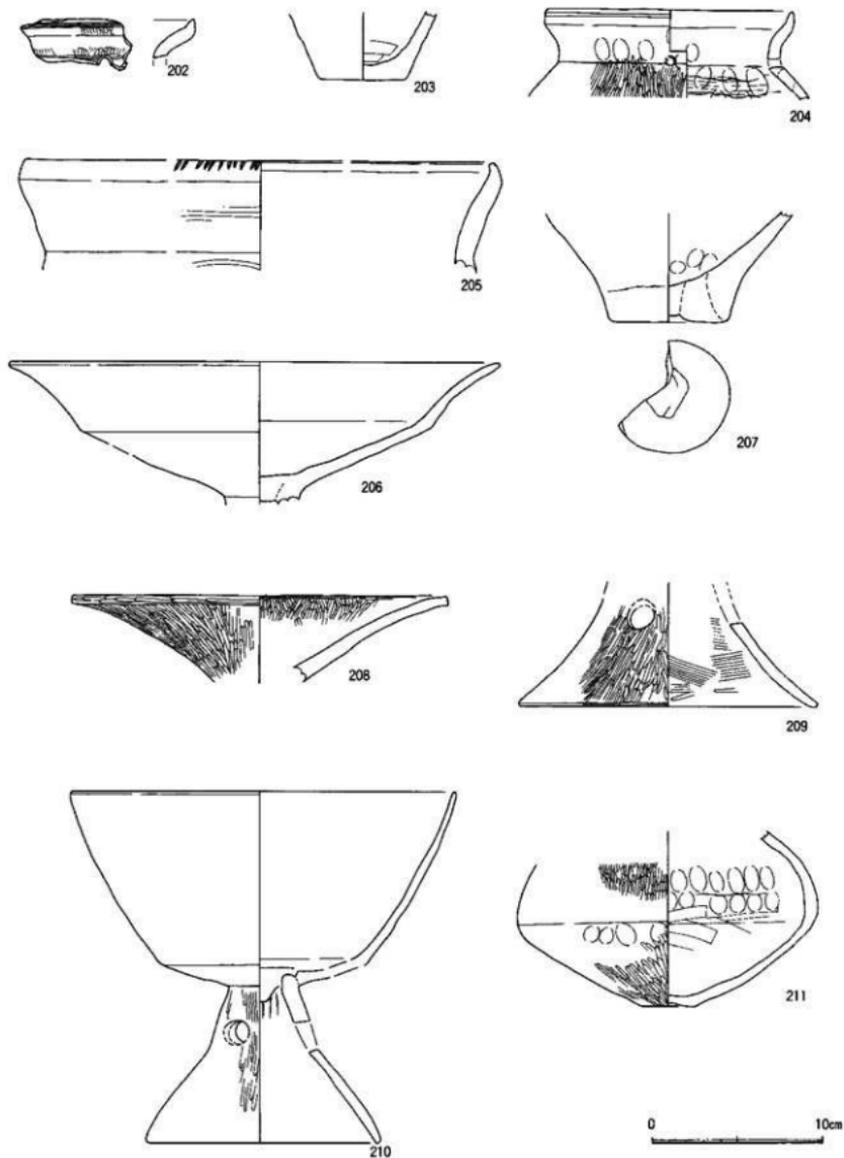
## SBA08 (第55、58、59図)

K14グリッドにあってSBA07と南壁面が重複する。SBA07との先後関係は前述した通りである。壁面の残存はほぼ山側に限られ、その高さは10cm程度である。Ⅳ層を掘削して形成しているためか、流失が著しい結果と推測される。主軸方向はS-53°-Eを向き、規模は主軸長(現存)2.22m・奥行き3.48m・幅3.35mをはかる。隅角は両側とも比較的角度が明確だが、壁面が浅いせいもあり、判断が難しい。炉跡・壁溝は認められず、床面も硬化していない。床面はやや斜面を呈し、疑問点も残る。ピットは北東隅で一箇所のみ確認した。直径30cm程度のピットで深さは約15cm程度ある。位置的には柱穴に都合がいいが、対応するピットがなく断定できない。

遺物埋土から44点の土器片が出土している。高坏A類(197)、甕C2類(196)が出土している。浅い住居のため、埋土出土といっても床面出土との分類が困難である。

## SBA09 (第60、62、64図)

I15・J15グリッドに位置する住居跡。SBA10と重複すると思われるが、互いの壁面が重複する箇所が認められないため正確には不明だが、一応、SBA09→SBA10の先後関係を想定している。壁高は山側で10cm程度と浅く、流失が著しい住居である。掘削面がⅣ層であることにその原因があると推測される。平面形は横長の長方形を呈しているが、当然、本来の形状を保持するものではない。そ



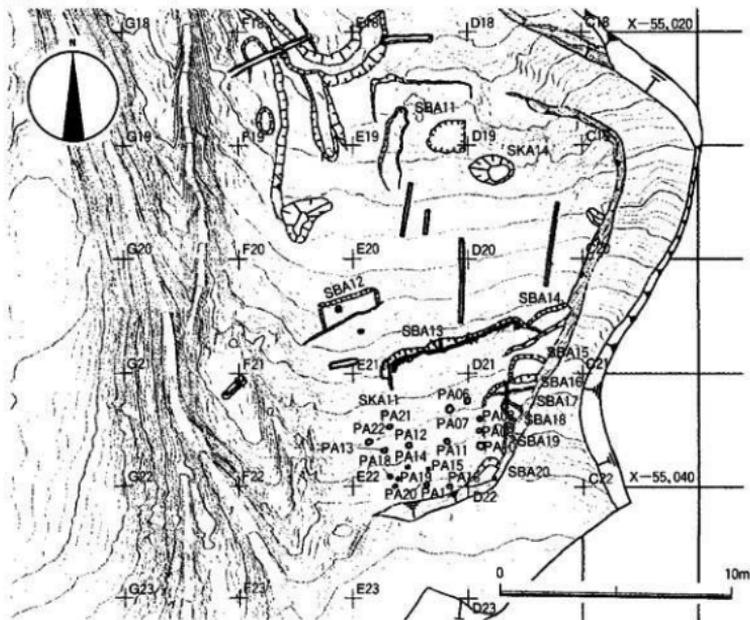
第65図 Ⅲ期SBA10出土遺物（S：1/3）

の規模は主軸長1.79m・奥行き3.31m・幅3.46mをはかる。主軸方向はS-34°-Eを向く。壁高・炉跡・柱穴などの施設は検出できず、床面の硬化面も確認できなかった。床面は土色の変化により認定したものの平坦ではなく、住居跡としての判断にやや不安な点も存する。

遺物は土器片103点が出土した。鉢A類(198)、器台A類(199)、高坏A類(200)、甕C2類(201)を図示した。出土状況に疑問が残るが、組み合わせとしては、本来のあり方を示していると思われる。また、199は条痕文系の胎土をもつ。

#### SBA10 (第60, 61, 63, 65図)

I15グリッドにありIV層を掘削している住居跡。検出状況や平面形態などSBA09に類似する。壁面は山側が主に残存し、その高さは10cm程度と浅く、大半がII層の堆積に伴って流失したものである。平面形は横長の長方形で、主軸長2.03m・奥行き3.45m・幅3.86mをはかる。主軸方向はS-35°-Eである。本住居でも壁溝・炉跡・柱穴はなく、床面も平坦でないことから、住居跡としての認定にやや不安を残すが、遺物が多く出土していることを重視して住居跡と認定した。土器片で120点出土している。ここでもSBA03と同様、高坏A類(206, 209)と高坏C類(210)が併存している。その他に器台(208)、口縁端部が受口状になる甕B類(202)、甕C2類(204, 205)、壺B類(211)が認められる。208, 211とも残存状況が良好である。住居の所属年代は出土遺物から弥生時代末~古墳時代初頭と考えられる。



第66図 SBA11周辺地形図 (S:1/200)

## SBA11（第66～68図）

D18グリッドで確認した住居跡で砂岩岩盤を掘削していた。平面形は横長の長方形を呈するが、谷側の平面形1/2程度はすでに失われていると考えられ、本来の形状は保持していない。床面には南北方向に伸びる自然流路によって床面が削平されており、斜面による損失が著しいものであったことがうかがわれる。平面形の規模は主軸長1.16m・奥行き3.99m・幅4.16mをはかる。壁面は最大で壁高0.5m程度が残存するが、その範囲は山側の西半分程度にとどまり、東側は急激にその高さが減少する。おそらく、自然流路による浸食があったものと推測される。壁溝・柱穴は確認できなかったが、炉跡はわずかだが確認することができた。谷側南端は中央付近で砂岩岩盤が被熱して赤褐色化しているのが認められ、この箇所が炉跡に相当するものと考えられる。焼土は東西方向に長く約40cm程度の幅で広がっていた。川原石は残存せず、周囲の削平は認められなかった。埋土には風化した砂岩からの細かな砂粒を多く含むことから、II層に起因する土砂が流入して短期間のうちに埋没したと考えられる。

土器はこのII層に起因する土層から若干出土した。この出土土器が本住居の所属年代を決定するには問題があるが、周囲の状況や土器の所属年代から、本住居跡を弥生時代末～古墳時代初頭と判断した。土器片で21点あり、器台(179)、鉢(182)、ミニチュア土器(181)が出土した。高坏C類(182)は胎土が桑痕文系である。

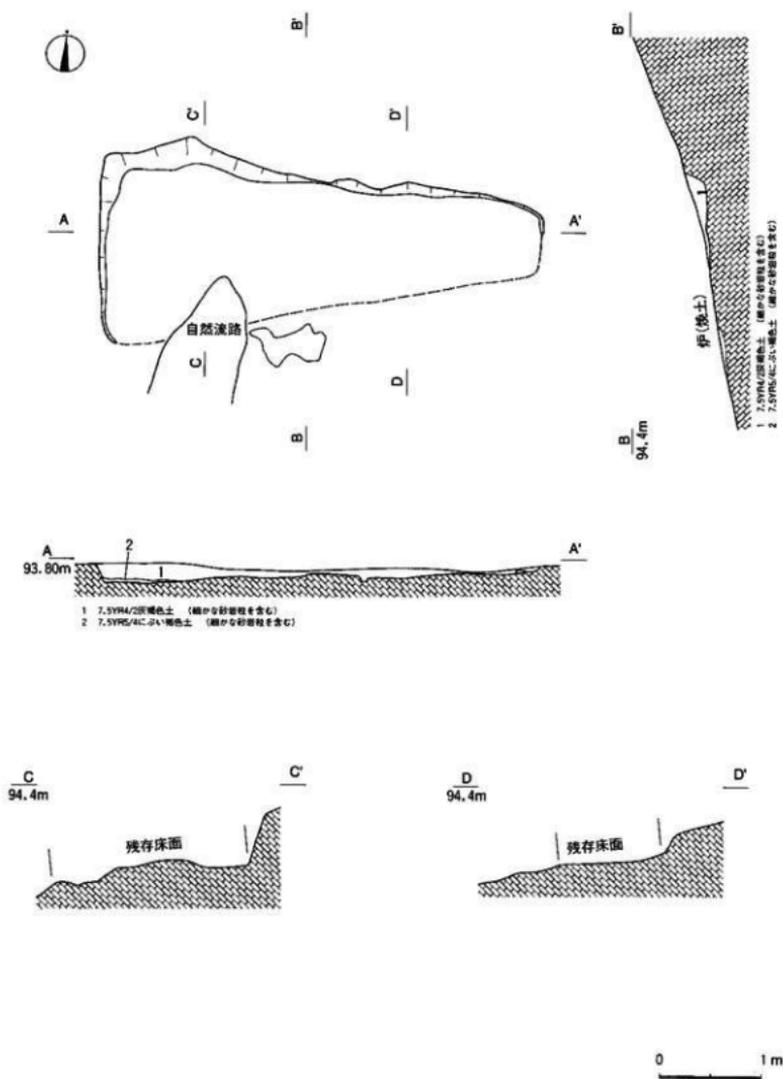
## SBA12（第69図）

D20・E20グリッドに位置する小型の住居。山側は地山である砂岩岩盤を削平して住居を形成していたが、谷側はその山側を掘削した排土を埋め立てて床面を築成していたものと思われ、平面形の確認は山側のみにとどまった。しかし、掘削の過程で本住居に伴うと思われる炉跡を山側床面の南端から50cm程度離れた位置で検出した。川原石は認められなかったが、直径30cm程度の焼土面が広がり、やや硬化していた。また、その周囲には細片ながら炭化材が散布していた。断面図をみると山側に残る床面レベルとこの焼土面の検出レベルがほぼ合うことからみて、本住居に伴う炉跡と判断できる。ただし、掘削の際、炉跡の周囲を炉跡検出以前に掘削してしまい、その後山側の住居の平面形を確認したため、本来、炉跡周辺にあったはずの谷側の床面を掘削してしまった。確認した平面形の規模は主軸長0.79m・奥行き2.45m・幅2.43mをはかり、本来は正方形にちかい形状を示していたと思われる。山側では壁高が約30cm弱残存していた。主軸方向はN-9°-Wを向く。壁溝は確認できなかったが、ピットを1基確認した。ピットは山側壁面付近の中央やや西側で検出し、長軸約30cmをはかり平面形が楕円形を呈する。位置的には柱穴の可能性が高いが、深さが20cm弱と浅く、対応する北東部にはピットが認められないため、その性格は不明である。

遺物はわずかに土器片が出土したが、図示可能な資料はなかった。時期の比定は土器片からは困難だが、周囲の住居と同時期、弥生時代末～古墳時代初頭とみておきたい。

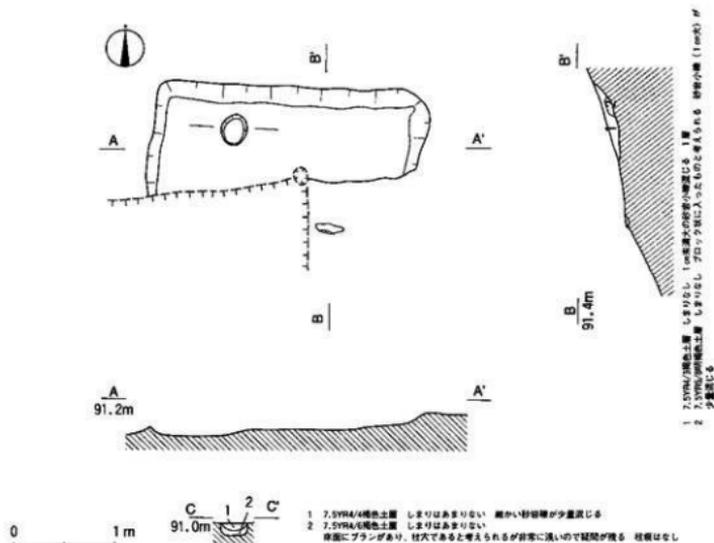
## SBA13（第70～74図）

C20・D20グリッドに位置し、地山である砂岩岩盤の風化土を掘削している住居跡。SBA14と東端が重複するが、その先後関係はSBA14→SBA13と思われる。また、西端はSKA11と重複し、その



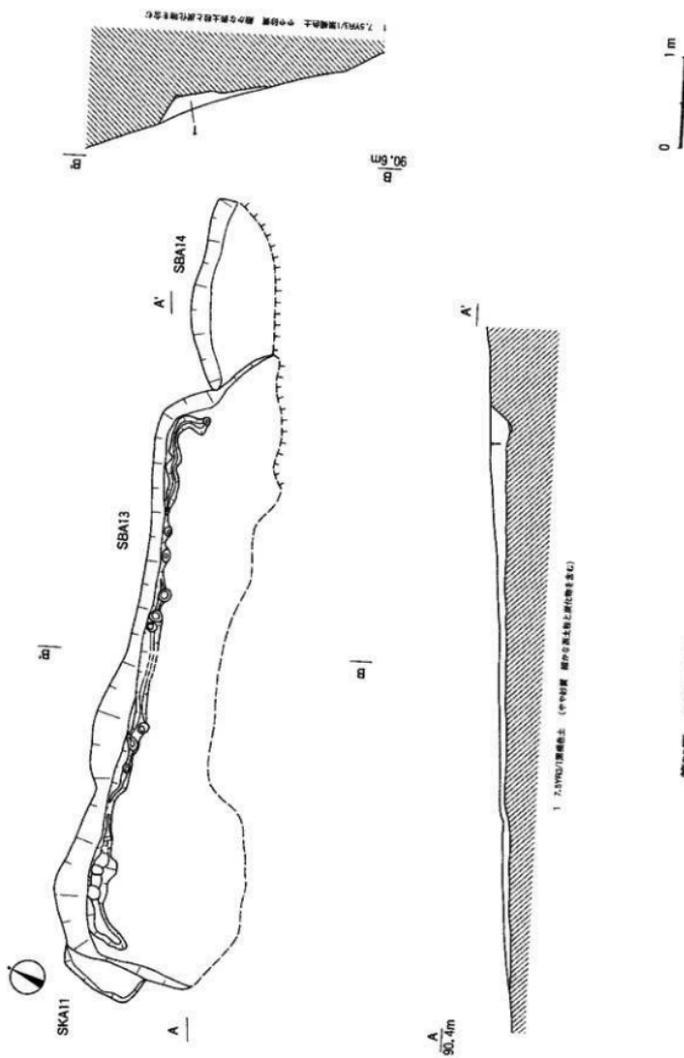
第67図 Ⅱ期SBA11平面図・断面図 (S : 1/50)





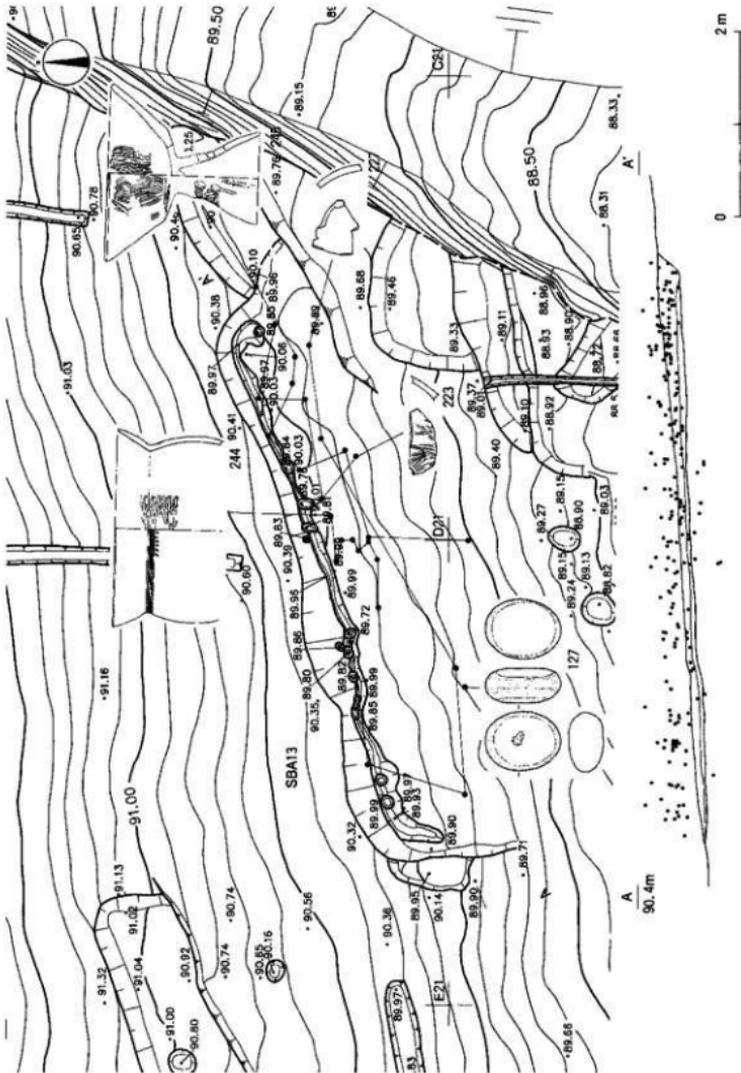
第69図 III期SBA12平面図・断面図 (S:1/50)

先後関係はSKA11→SBA13である。平面形は東西方向に長い長方形を呈するが、確認した平面形は山側で地山を掘削した部分だけである。本来は地山を掘削して生じた排土を埋め立てて築成した床面が存在したと想定されるが、すべて流失したためか確認できなかった。おそらく、本来の形状の1/4程度と推測される。確認した平面形の規模は主軸長1.63m・奥行き5.81m・幅6.88mで、本遺跡のなかでは最も大型の住居である。主軸方向はN-15°-Eを向く。幅は奥行きに対してかなり広くなっており、SBA14との重複関係が判然としない。壁高は山側を中心にその高さは約40cm残存し、床面には壁面際をコの字形に幅5cm程度の壁溝がめぐる。壁溝内には直径5~10cm程度の小ピットを12基確認した。いずれもその深さは10cmにも満たない浅いものだが、SBA03同様、壁面の板材を支える杭用の小穴と考えられる。壁面の傾斜角は60°程度で杭がほぼ垂直に立てられていたと推定すると、かなりの壁面が流失していると考えられる。床面には硬化面はなく、支柱穴用のピットあるいは炉跡の存在は確認できなかった。埋土にはⅢ層に起因する黒褐色土が堆積しており、このなかから337点の土器片が出土している。これらの土器片から本住居跡の所属時期は弥生時代末~古墳時代初頭と想定されるが、出土した土器片の大半は器形復元が困難な破片ばかりで、一括性はそれほど高くはないと思われる。その大半は鉢類(213、221、222、224、225、242)で占められる。このなかでも242は他の鉢より口縁端部が内湾し段ができる。高坏はA類(235、239、241)、高坏B類(245)、高坏C類(233、237)がみられ、本住居跡出土資料の一括性が低いことを示している。その他に条痕調整をもつ甕A1類(216、217)、甕A2類(218)、波状文をもつ口縁端部が受口状になる甕B類(243)、甕C2類(212、214、215)、壺A類(225、228、229)、壺B類(240)が出土した。



第70図 Ⅲ期SBA13、SBA14、SKA11平面図・断面図 (S : 1/50)

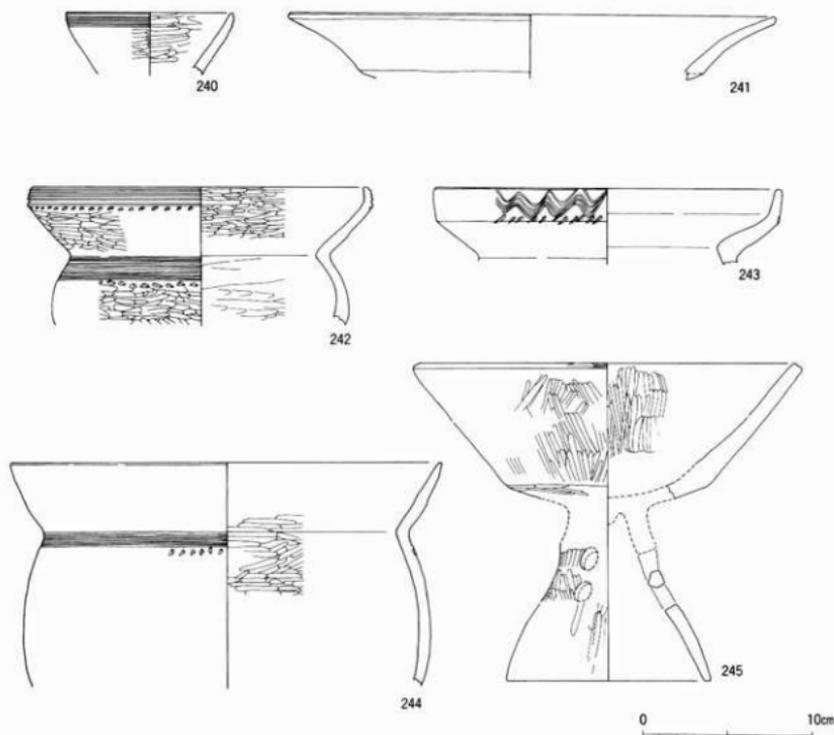




第72図 Ⅲ期SBA13出土遺物位置図(2) (S : 1/50)



第73図 SBA13出土遺物(1) (S : 1/3)



第74図 SBA13出土遺物(2) (S : 1/3)

## SBA14 (第70図)

C20グリッドにあり、大半をSBA13によって削平されている住居跡。地山である砂岩岩盤風化土を削平している。北東部は重機の進入路（試掘トレンチTr6）によって削平を受けていることによって住居の本来の形状は不明といわざるをえない。現状で確認できる平面形の規模は主軸長0.69m・奥行き1.97mである。主軸方向はN-15°-Eを向く。壁高は最大で30cm程度の高さが認められるが、床面における硬化面ならびに柱穴・炉跡などは確認できなかった。遺物は出土しなかった。

## SBA15 (第75図)

C20グリッドに位置する住居跡で本来の平面形のうち東半分を試掘トレンチTr6によって削平されている。また、谷側ではSBA16と重複関係をもつ。その先後関係はSBA15→SBA16と判断した。壁面が残る山側はその高さが20cm弱認められるが、平面形が北西隅から東側に向かってやや弧状とな

るのが認められ、住居跡としては不自然な形状を呈している。現存する平面形の規模は主軸長0.77m・奥行き1.27m・幅1.12mで、主軸方向はN-6°-Eである。床面には顕著な硬化面はなく、自然地形にそって南側へ傾斜する傾向があり、前述の平面形状とあわせて住居跡とするのには不安な点が存在する。検出面は地山である砂岩岩盤風化土上である。なお、壁溝・柱穴・炉跡などの施設は認められなかった。遺物は出土しなかった。

#### SBA16 (第75図)

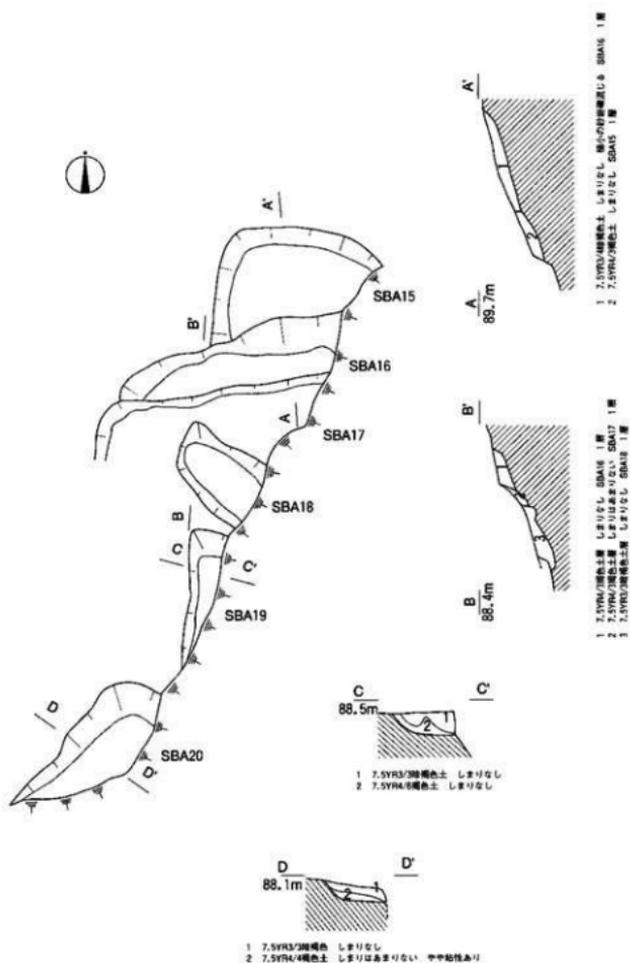
C21グリッドにあり、山側ではSBA15、谷側ではSBA17との重複関係が認められる。これらの先後関係はSBA15→SBA16→SBA17と考えられる。しかし、確認した平面形は谷側ではSBA17に大半を削平され、山側の東半分は試掘トレンチTr6によって削平されているため、本来の形状の大部分を失っており、前述した先後関係が妥当なものについては不安も残る。確認した平面形は山側の壁面付近のみで、わずかに残る北西の隅角から山側壁面の中央付近までと考えられる。確認面は砂岩岩盤風化土上で、壁高は確認面から最大で20cm程度しか認められない。現存の平面形の規模は主軸長0.29m・奥行き1.93mで、主軸方向はN-11°-Wを向く。なお、壁溝・柱穴・炉跡などの施設は確認できなかった。また、遺物は皆無である。

#### SBA17 (第75図)

C21グリッドに位置し、地山である砂岩岩盤風化土を掘削している住居跡。SBA16・SBA18と重複関係をもつが、SBA16との先後関係は前述した通りである。SBA18との先後関係はSBA17→SBA18と考えられる。また、本来の平面形のうち、東端については試掘トレンチTr6によって削平されている。SBA15・SBA16同様、山側壁面の西半分程度しか残存していないが、SBA15・SBA16と比較するとその形状は安定しており、比較的直線的に東へ伸びる傾向が認められる。残存する壁高は確認面から最大で30cm強をはかる。北西の隅角はやや丸みをもち、本来の平面形状は横長の長方形を呈して、SBA13に類似するものであったと考えられる。現存する平面形の規模は主軸長0.43m・奥行き1.96mである。主軸方向はN-1°-Wを向く。なお、壁溝・柱穴・炉跡などの施設は検出できなかった。遺物の出土も皆無であった。

#### SBA18 (第75図)

C21グリッドにあり、地山である砂岩岩盤風化土を掘削している。SBA17と重複関係が認められるが、それについては前述した通りである。平面形は東西に伸びる細長い溝のようにもみえる。残念ながら、本来の平面形の大半を試掘トレンチTr6によって削平されているため、正確な平面形が不明であり、その平面形からみると住居跡とするには疑問な点もあるが、現地での判断を重視してここでは住居跡として報告する。確認面はSBA17の床面上であり、検出レベルにやや調査手順の問題が存在するが、何らかの遺構であることは間違いのないと思われる。壁高はSBA17の床面からだが、15cm程度の高さが認められる。現存の平面形の規模は主軸長0.81m・奥行き0.47m、主軸方向はN-33°-Eをはかる。なお、床面上では壁溝・柱穴・炉跡などの施設は確認できなかった。遺物は出土しなかった。



第75図 Ⅲ期SBA15、SBA16、SBA17、SBA18、SBA19、SBA20平面図・断面図 (S : 1/50)

## SBA19 (第75図)

C21グリッドに位置し、地山である砂岩岩盤風化土を掘削している。平面形の大半を試掘トレンチTr6の削平によって失われているが、わずかに残存する平面形が隅角をもつことから住居跡と判断した。隅角における確認面からの壁高は約30cm程度存する。平面形の規模は現存で主軸長1.22m・奥行0.21mをはかる。主軸方向は推定だが、N-9°-Eを向く。なお遺物は出土しなかった。

## SBA20 (第75図)

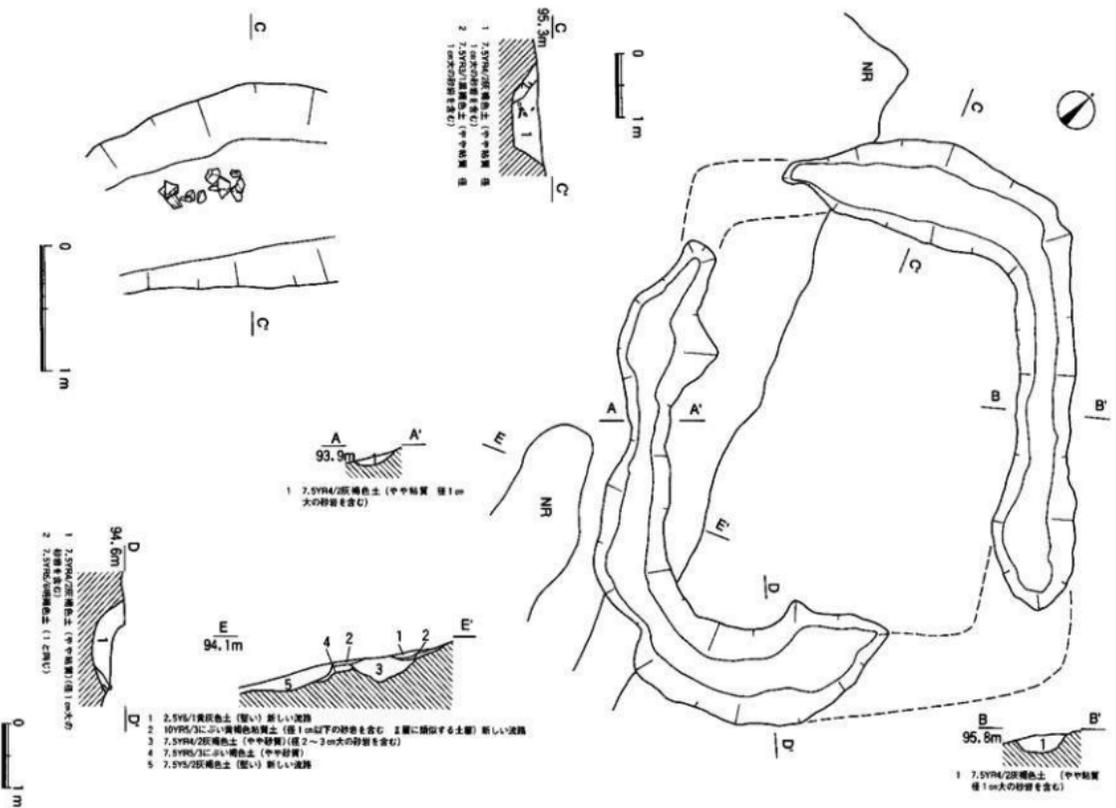
C21グリッドで確認した住居跡で、調査区のはほぼ南端に位置する。試掘トレンチTr6によって平面形の大半を削平によって失われている。SBA19同様、北西隅の隅角の形状から住居跡と判断したもので、壁溝・柱穴・炉跡などは確認できなかったため、住居跡としての妥当性には不安が存することは否めない。確認面は地山である砂岩岩盤風化土上で、これを掘削して住居を形成している。埋土は暗褐色土が堆積し、確認面からの壁高は北西の隅角で25cm程度認められる。検出した床面にはとくに硬化した面は認められなかった。現存する平面形の規模は主軸長1.37m・奥行0.28mで、主軸方向はN-40°-Eをはかる。なお遺物は出土しなかった。

SBA15～SBA20については住居跡と報告したが、その平面形ならびに重複関係の複雑さからみて、住居跡としてはやや疑問が残る遺構である。試掘確認調査時の試掘トレンチTr6の観察からC21グリッド付近には複数の遺構が重複することは予想されていた。その理由はTr6の断面では黒褐色土が階段状に堆積している状況が認められたことによる。しかし、本発掘調査においては遺物の出土も希薄であり、壁溝・柱穴・炉跡などの施設が認められなかった。判断材料として最も大きな要因は山側に残る平面形でしかない。その観点からすれば、試掘確認調査時に重機の進入路として誤って試掘トレンチTr6を掘削してしまったことに悔いが残る。もう少し詳細な平面形状が明らかになっていれば、正確な判断が可能であったと想像されるからである。

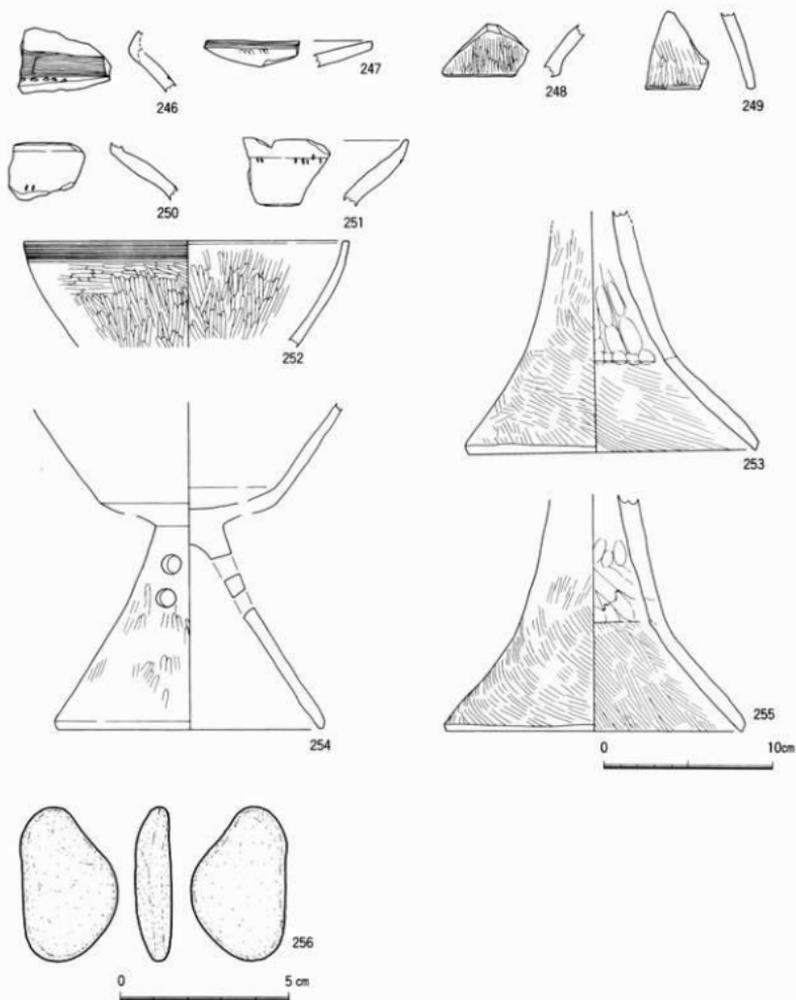
住居跡として報告したSBA15～SBA20のうち、最も住居跡としての可能性が高いものはSBA17である。後述するB地区の住居跡のなかには山側周溝をもつものが明らかとなっている。A地区では山側周溝をもつ住居跡は確認できていないが、SBA15・SBA16をSBA17に伴う山側周溝とみることも可能ではなかろうか。また、B地区の事例ほど整然とした形状を呈していないが、地山を掘削していることは明らかであるので、谷側の床面を形成するためにSBA17の山側を掘削してその土量を確保したとの推測も可能ではないかと思われる。その方がこれらの遺構の重複関係を無理なく理解できるのかもしれない。そうした仮定にたつならば、SBA19とその山側周溝SBA18との理解も可能となる。いずれにせよ、不安定な判断材料の上になつた住居跡であることは否めず、根拠が希薄な上で住居跡として報告していることを改めて記しておきたい。

## 方形周溝墓 (第76～78図)

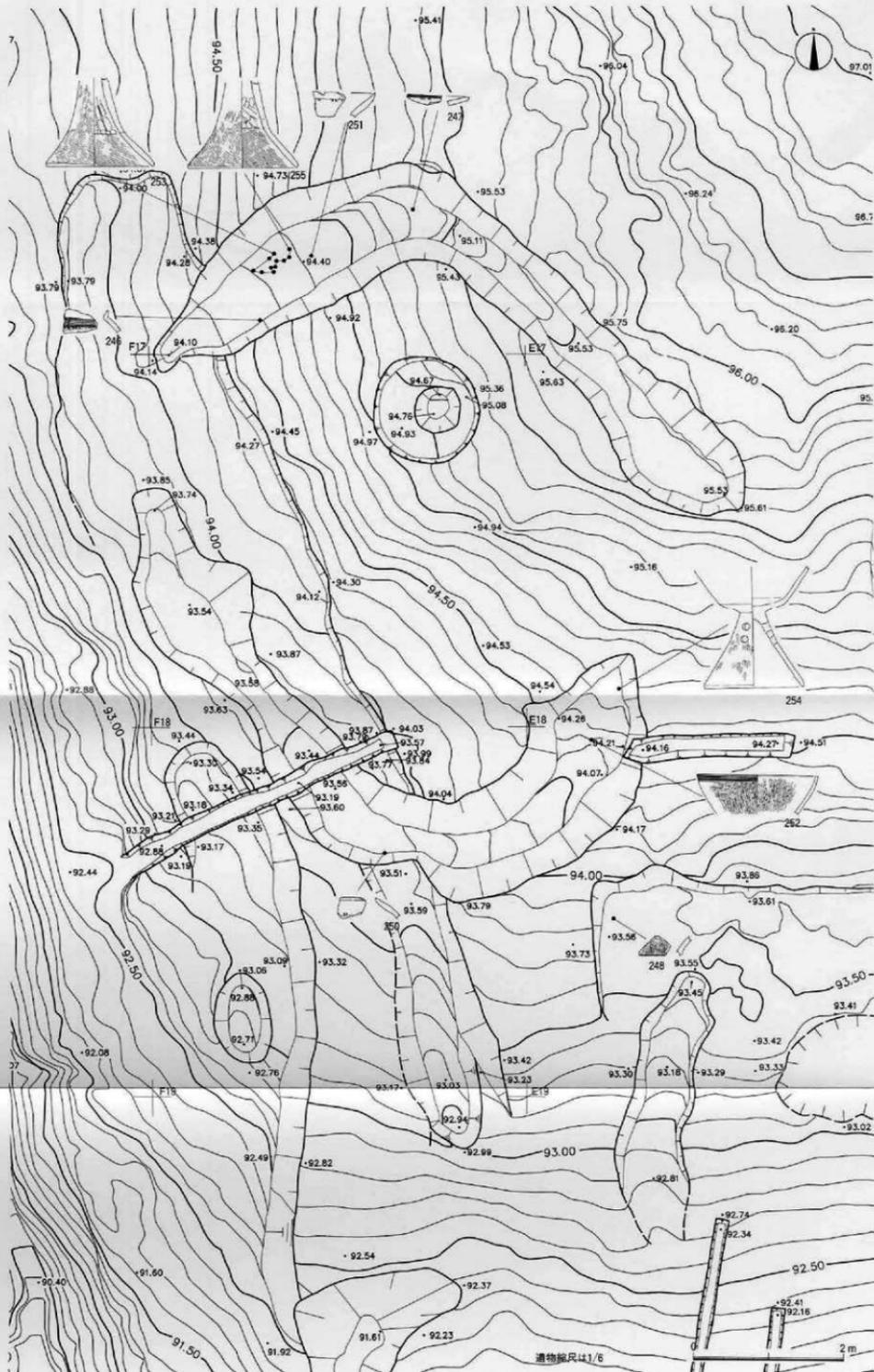
D16～F18にかけての西向きの斜面に立地する方形周溝墓で砂岩岩盤の風化土(礫混じり)上で確認した。平面形はやや南北方向に長い長方形にちかい形状を示す。北西隅と南東隅では溝が収束して、陸橋のようにも見える。実際には南東隅は試掘確認調査における伏採時の重機進入路にあたっており、重機の踏みつけによる土の硬化と攪乱が著しく、本発掘調査時にその土の硬化面及び攪乱を取り



第76図 Ⅲ期 方形周溝墓 平面図・断面図（S：1/80）、遺物出土状況図（S：1/40）



第77図 Ⅲ期方形周溝墓出土遺物 (S : 1/3、石器 S : 2/3)



第78图 Ⅲ期 方形周溝墓出土遺物位置圖 (S: 1/50)

除くためにかなり確認面より掘削した結果、溝が途切れているにすぎない。本来はつながっていたものと思われる。また、北西隅は自然流路によって削平されていることによって溝が途切れているようにみえるもので、やはり本来はつながっていたと思われる。現存の各辺の規模は北辺2.36m・南辺2.43m・東辺3.26m・西辺3.41mである。復元すれば一辺が4m程度の規模になると考えられる。確認面からの溝の幅・深さはA断面で幅1.75m・深さ0.5m、B断面で幅0.66m・深さ0.24m、C断面で幅1.63m・深さ0.44m、D断面で幅0.75m・深さ0.28mをはかる。北辺・南辺で幅・深さが大きくなる傾向が認められるが、西辺の大半が自然流路による削平を受けているため断定はできない。溝の断面形状は一律ではなく、規則性を見いだすことができない。周溝の内側には人為的な盛土は認められず、確認面である砂岩岩盤風化土が露出している。おそらく盛土は斜面による浸食を受けて流失したものと思われる。また、同様に埋葬施設も流失した可能性が高く、検出することができなかった。

埋土はⅡ層に類似する明褐色土が堆積しているのが認められ、遺物が埋土から155点出土した。そのほとんどが土器の細片で図化可能な資料は少ない。おそらく、土器の細片は周囲から流入したものと考えられる。周溝墓に伴う土器は器形復元が可能な253・254・255の3点である。高坏C類254は南辺の東端から出土した土器で出土レベルはほぼ確認面と同レベルであった。周溝の内側にあったものが周溝内へ移動したのかもしれない。器台B類253・255は北辺の中央付近の底面ちかくから出土したもので、253は横位で出土した。255は埋没の際に破損したためか、破片が周囲に散布しているが、253と同様、横位になっていたものと想定される。253・255はその器形が器台であり、いずれも受部を人為的に破損している。また、通常みられる透孔もなく、何か特殊な意図をもった土器と考えられる。こうした状況からみて、253・255は周溝内側に設置されていた土器が周溝内に流入したのではなく、最初から何らかの意図をもって周溝内に埋納した可能性が高いと考えられる。さらに周溝内埋葬の可能性もありうると思われるが、周溝掘削時にはそのような様子を認めることはできなかったため、断定はできない。なおその他の土器片は混入資料と思われる。他に、高坏A類(248)、高坏C類(249、252)、器台、壺が出土している。

扁平小円磔(256) 礫石錘の素材となるような礫。

## 土坑

### SKA12(第79図)

C3グリッドに位置する土坑で、地山である砂岩岩盤風化土を掘削している。位置的には本遺跡のなかで確認した遺構のうち最も北端にある。埋土出土の遺物及び周囲のⅢ層出土の遺物も皆無で、その所属年代の判断が難しい。C3グリッド周辺ではSZA01などの後述するV期の遺構がちかくに認められることから、V期の遺構となる可能性もあるが、確証はない。ここでは地山上で確認した遺構であることを重視して、Ⅲ期の遺構として報告する。平面形は不整な円形で、その形状からは2つの土坑?が重複している可能性も看取されるが、調査時にはその確証がえられなかった。長軸は1.54mをはかり、深さは最大で0.28mである。壁面は緩やかな角度で立ち上がり、床面との変化点が判然としなない。埋土はⅢ層に起因する黒褐色土が堆積していた。

## SKA13 (第79図)

K14・L14グリッドで確認した土坑で、IV層を掘削している。確認した土坑のなかではその規模が大きく、遺物も多く出土した。平面形は不整な楕円形を呈し、深さは10~20cm程度と浅い。壁面の傾斜は緩やかで床面との接点が明確ではない。平面形の規模は長軸2.77m・短軸2.64m、主軸方向はN-28°-Wをはかる。埋土は黒褐色土が堆積していた。

## SKA14 (第79図)

C19グリッドで確認した土坑で、地山である砂岩岩盤風化土を掘削している。平面形は不整な楕円形で、その規模は長軸1.9m・短軸1.24mをはかる。深さは最大で0.35mが認められるが、壁面がかなり緩やか傾斜をもち、床面との変化点は判然としない。埋土はII層に類似する。遺物はまったく出土しなかったため、所属時期を明らかにすることはできないが、先のSKA12と同様の所見に基づきⅢ期の遺構と判断した。なお、主軸方向はN-88°-Wをはかる。

## SKA15 (第80図)

E19グリッドで確認した土坑。確認面は地山である砂岩岩盤風化土上である。平面形は北側が東側へL字状に屈曲する特異な形状をもつ。規模は南北1.85m・東西2.25mをはかる。主軸方向は南北方向と仮定するとN-8°-Wを向く。深さは最大で0.63mが認められる。埋土は暗褐色土が堆積し、鉢A類の土器片264が1点出土した。264は周囲から本土坑へ流入したと考えられるが、本土坑の形成は264の時期とほぼ同じと想定している。

## SKA16 (第80図)

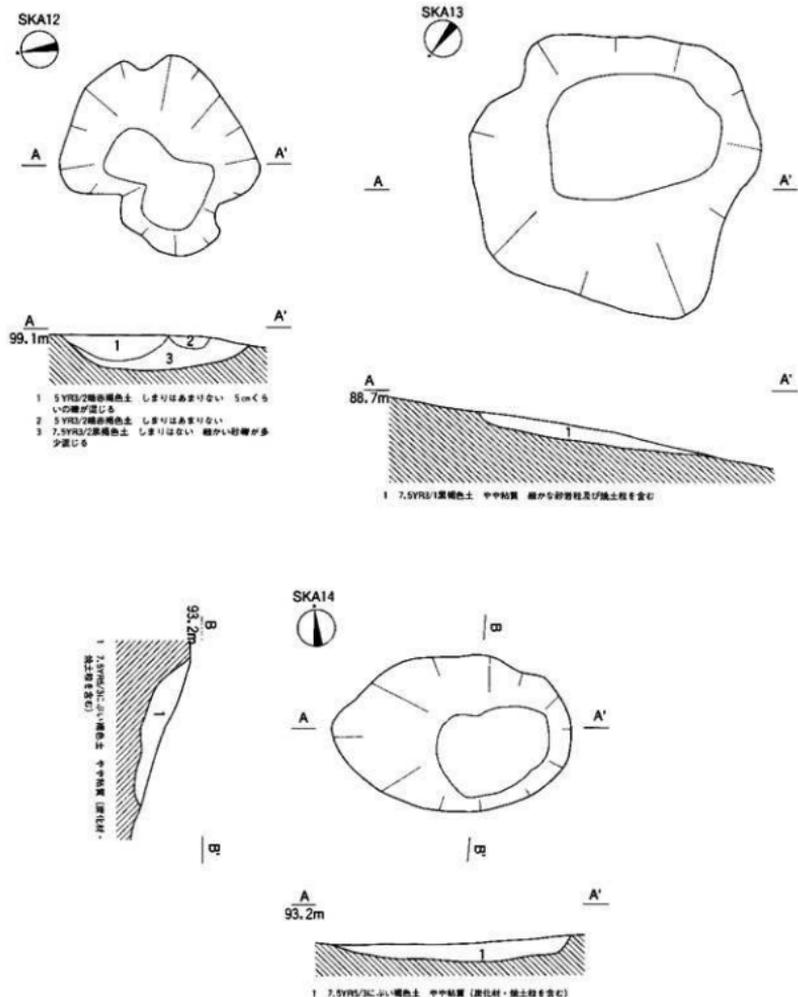
B19グリッドに位置する土坑で、試掘トレンチTr6によって東側を削られている。このため、正確な平面形は不明だが、東西に細長い形状を呈するものと思われる。断面形からは溝のようにも見えるが、完存していないため判断できない。現存する規模は長軸0.69m・短軸0.55mで、主軸方向はN-75°-Wをはかる。埋土からは数点の土器片が出土しているが、図示可能な資料は認められなかった。土器の時期は弥生時代末~古墳時代初頭と考えられ、本土坑の形成もほぼ同時期と思われる。

## ビット (第82、83図)

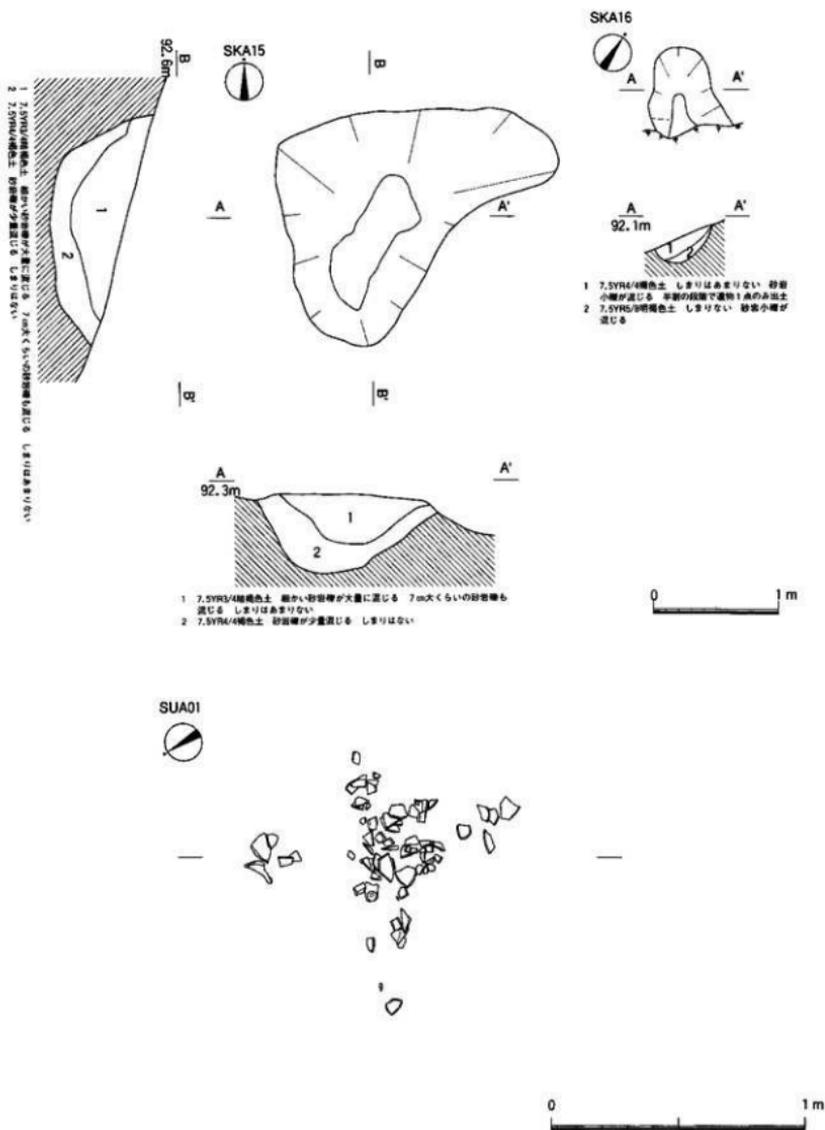
ビットは19基確認した。PA04・PA05の2基はI10・J10グリッドで検出したが、それ以外のPA06~PA22はC21・D21グリッドに集中する。いずれのビットも地山である砂岩岩盤風化土を掘削している。それぞれのビットにおける規模などの詳細は第5表を参照してほしい。いずれのビットも直径20cm程度で、深さも浅く15cm~20cm程度である。埋土にはⅢ層に起因する黒褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。遺構の形成時期は地山を掘削していることからⅢ期と想定している。

## SUA01 (第80図)

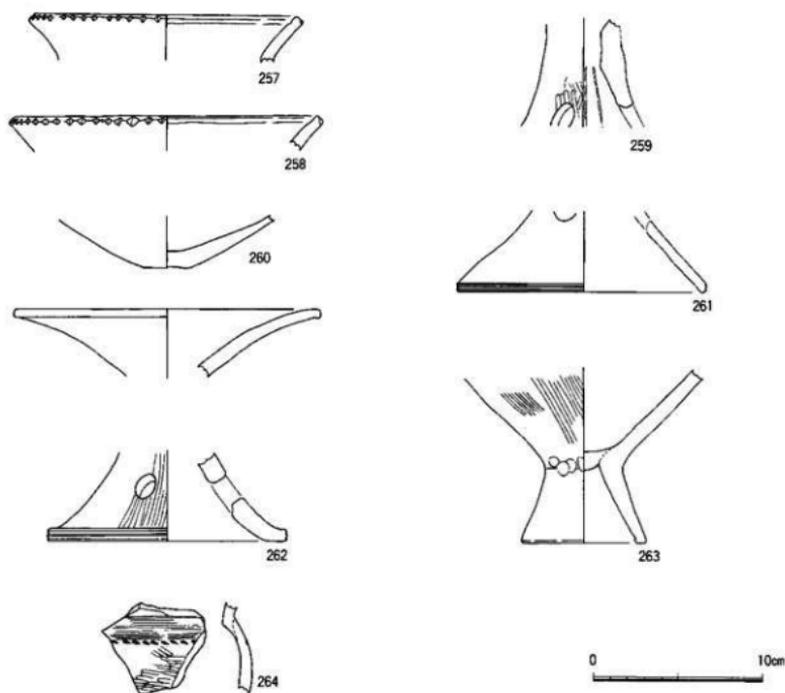
M14グリッドで検出した。土器片で142点出土しており、器台A類(262)、器台B類(261)、鉢、甕、壺が出土している。



第79図 III期SKA12、SKA13、SKA14平面図・断面図（S：1/40）



第80図 Ⅲ期SKA15、SKA16平面図・断面図 (S:1/40) SUA01遺物出土状況図 (S:1/20)



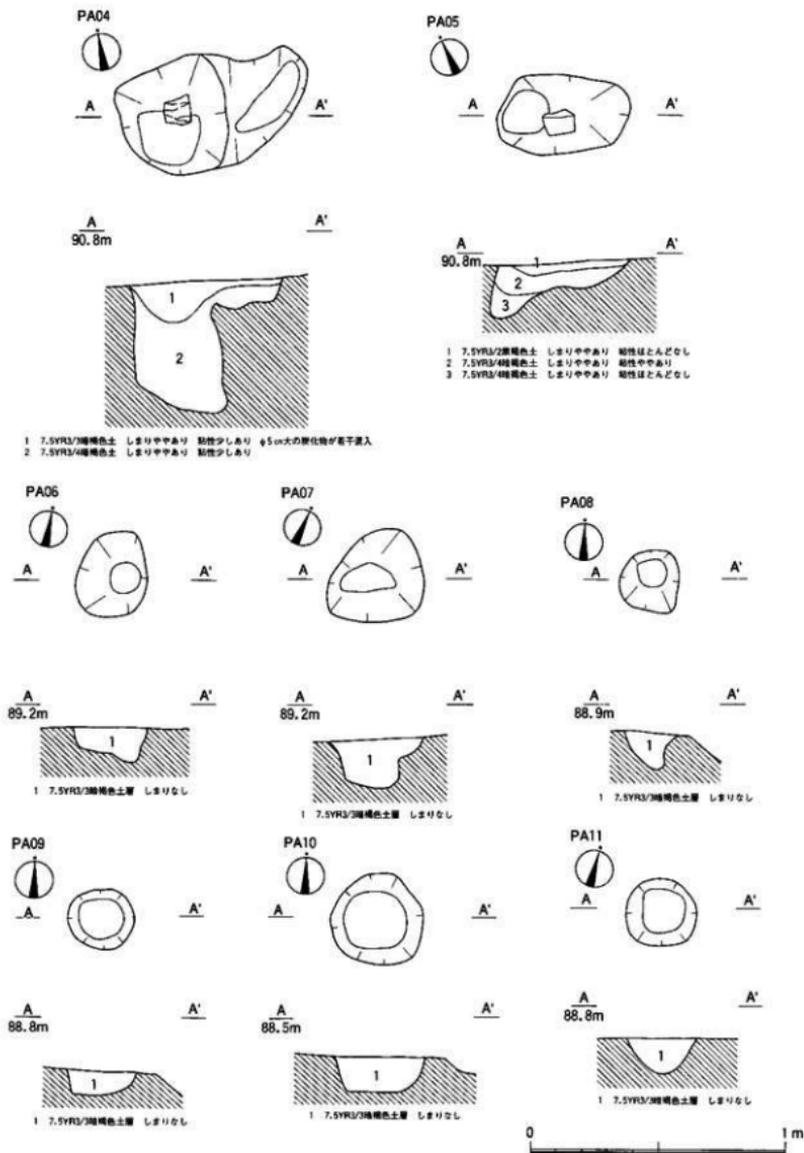
第81図 SUA01出土遺物（S：1/3）

第5表 III期ピット一覧表

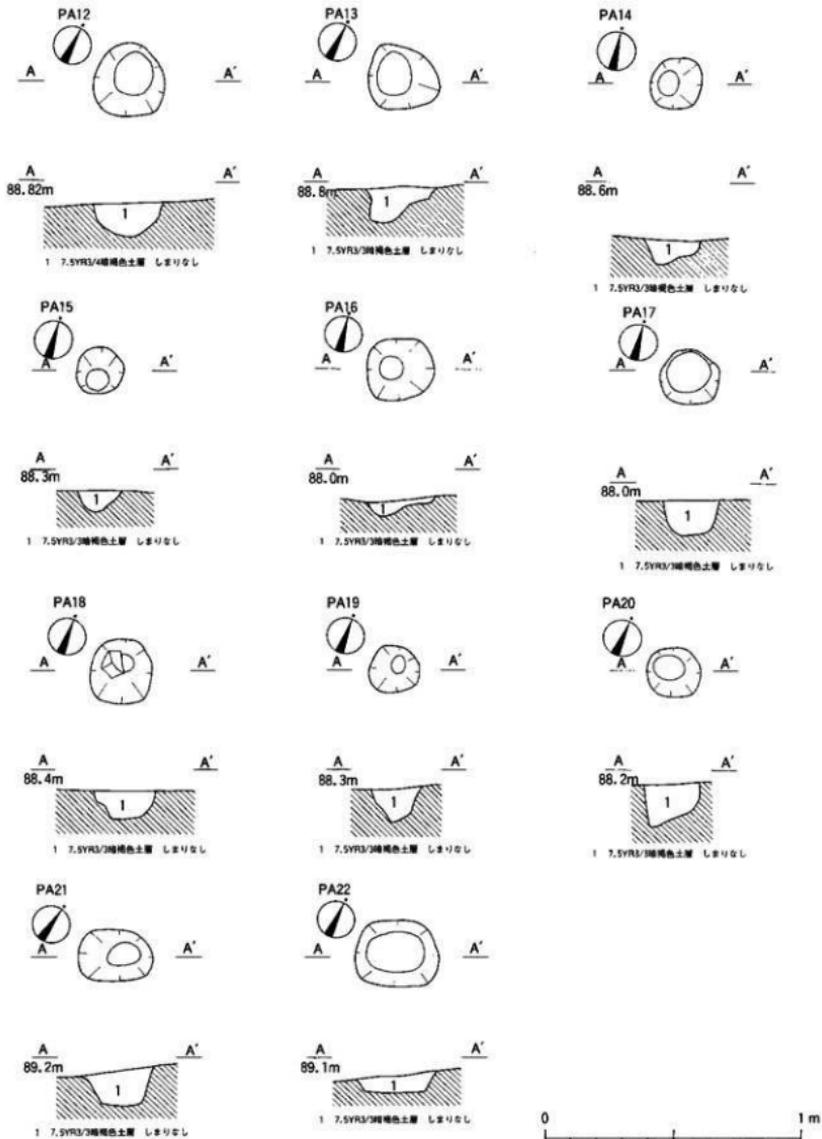
番号	出土区	規模 (m)			形状		番号	出土区	規模 (m)			形状	
		長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状			長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状
PA04	J9	0.91	0.46	0.49	不整形円形	U字形	PA14	C21	0.20	0.20	0.10	円形	U字形
PA05	J9	0.52	0.31	0.21	楕円形		PA15	C21	0.19	0.19	0.90	円形	V字形
PA06	D21	0.34	0.28	0.14	楕円形	台形	PA16	D21・D22	0.27	0.25	0.60	円形	
PA07	C21・D21	0.43	0.36	0.20	不整形円形	台形	PA17	D21	0.24	0.23	0.14	円形	U字形
PA08	C21	0.25	0.23	0.15	円形	U字形	PA18	D21	0.26	0.24	0.12	円形	台形
PA09	C21	0.27	0.24	0.10	円形	台形	PA19	D21	0.20	0.19	0.14	円形	U字形
PA10	C21	0.37	0.36	0.14	円形	台形	PA20	D21・D22	0.21	0.19	0.16	円形	台形
PA11	C21	0.29	0.27	0.14	円形	V字形	PA21	D21	0.30	0.20	0.15	楕円形	台形
PA12	C21	0.30	0.28	0.13	円形	U字形	PA22	D20	0.33	0.26	0.09	楕円形	台形
PA13	C21	0.29	0.25	0.14	不整形円形	U字形							

## III期包含層出土遺物（第84～86図）

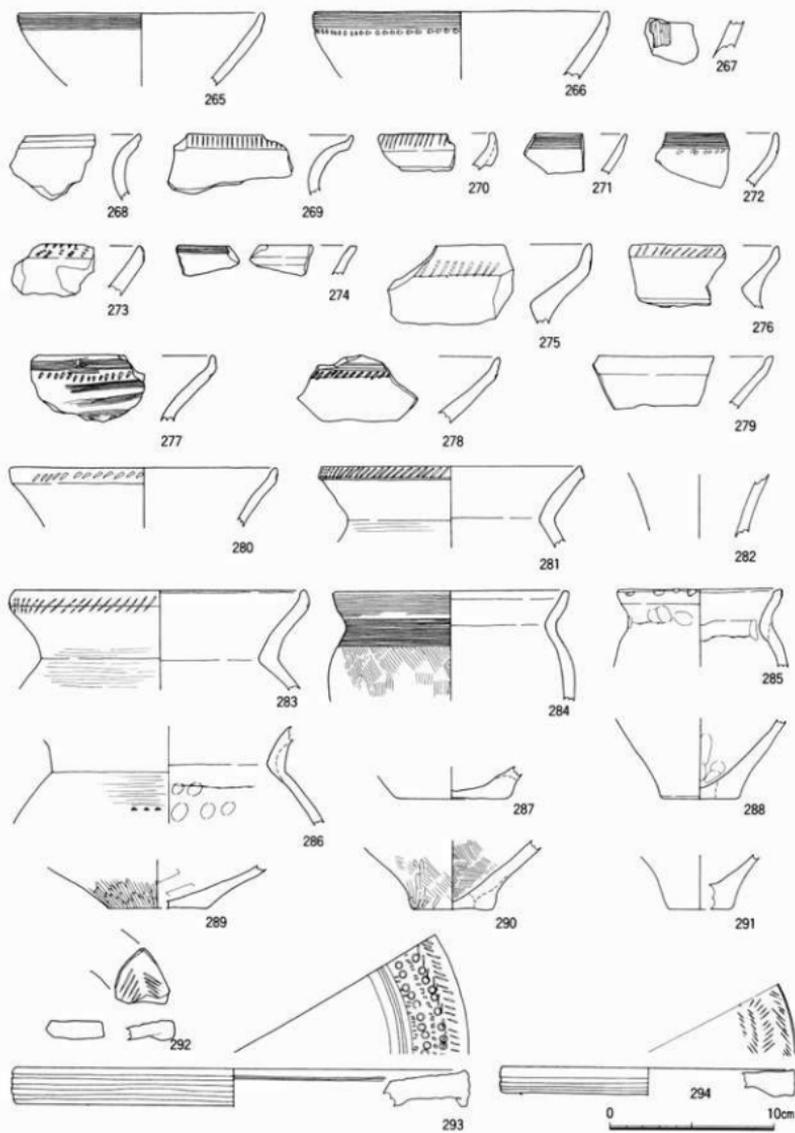
土器片で2628点出土している。高坏A類(300、317～321)、高坏B類(301)、高坏C類(305、311)、器台A類(309、322)、鉢(266、272、277、278、304)、甕A2類(335)、甕C1類(269、275、284、324、326、327)、甕C2類(276、283)、甕E類(334)、壺A類(292、293、294、329)、壺B類(282、302、303)が出土している。



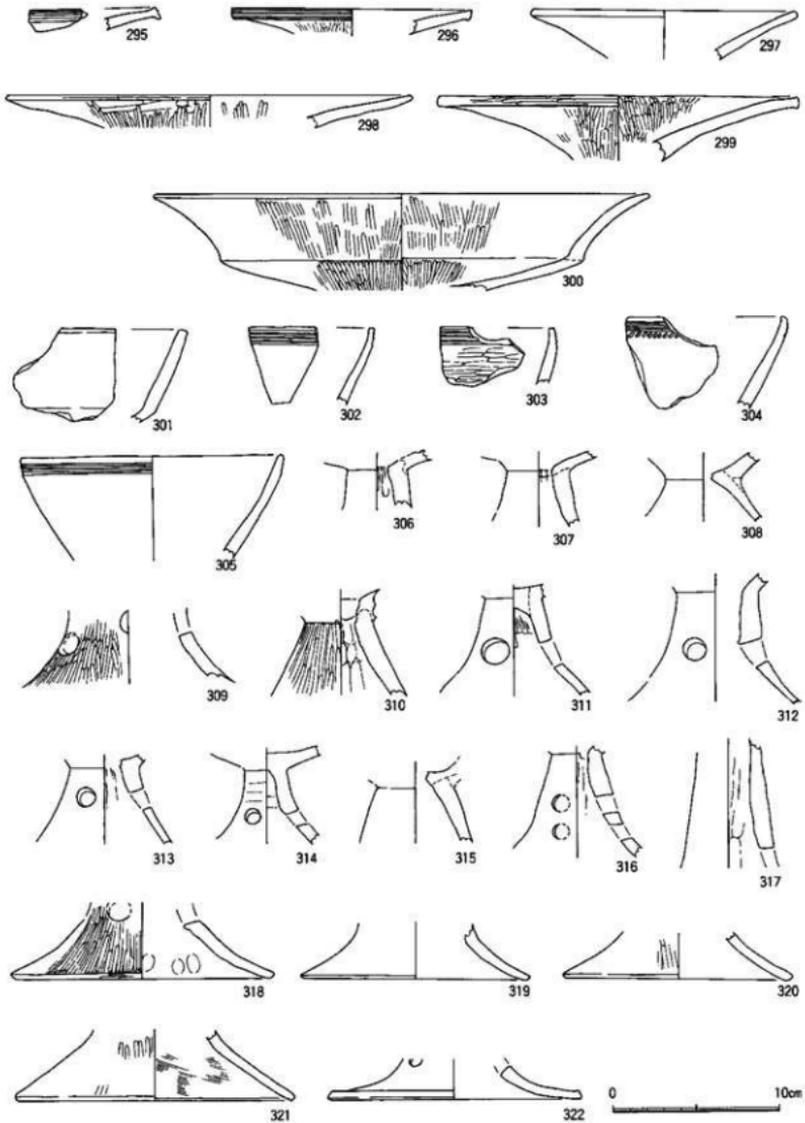
第82図 Ⅱ期PA04、PA05、PA06、PA07、PA08、PA09、PA10、PA11平面図・断面図 (S:1/20)



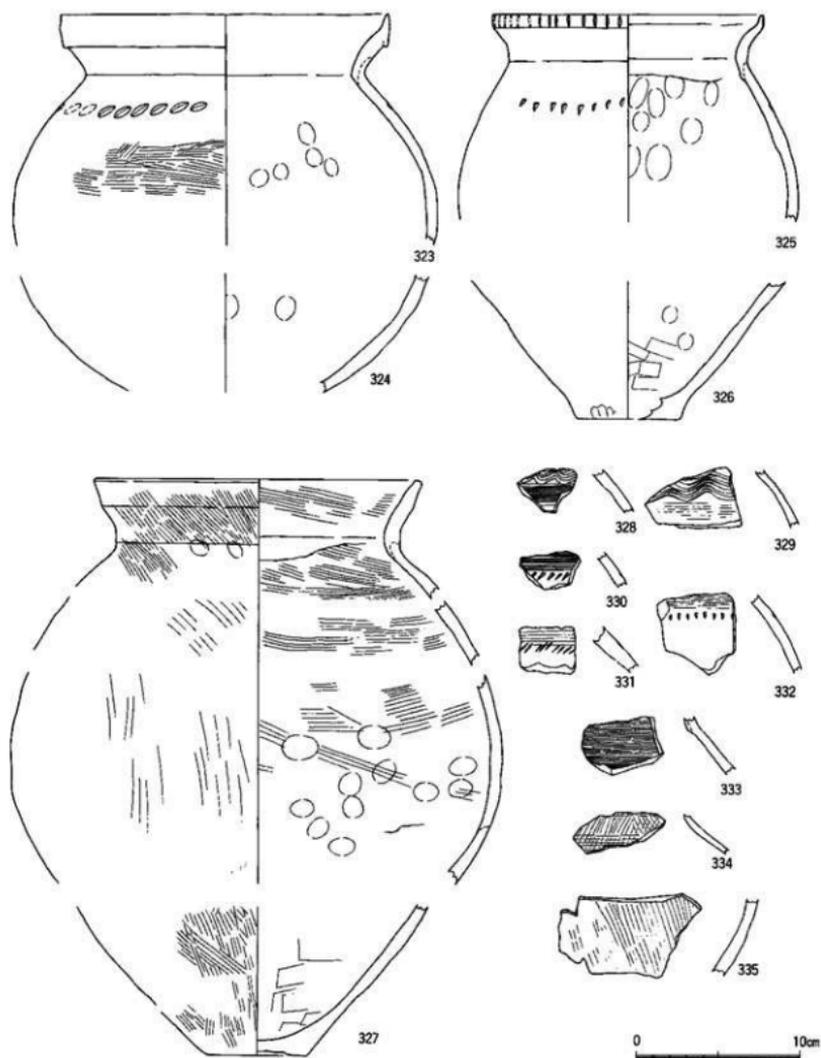
第83図 Ⅲ期PA12、PA13、PA14、PA15、PA16、PA17、PA18、PA19、PA20、PA21、PA22平面図・断面図（S：1/20）



第84図 A地区Ⅱ層出土遺物1) (S : 1/3)



第85図 A地区Ⅲ層出土遺物(?) (S : 1/3)



第86図 A地区Ⅲ層出土遺物(3) (S:1/3)

## 第4節 IV期の遺構と遺物（古墳時代後期）

### 後平茶臼古墳

#### (1) 調査以前の記録

本古墳の存在はかなり古くから知られており、昭和初期にすでに小川栄一氏の踏査によって埴輪が採集され、古墳であることが確認されている。さらに昭和30年代には、八賀晋氏（現在三重大学名誉教授）により「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」と遺跡（条里・古墳）の研究の一環として踏査がおこなわれている。この際にも埴輪が採集されている。その成果の一部が『岐阜県史』通史編原始におさめられ、『改訂版岐阜県遺跡地図』に記載されるに至っている。その後、岐阜県考古学会・県立関高等学校社会研究部・富加村青年団によって町内の古墳の分布調査が昭和40年代に実施された。その際には本古墳の規模は南北径13m、高さ2.2m、東西径20～25mと推定し、前方後円墳の可能性も指摘されている。

試掘確認調査で設定したトレンチTr1から埴輪片が出土し、過去に採集された埴輪と同様の須恵質埴輪であることから、本古墳は須恵質埴輪がめぐる古墳であることが確定的となった。

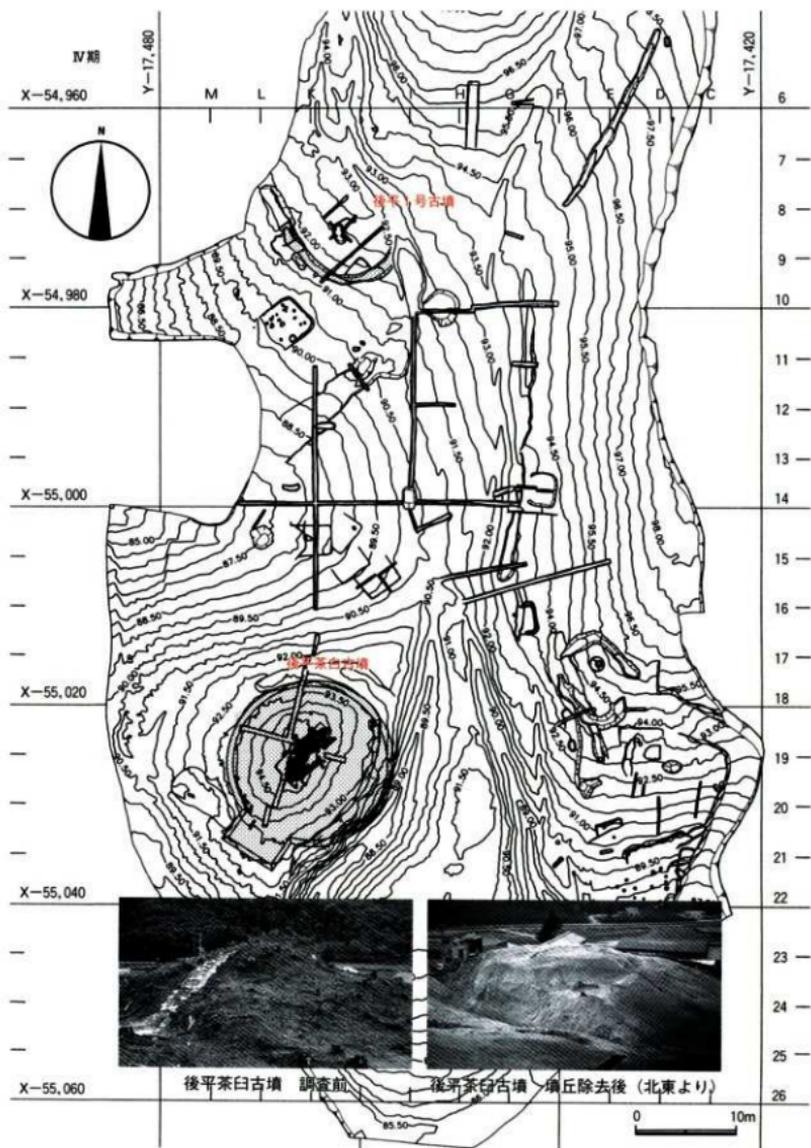
#### (2) 調査前の状況と古墳の残存状態（第88、89図）

試掘調査開始以前に踏査した際にはうっそうとした雑木林に覆われ、墳丘の観察はほとんど不可能であった。この時には墳丘は直径20m程度の円形ないしは方形のようにも感じられた。墳頂部と思われる箇所のある東側斜面では一部に人頭大の礫の散布が認められたため、埋葬施設はすでに破壊を受けているものと判断した。試掘確認調査の実施に伴って、古墳周辺の雑木林を伐採した際に再度、墳丘観察をおこなった。この時点で墳形は主軸方向を南北に向ける造り出し付き円墳もしくは前方後円墳であることが判明した。当然、本発掘調査の際には墳形がどちらになるのかが焦点となった。伐採以前に確認した人頭大の礫の分布はさらに広がり、墳頂部にはわずかにくぼむ箇所が認められたため、盗掘によって礫が周囲に捨てられたものとの推測が可能となった。

#### (3) 古墳の立地

本古墳は富加町の市街地を形成する小盆地の北端にある丘陵上に立地している。北側には隣接する県道関・金山線によって、斜面が削平されているため、本来の地形は不明だが、おそらく南北方向に舌状に伸びる低丘陵の先端に選地している。この舌状に伸びた丘陵の最高所は調査区北側、すなわち試掘確認調査でトレンチTr3を設定した標高104mの箇所にある。本古墳が選地した箇所は検出時の墳頂部の標高は94mで、前述した最高所よりも低い箇所だが、最高所の箇所と本古墳が選地した箇所との間には埋没した谷が東西方向に存在しているため、本古墳が選地した箇所も地形上、独立した丘陵のようにみえる。おそらく、こうした丘陵の先端にやや独立した感のある高まりをもつ地形を利用したと思われる。なお、調査区南端の平坦部との比高差は約9mをはかる。

その眺望は南側に向かって開け、富加町内の平坦地を眼下に望むことができる。



第87図 IV期遺構配置図 (S : 1/500)

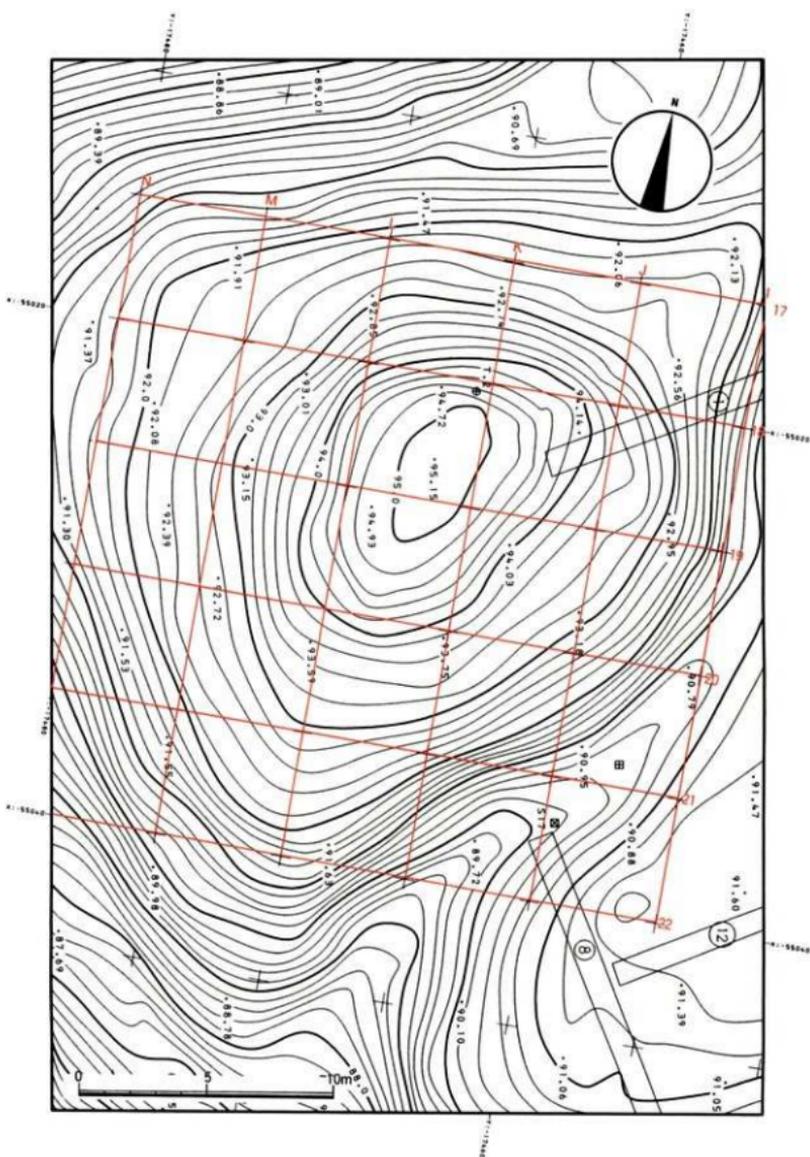
#### (4) 墳丘の形状と規模（第90・91図）

墳丘表面を覆っている表土・流失土を除去した結果、墳丘裾に埴輪がめぐり、南西部に造り出し部が伴う、造り出し付き円墳であることを確認した。埴輪についての詳細は後述するが、造り出し部と円丘部が接続する南西部のみしか原位置を保っていないかった。墳丘の復元ならびに規模の推定はこの原位置を保つ埴輪列と円丘部の北西部を中心として確認した周溝からおこなった。なお、周溝の詳細についても後述する。

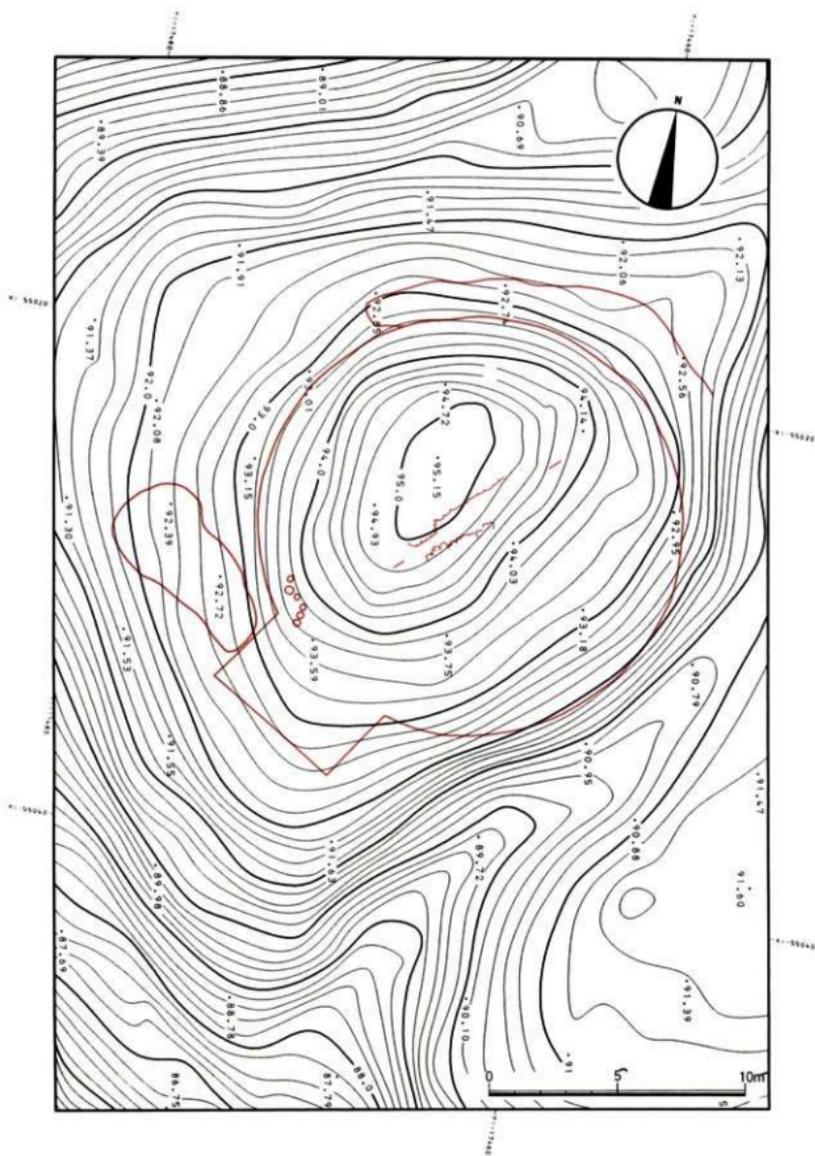
円丘部は直径15.5m程度の規模をもつと考えられ、現存長（墳丘残存部位）は、南北径15m・東西径8mをはかる。その端部は埴輪列より0.6m程度外側にあると考えられ、埴輪が樹立された箇所にはテラス面が形成されていたとも想定されるが、墳丘の流失が著しいため、調査時にはその痕跡を確認することはできなかった。円丘部の北東部は墳丘の損壊が著しい。おそらく、盗掘孔の掘削に伴う破壊を受けた結果と考えられる。さらにその東端に隣接するSDA02の掘削にともなう破壊ないし流失という状況も推測可能で、このために北東部についてはほとんど原形はとどめていない。その状況は周溝がSDA02によって寸断されている状況からも推察可能である。現状における墳頂部までの高さは、墳丘端部を標高93m前後と想定しているため、そのラインからはかると約1.5m程度認められる。後述する埋葬施設を墳頂部で確認しているが、埋葬施設の高さも考慮するなら、本来の墳丘の高さは3m程度あったものと考えられ、墳丘のうち1/3程度は流失したものと推測される。このため、墳丘斜面の傾斜角は本来の形状とはかなりかけ離れたものと考えられることから、墳丘裾以外の墳丘形状の復元は困難である。

造り出し部は円丘裾部の南西部に接続する。造り出し部の接続部位は南西隅については埴輪列の存在からその部位の確定は容易であったが、南東部については墳丘の流失が著しく判然としなかった。流失土を除去した後、墳丘部を確定するための検出作業の過程で、南東部の接続部位と思われる箇所を確認した。等高線においてもやや屈曲する様子をうかがうことができるが、流失部分を考慮すると本来の形状を保持しているとは考えられない。このため、接続部位の幅は円丘部と設定可能な南西部における接続部位で南北方向の主軸ラインを設定し、これを南東部へ反転する方法で復元した。その場合、復元した接続部位の幅は5mと推定される。造り出し部の南端については墳丘の流失が著しく、その設定が困難である。岩盤を掘削した周溝が造り出し部の西側に回り込み、造り出し部に隣接するため、この周溝の南端を造り出し部の南端にほぼちかいものと判断した。また、等高線にも屈曲する部位が認められたため、その部位に南端が位置するものとして設定した。幅はやや接続部位に対して広がる可能性もあるが、確証がないためほぼ同じとみている。その結果、造り出し部の主軸長は3.5mと推測している。墳丘高は接続部位で1m程度認められ、南端に向かうにつれてその高さを減じ、自然地形に連なる。南端からさらに下方は急な斜面を形成している。

なお、墳丘の流失があるため、確証ある痕跡を確認したわけではないが、造り出し部から円丘部に続く隆起斜道を確認できなかったため、いわゆるホタテ貝式古墳ではないと判断した。また、造り出し部の付近において祭祀的行為の伴う遺構の痕跡あるいは埋葬施設の検出に努めたが、それらの痕跡は確認できなかった。ただし、337の脚付短頸壺他、須恵器が、西側の周溝から多く出土しており、造り出し部で祭祀用として使用されたものが周溝内へ転落した可能性があることを指摘しておく。

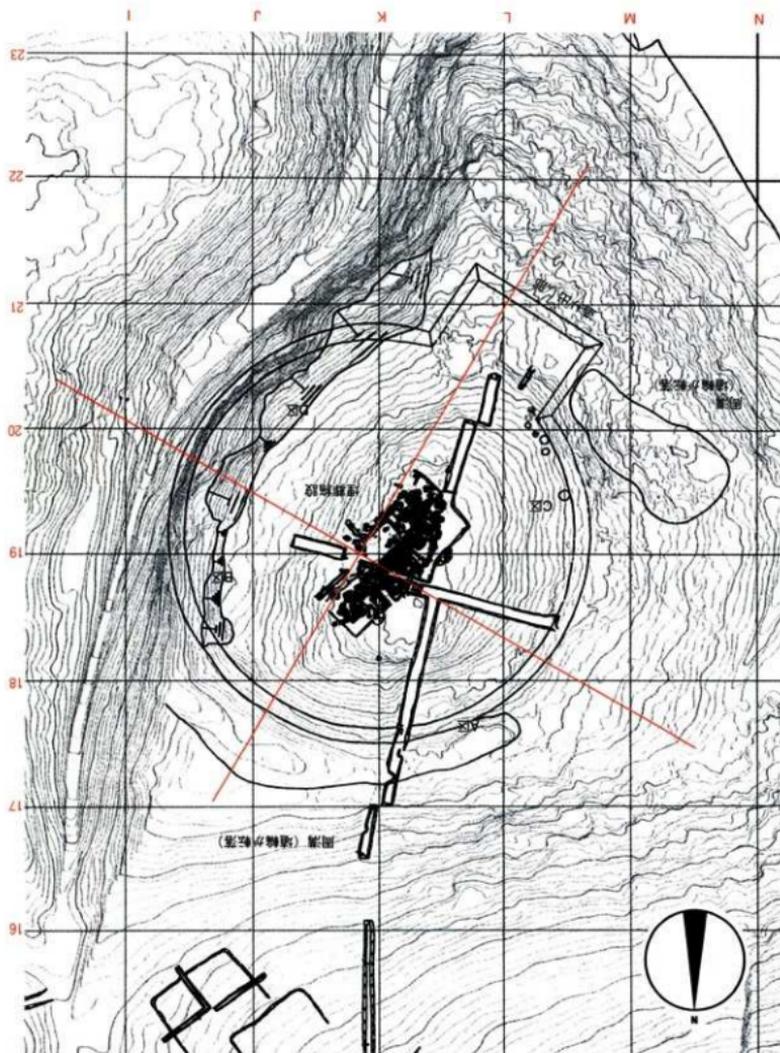


第88図 M期後平茶臼古墳グリッド配置図 (S : 1/200)

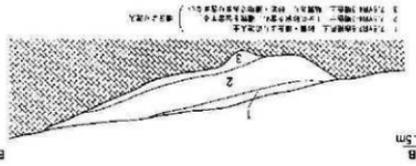
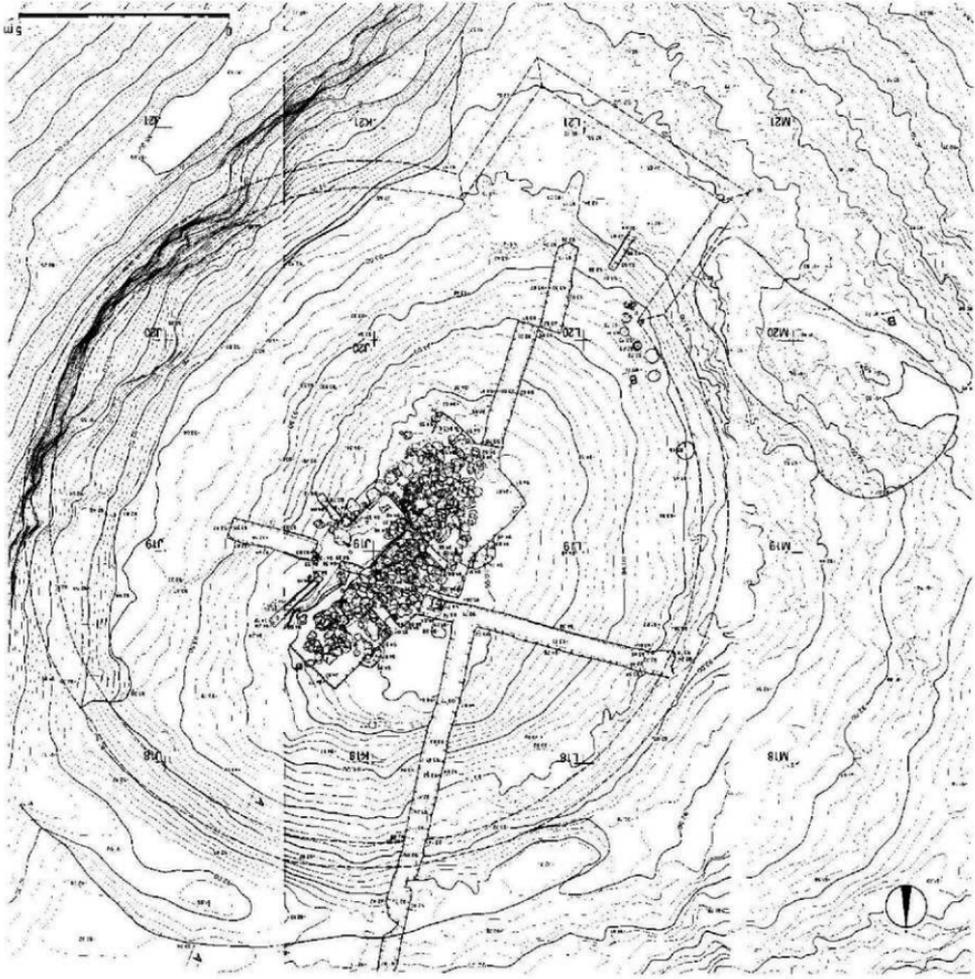


第89圖 IV期後平素臼古墳調査前地形測量図（S：1/200）

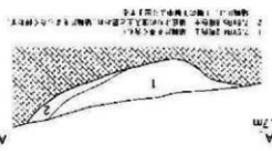
第90図 N期後半来白古墳地区設定図 (S:1/200)



第191图 1:50000地形图(比例尺1:50000)



90.5m  
B



92.7m  
A

## (5) 周溝の形状と規模（第91図）

周溝は円丘部の北側と造り出し部の西側の2箇所で見られた。両者が連続する可能性もあるが、確認した周溝はいずれも岩盤を掘削したものであり、円丘部の西側では岩盤が人為的に掘削された痕跡はまったく認められなかったため、連続しないものと判断した。円丘部北側の周溝は墳丘端部から急な傾斜をもって掘削されており、その断面はV字形を呈する。ただし、東側から西側に向かうに従って深さが浅くなり、西側の突端で自然地形に連続する。平面形は三日月状を呈するが、東端についてはSDA02によって削平されているため、詳細な形状は不明である。埋土は黒褐色土が下層、赤褐色土が上層に堆積していた。赤褐色土は墳丘からの流失土と考えられる。遺物の出土は埴輪片が大半を占め、わずかに弥生時代末～古墳時代初頭の土器片も出土した。弥生時代末～古墳時代初頭の土器片は墳丘の流失に伴って混入したものである。詳細は後述する。出土した埴輪片の多くは、黒褐色土から出土しており、墳丘が流失する以前のかかなり早い段階から周溝内へ転落したものと考えられる。409、410、413、418、423はほぼ完形となる資料で、転落した状況を良好に示す資料とみられる。造り出し部西側にある周溝は造り出し部西側の墳裾から円丘部西側をめぐり、平面形状は不安定である。断面形も基本はV字形だが、円丘部北側で深さが浅くなるためか、顕著なV字形とならない。深さはそれぞれ南北両端が浅く、中央部が最も深く0.5mをはかる。埋土の状況・遺物の出土状況は円丘部北側とほぼ同じ状況であった。ただし、遺物については細片が多く、円丘部西側と比べると墳丘裾から周溝内へ転落したにしてはやや不安定である。出土遺物には埴輪片のほかに須恵器片が含まれる。なかには348のように石室内から出土した須恵器と接合する資料が認められることから、盗掘した際の排土が周溝内へ捨てられたとの推測も可能である。337は周溝内から大半が破片となって出土したもので、その特殊な形からみて、最初から石室外に設置されていた可能性が高いとみられる。

## (6) 墳丘の築成

墳丘の築成は大別すれば以下の7段階に工程に従って築成されたと考えられる。その理由はそれぞれの工程において使用される墳丘土層の性質が異なることによる。本来、円丘部と造り出し部に分けて記述すべきだが、造り出し部の状況がそれほど良好ではなかったこと及び明確に円丘部と造り出し部とで工程が異なることを確認できなかったため、ここで一括して記述する。また、前述したように墳丘の1/3程度はすでに流失したと推測されるので、築成当時の工程はさらに増えるものと考えられる。

## 墳丘築成に使用された土層の大別（第92～94図、第6表）

以下の各工程で使用された墳丘土層はそれぞれ色調あるいは土層内に含まれる砂岩礫の大きさなどの特徴によって以下のA～F系に大きく区分できる。当然、墳丘築成に際しては周辺から土を採取したものと思われるが、これらの土層の違いはそれぞれ採取した地点の違いによるものと推測され、それぞれ工程に見合った土を墳丘築成に利用したと考えられる。

A系 径2～3cm大の風化砂岩を多量に含む黄褐色砂質土（10YR6/3）。風化した地山の砂岩岩盤を掘削したものと考えられる。本古墳周辺の南側斜面において認められる。

第6表 後平茶臼古墳墳丘土層

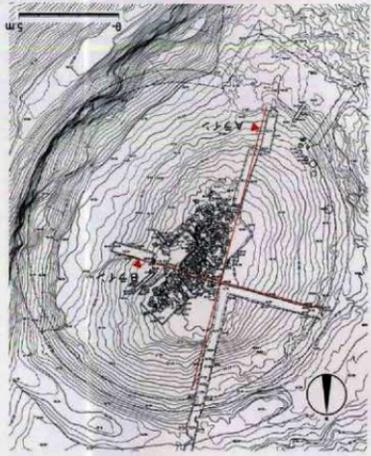
番号	築成工程	性質	色調	特徴	備考
1	B	橙色砂質土	5YR7/6	径3～4cmの砂岩を多く含み、部分的に褐色土ブロックが認められる。	1～3層は性質が類似。
2	B	橙色砂質土	5YR6/8	径3～4cmの砂岩を多く含み、部分的に褐色土ブロックが認められる。1層より赤味を帯びるが、それらは砂岩が風化したものと考えられる。	
3	B	橙色砂質土	5YR7/6	径1～2cmの砂岩を多く含むが、褐色土ブロックは含まない。	
4	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径5～6cmの砂岩を多く含み、黒褐色土粒が混じる。	
5	C	褐色粘質土	5YR6/8	径1～2cmの砂岩が混入するが、これらは1層から混入したものと考えられる。	
6	D	にぶい褐色粘質土	7.5YR5/4		
7	D	褐灰色粘質土	7.5YR6/1	やや還元気味で褐色にみえる箇所は砂岩が風化した変色したものと考えられる。6層が境により還元されたものかもしれない。	
8	D	にぶい褐色粘質土	7.5YR5/3	ほぼ6層と同層だが、明黄褐色砂質土が混入する。	
9	C	褐色粘質土	5YR6/8	5層と同層。	
10	E	黒褐色砂質土	7.5YR3/1		
11	D	にぶい褐色固粘質土	7.5YR5/3	径1～2cmの砂岩を多く含み、褐色・赤褐色土粒を含む。	
12	E	褐灰色砂質土	7.5YR4/1	砂岩は含まず、赤褐色土ブロックをわずかに含む。	
13	C	褐色粘質土	5YR6/8	5層と同じ。	
14	E	灰褐色砂質土	7.5YR5/2	Ⅲ層起源。	
15	E	灰褐色シルト	7.5YR4/2	黄褐色砂・炭化物をわずかに含む。Ⅲ層起源。	
16	E	褐色シルト	7.5YR4/3	15層に類似。Ⅲ層起源。	
17	D	褐色粘質土	7.5YR4/4	径1cmの以下の風化した砂岩を含む。Ⅲ層起源。	
18	E	暗褐色砂質土	7.5YR3/3	径1cmの以下の風化した砂岩を含む。Ⅲ層起源。	
19	E	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	径1cmの以下の風化した砂岩を含む。18層と類似。Ⅲ層起源。	
20	E	黒褐色土	7.5YR3/1	色調には濃淡がある。	
21	C	褐色粘質土	5YR6/8		
22	D	褐色粘質土	7.5YR4/3	黒褐色土粒を含む。	
23	D	褐色粘質土	7.5YR4/3	赤褐色土粒を含む。	
24	E	灰褐色砂質土	7.5YR6/1		
25	C	褐色粘質土	5YR6/8	わずかに褐色土ブロックを含む。	
26	E	にぶい褐色砂質土	7.5YR5/3		
27	E	褐灰色砂質土	7.5YR4/1		
28	D	褐色粘質土	7.5YR4/3	黒褐色土をブロックを含む。	
29	D	褐灰色土	7.5YR5/1	鉄分沈着。	
30	F	明黄褐色砂質土	10YR6/6	鉄分沈着。	
31	C	褐色粘質土	5YR6/8		
32	D	褐灰色粘質土	7.5YR5/1	色調は安定しない。	
33	F	灰青色粘質土	2.5Y7/2	鉄分沈着。	
34	F	黄灰色粘質土	2.5Y6/1	鉄分沈着。径1cmの風化した砂岩を含む。	
35	C	褐色粘質土	5YR6/8		
36	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
37	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/3		
38	D	褐色粘質土	7.5YR4/3	22層と同じ。	
39	F	褐灰色砂質土	10YR6/1	鉄分沈着。	
40	F	灰褐色砂質土	7.5YR5/2		
41	F	明黄褐色砂質土	10YR7/6	灰色土ブロックを含む。	
42	E	にぶい褐色砂質土	7.5YR5/3	26層と同じ。	
43	C	褐色粘質土	5YR6/8		
44	F	褐灰色粘質土	10Y6/1	43層が還元したものか。鉄分沈着。	
45	F	褐灰色砂質土	7.5YR4/1	黒褐色土粒を含む。	
46	F	灰褐色砂質土	7.5YR4/2	黒褐色土粒を含む。	
47	F	にぶい褐色シルト	7.5YR6/4	上面には薄い炭化物の層が認められる。	
48	F	灰褐色シルト	7.5YR5/2		

番号	築成工程	性質	色調	特徴	備考
49	D	灰褐色砂質土	7.5YR5/2		
50	D	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
51	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/6		
52	C	褐色粘質土	5YR6/8		
53	F	褐灰色粘質土	10YR6/1	褐色土ブロックを含む	
54	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6		
55	B	褐色固粘質土	7.5YR7/6	径1cmの砂岩を含む	
56	D	にぶい褐色粘質土	7.5YR5/3	赤褐色土ブロックを含む	
57	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径3～4cmの砂岩を含む	
58	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/3	径2～3cmの砂岩を含む。褐色土ブロックを含む。	
59	A	黄褐色砂質土	10YR8/6		
60	B	褐色粘質土	5YR6/8		
61	B	褐色粘質土	2.5YR6/8		
62	B	褐色粘質土	5YR6/8	径1cm以下の砂岩を含む。	
63	E	にぶい褐色砂質土	7.5YR5/3		
64	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
65	B	褐色砂質土	5YR6/3	径1cm以下の砂岩を含む。	
66	E	灰褐色砂質土	7.5YR5/2	径1cm以下の砂岩を含む。赤褐色土ブロックを含む。	
67	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR6/3	径2cmの砂岩を含む。	
68	B	褐色砂質土	5YR6/8	褐色土ブロックを多く含む。	
69	B	褐色砂質土	5YR6/8	褐色土ブロックが少ない。	
70	F	褐色シルト	10YR5/1		
71	F	にぶい黄褐色シルト	10YR6/4	上面に灰色シルト、鉄分沈着。	
72	F	褐灰色シルト	10YR5/1	鉄分沈着。	
73	F	にぶい黄褐色シルト	10YR6/3	上面に灰色シルト、鉄分沈着。	
74	E	褐灰色砂質土	7.5YR4/1		
75	E	褐灰色砂質土	7.5YR4/1	69層に類似。赤褐色土ブロックを含む。69層との色調の違いは褐色土と赤褐色土の比率の違いと思われる。	
76	F	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	径1cmの砂岩を含む。	
77	B	褐色砂質土	5YR6/8	2層と同じだが、やや粘質。	
78	D	褐灰色粘質土	7.5YR5/1		
79	C	褐色粘質土	5YR6/6		
80	D	褐灰色粘質土	7.5YR5/2	褐色土ブロックを含む。	
81	D	褐色粘質土	7.5YR4/3	径1cm以下の風化した砂岩を含む。	
82	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2	径2～3cm大の風化した砂岩を含む。	
83	D	褐色粘質土	7.5YR4/3	31層と同じだが、暗味を帯びる。	
84	C	褐色粘質土	5YR5/8		
85	E	褐灰色シルト	10YR5/1	鉄分沈着。	
86	E	褐灰色シルト	10YR4/1	85層より粘質。	
87	A	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	径1cm以下の砂岩を含む。	
88	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/4	径2～3cmの砂岩を含む。	
89	D	にぶい褐色土	7.5YR5/3	やや粘質。	
90	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/4	径5～6cmの砂岩を多く含む。	
91	B	褐色砂質土	5YR6/6	径3～4cmの砂岩を含む。	
92	B	淡黄褐色砂質土	2.5YR8/3	径5～8cmの砂岩を含む。	
93	B	褐色砂質土	5YR7/6	径1～10cm大の砂岩を含む。	
94	B	褐色砂質土	5YR7/8	径5～10cm大の砂岩を含む。	
95	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
96	E	灰褐色土	7.5YR4/1	わずかに炭化材を含む。	
97	B	明赤褐色砂質土	5YR6/6		
98	E	褐色土	7.5YR5/1	径1cm大の砂岩を含み、赤褐色土ブロックを含む。	
99	E	褐色土	7.5YR5/1	砂岩を含まない。	
100	B	褐色シルト	5YR6/6		

番号	築成工程	性質	色調	特徴	備考
101	A	明黄褐色砂質土	10YR7/8	径2～3cmの砂岩を含む。	
102	E	黒褐色シルト	10YR3/2		
103	E	灰黄褐色シルト	10YR4/2		
104	B	明赤褐色砂質土	5YR5/8	わずかに径2cm大の砂岩を含む。	
105	F	にぶい黄褐色シルト	10YR5/3	部分的に灰色に変色。鉄分沈着。	
106	F	灰黄褐色シルト	10YR6/2		
107	F	明赤褐色土	5YR5/6		
108	F	にぶい黄褐色砂質土	10YR6/4		
109	B	褐色砂質土	5YR6/8	径2～3cmの砂岩を含む。	
110	B	褐色砂質土	5YR6/8	砂岩をあまり含まない。	
111	E	灰褐色砂質土	7.5YR5/2	砂岩をあまり含まない。	
112	B	褐色砂質土	2.5YR6/8	径3～4cmの砂岩を含む。	
113	B	浅黄褐色砂質土	7.5YR8/6	流土。	
114	E	灰褐色砂質土	7.5YR5/2	砂岩をあまり含まない。	
115	F	灰褐色砂質土	7.5YR4/2	風化した砂粒を含む。	
116	E	褐色砂質土	7.5YR5/2	径1cm大の砂岩をわずかに含む。	
117	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2	径1cm位の砂岩を含む。	
118	A	浅黄褐色砂質土	7.5YR8/6		
119	F	にぶい褐色シルト	7.5YR5/3		
120	F	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
121	F	灰褐色砂質土	7.5YR6/2	鉄分沈着。	
122	F	褐灰色砂質土	7.5YR4/1		
123	F	褐灰色砂質土	10YR6/1	径3～4cmの砂岩をわずかに含む。鉄分沈着。	
124	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2	径1cm大の砂岩を含み、細かな炭化材をわずかに含む。	
125	C	赤褐色粘質土	2.5YR4/6		
126	A	黄褐色砂質土	10YR8/6	径1cm以下の砂岩を含む。	
127	A	灰黄褐色土	10YR4/2	やや粘質。細かな炭化材を含む。	
128	B	赤褐色粘質土	5YR4/6		
129	B	赤褐色粘質土	5YR4/6	128層と比べると粘性が弱い。	
130	E	灰褐色砂質土	7.5YR5/2	径1cm以下の細かな砂岩を含む。	
131	C	褐色粘質土	5YR6/6	79層であるかもしれない。	
132	B	褐色粘質土	5YR6/6		
133	B	明赤褐色粘質土	5YR5/6	褐色土粒を含む。	
134	A	黄褐色砂質土	10YR8/6	径2～3cmの砂岩を多く含む。	
135	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR6/3	径2～3cmの砂岩を多く含む。	
136	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/4	径2～3cmの砂岩を多く含む。	
137	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/4	砂岩をあまり含まない。	
138	D	にぶい褐色粘質土	7.5YR5/4	赤褐色系よりも粘性は弱い。	
139	E	にぶい褐色粘質土	7.5YR5/4	やや粘性が強い。	
140	B	褐色粘質土	5YR5/8	84層と同じだが、やや脆い。	
141	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/4	径2～3cmの砂岩を多く含む。	
142	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/4	砂岩を多く含まない。	
143	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/4	径2～3cmの砂岩を多く含む。	
144	B	にぶい褐色粘質土	7.5YR6/4	径3cmの砂岩を含む。	
145	B	にぶい褐色粘質土	7.5YR6/4	砂岩はほとんど含まない。	
146	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2	攪乱気味だが、124層とほぼ同じと思われる。	
147	E	褐色粘質土	7.5YR4/3		
148	B	明赤褐色粘質土	2.5YR5/6		
149	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径3cm大の砂岩を含む。	
150	E	灰褐色土	7.5YR4/2		
151	E	褐色土	7.5YR4/3	径1cm以下の砂岩を含む。	
152	A	明黄褐色土	10YR6/6	径1cm以下の砂岩を含む。	
153	A	明黄褐色土	10YR6/6	152層より砂岩が大きく褐色ブロックを含む。	

番号	發成工程	性質	色調	特徴	備考
154	E	99と同じ	7.5YR4/1		
155	E	101と同じ	7.5YR5/1	99と比べてやや砂質。砂岩が少ない。	
156	C	明赤褐色顔料質土	5YR5/6		
157	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6		
158	A	にぶい黄褐色顔料質土	10YR5/3	径1cm以下の砂岩を含む。	
159	A	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	細かな炭化材を含む。	
160	B	褐色土	5YR6/6	径1cm大の砂岩を含む。	
161	E	灰褐色土	7.5YR4/2	径1cm大の砂岩を含む。	
162	E	灰褐色顔料質土	7.5YR4/2	径1cm大の砂岩を含む。	
163	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
164	B	褐色土	5YR5/8	径10cm大の砂岩を含む。	
165	B	褐色顔料質土	5YR6/8	径1cm以下の砂岩を含む。	
166	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
167	F	灰褐色砂質土	7.5YR5/2		
168	B	褐色土	5YR5/8	径5～6cmの砂岩を含む。	
169	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径7～8cmの砂岩を含む。	
170	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径1cm以下の砂岩を含む。	
171	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR7/4	径1cm以下の砂岩を含む。	
172	C	明赤褐色顔料質土	5YR5/6		
173	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径2cm大の砂岩を含む。	
174	D	灰褐色顔料質土	7.5YR4/2		
175	B	褐色顔料質土	7.5YR6/6		
176	B	褐色顔料質土	5YR5/6	径2～3cmの砂岩を含む。	
177	E	褐色土	7.5YR4/3		
178	B	褐色土	7.5YR7/6		
179	E	にぶい褐色土	7.5YR5/4		
180	B	褐色顔料質土	5YR5/6	径1cm大の砂岩を含む。	
181	A	黄褐色砂質土	10YR8/6	径1cm大の砂岩を含む。	
182	E	灰褐色土	7.5YR4/2	径1cm以下の砂岩を含む。	
183	E	灰褐色土	7.5YR4/2	砂岩をほとんど含まない。	
184	B	明赤褐色顔料質土	5YR5/6		
185	E	褐色土	7.5YR4/3	径3～4cmの砂岩を含む。	
186	A	黄灰色シルト	2.5YR5/1		
187	A	明黄褐色土	10YR6/6	径2～3cmの砂岩を含む。	
188	F	浅黄色砂質土	2.5Y7/3		
189	B	褐色土	7.5YR6/6		
190	A	明黄褐色土	10YR7/6	径1cm大の砂岩を多く含む。	
191	B	にぶい褐色土	7.5YR6/4		
192	E	褐色顔料質土	7.5YR4/3		
193	F	にぶい褐色顔料質土	7.5YR5/3		
194	A	明黄褐色土	10YR7/6	径1cm大の砂岩を含む。	
195	E	灰褐色土	7.5YR4/2	径1cm大の砂岩を多く含む。赤褐色ブロックをわずかに含む。	
196	A	194と同じ	10YR7/6	赤褐色ブロックを多く含む。	
197	E	195と同じ	7.5YR4/2		
198	A	明黄褐色土	10YR7/6	径2cm大の砂岩を含む。	
199	A	黄褐色砂質土	10YR8/6	径1cm大の砂岩を含む。	
200	E	灰褐色砂質土	7.5YR4/2		
201	A	199と同じ	10YR8/6		
202	E	にぶい褐色土	7.5YR5/3	径3cm大の砂岩をわずかに含む。赤褐色ブロックをわずかに含む。	
203	F	黄灰色シルト	2.5Y3/1	上面に鉄分付着。	
204	B	91と同じ	5YR5/6	径5cm大の砂岩を含む。	
205	E	黒色土	7.5YR2/1		
206	E	灰褐色土	7.5YR4/2	径1cm大の砂岩を含む。	

番号	醸成工程	性質	色調	特徴	備考
207	E	にぶい褐色砂質土	7.5YR5/3	赤褐色砂質ブロックを多く含み、1cm大の砂岩を含む。	
208	E	207と同じ	7.5YR5/3	赤褐色砂質ブロックは少なく、砂岩も少ない。	
209	E	208と同じ	7.5YR5/3	褐色ブロックを含む。	
210	B	にぶい褐色土	7.5YR6/6	上面に褐色ブロックを多く含む。	
211	B	210と同じ	7.5YR6/6	下面に赤褐色ブロックを多く含む。	
212	E	209と同じ	7.5YR5/3		
213	E	暗褐色土	7.5YR3/3		
214	E	褐色土	7.5YR4/3		
215	A	にぶい褐色土	7.5YR6/4	径1cm大の砂岩を多く含む。	
216	E	にぶい褐色土	7.5YR5/4	径1cm以下の砂岩を含み、赤褐色ブロックを含む。	
217	E	にぶい褐色土	7.5YR5/3	紙かな砂岩を含む。	
218	C	褐色粘質土	5YR6/8	褐色ブロックを含む。	
219	A	灰褐色シルト	7.5YR5/2	径2～3cm大の砂岩を含む。	
220	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR6/4	径2～3cm大の砂岩を多く含む。	
221	A	黄褐色砂質土	10YR8/6	径2cm大の砂岩を多く含む。	
222	D	にぶい褐色顔粘質土	7.5YR5/3		
223	E	灰褐色顔粘質土	7.5YR4/2		
224	B	にぶい明赤褐色顔粘質土	5YR5/4		
225	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径1cm大の砂岩を含む。	
226	E	にぶい褐色砂質土	7.5YR5/3	赤褐色ブロックを多く含む。炭化材をわずかに含む。	
227	B	明赤褐色シルト	5YR5/6		
228	F	黄色シルト	5Y8/6		
229	F	褐色シルト	5YR6/6	わずかに炭化材を含む。	
230	F	灰褐色シルト	7.5YR4/2	赤褐色ブロックを多く含む。	
231	F	229と同じ	5YR6/6		
232	E	褐色シルト	7.5YR4/4	わずかに炭化材を含む。	
233	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6		
234	E	232と同じ	7.5YR4/4		
235	B	褐色土	7.5YR6/6		
236	A	233と同じ	10YR7/6		
237	E	232と同じ	7.5YR4/4		
238	C	明赤褐色粘質土	2.5YR5/6		
239	D	褐灰色粘質土	7.5YR4/1		
240	A	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径2cm大の砂岩を含む。	
241	E	褐色顔粘質土	7.5YR5/3	鉄分沈着還元化	
242	E	褐灰色粘質土	10YR5/1	径1cm大の砂岩を含む。	
243	D	灰褐色粘質土	7.5YR4/2		
244	B	にぶい褐色砂質土	10YR6/4		
245	C	明赤褐色顔粘質土	5YR5/6	褐色ブロックを含む。	
246	E	にぶい褐色土	7.5YR5/3	径1cm大の砂岩を含む。	
247	C	245と同じ	5YR5/6		
248	E	246と同じ	7.5YR5/3		
249	B	褐色土	5YR6/6	径1cm大の砂岩を多く含み、褐色土粒を含む。	
250	F	にぶい赤褐色シルト	5YR5/3		
251	F	にぶい赤褐色シルト	5YR4/4	下面に径3～4cm大の砂岩を多く含む。	
252	E	242と同じ	10YR5/1		
253	A	200と同じ	7.5YR4/2		
254	E	明黄褐色砂質土	10YR7/6	径9cm大の砂岩を含む。赤褐色ブロックを含む。	
255	A	にぶい黄褐色砂質土	10YR6/3		



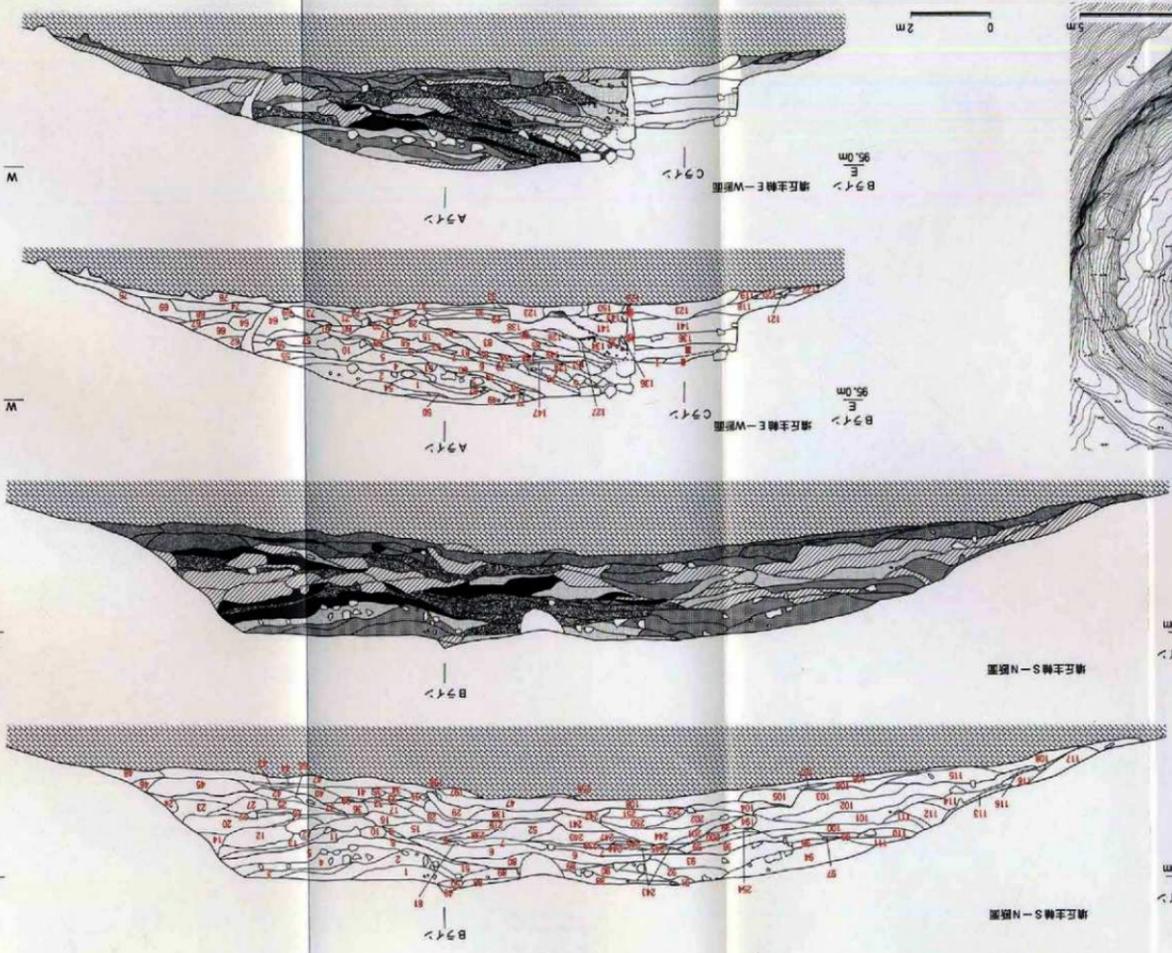
- A 白
- B 黒
- C 斜線
- D 点線
- E 斜線
- F 点線

A-A' S  
95.0m

A-A' S  
95.0m

墳丘軸S-N断面

墳丘軸S-N断面



W

W

N

N

B-B' E  
95.0m  
墳丘軸E-W断面

B-B' E  
95.0m  
墳丘軸E-W断面

A-A'

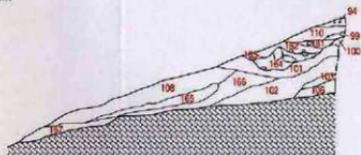
A-A'

B-B'

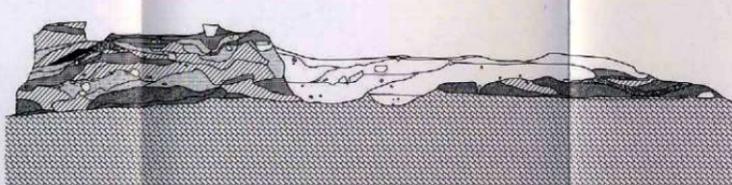
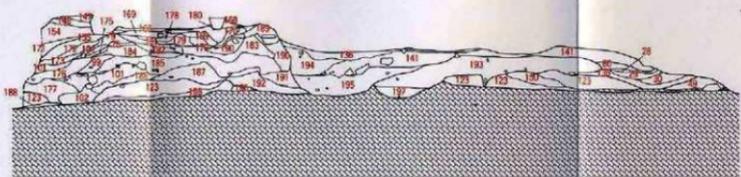
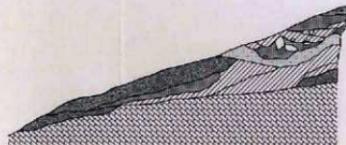
B-B'

0 2m

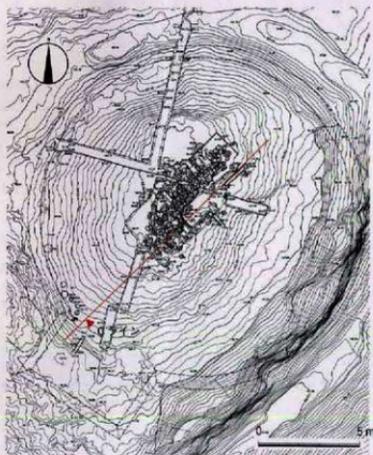
Cライン  
S  
99.0m



Cライン  
S  
95.0m



0 2m



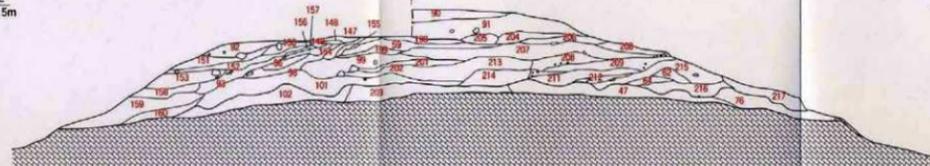
- A 一山の黄土 (砂鉄質)。砂鉄が大きく剥離を呼び出したものと見られる。黄褐色系。 ) AとBの色の相違は、剥離層が厚さでだけと見られる。  
 B 一山の黄土 (砂鉄質)。砂鉄が大きく剥離を呼び出したものと見られる。黄褐色系。  
 C 一帯の黄土質土。  
 D 一帯の黄土質土。  
 E 一帯の黄土質土に砂鉄。強度を弱めている可能性あり。正誤不明。  
 F 一帯の黄土質土に砂鉄。砂鉄がまみれているために、砂鉄より土 (白層) を剥したと見られる。

第93図 M期後平茶臼古墳墳丘築成土層断面図(2) (S : 1/50)

Fライン  
E  
94.5m

Cライン

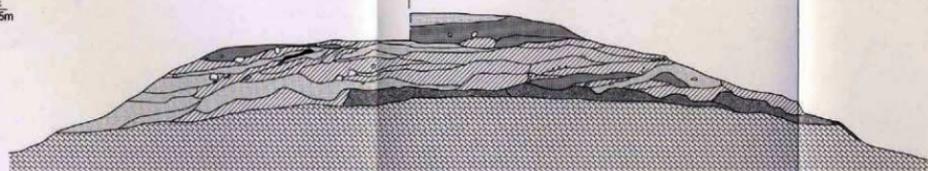
W



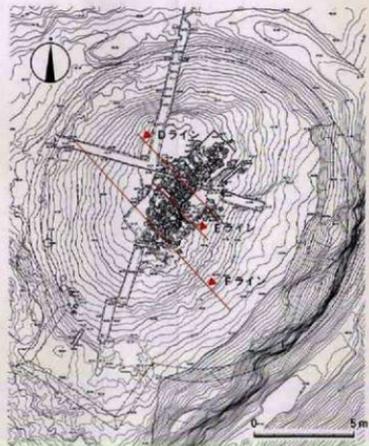
Fライン  
E  
94.5m

Cライン

W



- A
- B
- C
- D
- E
- F



Eライン  
E  
95.0m

Cライン

W



Eライン  
E  
95.0m

Cライン

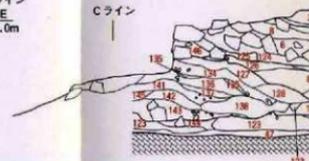
W



Dライン  
E  
95.0m

Cライン

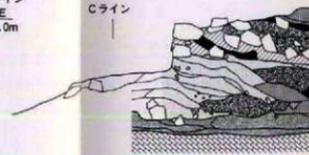
W



Dライン  
E  
95.0m

Cライン

W



0 2m

第94図 Ⅱ期後平茶臼古墳墳丘築成土層断面図3) (S:1/50)

- B系 径3～4cm大の風化した砂岩を多く含む赤褐色砂質土（5YR7/8）。風化した地山の砂岩基盤を掘削したものと考えられ、色調が異なるだけで性質はA系と酷似する。A系と色調が異なる要因は採取した地点が異なっていることを反映しているとみられる。同じ砂岩基盤でも雨水が浸透しやすい箇所では鉄分が沈着して、赤褐色に変色する場合があります、B系はこのような赤褐色に変色した箇所を掘削したと考えられる。調査区内では後半1号古墳付近やH22グリッド付近で顕著である。
- C系 橙色粘質土（5YR6/8）。地山の砂岩岩盤が風化して粘質化したものと考えられ、調査区内では谷部における基本層序のⅣ層やⅥ層に類似する。谷部を掘削した様子は認められないが、D19グリッド付近で同様の土層が存するので、この付近の土層を採取したかもしれない。しかし、この土層はかなり粘性が高いため何らかの手段によりその粘性を高めていると考えられる。
- D系 褐色粘質土（7.5YR6/1）。色調が異なるだけで、性質はほぼC系と同類である。この土層については、調査区周囲には見当たらない。ただし、基本層序Ⅲ層に色調は類似するので、これを何らかの手段をもって粘性を高めたとも考えられる。
- E系 黒褐色砂質土（7.5YR3/1）。基本層序のⅢ層に類似し、弥生時代末～古墳時代初頭の土器片を包含する。ただし、色調にはややばらつきが認められる。おそらく、本古墳周辺のⅢ層を掘削したと思われる。調査時には本古墳周辺ではⅢ層はまったく認められなかったことから、墳丘築成以前には基本層序Ⅲ層は本古墳が立地する箇所を覆っていた可能性が高い。また、同時期の遺構が存在していた可能性も十分にあり、これを掘削したとの推測も可能である。
- F系 色調にはややばらつきが目立つが、にぶい橙色シルト（7.5YR6/4）を基本とする。その起源は地山の風化土にあると考えられ、基本層序のⅡ層に類似する。おそらく、本古墳周辺谷部のⅡ層を掘削したと思われる。

#### 墳丘築成における工程の大別（第95、96図）

前述したA～F系の土層をそれぞれの工程に従って、区別しながら墳丘の築成を図っていると考えられる。そうした様相が墳丘断面にも反映しているとの予測から以下のⅠ～Ⅵの工程に大別した。ただし、墳丘本来の形状を保持していたならば、各工程の区分が変わる可能性もありうる。とくに、最終段階のⅥ工程の場合、本来ならさらにその上部にも墳丘が続くため、それによって区分が変わる可能性は十分にあると思われる。

#### 第Ⅰ工程 原地形の整形及び野焼き

実際に盛土作業を行う以前の段階で、おおよそ墳丘築成を行う箇所を平坦にしたと思われる。周辺の地形からみれば限り、墳丘中央部はやや平坦になっており、その高さは標高93.5mで揃う傾向が認められる。ただし、後述する野焼きの痕跡を考慮すると原地形を極端に改変させるほどの整形をおこなっているとは積極的に認めたいこともあり、断定はここでは避けておきたい。野焼きの痕跡は地山である砂岩岩盤と後述する第Ⅱ工程における盛土との境界において認められる。その痕跡は細かな炭化材混じりの黒褐色土層で、その厚さは1cmにも満たない薄い層である。そのため、図示は不可能であっ

た。また、この黒褐色土層は盛土と地山との境界すべてにわたって認められる比較的安定した土層であることからみても、野焼きの痕跡を示す大きな材料と考えられる。

#### 第Ⅱ工程 墳丘築成範囲の確定

野焼きの痕跡を示す黒褐色土の上部において、主としてF系の土を利用し、墳丘の築成範囲の設定を図っていると思われる。F系の土はこの第Ⅱ工程のみに使用され、色調は異なるものの円丘部のみならず造り出し部でも認められる。その厚さは墳裾付近の厚さは別として、40cm前後と比較的均一であり、円丘部中央付近では標高93.8m前後の高さでやや平坦気味に整えられている。おそらく、次の第Ⅲ工程への準備を図っていると考えられる。

#### 第Ⅲ工程 石室基底面の準備

主にA系の土を利用して標高94.5m前後にそろえ、石室基底面の平坦面を築成している。その分布は石室主軸ラインから東西へ4～6mの範囲でほぼ円形に分布しているとみられ、墳裾までにはいたらない。断面形状は石室部分を中心に楕円形の形状を示す。A系の土は石室基底面の下部に相当する部分で顕著に認められ、その厚さは70～80cmに及ぶ。その土質（砂質土）からみて、石室の排水目的として利用したのかもしれない。また、本工程の末端部分についてはD系の土が認められる。

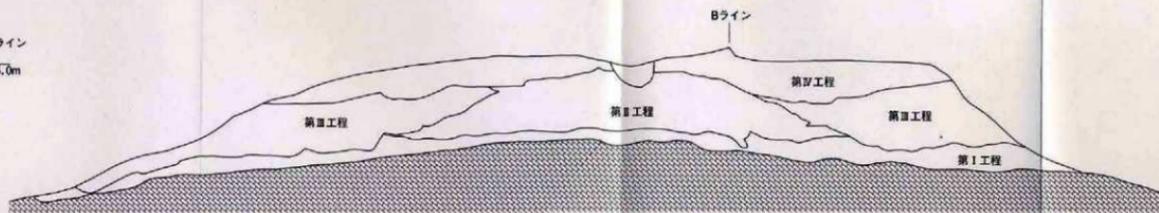
#### 第Ⅳ工程 墳丘周縁部の盛土

第Ⅲ工程の盛土末端から墳裾までの盛土を行う。A・Bラインでは本工程における墳裾の標高は94.5m前後で、石室基底面の高さと同様とそれほど変わらないことから、第Ⅲ工程から次の工程への準備段階と考えられる。土は主にD系を用いるが、その使用は比較的墳丘中央付近で顕著である。末端部分ではE系の土を中心としながらも、A・B系の土を混和しながら墳丘の築成を図っているようである。また、この末端部分は上面がやや高くなる傾向を有しており、土塁状のように盛土を行っているようにもみえる。

#### 第Ⅴ工程 石室控え積みの安定

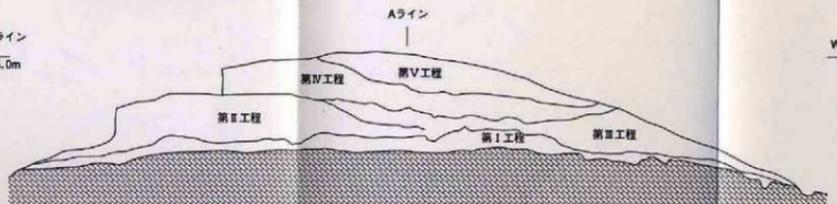
前述の第Ⅳ工程から控え積みに平行して認められるC・D系の土が及ぶ範囲が本工程に相当するものと考えられる。これらの土は石室の控え積みに沿って何回に分けて薄く盛られている。おそらく、C・D系の土の粘性が高いことから、石室の控え積みの安定を図る目的で粘性の高い土を使用したと推測される。さらに、これらC・D系の土の使用回数が石室構築における大きな工程の区別を反映していると考えられる。その状況を良好に観察できるのは、石室及び墳丘の残存状況から墳丘西側の断面に限られるが、その断面から想定すると、石室の控え積みの上面を覆うようにしてD系①→C系①→D系②→C系②の4回の使用は確認できる。細かくみれば、D系に覆われた控え積みの目地に認められる土は本工程に先行する工程に属すると思われるが、ここでは大別して一括する。石室控え積みは断面を観察する限りでは、石室側壁2段目から続き、D系①より上部には続かないと考えられる。この控え積みにD系①が相当し、仮に石室側壁の目地とC・D系の土が対応関係を有するとするならば、現状ではC系②の延長に石室側壁の目地が存在すると推測される。その場合、石室側壁は6段程度積まれていたとの復元が可能で、床面からの高さは1m～1.2mと考えられる。また、造り出し部ではまったくC・D系の土は確認できないことから、本工程は石室構築に深く関わり、連動した工程であると考えられる。

Aライン  
S  
95.0m



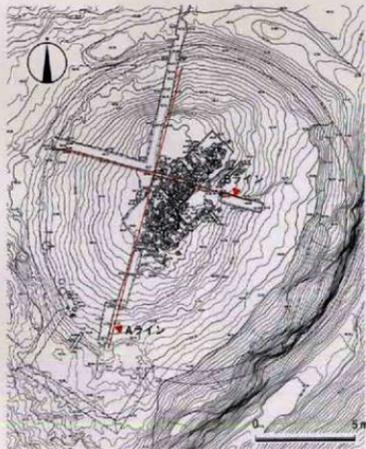
Aライン  
第Ⅰ工程 Bラインの第Ⅰ工程に相当。  
第Ⅱ工程 Bラインの第Ⅱ工程に相当。  
第Ⅲ工程 Bラインの第Ⅲ工程に相当。  
第Ⅳ工程 Bラインの第Ⅳ工程に相当。

Bライン  
E  
95.0m



W

0 2m



墳丘主軸E-W断面 (Bライン)

第Ⅰ工程 原地形の整地

第Ⅱ工程 石室基礎面の整地①)

第Ⅲ工程 石室基礎面の整地②)

第Ⅳ工程 石室安定の全面

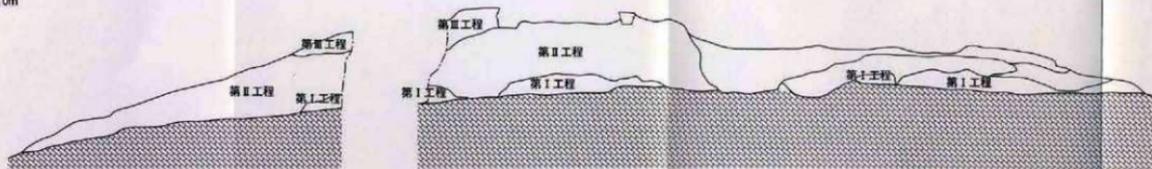
第Ⅴ工程 最終工程

原地形を平坦に削平した後、F系の土層を使用する。(94.0m高) 堆山とF系の土層の境界では炭化物のうすいラミナ面が認められる。主にA系の土層を使用して石室の基礎面94.5m前後にそろえる。その分布は石室主軸ラインより東西方向へ、それぞれ4～6mの範囲とみられ断面で見ると半円形にちがいない。

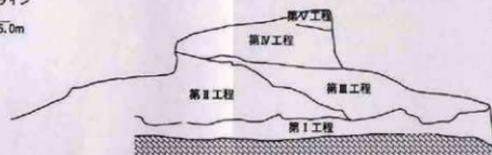
第Ⅱ工程を継続して墳頂まで94.5mの高さにそろえる。この際には、主にD系の土層が使用される。

石室埋積みを安定させるため、B・C系の土層を交互に使用する。第Ⅳ工程の上に、B系の土層を用いて墳丘築成を完成させる。

Cライン  
S  
95.0m



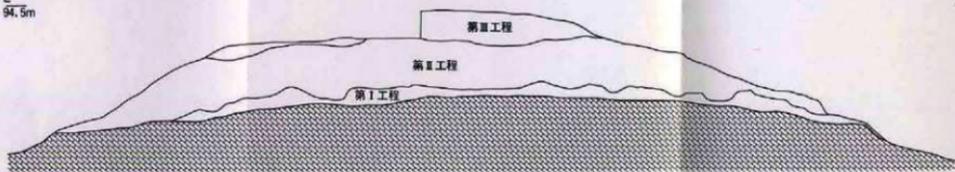
Dライン  
E  
95.0m



W

Dライン  
第I～V工程 墳丘主軸E-W断面に準じる。

Fライン  
E  
94.9m



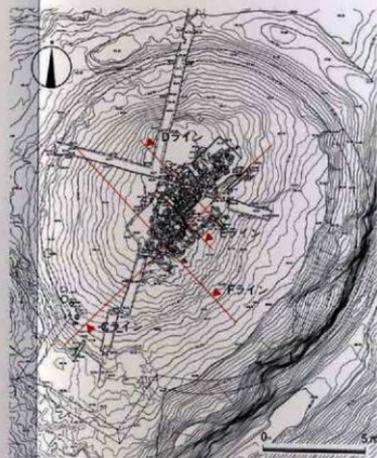
W

Fライン  
第I工程 墳丘主軸E-W断面の第I工程に相当。  
第II工程 墳丘主軸E-W断面の第II工程に相当。  
第III工程 石室が位置していたため、第III工程は省略される。  
第IV工程 墳丘主軸E-W断面の第IV工程に相当。

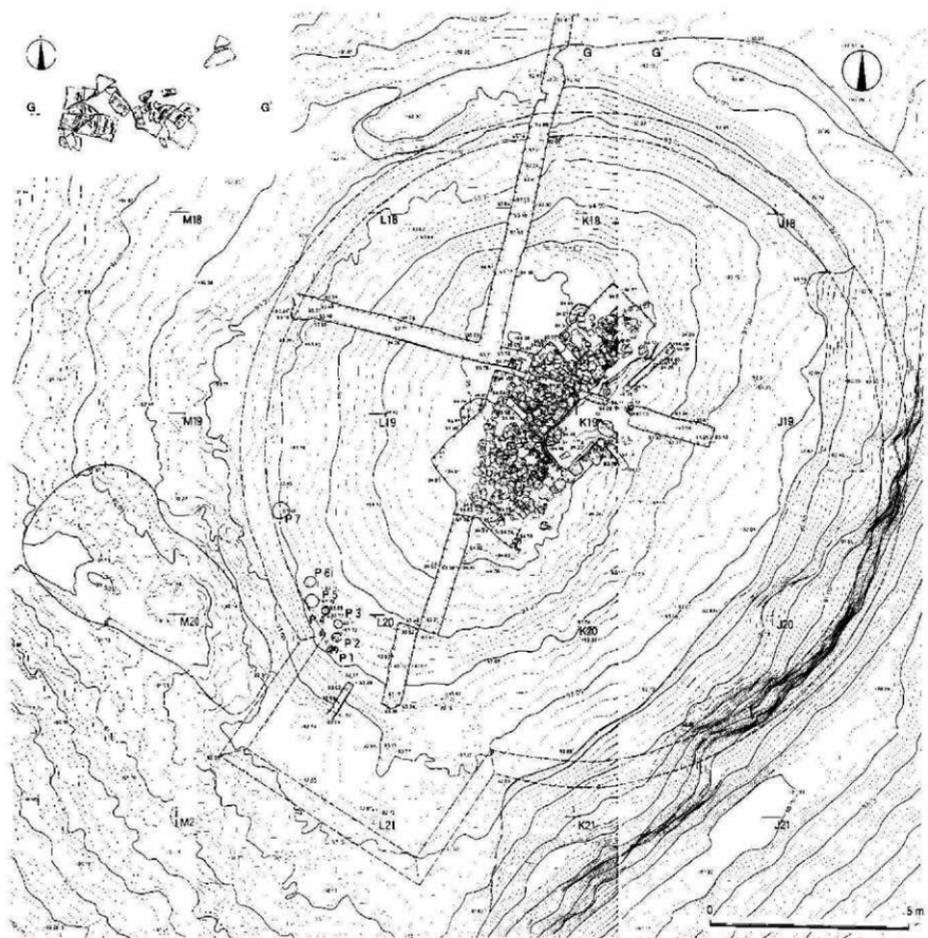
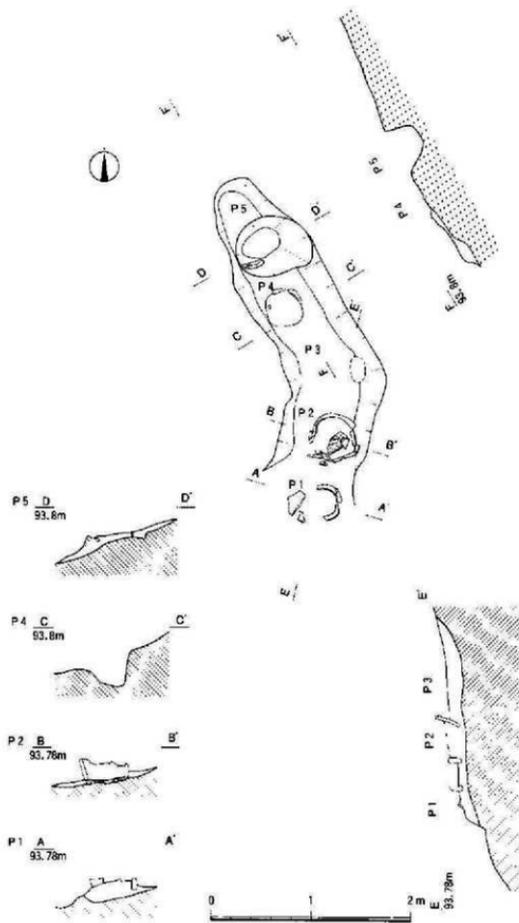
0 2m

N

Cライン  
第I工程 墳丘主軸E-W断面の第I工程に相当。  
第II工程 墳丘主軸E-W断面の第II工程に相当。  
第III工程 墳丘主軸E-W断面の第III工程に相当。



第96図 IV期後平茶臼古墳墳丘築成工程模式図(2) (S:1/50)



第97図 IV期後平茶臼古墳造り出し部域輪列平面図・断面図 (S:1/20)

## 第VI工程 墳丘中心部の築成

石室を覆う、現状での最終工程。主にA・B系の土が用いられ、それらが交互に使用される部分も認められる。ただし、いずれの土も砂質土で流失しやすい土質であることを考えられると本工程の上面には流失しにくい土を利用した化粧土的な工程があったとの想定も可能である。また、流失部分があるため断定はできないが、本工程は円丘部を築成するための工程と考えられるため、本工程の有無が円丘部と造り出し部との境界を形成していると思われる。実際に本工程の有無により検証してみると、平面形における円丘部と造り出し部との境界より円丘部側へ0.5m～0.8m程度入る様相を呈している。

### (7) 外表施設（第97、110図、付図）

本古墳に伴う外表施設は墳丘の周りに埴輪が樹立されていたことが確認された。おそらく、埴輪はその出土状況（第97図）からみて造り出し部の南端を除くすべての墳壇にめぐらされていたと思われる。ただし、埴輪の大半は墳丘の流失に伴い周溝などの斜面下方へ二次的に移動しており、実際に原位置を復元できるものはP1～P7までである。P1～P7は造り出し部西側から円丘部西側へ続く屈曲部付近で確認したもので、これらの埴輪列の確認により、ある程度の墳形の再現が可能となった。P1～P7のうち埴輪が伴うものはP1～P4・P7で、当時の状況を良好に保持しているのは造り出し部に位置するP1・P2のみにすぎない。P1・P2に残る埴輪は基部がほぼ全周するが、基部より上部はすでに破損して流失している。埴輪の埋設にあたっては布掘り構造をもつとみられ、確認面から5cm前後の深さを有する溝が埴輪に沿うことが確認できた。さらに埴輪の基部に合わせて深さ2cm前後の浅いくぼみを築成して埴輪を埋設したと考えられる。埴輪の基部には2～3cm前後の風化した砂岩礫が認められることから、これらの砂岩礫を利用して埴輪の固定を図ったと思われる。P7は単独してピットが検出されているが、その原因は布掘りが流失してピットのみが残ったことによる。

確認できた埴輪列の間隔は20cmであるため、これから推測すると墳丘にはおよそ、110個体の埴輪が樹立されていたことになる。調査でえられた埴輪の残存率からは、口径残存率では11.6個体分、底径残存率では12.6個体分の資料しかえられていないので、かなり埴輪が流失した可能性がある。また、一方では造りだし部と円丘部とでは間隔が異なることを示しているのかもしれないが、調査結果からは判断できない。埴輪は、円筒形埴輪と朝顔形埴輪の2種類が認められるが、調査でえられた残存率からみると、その比率は9：1と考えられる。詳細は後述するが、円筒形埴輪・朝顔形埴輪はそれぞれ2類型に分類が可能で、これら計4類型の埴輪が規則的に配置された様子は看取されなかった。

なお、埴輪列周辺には石材などが転落していた様子は確認できなかったので、葺石はなかったものと思われる。

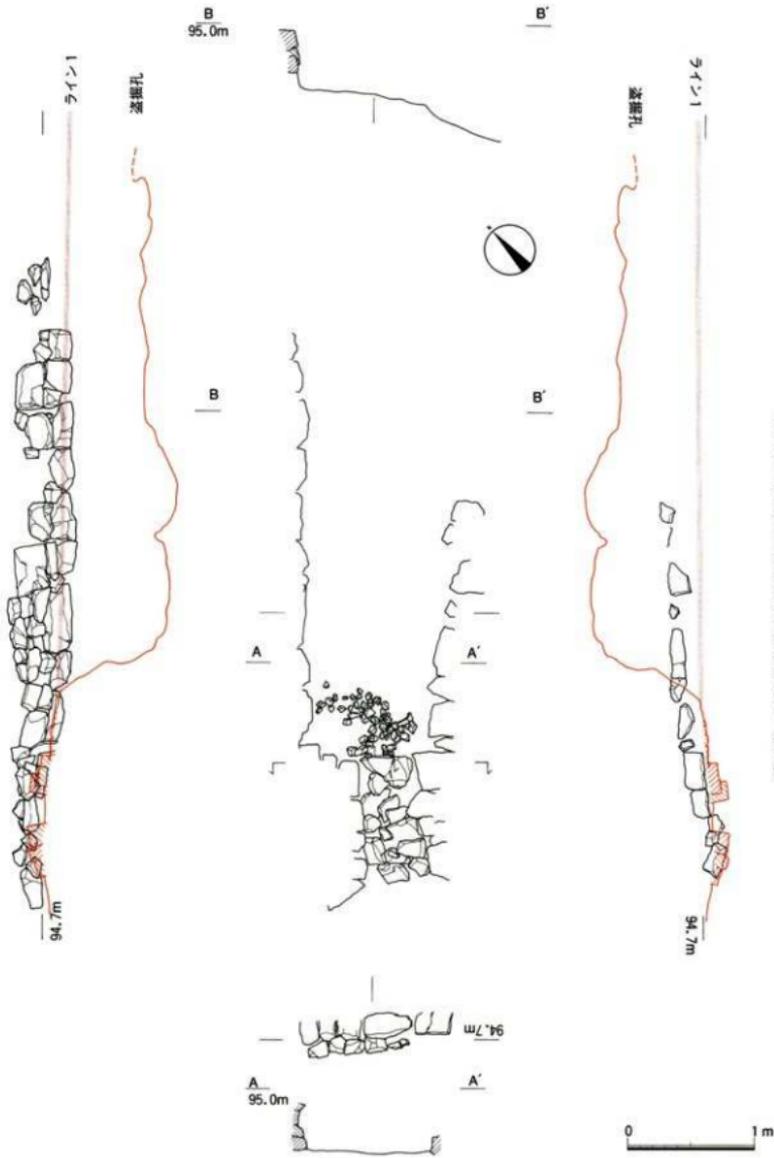
### (8) 埋葬施設（第98～100図）

ほぼ墳丘中央で開口部がS-42°-Wを向く、石室を確認した。このため、石室の主軸方向と墳丘の主軸方向が異なる。前述したようにこの付近では調査以前から人頭大のチャート礫が散乱していたため、石室の存在は容易に推測できた。表土掘削直後から、石室を構成する壁体が姿を表し、天井石もなく石室の上部構造がかなり損壊していることを確認した。検出当初は後述する控え積みの存在か

ら竪穴式石塚と想定していた。しかし、南側の壁面には一部周囲の石材とは異なる横長の石材（第98図参照）を用いている箇所があり、これが框構造をもつのではないかと懸念があった。このため、竪穴式石塚として図面を作成した後、框構造及びそれに続く開口部への構造の有無確認を石材を除去しながら行った。その結果、框石とみられる石材から南側へ羨道部が続くことを確認し、石室の形態は矮小な開口部をもつ竪穴系横口式石室であることが判明した。羨道部は石室主軸方向よりやや東側に偏り、玄室と羨道部との境界における幅は0.45mをはかる。玄室と羨道部との境界については軸をもつようにも見えるが、左右それぞれで石材の使用形態が異なる。左側は幅20cm程度の石材の小口面を玄室内に向け、これらの石材を左隅から3枚程度並べて羨道に接続している。それに対して右側は幅40cm程度の扁平な大型石材のみで羨道へ接続させている。この状況は左側を袖部として意識している可能性がある。羨道部内には20~40cm大のチャート礫が散在し、床面を形成しているのか閉塞石であるのか判断が困難である。開口部ちかくには扁平な横長の石材（第99、100図参照）が据えられ、この石材については閉塞石である可能性が高い。羨道部の幅は開口部が0.5mとそれほど玄室との境界と変わらないが、開口部がわずかに広がる傾向が認められる。しかし、右側については墳丘の流失に伴う石材の移動の可能性があるため、本来の形状を保持しているか疑問がある。側壁は両側ともに最下段の石材しか遺存していない。石材は20~30cm大の板状のものを用いるが、小口面をとくに意識している様子は認められない。控え積みの状況を観察すると西側では玄室と羨道部との接続部分でややその範囲が屈曲する箇所が存することから、羨道部を意識した控え積みの様相が看取されるが、その構造は乱雑で規則的な配置状況は強く感じられない。羨道部の全長は1.07mをはかる。

玄室は盗掘による破壊を受けてその損壊が著しい。北側の壁面すべてと東側の壁面2/3程度は破壊され、まったく遺存していない。東側壁面は羨道部側の壁面1/3程度が残存するが、幅が北側に向かって広がる傾向があり、原位置をとどめているか疑わしい。また、最も良好に残存する西側壁面も北側の一部は損壊を受けている。遺存する玄室の主軸長は3.17m、幅は1.01mをはかる。西側壁面では2~3段程度の壁体が残存するが、その目地はやや不揃いである。基底面にある石材は基底面の高さが94.12mに揃えられ、石材も30cm前後の比較的大型のものを用いるなど整然とした印象を受ける。2段目以降は石材の選択がまばらで羨道部側の石材は小型のものが目立ち、目地も意識していないようである。なお、壁体で使用されている石材は最下段の石材は長手側を玄室内に向けるものが多いものの、それより上位の石材は小口面を玄室内に向けている。西側壁面最奥にやや離れて小型の石材が認められるが、この石材は石室を構成する石材と考えられず、盗掘に伴い二次的移動を受けた感がある。周囲の状況からみて、控え積みを構成する石材の一部と考えられ、二次的移動の状況もそれほど著しいものではなく、ほぼ元来の状況にちかきものと判断される。そうした判断に立つと、この小型石材の部位まで西側側壁が及ぶとは考えにくく、おおよそ西側側壁が遺存する北端部が奥壁との接点になると想定される。

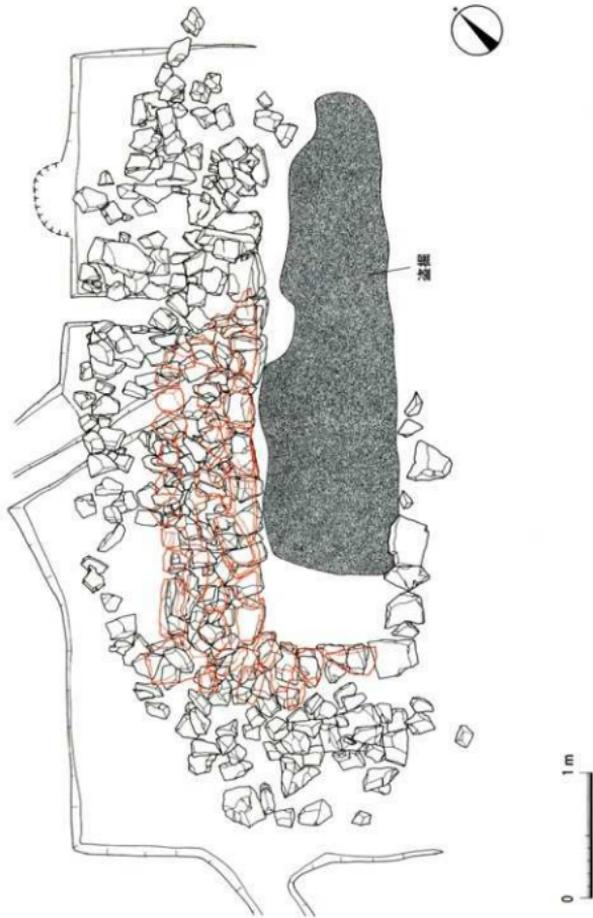
玄室の床面は羨道部側で一部、拳大のチャート角礫が散乱しているのを検出した。この面を床面と想定しているが、その散布状況が散漫で、西側ではかなりの空間が認められる。後述する鏝もこの部位で出土したが、鏝は二次的移動を受けた可能性が高いと考えられる。その場合、角礫も二次的移動を受けている可能性があり、床面の認定が困難である。仮に角礫が散布している面を床面として想定すると、標高94.21m前後が玄室床面となり、玄室側壁の1段目の石材はほぼ埋め殺しの状態となり、



第98図 IV期後平茶臼古墳石室展開図 (S : 1/40)



第99図 IV期後半茶臼古墳石室平面図① (S : 1/40)



第100図 IV期後平茶臼古墳石室平面図(2) (S : 1/40)

羨道部床面からの落差もほとんど認められない状態となる。このような状況では角礫分布面を床面とするには疑念があり、本来はもう少し下位のレベル（第98図ライン1）であった可能性が高いと思われる。このレベル（ライン1）は柩石と羨道部床面との落差を考慮したもので、この場合、羨道部と玄室床面との落差は15cm前後と想定される。どちらのレベルが玄室床面と認定するかはいずれの場合にも断定するだけの根拠を欠くが、本石室が竪穴系横口式石室の形態を採用している性格を考慮するなら、ライン1を床面とすることが望ましいと考える。

なお、前述したライン1の角礫散布範囲より北側は大きく盗掘によって削平され、床面も破壊されている。その詳細は後述する。

石室の背後には控え積みが取り巻く状況が顕著に認められる。控え積みの分布範囲は石室の遺存状況と同様、ほぼ西壁の背後のみに限られる。この西壁背後に形成された控え積みの西端を観察すると、その端部を形成する石材が楕円形にめぐる傾向が認められる。その規模は遺存範囲から類推すると、長軸約6.7m・短軸約4mと考えられる。しかし、西壁から連なる控え積みが著しいのは西壁から背後へ約0.7~0.8mの範囲で、端部を形成する石材との間には部分的に0.4~0.5m程度の空間を生じている箇所が認められる。また、控え積みが顕著な範囲は前述した0.4~0.5m程度の幅をもちながら、石室の形状に沿って羨道部へ続くことが分かる。こうした傾向は控え積み端部を形成する石材と石室側壁背後から連続する控え積みが別の意味を有することを示唆していると判断できるのではなからうか。その理由は側壁から連続しない端部の控え積みは側壁全体の安定にはその効果が期待できないからで、端部を形成する控え積みは本来の控え積みとは異なる意味をもつことが予測されるからである。仮に端部を形成する控え積みが控え積みの意味をもたないとすればどのような意味をもつのであろうか。確証があるわけではないが、端部を形成する控え積みが開口部に接続することから、石室構築に関わる何か区画的な配置の意味をもつものと推測も可能ではなからうか。直接な因果関係は認められないが、多治見市元三ヶ根3号墳（※1）では埋め殺した内回りの石列が確認されている。この石列も石室の周囲を楕円形に取り巻き、本古墳の事例との共通性が認められる。さらに石室が竪穴系横口式石室に類似する形態をもつことも本古墳との類似性を考える上で示唆的である。こうした事例を考慮するなら、控え積み端部にみる石材の配置状況は、側壁から連続する控え積みとは別の意味をもっていたとの想定はある程度妥当性があるものと判断される。ただし、いずれも石室構築に関わる施設であるという点では同じ意図をもつものと考えられるが、同じ控え積みとして同一視できず、石室構築における工程の差異程度の相違であると考えられる。

側壁から連続する控え積み分布状況は先に述べた通りで、断面を観察すると（第92、94、99図参照）側壁2段目から連続し、最下段が長手積み、それより上位が小口積みによる壁体構成と連動するようにみえる。これらの控え積みも大半が小口積みによっている。なお、石材の選択は側壁壁体よりやや小振りとなり約20cm大のチャート角礫を使用し、前述した控え積み端部も共通する。

第99、100図は玄室の最下段を構成する側壁壁体ならびに控え積みのみを残した状況図である。羨道部については玄室2段目の壁体に連続するため、図示できなかった。この状況からは玄室最下段の壁体が前述した通り、2段目以降の石材より大きめの石材を用い、長手積みによっていることがよく分かる。注意を要するのは最下段の側壁壁体背後に40cm前後の空間において側壁壁体に類似する構造の石材が配置されていることにある。この空間がどのような意図をもつのか不明だが、空間を生じて

いる点は先の控え積み端部と控え積みとの関係に類似し、壁体背後にある石材配置は控え積みとは別の意味を想定する必要があるかもしれない。

※1 1993『元ヶ根古墳群・白土原9・10号古窯跡』財団法人岐阜県文化財保護センター調査報告書第9集

#### (9) 盗掘坑（第98、99、100図）

盗掘坑は玄室床面の約4/5に及び、ほとんど全面といってよいほど盗掘による掘削を受けている。また、玄室北壁及び東壁も同様にして盗掘による損壊を受けている。側壁の損壊状況からみて、盗掘行為は北壁の北東隅から行われたと考えられる。盗掘行為の痕跡は石室の損壊状況より調査当初より予想していたことだが、その痕跡範囲の確定が困難であった。最終的範囲が確定できたのは、墳丘の南北主軸方向の断割断面（第92図）の観察後であった。その理由は盗掘坑を掘削した範囲に墳丘と同様の土が埋め戻されたことにより、石室の埋没土と盗掘坑埋め戻し土の識別が困難であったことによる。石室の埋没土は墳丘を形成している土と同様であることからみて、石室は盗掘行為が行われる以前からある程度、崩壊する過程にあり、その埋没する過程で墳丘を形成する土が石室内へ流入したと考えられる。その結果、これを盗掘行為による掘削によって再び埋め戻したことによって、その識別が困難になったものと推定される。その規模は南北方向の断面からは長軸である南北方向は4.5m前後と考えられるが、短軸は東側壁の損壊もあって不明瞭である。おそらく玄室と同程度の規模をもつと考えられる。深さは玄室床面想定ライン（ライン1）から40cm強も掘削されており、その基底面は墳丘をすべて掘削して地山の一部まで達しており、玄室床面を破壊してさらに深い位置まで掘削を行ったことになる。

この盗掘行為の規模によって玄室内に設置されていた遺物は当然、その大半が持ち去られたものと考えられ、残された遺物は原位置をとどめている可能性は薄いものと判断される。その具体的な姿は石室内から出土した須恵器は破片となって出土していることに反映され、また、盗掘坑内から須恵器片ならびに鉄器片が出土していることから看取できる。

なお、盗掘坑からはわずか1片だが、灰軸陶器片が出土している。また、L15グリッドからも灰軸陶器の底部片が出土している。いずれも年代観は12世紀前後とみられ、本遺跡中で灰軸陶器の出土はこの2片のみであることから、この年代に盗掘行為が行われたと考えられる。

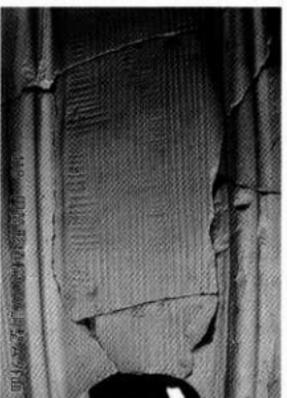
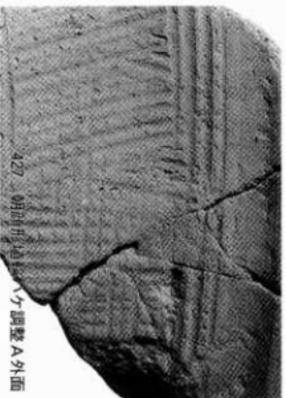
#### (10) 埴輪（第110～122図）

##### 分類（文章中写真図版2）

出土した埴輪はすべていわゆる尾張型埴輪と呼称されているもので（※2）、墳丘裾をめぐるものと考えられる。器形・調整によって以下の4類型に分類できる。

器形は円筒形と朝顔形の2形態が認められ、器形そのものに大きな変化がなく、後述するハケ調整A・Bによって2つに分類することができる。ハケ調整はC種ヨコハケで調整されているが、残されているハケメ痕跡を観察すると、その密度に粗密が認められる。おおよそ、その密度は8～9本/cmと18～20本/cmに分化する傾向が存するため、これをそれぞれハケ調整A（粗）、ハケ調整B（密）と呼称することにする。以上、器形・調整の分類によって、

円筒形埴輪A類 ハケ調整A



文章中国版 2

埴輪ハテ調整

円筒形埴輪B類 ハケ調整B

朝顔形埴輪A類 ハケ調整A

朝顔形埴輪B類 ハケ調整B

の4類型に分類できる。以下の記述は上記の分類に従って記述したい。

#### 円筒形埴輪A類

前述したように密度の粗い工具を用いてハケ調整（C種ハケ調整）施した円筒形埴輪を分類した。B類と比べると器面に残るハケの痕跡が深く鋭い断面となっていることが特徴である。各段ともにハケ調整が施される。ヨコハケは各段2・3周程度認められ、それ以前にタテハケで調整される。内面にも同様のハケ調整が認められるが、タテハケの調整は縦方向というよりは斜位方向となる。また、ヨコハケのみの資料も存する。第1段・第2段・第3段のそれぞれの間隔はそれほど大きな差はないが、やや第2段が短くなる傾向がうかがえる。口縁端部は強いナデ調整によって、平坦面が形成される。一部には口縁端部が左右に拡張された印象を受ける資料（417・440）やナデ調整が口縁外面や内面に及び、ハケ調整が観察できない資料も存する（406・408）。突帯の上下にも、突帯貼り付けの際の強いナデ調整の痕跡が観察される。突帯は強いナデ調整の結果、凹面を呈し、ややその高さが低い。口径は25cm前後、底径は16cm前後にピークが認められる。器壁はおよそ1.5cm前後ではほぼ均等にいていねいにつくられている。

第1段は基部周辺に他の段とは異なる特徴がみられる。基部は直立する傾向が認められ、内外面とも器形の屈曲点が認められる（第114・116図A）。この屈曲点は後述する底部設定技法と関連する特徴と考えられる。外面の屈曲点は底部設定によって残された痕跡である可能性が高い。内面の屈曲点は強い回転ヘラケズリ調整によって生じた現象である。内面屈曲点より上位の調整はハケ調整単独のもの（409・410・417）とハケ調整・ヘラケズリ調整が共存するもの（418）との2種があり、画一的ではない。それに対して、内面屈曲点下位のヘラケズリ調整はすべての資料で認められ、画一化された技法といえる。また、砂粒の動きが顕著でほぼ1周に限定されていることからみて、内面屈曲点を境にして、その上下では同じヘラケズリ調整といっても別の意図があったものと類推される。1周程度のヘラケズリ調整では器面整形の意図はなかったと考えられ、内面屈曲点以下のヘラケズリ調整は底部設定と連動した技法の可能性が高い。なお、第1段と第2段の境界付近の内面では、接合を強めるためか、指ナデ痕が顕著にみられる。

第2段には2対1孔の円形透孔がみられる。直径6cm程度で、焼成前に切り抜かれている。透孔左横にはヘラ描きによるヘラ記号が認められるが、すべての資料に認められるわけではない（410）。内面の調整はハケ調整で、第3段との境界付近に指ナデ痕が顕著であるなど第1段と共通する。

第3段の内面調整はハケ調整がほとんどであり、口縁部にヨコナデ痕が顕著な資料が見受けられる。

A類の資料は全体に焼成が良好な資料が多い。

#### 円筒形埴輪B類

ハケ調整の痕跡の密度が細かく、その断面が浅いものを分類した。器形や調整手法はA類とほぼ同じである。A類と比べると、やや焼成が不良な資料が多い。また、残存率に問題を残すが、ヘラ記号が認められる資料が少ないと思われ、量的にもA類を下回ると推測される。

### 朝顔形埴輪

ハケ調整の類型で分類した点は、円筒形埴輪と同じである。A類は396・419、B類は420・461がそれに当たる。確認した資料が少なく、断片的な資料しかえられていないので、ここで一括して述べる。確認した資料の大半は口縁部片である。基部の破片は後述する突帯形状によって識別可能だが、そうした基部の破片はほとんど皆無であった。ハケ調整の原体は円筒形埴輪と同一である。全形が判明する資料は唯一396のみである。法量は口径34.4cm・頸部径13.5cm・基部径17.8cm・器高49.3cmで、円筒形埴輪に比して、かなり大型である。突帯は7条認められ、そのうち第1突帯と第5突帯は断面三角形で、円筒形埴輪で採用している断面台形状の突帯とは形状が異なる。第2突帯～第4突帯・第6突帯は円筒形埴輪と同様の断面台形状の突帯を採用している。また、口縁部下端は下方に拡張され、貼り付けられた突帯ではないが、外見的には断面三角形の突帯のようにみえる。他の資料(402・419・427・428・430・461)の口縁部下端も、風化や摩耗によって度合いが異なるが、下方に拡張されており、調整手法も断面台形状の突帯と同じである。この点からみて、口縁部下端の拡張は突帯として意図されたものと考えられる。口縁部各突帯間の間隔はほぼ均等だが、第4段・第6段はやや間隔が広がっている。第2段・第3段には2対1孔の円形透孔がそれぞれ千鳥に配置される。直径は4.5cm程度で、円筒形埴輪より小さい。焼成前に切り抜いている。内面の調整は、396の摩耗が著しく、詳細は不明である。また、その他の資料も風化・摩耗が顕著であり、全体的に焼成が不良な資料が多い。

### 底部設定技法

尾張型埴輪の底部設定技法は赤塚氏(※2)によって味美技法が提唱され、基部において底径を設定した際の針金状の痕跡が残るとされている。これに対して大塚氏(1994)(※3)からは基部における痕跡は埴輪を台から切り離した際に生じた痕跡であるとしており、底部設定技法には様々な見解があり、定着するにいたっていない。本稿では底部設定技法に対する見解を判断することはできないが、底部設定にかかわると思われる属性について、ここで述べておきたい。

基部に残る針金状の痕跡は、確認されたのは82点中6点でそれほど顕著な傾向を示していない。すべての個体において針金状の工具を用いたとは考えられないようである。確認できた針金状の痕跡(文中中図版3、第114、116～118図)のように溝状の断面ではなく、階段状の断面形状の痕跡を示すものが多い。また、それらの痕跡が正円状を呈するものはほとんど認められない。以上の結果から、底径をそろえるために一元的に針金状の工具を用いたとは考えにくい状況にある。しかし、法量値(第103図)を見る限り、ある一定の規格が存在したことは明らかであり、何か別の工具によって底部設定がなされた可能性が高い。その際に注目すべき点として、基部外面にハケ調整が認められないことがあげられる。基部外面はいずれの資料においてもハケ痕跡が認められず、1.5cm程度の範囲でわずかに横方向に何らかの工具が動いたような痕跡が認められる(写真図版65～69・第101、102図)。この範囲は何らかの工具と接点をもっていたことは確実であるが、いわゆるケズリ調整のように明確に砂粒が移動した痕跡を認めることはできないため、別の要因を想定する必要がある。ハケ調整がこの範囲の外側を起点に開始され、また断面形状にも変化点が認められる。以上の2点から考慮するとハケ調整が認められない範囲に底部設定をおこなうための何らかの工具が使用された可能性が高いと考えられる。そのために、この範囲にハケ調整が及ばず、断面形状に変化点が形成されたと思われる。その意味では淡輪技法に類似する手法ともみられる。本稿では調査で得られた資料の観察結果に基づ



409



410



413



410

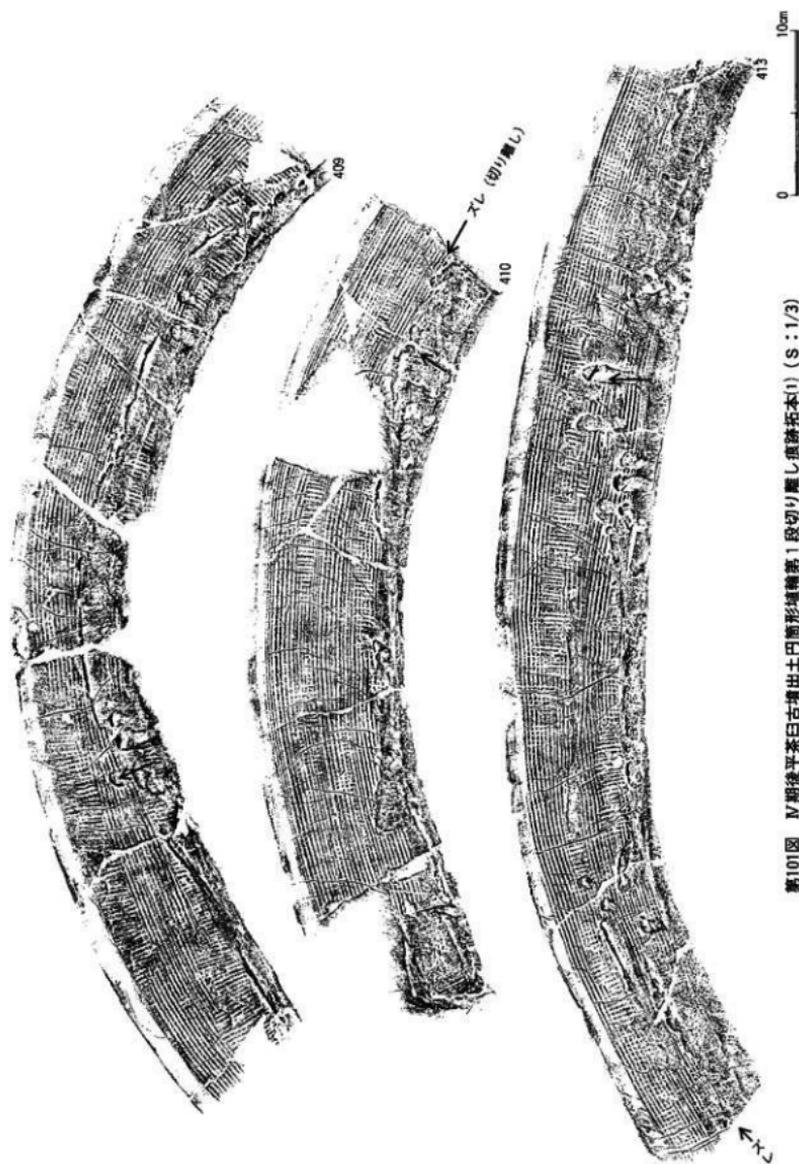


418



423

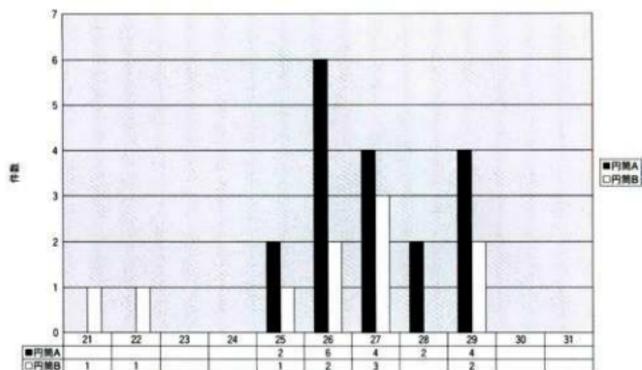
基部残存針金状痕跡  
文章中国版3 埴輪底部設定細部



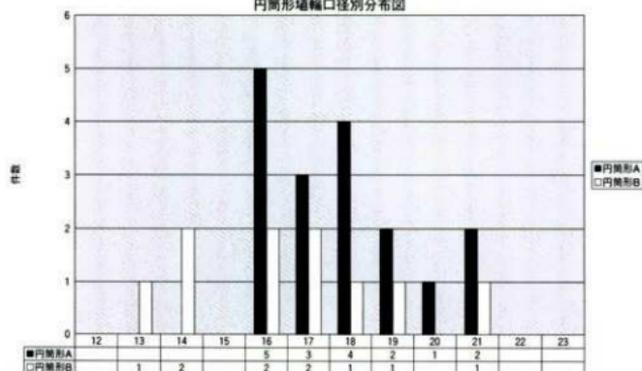
第101図 IV期後平茶臼古墳出土円筒形織物第1段切り直し痕跡拓本(1) (S:1/3)



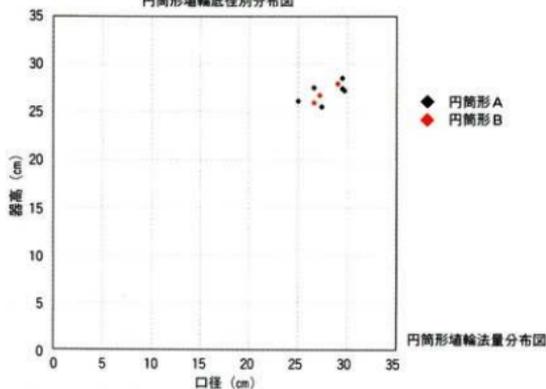
第102図 IV期後半茶臼古墳出土円筒形遺構第1段切り履し遺跡拓本(?) (S:1/3)



円筒形埴輪口径径別分布図



円筒形埴輪底径別分布図



円筒形埴輪法量分布図

第103図 円筒形埴輪口径径別・底径別・法量分布図

いて、以上のように底部設定について考慮したが、いくつかの技法が存する可能性もあるため、今後の資料の増加とともに再検討する必要があると思われる。

#### 切り離しについて(第101、102図)

前述した底部設定技法に伴う痕跡の可能性が高い範囲とは別に、第1段外面には指頭圧痕と紐状の工具と思われる痕跡が顕著に残る。この2点については相関関係が認められるため、以下にその理由に述べる。指頭圧痕は器面のある1カ所において顕著に認められることが多い。指頭圧痕の動きは下→上で、薬指を中心として数本の指頭が同時に器面に接している。このことから、この指頭圧痕は器面を整形・調整するためではなく、確認される位置からみて、埴輪を持ち上げる際に生じた痕跡の可能性が高い。さらにその周囲には何か紐のようなものが器面と接触し、下→上の動きによって残されたと考えられる痕跡が認められる。こうした痕跡は指頭圧痕を中心としてそれぞれ円弧を描きながら、相対する位置まで続くことを確認することができる。こうした痕跡も埴輪を持ち上げる際に生じた痕跡である可能性が強く、前述した指頭圧痕と同時に残されたものと考えられる。おそらく、第1段周囲に何か紐状の工具を廻して、それを持ち上げた際の痕跡と想定される。その点についてはハケ調整(旧)と紐状の工具の痕跡(新)との新旧関係によって明らかである。指頭圧痕がほぼ1カ所に集中してみられることから、相対する方向については紐状工具を何らかの手段で束ねていると考えられるが、残されている痕跡から類推することは困難である。こうした手法は断言できないが各務原市船山北古窯跡群(※4)にみられる中世陶器の大型品の底部付近でも確認することができ、類似する手法の可能性が高い。

※2 1991財団法人愛知埋蔵文化財センター「池下古墳」(財団法人愛知埋蔵文化センター調査報告書第24集)

※3 1994大塚康博(「味美技法」批判)[名古屋博物館 研究紀要]第17巻

※4 2000「船山北古窯群・船山北古窯跡・船山北遺跡」財団法人岐阜県文化財保護センター調査報告書第52集

#### (ii) 埋葬施設及び周溝内から出土した須恵器及び古墳との関わりを示すその他の土器(第104～106図)

ここでは、主に須恵器を中心に述べるが、本来、古墳あるいは埋葬施設内に設置されていたが周囲に流失してしまっただと考えられる須恵器についてもここで取り扱う。また、埋葬施設内の盗掘行為に関連する資料もここで取り扱う。

須恵器は畿内産(343・348)ものと猿投産(340・341)の2種が認められ、その大半が坏身(341・342)・坏蓋(339・340)のセットと有蓋高坏(343・346・347・348)と鈕付蓋(338・345)のセットと思われる。前者は猿投産が多く、後者は畿内産が多い。いずれも5世紀末～6世紀初頭の年代観を示すと考えられる。坏蓋(339・340・344)は天井部全体に回転ヘラケズリがみとめられ、天井部と口縁部との境界が明瞭である。口縁端部には凹面を形成している。坏身(341・342)は口縁端部の内傾面が顕著で、口縁部が直立する。受部が鋭く外上方に突出し、底部はやや平坦気味となる。底部の回転ヘラケズリは全面的いしは3/4程度におよぶ。338・345は有蓋高坏の蓋。鈕の中央は浅くくぼむ。その他は坏蓋と同様である。346～348は有蓋高坏の坏身で、脚部には1段3方向の透孔がみとめられる。347には脚部にカキ目がみられる。脚部端部は直立ないしは内傾するよう形成されている。349～352は甕。外面には平行タタキ目がみられる。内面は当具痕をナデ消している。いずれも同一個体と思われる。337は脚付短頸壺。セットとなる蓋は336である。337の頸部付近に336の口縁部が軸着

しているため、336をかぶせた状況で焼成されたと考えられる。337は短く口縁部がほぼ直立して立ち上がり、胴部はほぼ球状の形状を示すものの、最大径はやや上位に位置し、肩部を形成している。肩部には沈線3条と波状文が2帯みとめられる。沈線間を波状文が埋めている。胴部外面の下半には平行タタキ目がみとめられる。脚部は緩く端部に向かって外反し、端部が肥厚しながら内傾面を形成する。2段の透孔がみとめられ、上段の透孔は三角形、下段の透孔は長方形の形状で4方向にあげられている。各透孔間には3条1組の沈線によって区画され、脚部と胴部との境には断面三角形の突帯がめぐる。383は天井部の一部及び紐部を欠損している。紐部は338のような形状を示すと考えられる。天井部と口縁部との境は2条1組の沈線によって形成している。337・338は胎土からみて畿内産ではなく、猿投産に類似すると考えられる。以上の須恵器が後平茶臼古墳の構築ならびに埋葬に関わる須恵器と想定している。いずれも、5世紀末～6世紀初頭の年代観を示すと考えられる。しかし、すべて埋葬に関わるとするには出土状況に問題点が残る。それは出土地点が造り出し部西側周溝に集中している点である。一部に埋葬施設と造り出し部とで接合状況を示す遺物はあるものの、大半が単独で周溝を中心とする接合状況を示している。また、産地によって出土地点が異なる様子も認められない。かなりの資料が二次的な移動を伴っている可能性が高いと考えられるが、すべてを埋葬施設から二次的移動を受けたと判断するには無理がある。埋葬施設のほかに周溝にも須恵器を配置した可能性があることも考慮する必要がある。

353～355は盗掘に関わる土器資料と判断しているものである。353は灰釉陶器で、盗掘坑から出土しており、盗掘に関連する資料として断定可能である。時期は11世紀代とみられる。354は山茶碗で、出土地点が後平茶臼古墳に近く、山茶碗は後述するSZ01でも出土しているが、それよりも古くこの資料1点しか出土していないので、ここに掲載することにした。時期は12世紀代とみられる。355は須恵器の鉢。出土地点、単独出土など354と同様の理由で、ここに掲載した。時期は8世紀後半代である。354・355は盗掘行為に関わるとは断定できないが、後平茶臼古墳構築後に人為的行為が加わった可能性のある時期を示唆する資料と考えられる。

## (b) 埋葬施設から出土した鉄製品 (第107～109図)

### 馬具

本墳出土の馬具は鍔 (387)、鉸具 (385、386) がある。主体部と盗掘坑から出土しているがいずれも盗掘を受けているため埋葬位置からは動いている。387は鉄製の木芯鉄板張輪鍔である。全面が厚さ1～2mmの鉄板で覆われ、全体に1.2～1.6cmの間隔で鋸を打っている。一部には織布痕の付着がみられる。平面形は円形ではなく裾が広くなり縦方向がつぶれた形をしている。踏込部は幅広い作りになっており、滑り止めに直径9mmの半球形の鋸頭を持ち、長さ約1.2cmの鉄鋸が6つ残存している。5世紀末頃のものに類似する(※1)。木芯鉄板張輪鍔は5世紀中頃の中八幡古墳から出土している一対について県内2例目の出土となる。鉸具は2点あり385は埋納施設内から、386は主体部から出土している。2点とも鉄製で2軸式、長さ約6cm、幅約5cm、厚さ約6mmである。方形の鉄棒でつくられていると思われる。

### 鉄鎌

主体部からの出土しているが盗掘を受けているため埋葬位置からは動いているものと思われる。鉄

鎌は26本あり、このうち356は短頭鎌で三角式の鎌身部片、357～381は長頭鎌である。356は6世紀後半のものに類似する(※2)。357～358は片刃式の鎌身部片、359～366は頭部片、367～377は、台形状の頸部を有する頭部～茎部片、378～381は茎部片である。頸部片はすべて台形状をしており、6世紀末葉に頸部部の形状が台形状から棘状突起に短期間のうちに変化する(※2)ことから、それ以前の時期のものと思われる。また頭部片には木質とその上に樹皮状の細い皮が巻き付けてあるものが残存しているものがある。木質の残っているものが5点、樹皮巻の残っているものが8点、木質と樹皮巻が残っているものが2点ある。

#### 刀子

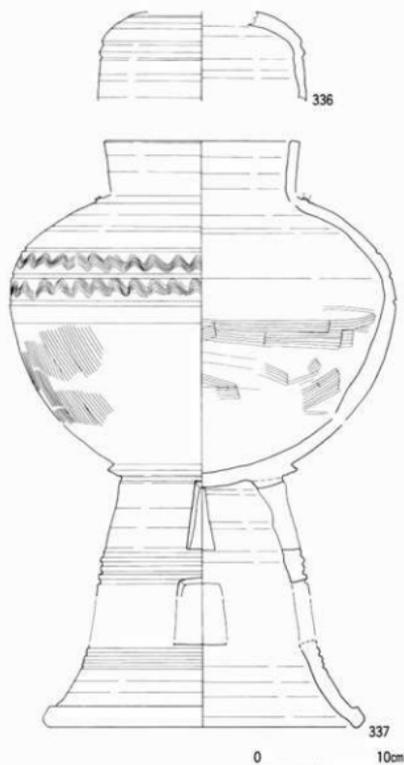
主体部から出土しているが盗掘を受けているため埋葬位置からは動いている。刀子は3点(382～384)出土している。382、383は刀先端部、384は身部で鞘木質が残存している。

※1 1996南山大学大学院考古学研究室「愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究」南山大学大学院考古学研究報告第5冊

※2 2001高田康成「鉄鎌から見た美濃の古墳の地域性」『美濃・飛騨の古墳とその社会』

#### (13) 墳丘盛土中から出土した遺物

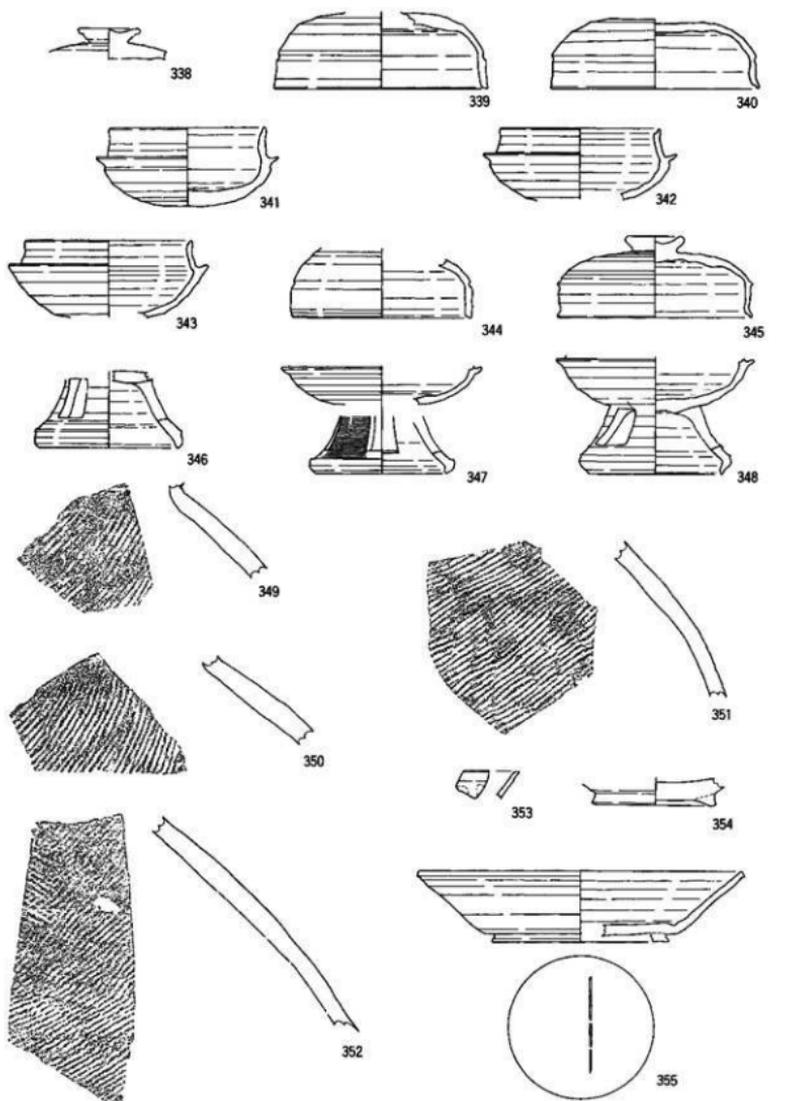
すべてE系の盛土から出土したものである。列点文・直線文をもつ鉢(470～475)、器台A類(484)、器台(478・479・482・485)、高坏A類(481・483・487)、甕C1類(476)などがみられる。時期は弥生時代終末期と考えられ、後平遺跡の出土資料と大差ない。おそらく、古墳築成に伴って当該期の遺構が破壊され、墳丘に包含されたものと思われる。後平遺跡の住居出土資



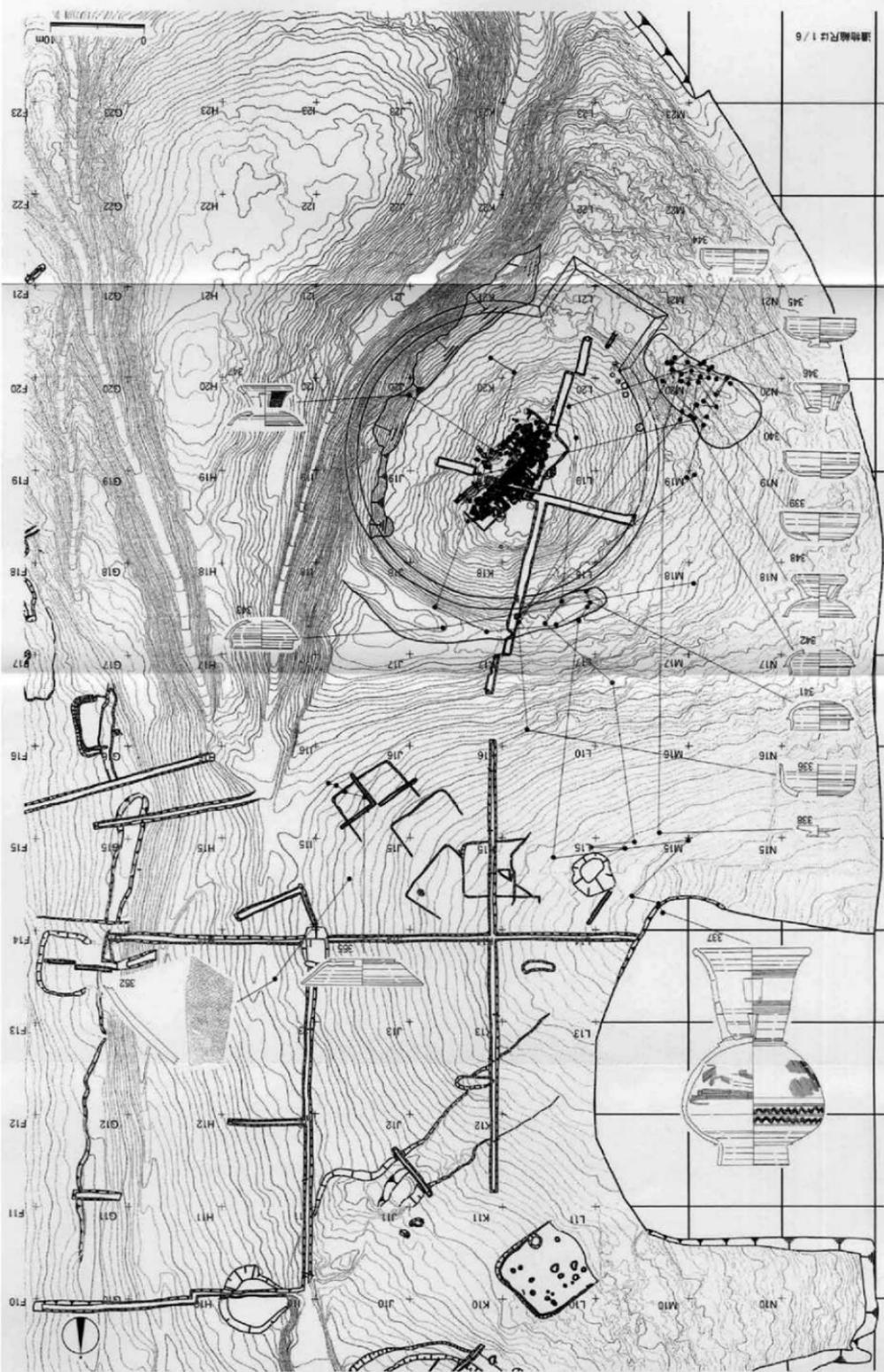
第104図 IV期後平茶臼古墳出土須恵器(1) (S : 1/3)

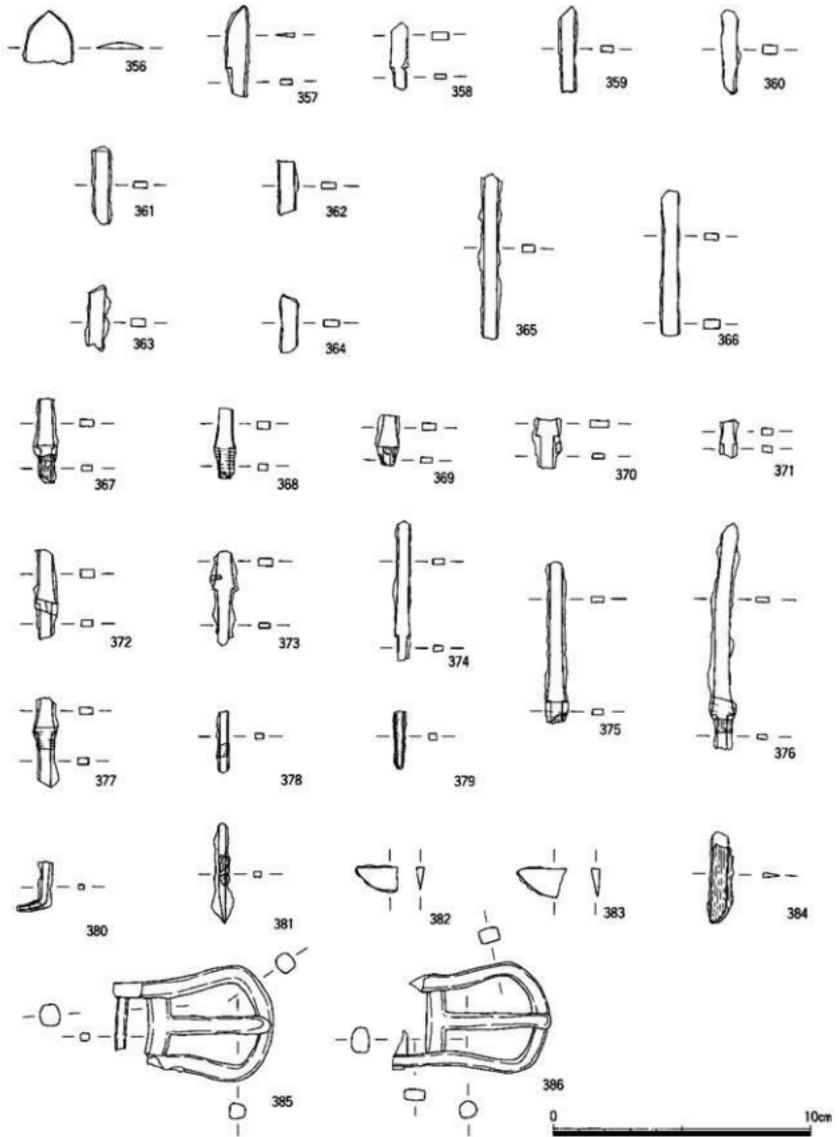


後平茶臼古墳 作業風景

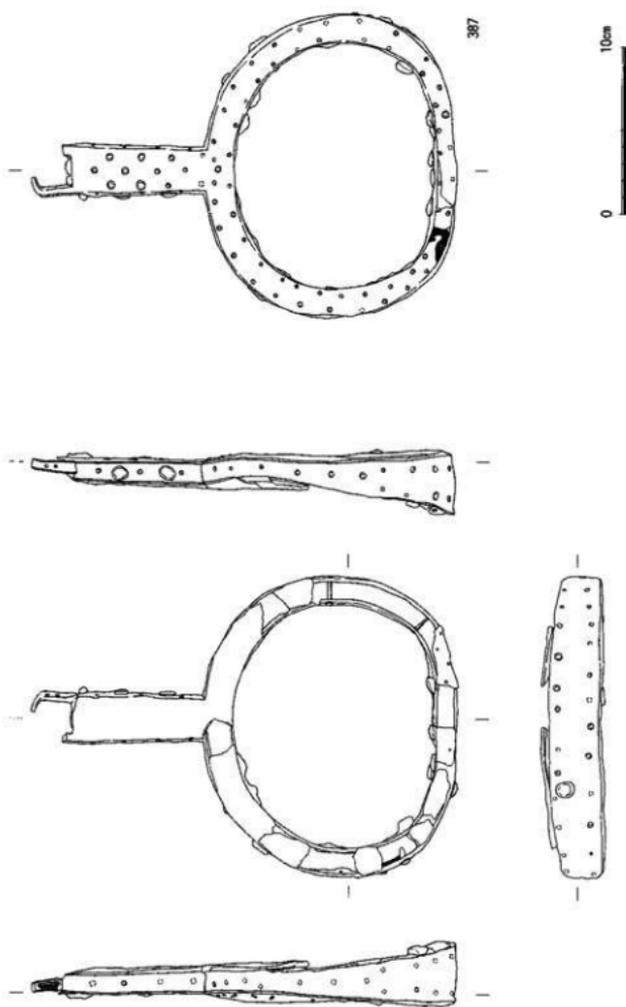


第105図 N期後平茶臼古墳出土須恵器(2) (S : 1/3)



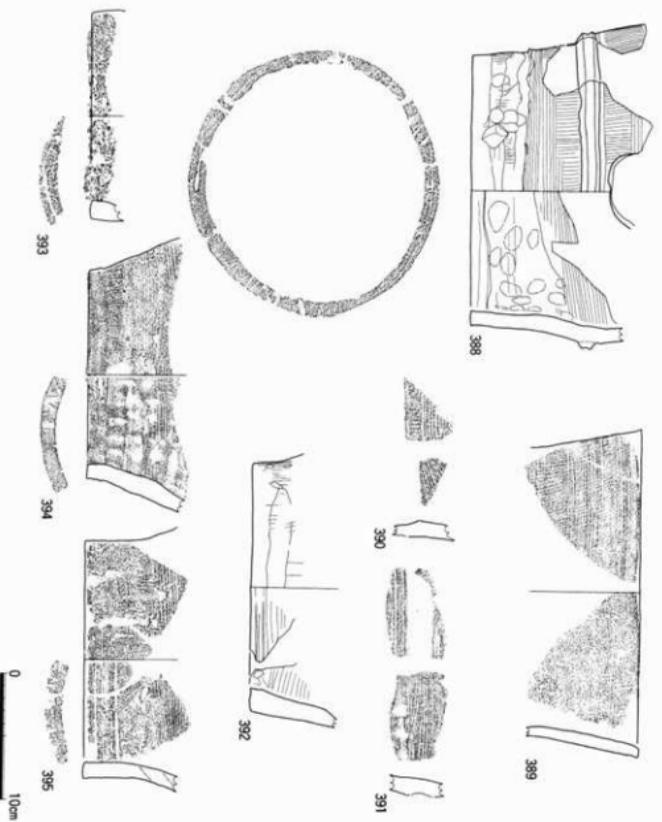


第107図 後平茶臼古墳出土鉄器 (S : 1/2)



第108図 IV期後平茶臼古墳埋葬施設出土土鏡 (S : 1/3)

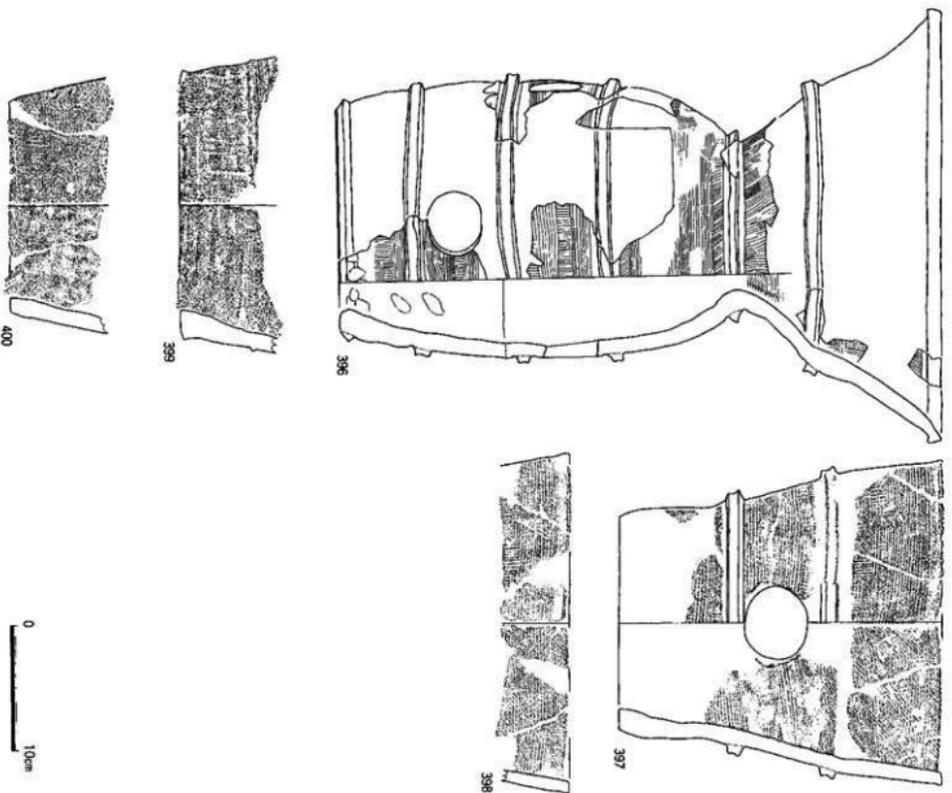




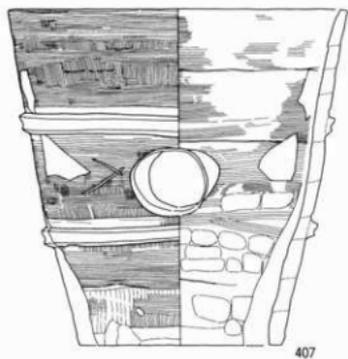
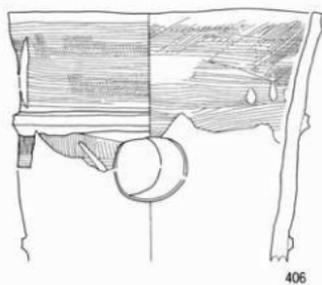
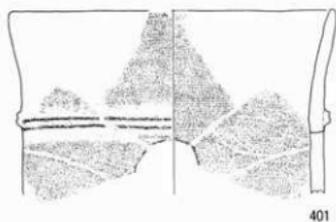
第110図 IV期後平茶臼古墳外羨施設出土土埴輪 (S : 1/4)



後平茶臼古墳 作業風景

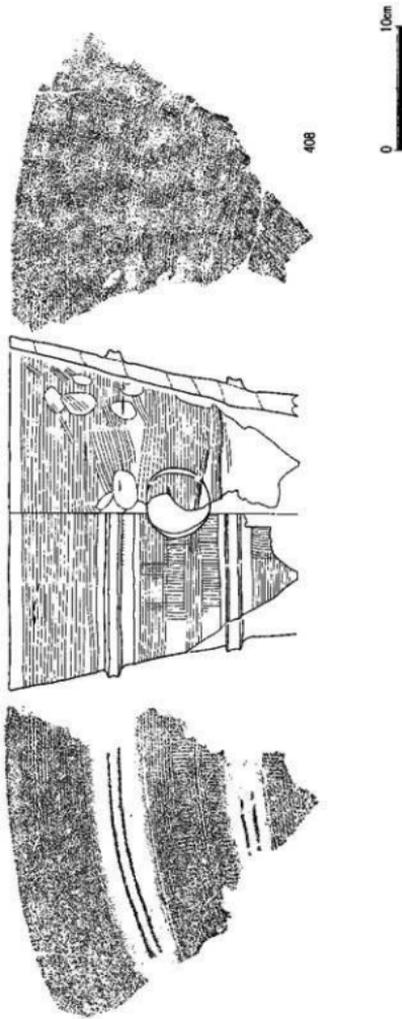


第111図 IV期後平茶臼古墳墳丘出土遺構① (S:1/4)

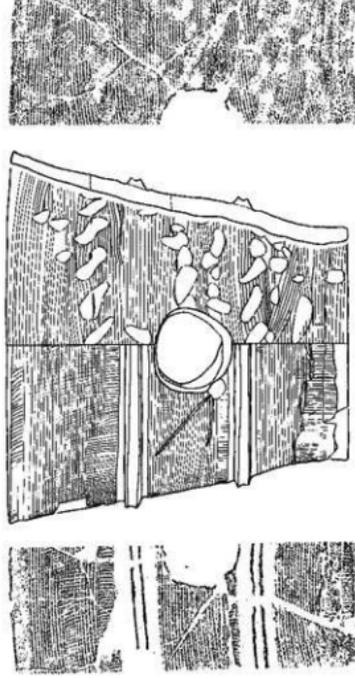


0 10cm

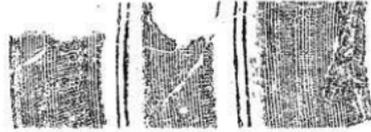
第112図 N期後平茶臼古墳墳丘出土埴輪(2) (S:1/4)



第113図 IV期後半茶臼古墳境丘出土土埴輪(3) (S : 1/4)



409

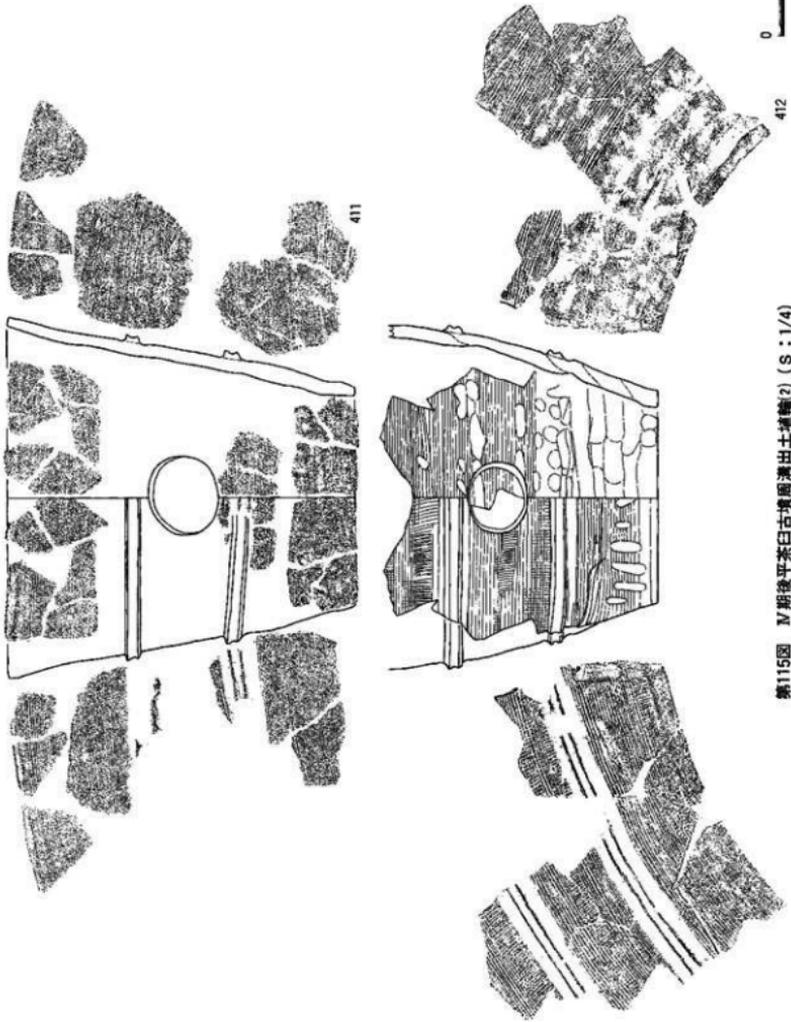


410

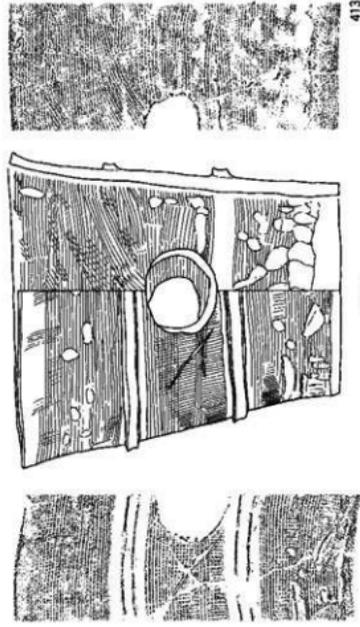


0 10cm

第114図 IV期後平茶臼古墳周溝出土埴輪(1) (S:1/4)



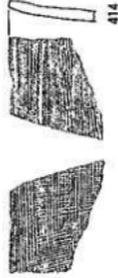
第115図 IV期後平茶臼古墳周溝出土土埴輪2) (S : 1/4)



413



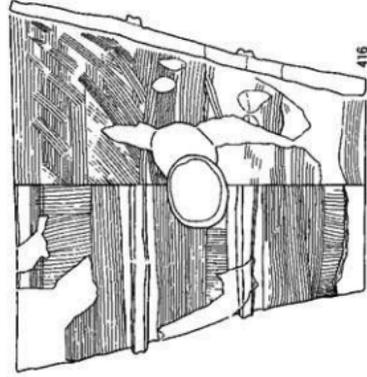
0 10cm



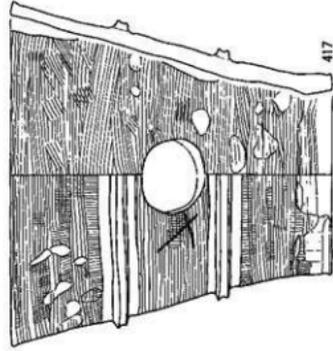
414



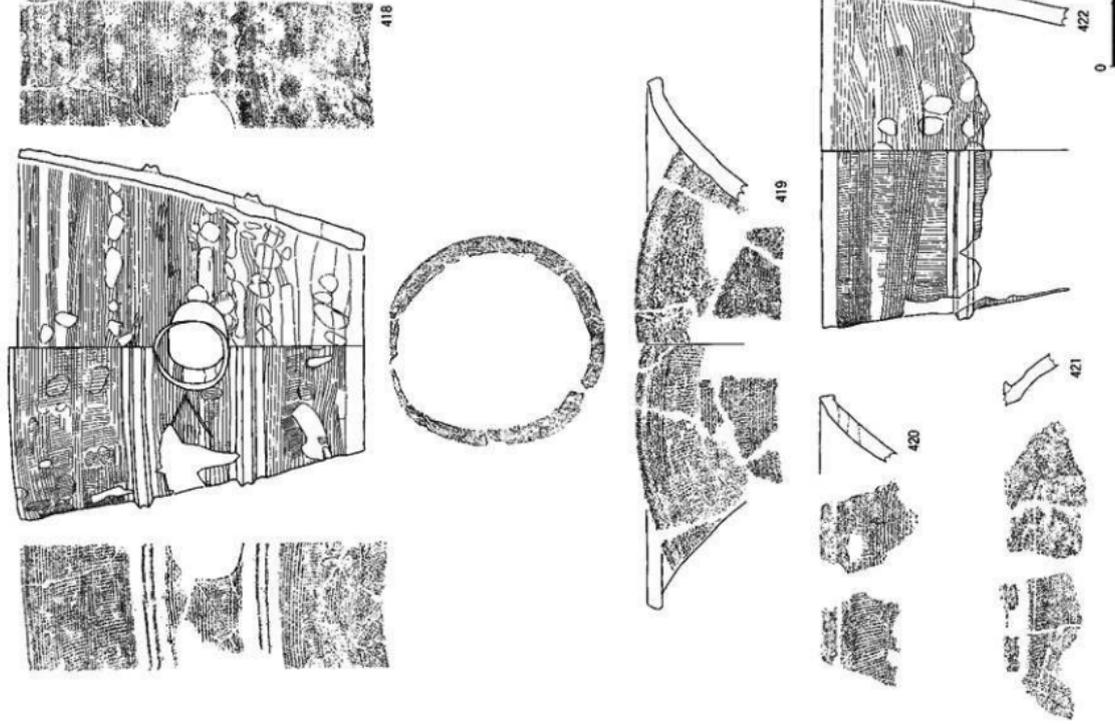
415



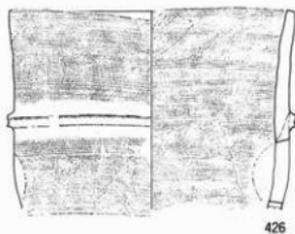
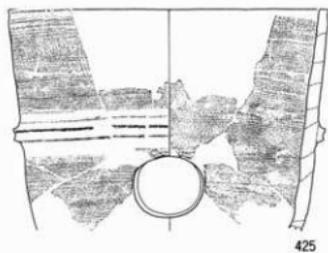
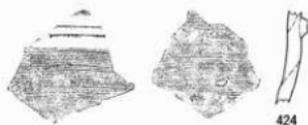
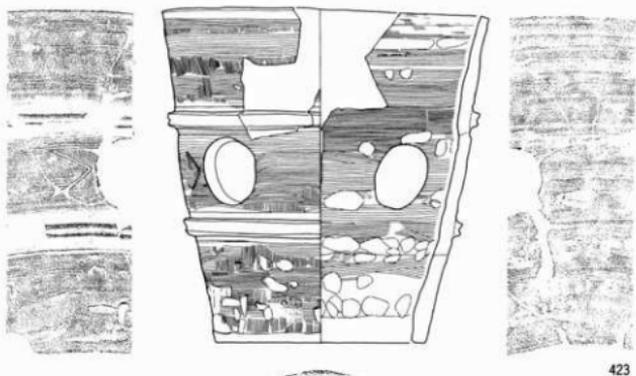
416



417

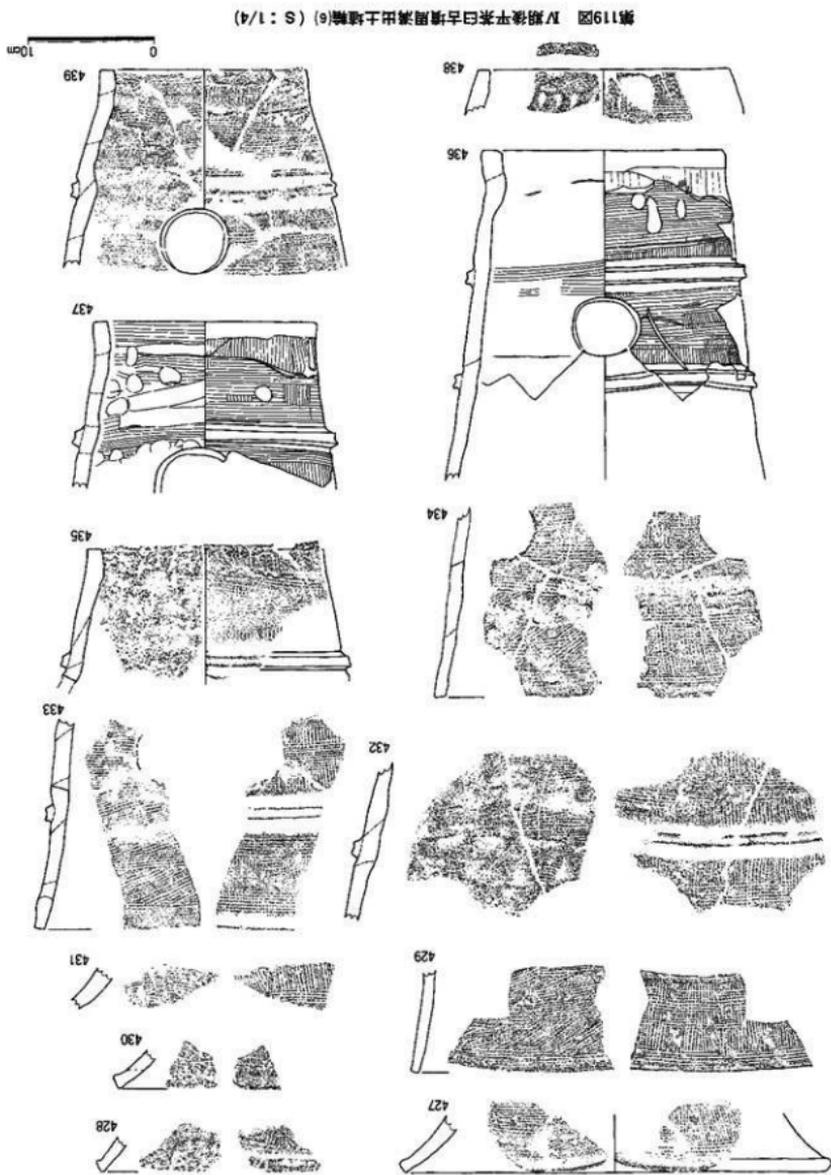


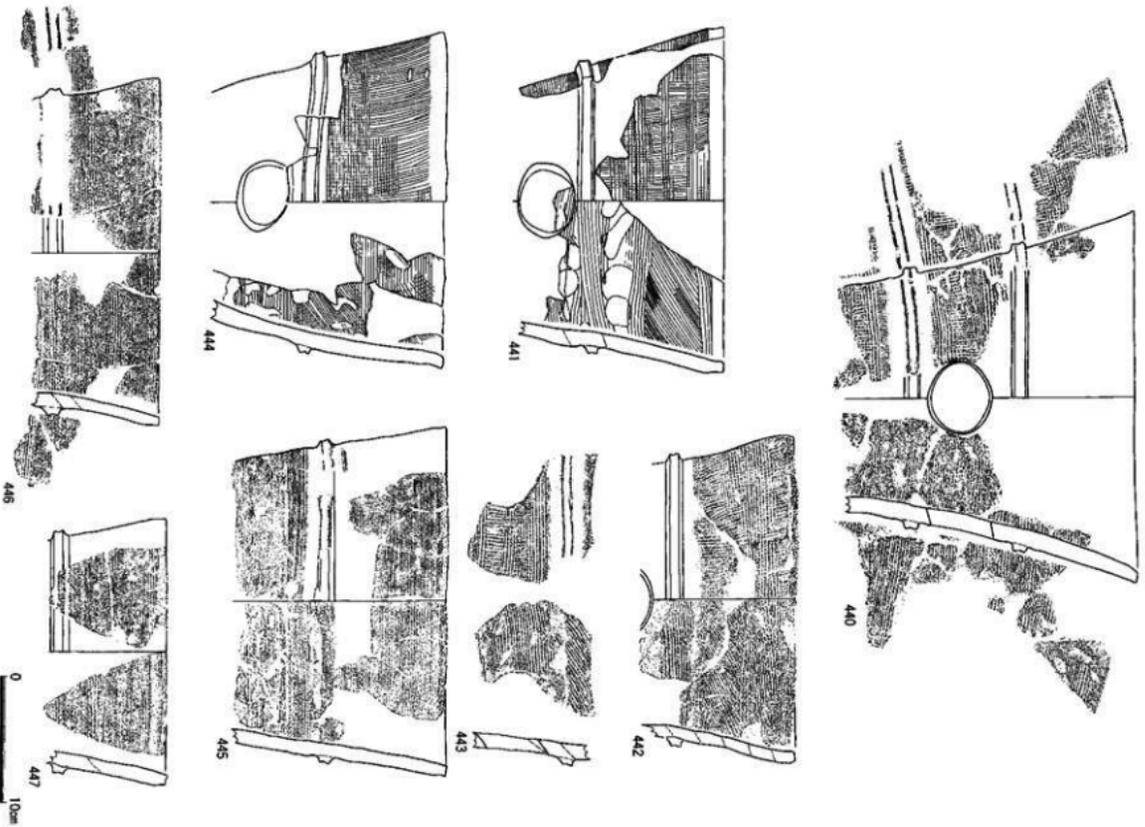
第117図 IV期後平茶臼古墳副溝出土埴輪(4) (S:1/4)



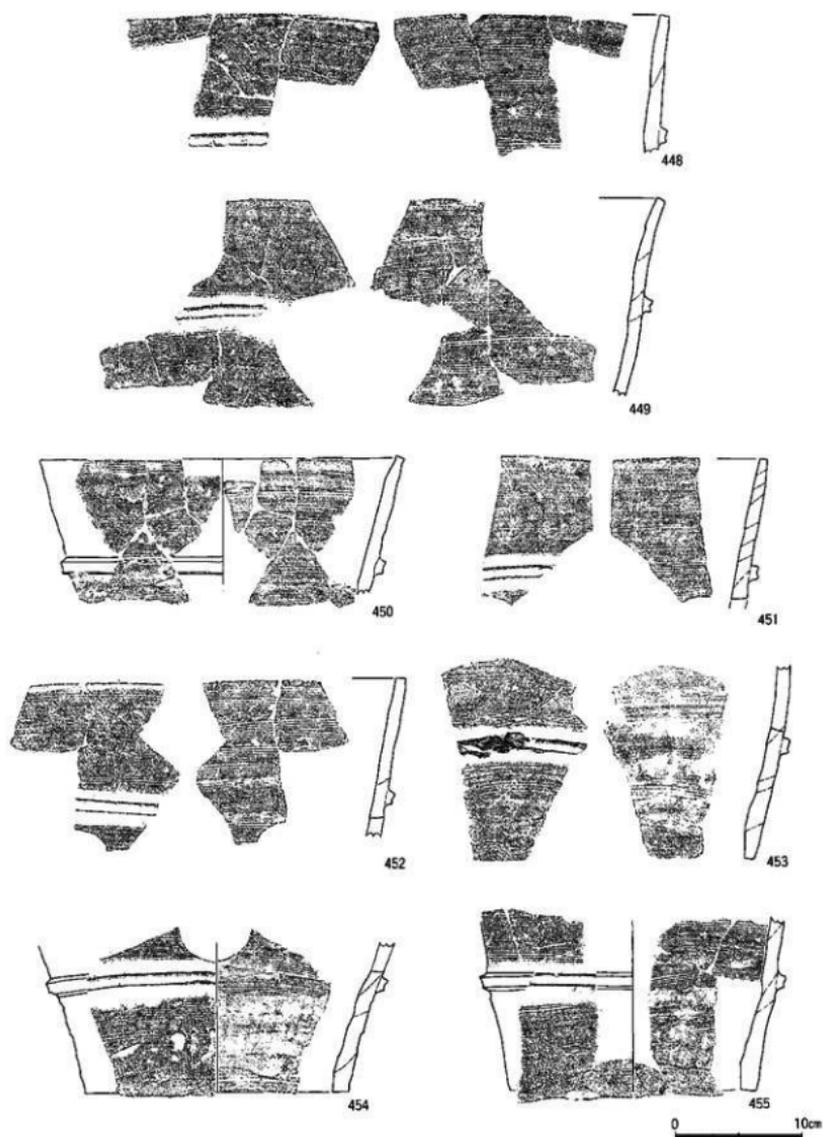
第118図 IV期後平茶臼古墳周溝出土埴輪(5) (S : 1/4)

0 10cm

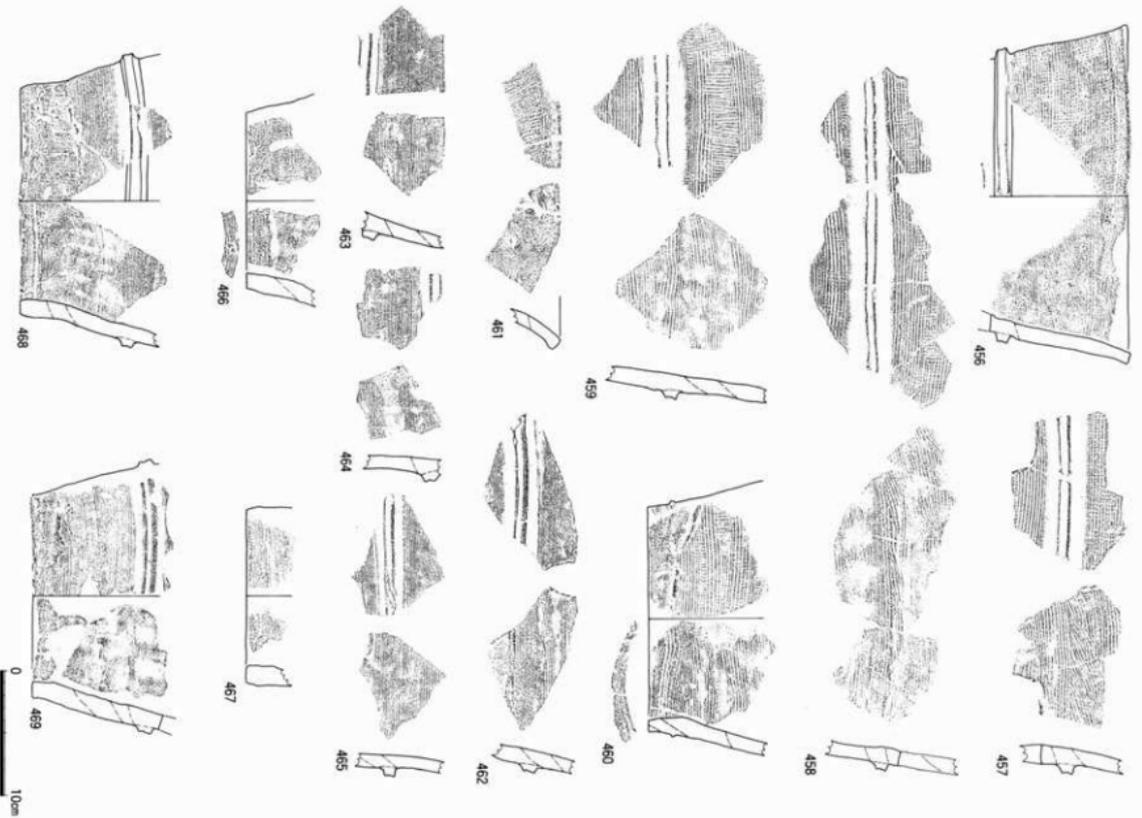




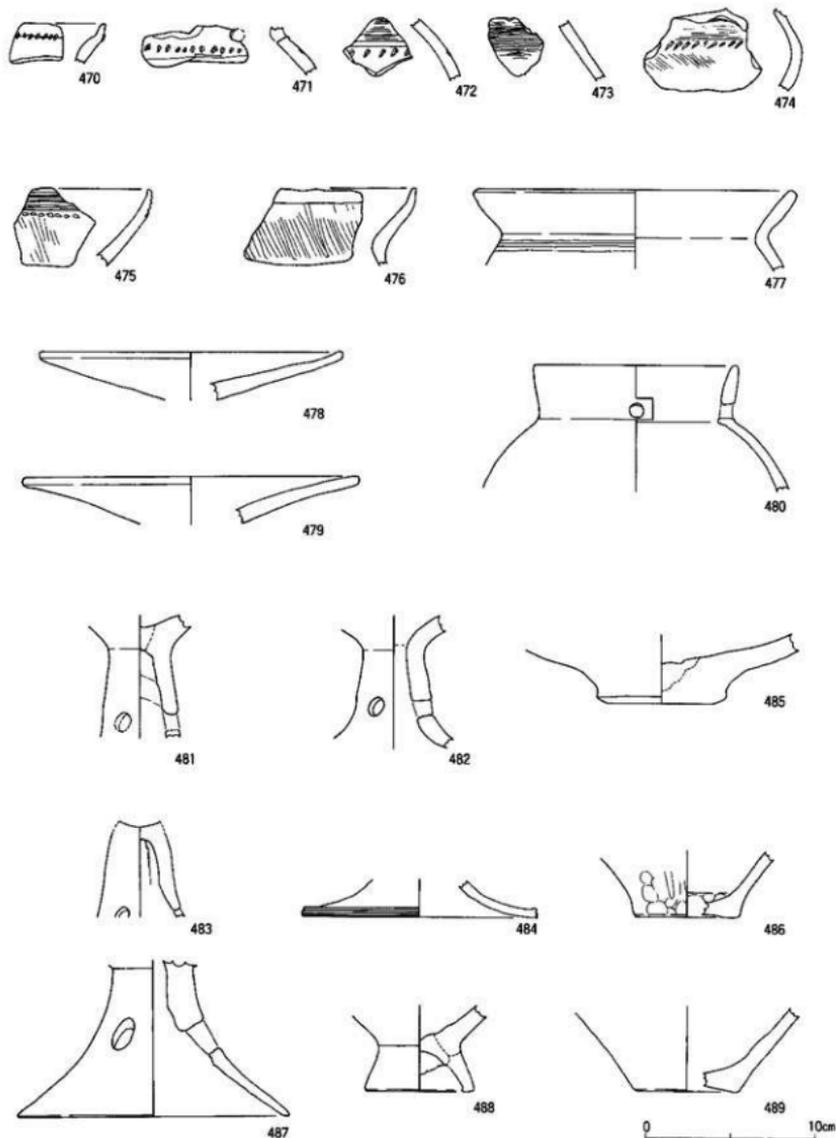
第120図 IV期後半赤白古墳周溝出土埴輪(7) (S:1/4)



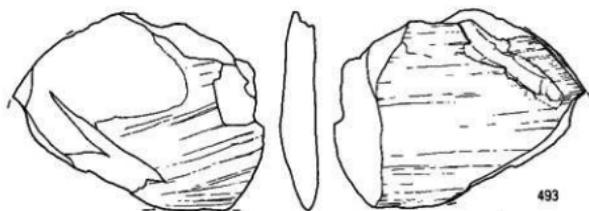
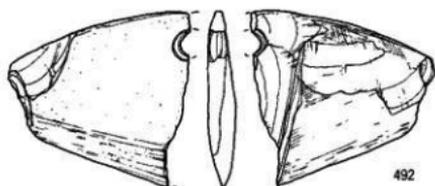
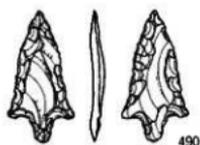
第121図 IV期後平茶臼古墳周溝出土埴輪(6) (S : 1/4)



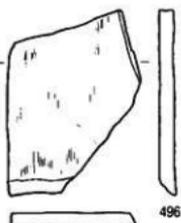
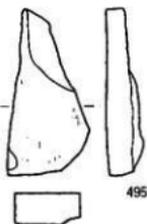
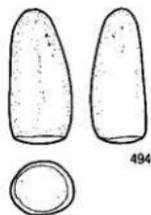
第122図 IV期後平茶臼古墳周辺出土土埴輪 (S:1/4)



第123図 IV期後平茶臼古墳墳丘出土土師器（S：1/3）



0 5 cm



0 5 cm

第124図 M期後平茶臼古墳墳丘出土石器 (S : 2/3、1/4)

料のうちで、あまりみとめられなかった資料として480・488があげられる。480は短く口縁部が直立する甕で、頸部に1対の穿孔がみられる。488は台付甕である。地域的には平広甕中心であるので、例外的な資料である。今回の調査では他にSBA01出土資料とあわせて2点しか確認できていない。墳丘から出土した資料は比較的時期差のない資料と考えられ、石器も伴出していることから良好な資料と想定される。

#### 弥生時代以降の石器（第124図）

490は有茎石鏃で下呂石製である。ハードハンマーの押圧剥離で加工している。491は磨製石鏃で凝灰岩製、基部に穿孔痕がある。492は石包丁断片で背面が自然面で剥片素材である。回転穿孔による両側からの穿孔痕がみられる。本格的な石包丁の断片で頁岩製である。493は石包丁断片で片岩製である。破損が著しく、穿孔痕が確認できない。494は石鏃で稜線の発達しない蔽打（使用痕）の痕跡がみられる。対象物は柔らかいと推定される。495は砥石で砂岩製である。加工対象は不明である。496は砥石で砂岩製、加工対象は不明である。

備考：石包丁について。

石包丁は器体中央につく穿孔痕を指標に2種類ある。両側から回転穿孔で2箇所の穿孔痕をもつ石包丁と、蔽打で穿孔し、1箇所の穿孔痕をもつ石包丁がある。前者は近畿地方の弥生前期から出現し、後者はより新しく、近畿地区の周縁に分布するようである。

また使用痕でコーングロスが付いている弥生時代の石器は石包丁だけでなく、大形の貝殻状剥片石器（直縁刃石器）や、打製で穿孔痕のない石包丁形態の石器もある。石包丁だけでなく、コーングロスの付く多様な石器の分析が、弥生時代の地域文化を明らかにする重要な指標であろう。後平遺跡の2点の石包丁もこの観点で資料の類例に加えられるべきである。

#### 後平1号古墳

##### (1) 調査前の状況と古墳の残存状況

試掘確認調査以前の踏査では雑木林に覆われ、古墳の存在を示す墳丘あるいは石室の崩壊による石材の散布はまったく認められなかった。試掘確認調査の時では、試掘Tr4の北端が一部、本古墳に及んでいたが、その際には古墳が存在するとの認識はもちえなかった。しかし、試掘Tr4北端からさらに北側ではやや地形が墳丘状の高まりをみせていたため、谷地形のなかにあつて不自然な様相を示し、その点については疑問が残った。この高まりについては試掘Tr4の断面観察からは人為的な盛土の存在を示す痕跡を確認できなかったため、人為的行為によるものではなく自然地形ないしはII層の流土が堆積したとの見解にたち、古墳との予測をもたなかった。

しかし、本調査の実施に伴い古墳をめぐる周溝の存在が確認され、すでに墳丘すべてが流失した滅失古墳の存在が明らかとなった。周溝についての記述は後述するが、本調査時における周溝の位置は現況測量の等高線に微妙に反映されている（第3図）とみられ、それが試掘確認調査時における墳丘状の高まりをみせる要因として作用したと思われる。本古墳の確認は県遺跡地図に記載されていない新発見の古墳であるため、本発掘中に県教育委員会と富加町教育委員会との協議により、その後、後平1号古墳と呼称することになった。

## (2) 古墳の立地

本古墳は後平茶臼古墳の北側にある谷状地形の東端を占め、さらにその北側に続く丘陵地形との変換地点にある。その標高は92m前後である。基盤は風化した砂岩岩盤である。眺望は北東側は丘陵地形によってさえぎられるが、それ以外は開けている。

## (3) 墳丘の形状と規模・埋葬施設

本古墳はすべて墳丘が流失しており、それに伴って埋葬施設も失われていると考えられる。そのため、埋葬施設の具体的な様相あるいは正確な墳丘規模を明らかにすることはできなかった。確認した周溝から想定すると墳丘の形状・規模は直径10m前後の円墳と推測される。なお、第126図にはJ8グリッドにおいて埋葬施設らしき土坑が掲載されているが、これは風倒木痕であり埋葬施設ではなかった。

## (4) 周溝の形状と規模

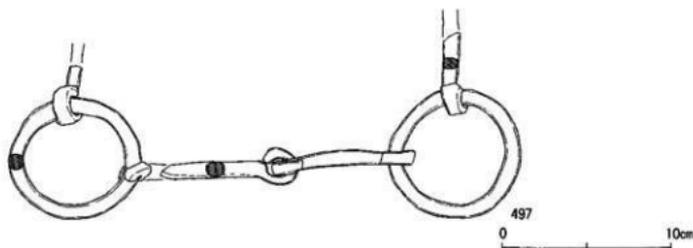
周溝はK8・K9・J9・I9グリッドにおいて確認した。その平面形は三日月状を呈し、とくに東端は自然流路によって削平され、本来の形状は不明である。また、Ⅲ期の遺構SBA01・02・04を掘削して周溝を形成している。その他、一部ではV期の遺構の削平を受け複雑な新旧関係が認められる。幅は0.5m前後、深さは確認面から0.2m前後である。確認面から上の流失部分を想定するなら、本来はもう少し幅・深さとも規模が大きかったものと考えられる。周溝内の埋土はⅢ層に類似する黒褐色土で前述したⅢ期の遺構との識別が困難であった。なお、周溝内から本古墳に関係する遺物はまったく出土しなかった。

## (5) 出土遺物

出土遺物は素環鏡板付轡で、本古墳に伴う遺物はこの1点のみである。轡(497)はJ8グリッドから出土したが、層位的には表土直下で埋葬施設・墳丘が失われている本古墳において、その層位については信用性に欠く遺物である。しかし、轡の年代観ならびに出土位置からみて本古墳に伴う蓋然性が高いことから、ここでは本古墳に帰属する遺物と判断して以下の記述する。

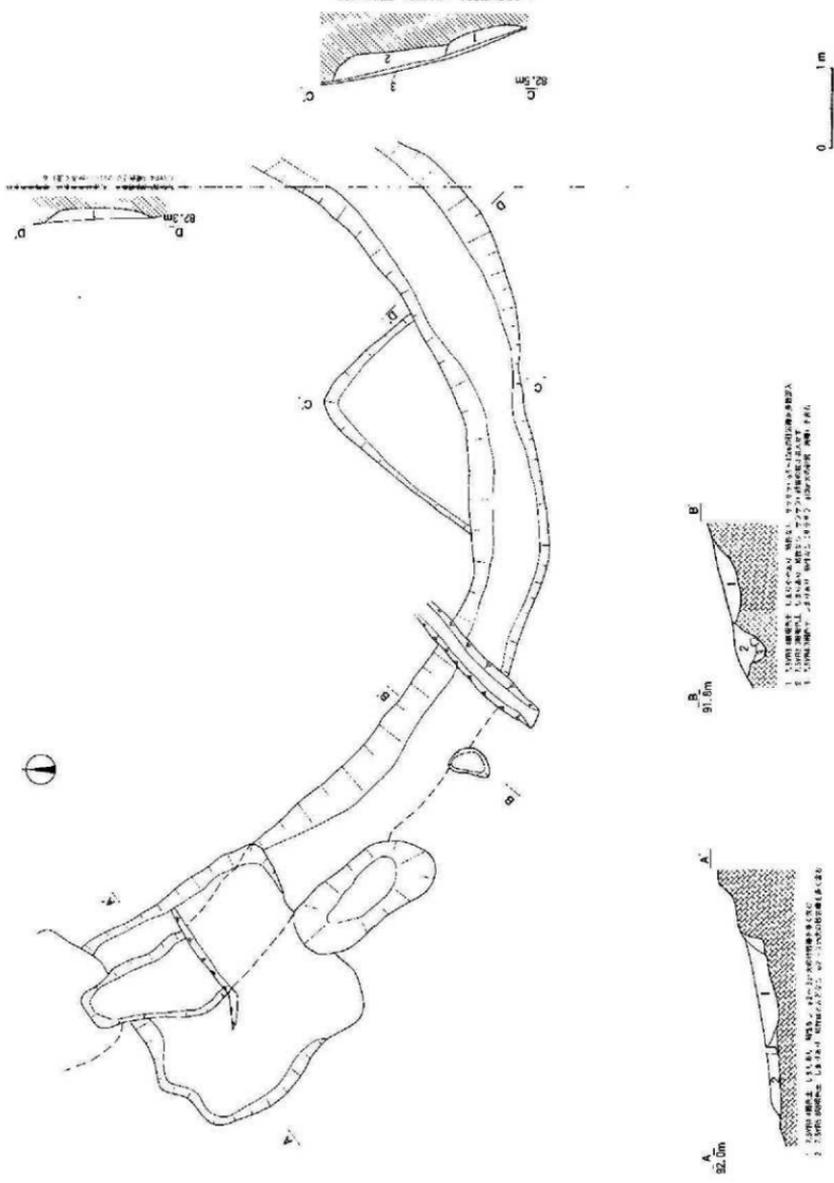
497は鉄製の素環鏡板付轡である。鏡板の形状は円形で環径は左8.0cm、右8.2cm、鉄棒径1cmである。銜は2連式で長さは16cmである。引手は欠損しており長さは不明である。銜と引手は別々に鏡板と連結している。轡の形状から時期は6世紀前葉～中葉と思われる※1。

※1 1996南山大学大学院考古学研究室『愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究』南山大学大学院考古学研究報告第5冊



第125図 IV期後平1号古墳出土轡(S:1/3)

Этот чертёж выдан в Институте истории, философии и литературы  
 Академии наук СССР 1988 г. 12.12.88



第126图 1号古坟平原地区・断面图 (S:1/50)

## 第5節 V期の遺構と遺物（中世）

主にⅡ層掘削中に検出された遺構を報告する。遺物が伴わないものが大半を占めることから、帰属時期の判断が困難だが、SZA01からは山茶碗が出土し、帰属時期の判断が可能である。SZA01はその形状から墓の可能性が高く、これに類似する土坑SZA02・SZA03・SZA04・SZA05の計4基が認められる。この4基の土坑については遺物を伴わないが、SZA01と類似性が高いものと判断してV期の遺構として報告する。また、SKA17・PA23も遺物を伴わないが、後平1号古墳の周溝を掘削しているため、後平1号古墳築成以降の遺構であることは確定している。このため、V期の遺構として確証は希薄であるが、ここで報告する。

### SKA17（第128図）

K9グリッドに位置する。後平1号古墳周溝掘削中には認識することができず、周溝の底面で本土坑の平面形を確認した。確認面は砂岩岩盤上である。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸1.87m・短軸0.83mをはかる。深さは確認面から40cm程度で、本来、50cm程度はあったものと推測される。断面形は緩いV字形で底面の平坦面は狭い。埋土は後平1号古墳周溝埋土と類似する土層が堆積しているが、下層に砂岩岩盤が風化した土層が認められる。主軸方向はN-37°-Wをはかる。

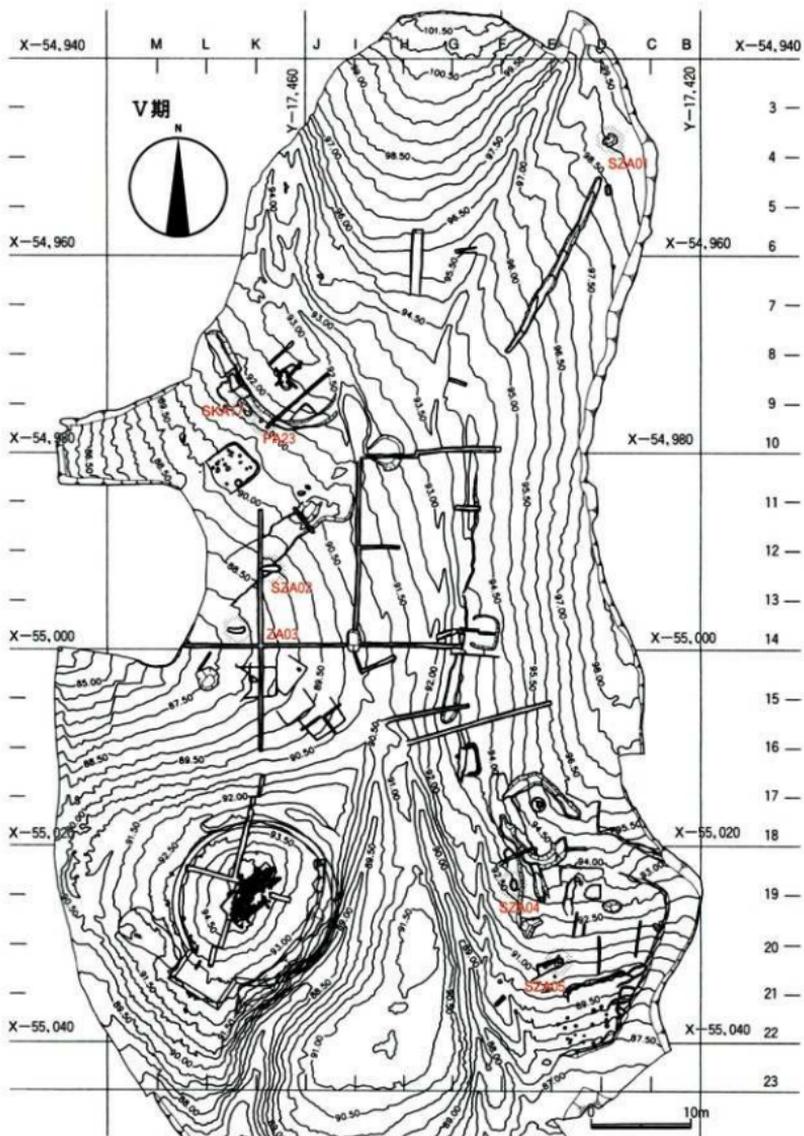
### PA23（第128図）

K9グリッドに位置するピット。平面形は不整な楕円形で、長軸25cm・短軸17cmをはかる。PA23もSKA17と同様、後平1号古墳周溝底面で確認した遺構で、周溝検出面ではその存在が識別できなかった。確認面からの深さは15cm程度認められる。埋土の状況はSKA17とほぼ同様であることから、遺構の埋没時期はSKA17とちかい可能性がある。

### SZA01（第130図）

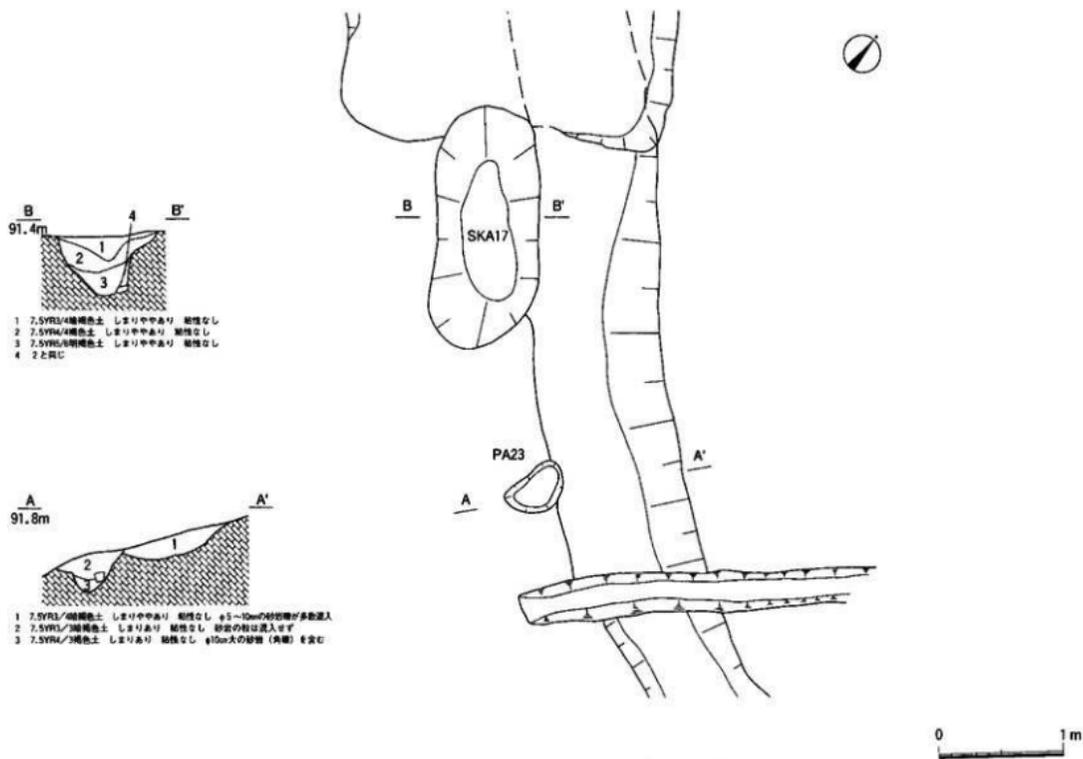
C4グリッドで確認した遺構で、前述したように確認面はⅢ層中だが、おそらくⅡ層中から遺構が掘削されていると考えられる。平面形は隅丸長方形にちかく、主軸方向はN-8°-Eを向く。規模は長軸2.09m・短軸1.06m・深さ0.1~0.2mをはかる。埋土はほぼ単層で細かな炭混じり黒色土で、風化した砂岩礫も認められた。床面より約10cm浮いた状態で、5~10cm程度の細かな炭化材と山茶碗を検出した。炭化材は中央やや北側の範囲に集中する傾向が認められるものの、とくに規則性があるような配置は認められない。山茶碗は中央付近に偏る様相をみせているが、細かな破片については重機掘削中に誤って移動させてしまったものであり、本来の位置にはない。信用できる位置あるものは第129図499~502のみである。また、掘削中には骨片らしきものが出土し、洗浄したところ歯であることが判明した。SZA01は炭化材・遺物の埋納・歯の出土からみて墓の可能性が高いと考えられる。

出土した山茶碗は碗2点、皿4点が出土した。498は小皿で時期は不明、499は小皿で白土原1号窯式、500は小皿で丸石3号窯式か窯洞1号窯式、501は小皿で白土原1号窯式、502は山茶碗で白土原1号窯式~明和1号窯式、503は山茶碗で白土原1号窯式期にそれぞれ比定する。ほとんどが北部系である。

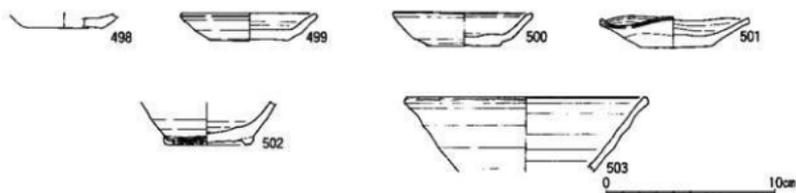


IV期

第127図 V期遺構配置図 (S : 1/500)



第128図 V期SKA17、PA23平面図・断面図（S：1/40）



第129図 V期SZA01出土遺物 (S : 1/3)

## SZA02 (第130図)

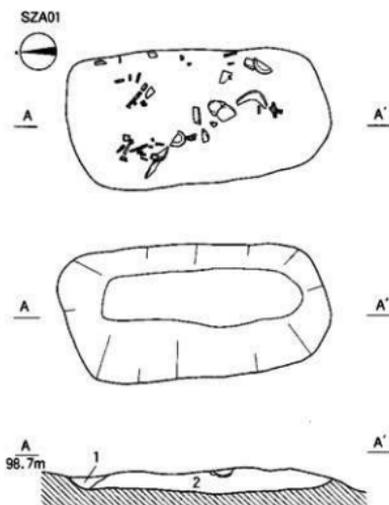
J12グリッドで確認した遺構で、確認面はⅢ層の上面である。遺構の遺存状況が悪く、谷側の壁面はほとんど認められず、おそらくⅡ層の堆積に伴って流失していると考えられる。平面形の確認は炭混じりの埋土であったことにより、識別が可能であった。平面形は不整な楕円形を呈しているが、山側の東壁の状況を流失した谷側に対応させると隅丸長方形になることから、本来の形状は隅丸長方形であった可能性がある。平面形の規模は長軸2.15m・短軸0.84mで、深さは確認面から約10cmである。主軸方向はN-88°-Eをはかる。埋土は5cm程度の炭化材が混じる黒色土で、床面付近では焼土粒が認められた。また、床面中央では被熱し赤色化した箇所が認められた。遺物が出土しなかったことから、帰属時期の判断が難しいが遺構の形状がSZA01に類似することからSZA01とほぼ同様の時期とみておきたい。

## SZA03 (第130図)

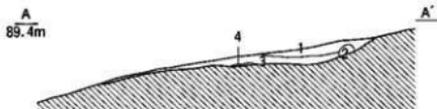
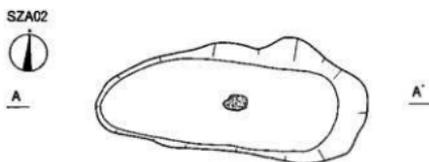
Ⅲ層掘削中に大きな炭化材を確認したことによって、K13グリッドで検出した遺構。炭化材の出土状況からみて、本来の遺構掘削面をすでに削平した状態で検出した可能性が高い。平面形の確認はⅢ層中でおこなっており、埋土も黒色土であったため、その識別が困難であった。本遺構に伴う埋土はⅡ層から流入したと思われる細かな砂粒が含まれていたため、これを頼りに検出をおこなった。確認した平面形は不整な楕円形状を呈し、床面はⅣ層を掘削している。平面形の規模は長軸1.77m・短軸0.53mを有す。深さは最大で20cm程度である。主軸方向はN-70°-Eをはかる。中央やや西側で長さ0.84m、幅0.21mの炭化材を検出した。また、東側では比較的細かな炭化材が散在していた。これらの炭化材の周囲には部分的に拳程度の砂岩礫が認められたが、いずれも被熱し赤色化していた。本遺構は平面形が整然とせず、遺物も伴わないため、その性格を判断する材料に欠くが、Ⅲ層上面で確認したことから、V期の遺構と判断した。

## SZA04 (第130図)

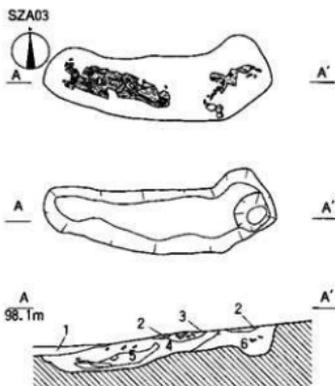
E18グリッドに所在する土坑。Ⅱ層の一部を掘削して遺構を形成しているため、V期の遺構と判断した。ただし、確認面はⅢ層中である。他の土坑と同じく埋土は炭混じりの黒色土が認められた。平面形の規模は長軸1.2m・短軸0.8mで、形状は楕円形を呈する。断面は皿状で、深さは確認面から20cm程度存する。主軸方向はN-3°-Wを向く。なお、遺物は出土しなかった。



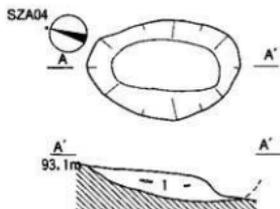
- 1 7.5YR4/2暗褐色土 しまりなし (遺土がのっている)
- 2 7.5YR2/1黒色土 しまりなし 2m未満の細かい砂粒層が混じる。骨片、炭、山梨鏡片が混じる



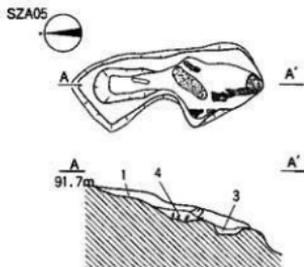
- 1 7.5YR3/2暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 2 7.5YR3/4暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 3 7.5YR2/1黒色土 約5-20cmの炭化物が多数混入 (5-6cm大の炭も入る) しまりなし 粘性なし
- 4 残土 5YR5/6 暗赤褐色土 しまりあり 粘性なし



- 1 残土 7.5YR4/4暗褐色土 しまりややあり 粘性少しあり 炭化物ほとんどなし
- 2 残土 5YR4/6暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化物ほとんど混入せず
- 3 7.5YR3/4暗褐色土 残土と炭化物が混じる 炭塊の炭化物 7.5YR5/9暗褐色土が少し混じる
- 4 7.5YR3/4暗褐色土 しまりややあり 粘性少しあり 約0.5-3cm大の炭化物多数混入するターム状になった大きな炭まりが入る
- 5 炭化材
- 6 7.5YR3/4暗褐色土 しまりほとんどなし 粘性少しあり 約0.5-2cm大の炭化物が混入するブロック状に7.5YR5/9暗褐色土が混入している



- 1 7.5YR2/1黒色土 (細かな炭化材及びわずかな粘土粒をまき) 砂質。深部に炭化層はない



- 1 7.5YR3/1暗褐色土 (粘土粒を少量含む)
- 2 7.5YR2/1黒色土 (細かな炭化材を含む)
- 3 7.5YR2/2暗褐色土
- 4 7.5YR3/3暗褐色土 (粘土ブロック及び炭化材を含む)

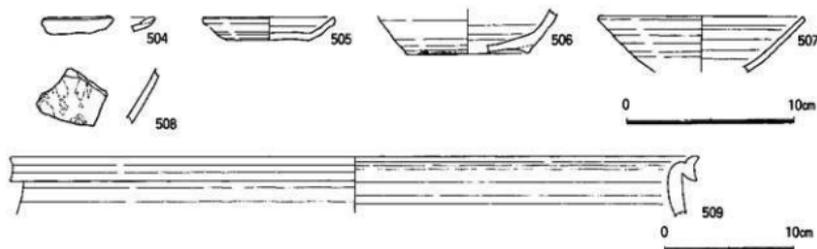
第130図 V期中世墓SZA01、SZA02、SZA03、SZA04、SZA05平面図・断面図 (S:1/40)

## SZA05 (第130図)

D20グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に検出した遺構である。予想される平面形の規模は長軸1.46m・短軸0.49mで、その形状は楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN-2°-Eをはかり、深さは確認面から15cm前後が認められるが、本来の深さは不明である。床面中央には硬化はそれほど認められないものの、長さ35cm・幅15cm程度の広がりをも赤色化した被熱面が認められた。その周囲には炭化材が散布し、とくに南側で大きな炭化材を検出した。遺物は出土していないが、その形状や炭化材・被熱面の存在はSZA02・SZA03と類似した性格をもち、遺構形成面がおそらくⅡ層に及ぶことを考慮してⅤ期の遺構と判断した。

## Ⅲ層出土のⅤ期の遺物

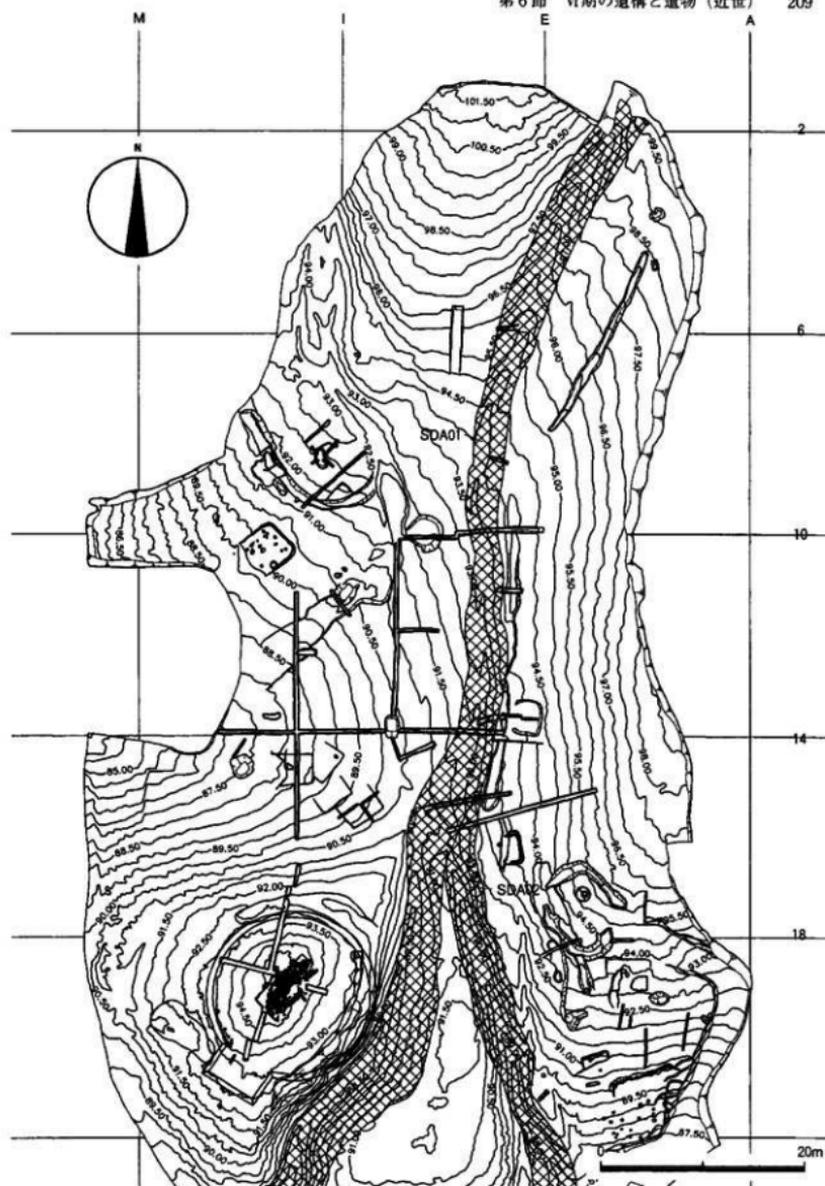
504はG13グリッドから出土、伊勢型鍋で時期は不明である。505はD21グリッドから出土、小皿で明和窯式に比定する。506は山茶碗で明和窯式に比定する。507は山茶碗で、高台が欠損しており、大洞東窯式か脇之島窯式に比定する。



第131図 Ⅴ期Ⅲ層出土遺物・Ⅵ期SDA01出土遺物 (S: 1/3、1/4)

## 第6節 Ⅵ期の遺構と遺物 (近世)

溝状の遺構SDA01・SDA02の2基を確認した。いずれも調査区を南北に縦断する大きな溝状の遺構で地山の砂岩岩盤をⅣ層上面から深いところでは2mちかく掘削している。断面形状はV字形を呈し、自然流路との区別が困難で判断ができない。Ⅵ期の遺構とした根拠はSDA01から近世初期の遺物が出土したからだが、その点数も数点にとどまり混入との可能性も否定できないことから、その根拠はかなり希薄であることは否めない。しかし、SDA01の一部の箇所では遺構を掘削した掘り抜き排土が認められたことから人為的な性格をもつと判断し、ここではⅥ期の遺構として報告する。



第132図 VI期SDA01、SDA02平面図 (S : 1/500)

## SDA01 (第131、132図)

D2グリッドからK23グリッドにかけて調査区を南北に横切る溝状の遺構。その断面は深いV字形を呈し、南側から北側へ向かって次第に浅くなる傾向が認められる。最大の深さはJ21グリッド付近で約4.7mをはかる。最も浅い箇所はF10グリッド近辺で約0.5mの深さしか認められず、また幅も狭くなる傾向がある。幅が最大となるのはJ21グリッド付近で約8mにも及ぶ。しかし、幅は掘削深度と連動しており、幅・深度とも値の小さいF10～G15グリッドにかけて遺構の西側には掘削した際の排土で盛土を形成している(第10図)ことが確認されているため、この排土の上面から計測すれば幅・深度の値のばらつきは多少縮まると考えられる。図示した第132図では排土で形成された盛土はⅢ期の遺構を検出するためにすでに掘削した状態であるため、正確な数値は不明である。ただし、この盛土の存在から本遺構は自然流路ではなく人為的行為が加わっている可能性が高いと判断される。また、D2グリッドより北側の調査区外においてもこの溝状の遺構は続き、さらには丘陵最高所の頂上部の東側をめぐって(第132図)下る地形が認められることも自然流路とするには不自然である。調査区に西端に隣接する関・金山線付近は現在田面が広がっているが、地形的には過去にはかなりの低湿地となっていたことが予想される。この場合、現在は幹線道路として関・金山線が使用されているが、過去には低湿地を避けるため、山側に道路が通じていたことも十分に考えられる。断面形がV字形で床面が平坦でないことに疑問が残るが、現状では道路としての性格が強いものとして想定しておきたい。

SDA01から出土した遺物はわずかに2点で、いずれも埋土のⅡ層から出土したものである。図示できたのは509のみである。509は甕の口縁部の破片でその形状はN字状口縁を呈する。胎土が赤く産地不明で時期は比定できない。在地のものと思われる。509が直接、SDA01の形成時期に結びつくとは考えられないが、他に手がかりがないため、509の時期にはSDA01は埋没過程に入っていたものと予想される。

## SDA02 (第132図)

G15～F21グリッドにかけて調査区を南北に伸びる溝状の遺構ないしは自然流路。G15においてSDA01と接続する。深度は南側から北側に向かう従って浅くなる傾向があり、最大の深度はF20グリッド付近で約2.7mである。断面形はV字形を呈し、その平面形状とともにSDA01と共通性が高いが、SDA01との接続部分における先後関係は不明であった。なお、遺物はまったく出土しておらず、帰属時期は不明である。しかし、SDA01との類似性によりⅥ期の遺構としてここで報告しておく。

## Ⅱ層出土のⅥ期の遺物

508は17世紀前半の徳利の胴部破片と思われる。外面は鉄軸を掛けた後に灰軸を流している。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	あとひらちやうすこふん・あとひらいせき							
書名	後平茶臼古墳・後平遺跡							
副書名	東海環状自動車道（関～美濃加茂）建設事業に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	藤田英博・安田正枝・三辻利一							
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550							
発行年月日	西暦2002年12月25日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
あとのひらちやうすこふん 後平茶臼古墳 後平1号古墳 後平遺跡	ぎふけんかまろ 岐阜県加茂郡 ふだかちやうへい 富加町大平賀	21502	04309 09263 09237	35° 30' 16"	136° 58' 27"	19981028～ 19981120 19990610～ 20000302	8,480㎡	東海環 状自動 車道建 設事業 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
後平茶臼古墳 後平1号古墳 後平遺跡	集落跡 古墳	縄文時代 弥生時代末 ～ 古墳時代	堅穴住居 方形周溝墓 古墳 中世墓 土坑 ピット	26軒 1基 2基 5基 19基 43基	石器 縄文土器 土師器 須恵器 埴輪 鉄製品 山茶碗	後平茶臼古墳は堅穴系横 口式石室を持つ造り出し 付き円墳で中濃地域の主 長墓と思われる。木芯鉄 板張輪鍔は県内2例目の 出土、尾張型埴輪は県内 5例目の出土で北眼にあ たる。砂行・南青柳・深 橋前遺跡とともに弥生時 代末～古墳時代初頭に丘 陵部の急斜面に集落を形 成した。また方形周溝墓 も確認した。		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第77集

## 後平茶臼古墳・後平遺跡

【第1分冊】

2002年12月25日

編集発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター  
岐阜県岐阜市三田河東1-26-1

印刷 サンメッセ株式会社